秋　田　市

秋田臨空港新都市開発関係
埋蔵文化財発掘調査報告書

坂ノ上E遺跡
湯ノ沢A遺跡
湯ノ沢C遺跡
湯ノ沢E遺跡
湯ノ沢F遺跡
湯ノ沢H遺跡
野　形　遺　跡

1984. 3　秋田市教育委員会

序

秋田臨空港新都市開発事業に係る御所野台地部の埋蔵文化財につきましては、昭和56年度（下堤Ｄ遺跡）から対処し、昭和57年度は５ヶ所、本年度は７ヶ所の遺跡発掘調査を実施いたしました。今回の調査においては、縄文時代中期の集落跡、県内では二つめの弥生時代の住居跡、それに平安時代の墓（21基）などの検出があり、学問的にも重要な成果をあげました。また、貴重な遺物も数多く出土しております。

調査の実施にあたっては県、関係機関の指導援助をはじめ、地元関係者、土地所有者等多くの方々の積極的なご協力をいただき深く感謝申しあげる次第です。

本報告書が文化財保護のため、さらには研究資料として広く活用されれば幸甚に存じます。

昭和59年３月

秋田市教育委員会

教育長　高　泉　宏　作

例　　言

1．本報告書は、秋田市四ッ小屋小阿地字坂ノ上（坂ノ上Ｅ遺跡）、四ッ小屋末戸松本字湯ノ沢（湯ノ沢Ａ遺跡・湯ノ沢Ｃ遺跡・湯ノ沢Ｅ遺跡・湯ノ沢Ｆ遺跡・湯ノ沢Ｈ遺跡）、上北手御所野字野形（野形遺跡）に所在する各遺跡の発掘調査報告書である。

2．本報告書は、調査員及び調査補佐員の協力を得て菅原俊行が編集したものである。

3．本報告書の執筆は、坂ノ上Ｅ遺跡ー菅原俊行、安田忠市、湯ノ沢Ａ・Ｃ遺跡ー西谷　隆、湯ノ沢Ｅ・Ｆ・Ｈ遺跡、野形遺跡ー石郷岡誠一が担当し、菅原が補筆した。前記以外は菅原が担当した。

4．発掘調査、整理作業の過程で下記の各氏より指導、助言を賜った。

秋元信夫、穴沢義功、阿部義平、岩見誠夫、大野憲司、岡田茂弘、金子拓男、桑原滋郎、小林克、高橋忠彦、富樫泰時、永嶋正春、永瀬福男、奈良修介、林　謙作、船木義勝、宮本長二郎

5．湯ノ沢Ｆ遺跡出土の鉄製品の錆処理については、秋田県埋蔵文化財センターより格別の指導と便宜を計らっていただいた。

6．各遺跡の平面図、土層断面図中のＰは土器（片）、Ｓは石（礫）を示す。

7．発掘調査による出土遺物、実測図、写真、その他の記録は秋田市教育委員会が保管する。

目　　次

序
例言
調査の概要
調査に至るまでの経過…… 1
調査期間と体制…… 1
調査の方法と経過…… 2
遺跡の位置と地形・地質…… 8
坂ノ上E遺跡
遺跡の概観…… 14
遺構と遺物…… 14
まとめ…… 162
湯ノ沢A遺跡
遺跡の概観…… 171
遺構と遺物…… 171
まとめ…… 196
湯ノ沢C遺跡
遺跡の概観…… 204
遺構と遺物…… 204
まとめ…… 228
湯ノ沢E遺跡
遺跡の概観…… 237
遺構と遺物…… 237
まとめ…… 240
湯ノ沢F遺跡
遺跡の概観…… 244
遺構と遺物…… 244
まとめ…… 265
湯ノ沢H遺跡
遺跡の概観…… 273
遺構と遺物…… 273
まとめ…… 288
野形遺跡
遺跡の概観…… 293
遺構と遺物…… 293
まとめ…… 308

湯ノ沢C遺跡（東から）

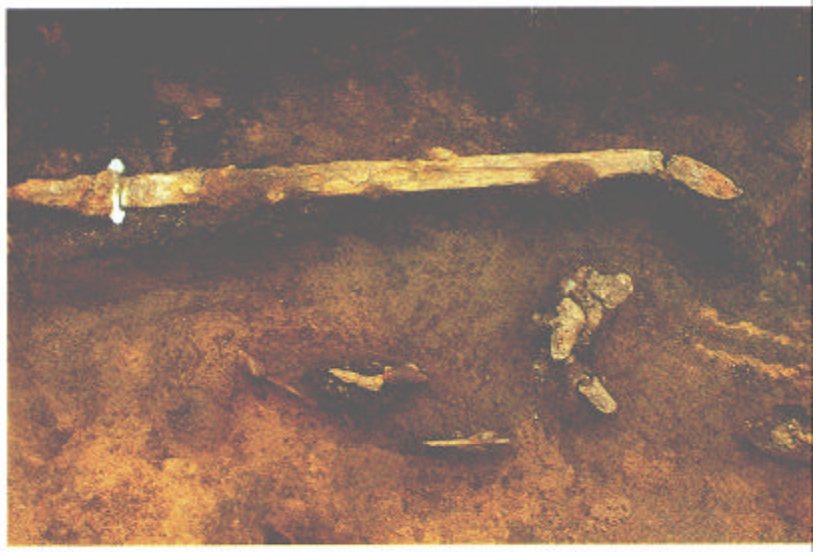
湯ノ沢C遺跡（南から）

湯ノ沢F遺跡（東から）

湯ノ沢F遺跡　3号土坑墓

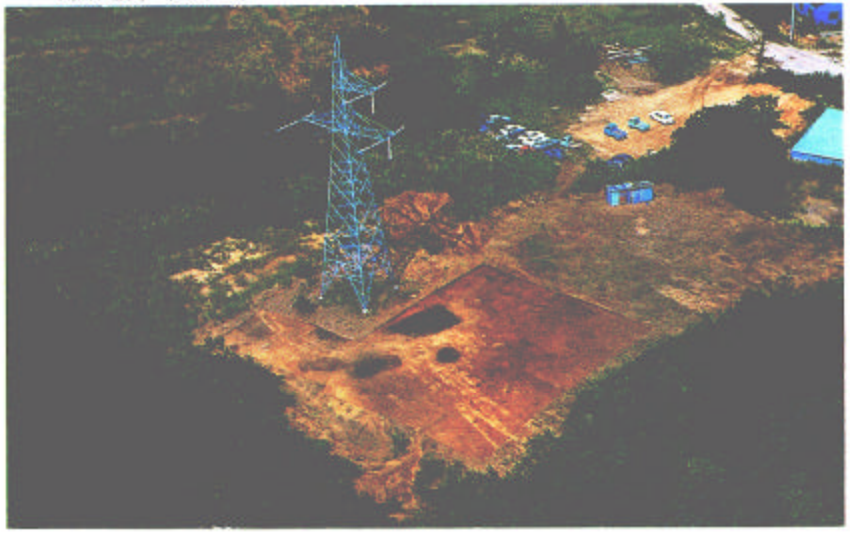
湯ノ沢F遺跡　16号土坑墓遺物出土状態

湯ノ沢Ｆ遺跡　６号土坑墓遺物出土状態

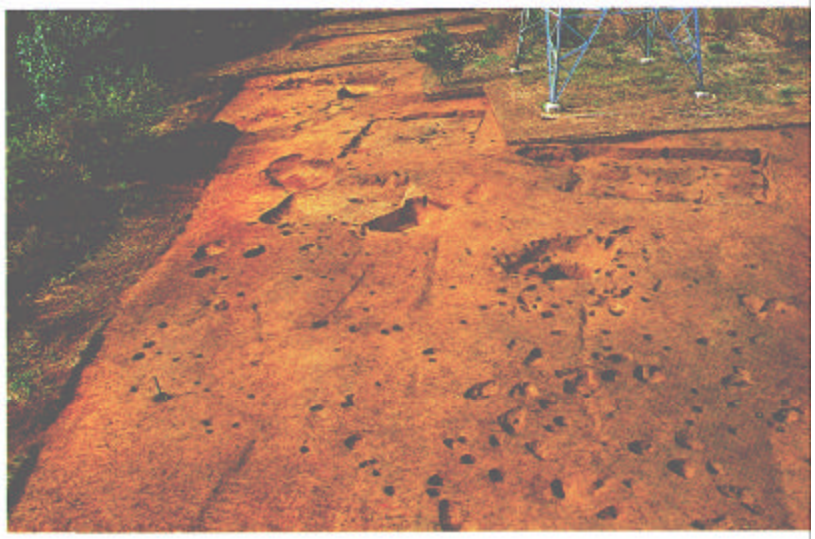


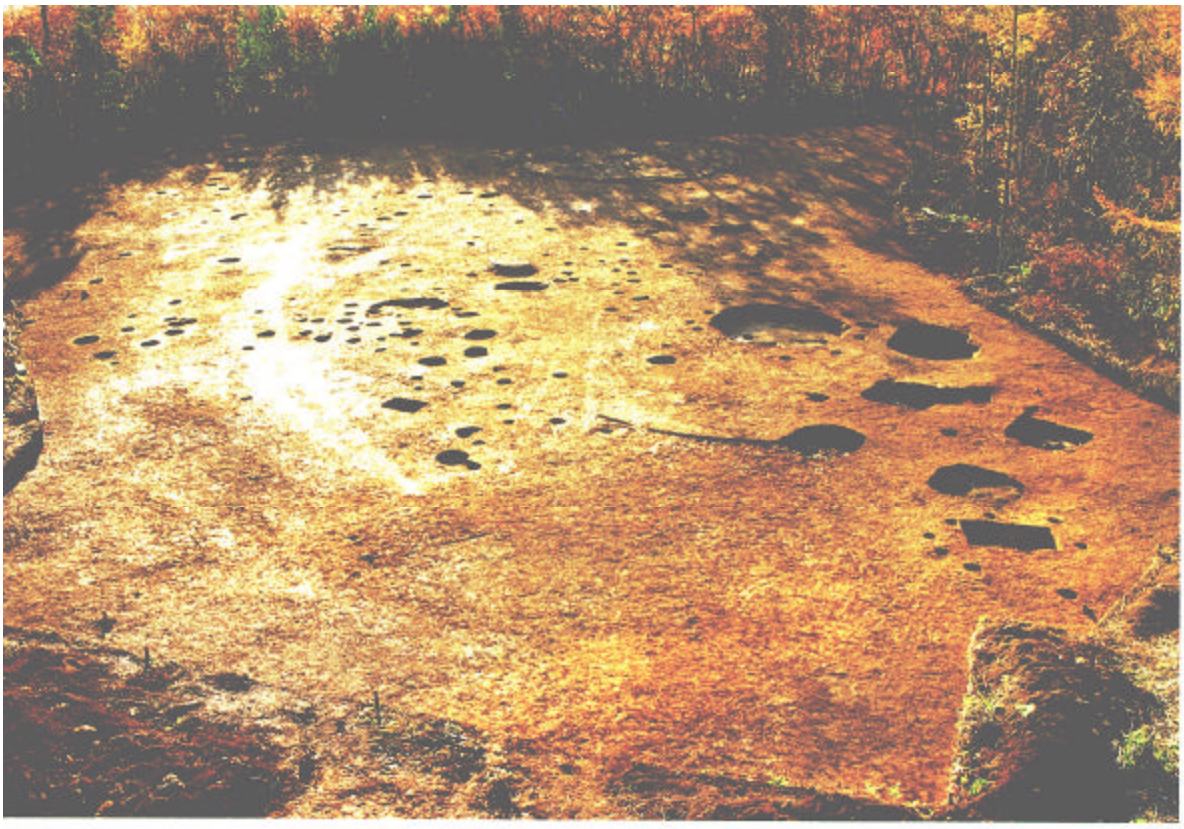
湯ノ沢Ｆ遺跡　７号土坑墓遺物出土状態

野形遺跡（東から）

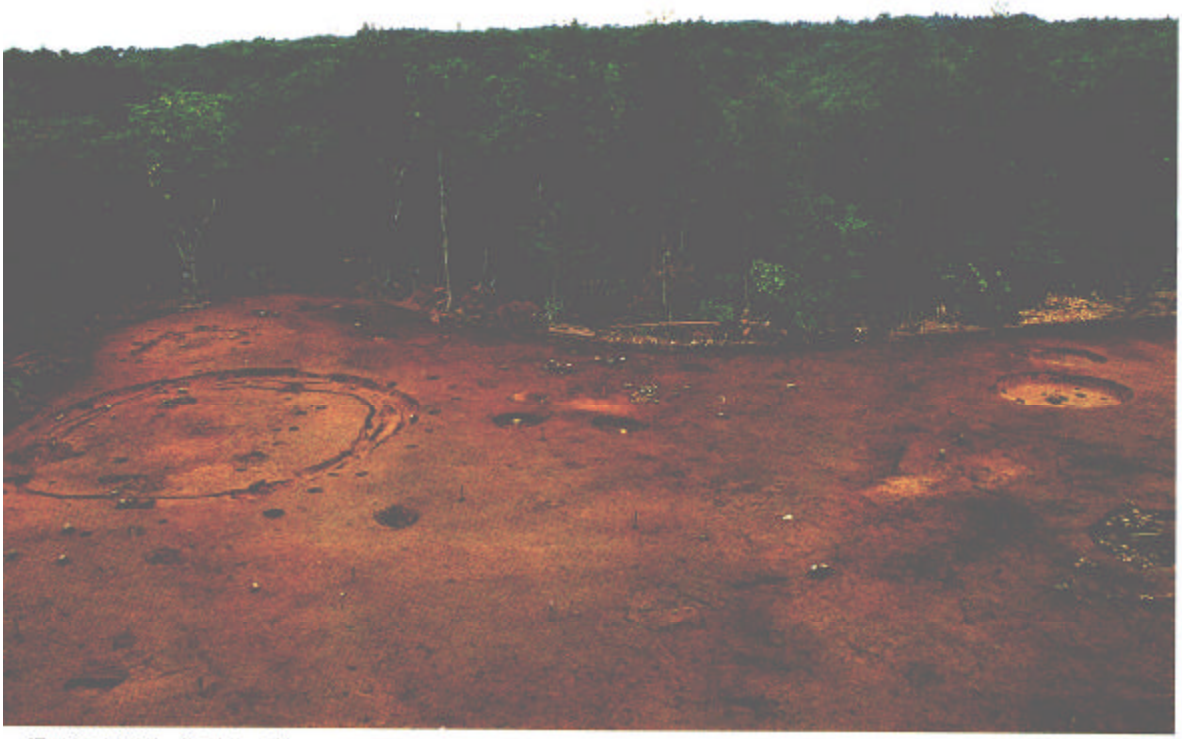


野形遺跡（東から）





湯ノ沢Ａ遺跡（北東から）



湯ノ沢Ａ遺跡（南東から）

坂ノ上F・E遺跡遠景（秋田市街地を臨む）

坂ノ上E遺跡（北から）

調 査 の 概 要

調査に至るまでの経過

秋田市南東部地域は、昭和56年６月の秋田空港の開港、東北横断自動車道秋田線秋田インターチェンジ開設予定等、空陸両面の交通の要衝に位置する所である。このような状況の中で南東部地域における御所野地区については特に広大な台地であることから、いち速く開発可能性等についての各調査が実施され、県市総合計画においても産業、住宅団地が一体となった総合的ニュータウン＝臨空港新都市として具体的に位置づけられた。

昭和55年に御所野台地全体の分布調査を実施し、約30カ所の遺物散布地を確認した。昭和56年度は、開発計画地域内の西部工業団地造成に先だち、下堤Ｄ遺跡の発掘調査を行なった（秋田市「下堤Ｄ遺跡発掘調査報告書」1982年３月、秋田市教育委員会）。昭和57年度は、今後の開発計画に対処するため55年の分布調査に基づき、３カ月間で遺跡の範囲確認調査を実施し、その結果、台地上に24カ所の遺跡を確認したのである（第１図　御所野台地部範囲確認遺跡一覧表）。しかし、開発計画地内には３カ所の未範囲確認地域が存在している。範囲確認調査の結果に基づき関係機関と協議を重ね、引き続き年度別に計画的な発掘調査を実施することとし、昭和57年度は、下堤Ｇ遺跡、野畑遺跡、湯ノ沢Ｂ遺跡、坂ノ上Ｃ、Ｄ遺跡の発掘調査を行なった（秋田市「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書」1983年３月、秋田市教育委員会）。

昭和58年度は、坂ノ上Ｅ遺跡、湯ノ沢Ａ遺跡、湯ノ沢Ｃ遺跡、湯ノ沢Ｅ遺跡、湯ノ沢Ｆ遺跡、湯ノ沢Ｇ遺跡、湯ノ沢Ｈ遺跡、野形遺跡の発掘調査を実施した。

調査期間と体制

調査期間　昭和58年４月１日～11月30日

調査主体者　（財団法人）　秋田県土地開発公社

調査担当者　秋田市・秋田市教育委員会

調　査　員　菅原俊行、石郷岡誠一、西谷　隆、安田忠市（秋田市教育委員会社会教育課）

派遣調査員　柴田陽一郎、児玉　準（秋田県埋蔵文化財センター）

調査補佐員　佐々木正昇、村田嘉一、三嶋隆儀、佐藤　司（秋田県埋蔵文化財センター）鈴木徳行、臼井由香

調査協力員　五十嵐芳郎（秋田考古学協会会員）、石川恵美子、伊藤　真（筑波大学）、塚田誠、鈴木　浩、小松博行（秋田大学）、田代博秀（国学院大学）、相場　修（明治大学）、山下英二（日本大学）、渡部宏之（法政大学）、三浦　浩（県立農業短大）

調査作業員　鈴木銀一、鈴木長治、鈴木茂治、鈴木力雄、鈴木一美、三浦竹治、三浦　馨、三浦吉司、三浦正二、三浦吉男、三浦三治、秋本与次郎、秋本佐市、水野金光、後藤善一郎、三浦　優、加賀谷新之助、鈴木銀三郎、加賀谷金一郎、安藤金四郎、堀野兼

雄、堀野健一、渡部吉春、渡部金次郎、渡部兼治、渡部謙治、渡辺圭太郎、佐々木東吉、佐々木敏男、嵯峨善幸、加藤雄司、尾形正隆、鈴木慶子、鈴木ウメノ、鈴木ツヤ、鈴木キヨ、三浦千枝子、三浦トミエ、三浦初枝、三浦シゲ、三浦ナツ、三浦タキ、堀井ヤス、堀井キヨエ、堀井征子、佐々木フミ、佐々木久子、工藤キクエ、相場ミツエ、熊谷文子、加藤満子、大友幸子、宮田トキ子、高島綾子、榎　トミ、伊藤ヒメ子、渡部セツ、渡部アイ子、渡部キネ子、渡部キヨ、渡部かよ子、渡辺ミネ、渡辺ミサ、渡辺フミ、佐々木ヨシ、佐々木縫子、佐々木清子、高橋ヨシ子、堀野京子、矢倉アキ、加賀谷ヒデ、鈴木貞子、堀井シゲ、稲垣テル子、杉沢チエ子、杉沢フミ、藤沢ミサ子、鈴木ヒデ、藤沢トクエ、鹿子沢ミサ、安藤チヨ、嵯峨信枝

整理作業員　鈴木和恵、三浦秋子、三浦睦子、堀井律子、堀井幸子、鈴木栄子、長谷部ヤエ子、加藤磨弓

事　務　員　佐藤誠子、伊藤茂子

調査の方法と経過

調査区は、各遺跡ごとに任意に原点を決めて、東西南北（磁北）に基準線を作り、調査区全体に大グリッド（40m ×40m ）を設定し、さらにその中に小グリッド（４ｍ×４ｍ）を設定し、単位グリッドとした。大グリッドは（１～ｎ）、小グリッドは東西（Ｘ軸）に数字（１～10）、南北（Ｙ軸）にアルファベット（Ａ～Ｊ）を配し、その組み合せで遺跡番号、大グリッド番号、小グリッドの順に呼称することとした。

発掘調査は、坂ノ上Ｅ遺跡（4/7～9/4）、湯ノ沢Ａ遺跡（8/10～9/10）、湯ノ沢Ｃ遺跡（8/13～8/9）、湯ノ沢Ｅ遺跡（4/7～8/1）、湯ノ沢Ｆ遺跡（8/12～8/23）、湯ノ沢Ｈ遺跡（8/24～8/1）、野形遺跡（8/7～9/2）の日程で実施した。

坂ノ上Ｅ遺跡は、西側の舌状台地に位置する坂ノ上Ａ遺跡（注1）とどのような関連を持つかと言う課題で調査をした。その結果、坂ノ上Ａ遺跡（縄文時代中期末～後期初頭）と同時期の集落跡が確認され、両遺跡の地理的状況からも、同一遺跡の可能性がある。

湯ノ沢Ａ遺跡、湯ノ沢Ｃ遺跡は、隣接する遺跡で、湯ノ沢Ａ遺跡では縄文時代中期末の住居跡の他、県内では２軒目の弥生時代の住居跡が検出され、沢を隔てた北西の地蔵田Ｂ遺跡との関連が予想される。湯ノ沢Ｃ遺跡は、表土剥ぎ作業の段階では縄文時代晩期の遺物が多く、同時期の遺跡と考えられたが、縄文時代中期末の住居跡が６軒検出された。

湯ノ沢Ｅ遺跡、湯ノ沢Ｆ遺跡、湯ノ沢Ｈ遺跡は、開発計画地域南端の台地（畑地）に位置する。湯ノ沢Ｅ遺跡は、範囲確認調査の時点で、縄文時代中期及び後期の遺物はみられたが、遺構の確認はなく、台地縁辺部を主に調査した結果、後期の土器埋設遺構１カ所の検出にとどまった。湯ノ沢Ｆ遺跡は、平安時代の集落を想定して調査を開始したが、検出された遺構は、平安時代（10世紀前後）の土坑墓21基であり、当時の墓域であることがわかった。畑作等の関係で、墓域の一部は未調

査である。湯ノ沢H遺跡は、範囲確認調査で縄文時代中期末及び後期の遺物が見られ、台地縁辺まで伐採等をし、調査した結果、中期末と晩期の住居跡が検出された。

野形遺跡（注2）は、昭和52年に一部、発掘調査がなされ、平安時代の住居跡２軒、窯跡６基が確認されている遺跡で、今調査はそれらを含めて調査した。その結果、新たに住居跡１軒、窯跡11基が検出された。

昭和58年度の発掘調査予定であった湯ノ沢G遺跡は、範囲確認調査の際、遺構は未確認であったが、縄文時代後期の遺物が出土した遺跡であった。４月、現地に行って、遺物包含層が削り取られた事を知り、残存する部分の調査を行なったが、遺構、遺物の検出は出来なかった。

昭和59年度、発掘調査予定の坂ノ上F遺跡の伐根、表土剥ぎ作業を11月30日までやり、屋外での作業を終了した。

（注１）　「小阿地地区遺跡分布調査概報（坂ノ上遺跡）」1975年３月、秋田市教育委員会、秋田考古学協会

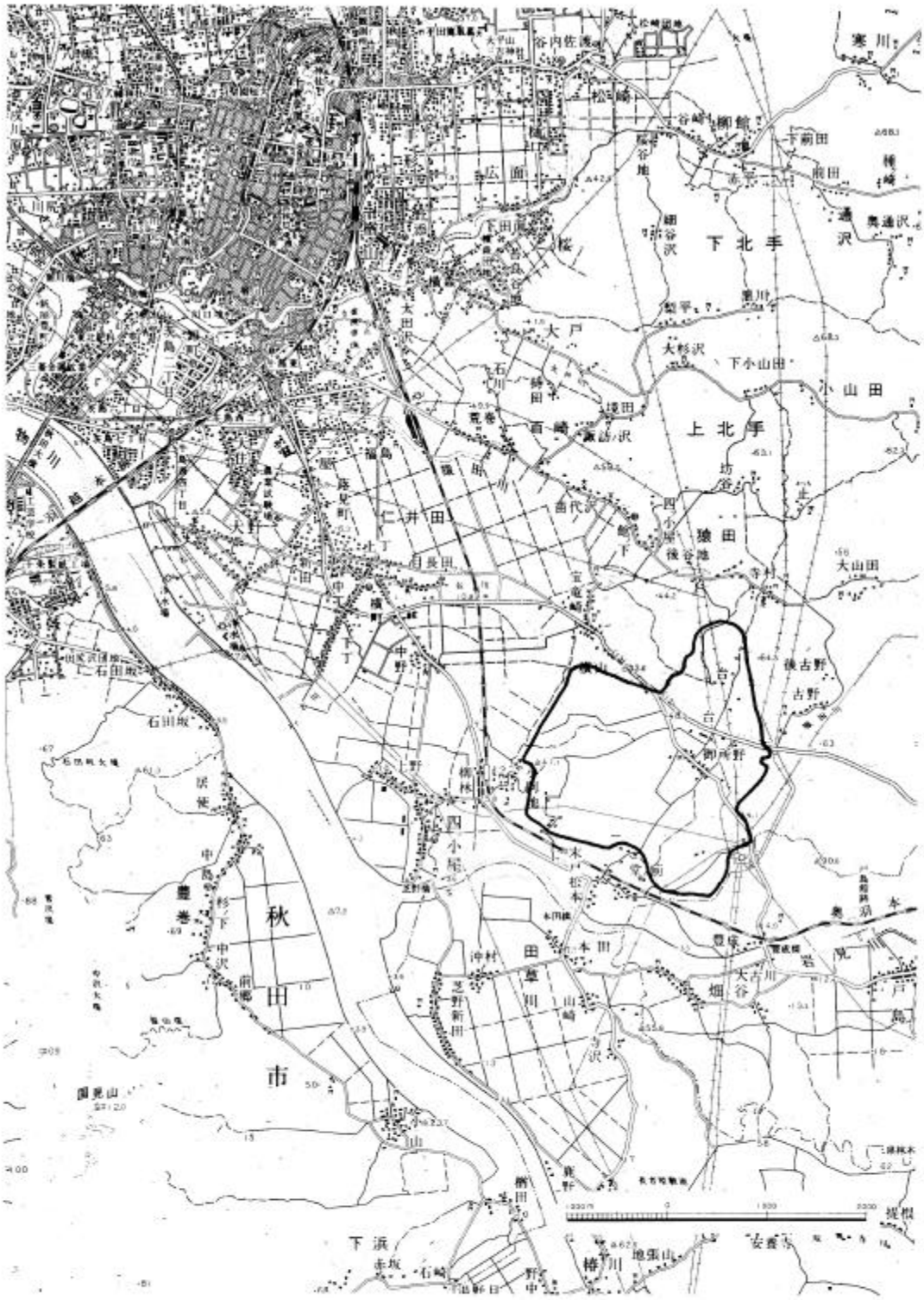
「小阿地、下堤・坂ノ上遺跡発掘調査報告書」1976年３月、秋田市教育委員会

（注２）　「野形遺跡」1977年３月、秋田考古学協会

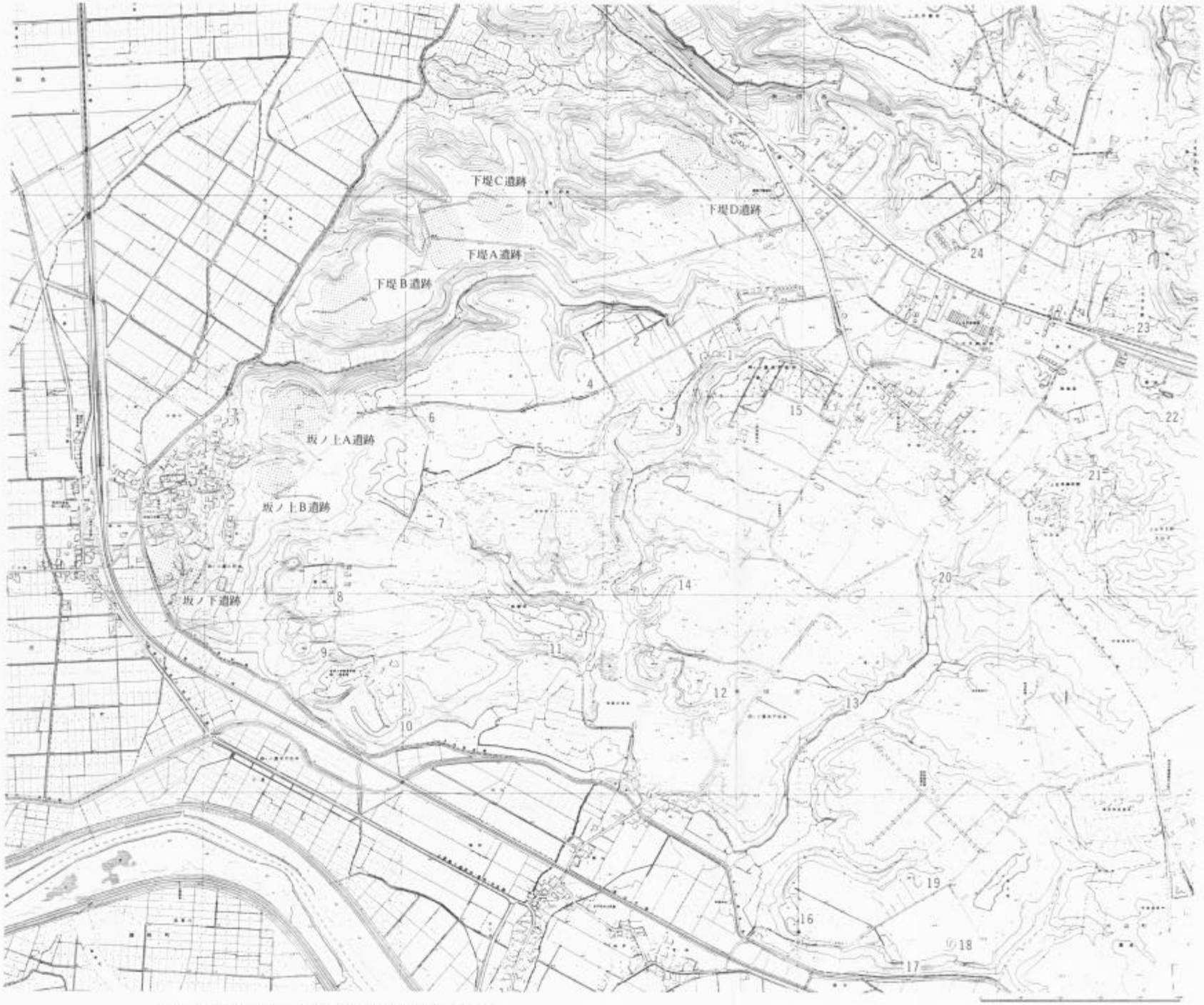
昭和58年度来跡者（順不同・敬称略）

岩見誠夫、高橋忠彦、船木義勝、大野憲司、小林　克、永瀬福男（秋田県埋蔵文化財センター）、秋元信夫（鹿角市教育委員会）、武藤康弘（国学院大学大学院）、宮本長二郎（奈良国立文化財研究所）、金子拓男（県立新潟江南高校）、阿部義平、岡田茂弘（国立歴史民俗博物館）、桑原滋郎（文化庁）、富樫泰時（秋田県文化課）、林　謙作（北海道大学）、杉沢文治（秋田姓氏家系研究会）、進藤秋輝、高野芳宏、吉川雅清、後藤秀一（宮城県多賀城跡研究所）、奥山良三（秋田市中央公民館）、穴沢義功

秋田県文化財保護審議委員（20名）、秋田市郷土史懇話会（30名）、秋田城跡作業員（10名）、秋田市立四ツ小屋小学校１年・２年・４年・５年生（380名）、県立南高校考古学研究協議会


寒川
下北手
上北手
小山田
大戸
大杉沢
下小山田
仁井田
猿田
大山田
後古野
古野
御所野
四小屋
秋田市
下浜
椿川
地張山
提根

遺跡の位置



第１図　御所野台地部範囲確認遺跡及び周辺遺跡

御所野台地部　範囲確認遺跡一覧表					
遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	面積㎡	現状
1	下堤E	秋田市四ツ小屋小阿地字下堤	縄文	5,625	畑
2	下堤F	〃　〃	〃	14,375	〃
3	下堤G	〃　〃	先土器・縄文(中)	5,000	山林原野
4	坂ノ上C	〃　四ツ小屋小阿地字坂ノ上	縄文	6,000	〃
5	坂ノ上D	〃　〃	〃	14,060	〃
6	坂ノ上E	〃　〃	〃	15,000	〃
7	坂ノ上F	〃　〃	〃	37,810	〃
8	狸崎A	〃　四ツ小屋小阿地字狸崎	縄文(晩)	13,750	畑・山林原野
9	狸崎B	〃　〃	縄文	11,250	原野
10	地蔵田A	〃　四ツ小屋末戸松本字地蔵田	先土器・縄文・平安	30,000	畑
11	地蔵田B	〃　〃	縄文(中晩)・弥生	25,000	山林原野
12	湯ノ沢A	〃　四ツ小屋末戸松本字湯ノ沢	縄文	21,555	〃
13	湯ノ沢B	〃　〃	縄文(前・中)	5,000	〃
14	湯ノ沢C	〃　〃	縄文(中晩)・弥生	11,565	〃
15	湯ノ沢D	〃　〃	縄文(中)	35,000	畑
16	湯ノ沢E	〃　〃	縄文	7,500	〃
17	湯ノ沢F	〃　〃	縄文・土師須恵	5,310	〃
18	湯ノ沢G	〃　〃	縄文(後)	1,300	原野
19	湯ノ沢H	〃　〃	縄文	5,940	畑
20	野畑	〃　上北手御所野字野畑	縄文(中)	1,875	山林
21	野形	〃　上北手御所野字野形	土師・須恵	5,940	山林原野
22	深田沢	〃　上北手古野字深田沢	縄文・平安	6,875	畑
23	台	〃　上北手古野字台	〃	8,440	〃
24	地方	〃　上北手猿田字堤ノ沢	縄文(晩)	54,670	畑・原野

遺跡の位置と地形・地質

位置

秋田市街から国道13号線を南下し、仁井田、横山を過ぎ、坂を登ると標高約40m 前後の広大な台地が開ける。これは奥羽本線四ツ小屋駅方面からもよく見える平坦な台地であり、御所野台地、末戸台と呼ばれている。この台地が臨空港新都市開発計画地域である。

各遺跡の位置については第１図「御所野台地部範囲確認遺跡及び周辺遺跡」を参照されたい。

地形・地質

遺跡の存在する地形は、大別して和田丘陵と末戸台台地に分けられる。和田丘陵は平坦面をあまり持たない。しかし、定高性を持った標高60～150m のかなり開析を受けた老年期地形を示し、地質は第３系鮮新統に属する青色砂質シルト岩（笹岡層）と青灰色塊状泥岩（天徳寺層）、それに中新統に属する暗灰色泥岩（船川層）などからなっている。末戸台台地は標高25～50m 強で、その表面は大変平坦である。この台地は和田丘陵と接して数段の段丘を識別できる。これらは内藤（注１）の区分からすると、上位から標高45～50m 強の椿台段丘、標高40m 強の上野台段丘Ⅰ、標高35m 強の上期台段丘Ⅱ、標高25m 強の宝竜崎段丘の４段に分けられる。（第２図）

椿台段丘

岩見川右岸末戸台台地では45～50m 強の標高をもつ、いわゆる椿台面をその堆積面とする椿台層が厚い礫（最大径10cm前後）、砂、粘土の互層で構成されている。ただ基底高度はわからない。岩相は最上部に１～２ｍの褐色の粘土質火山灰層があり、次に礫、砂、粘土の互層で、砂礫の部分でしばしばクロス・ラミナ（斜交葉理）がみられ、砂土あるいはシルトは水平な細かい層理をなすことが多い。層厚をみると、礫層はうすく、砂、粘土層が厚い。その下部は第３系の泥岩（船川層）や砂質シルト（笹岡層）となっている。内藤はこの椿台面を関東の下吉面に対比している。野形遺跡は、この椿台段丘に位置する。

上野台段丘Ⅰ

末戸台台地で椿台段丘の南側に標高40m 強でついている段丘が上野台段丘Ⅰと呼ばれている。表層の１～２ｍの粘土質火山灰層を除くと、段丘堆積物は最大径20～30cmの礫を含む礫層であり、厚さは５ｍ程度で、その下部は第３系となっている。坂ノ上Ｅ遺跡は、この上野台段丘Ⅰに位置する。

上野台段丘Ⅱ

末戸台台地では上野台段丘Ⅰとの比高が５ｍ強である。段丘堆積物の岩相は、上野台段丘Ⅰとほぼ同様で、層厚は５ｍ前後である。内藤によれば、厚い礫層の下部は椿台層に当るとしている。湯ノ沢Ａ・Ｃ・Ｅ・Ｆ・Ｈ遺跡は、この上野台段丘Ⅱに位置する。

段丘堆積物の特徴は、上野台Ⅰ・Ⅱ面では最大径30cm前後の亜円礫を主体とする、ほぼ一様な礫層をもち、河川堆積物で、厚さも加味すると岩見川などによる河成の浸食段丘面と考えられる。椿台、上野台Ⅰ、Ⅱ面の各面をおおっている層厚１～２ｍのシルト分を含んだ粘土質火山灰層は、男

鹿半島の寒風山が起源と一応考えられている。(注2) この粘土質火山層の表面細粒物質の風化状態をみていくと、椿台、上野台Ⅰ、Ⅱ面では黒色土の下の細粒物質のうち、上部50～100cmが明褐色を呈し、下部は灰色で、境は漸移する。また、土壌断面を見ると、椿台、上野台Ⅰ、Ⅱ面をおおう土壌は、いわゆる高岡2統に属していると考えられ、比較的大きい円礫を混入していて、黒色土層を厚く堆積させている。この土層中には火山ガラスを混入しており、火山灰が関係しているものと推定される。

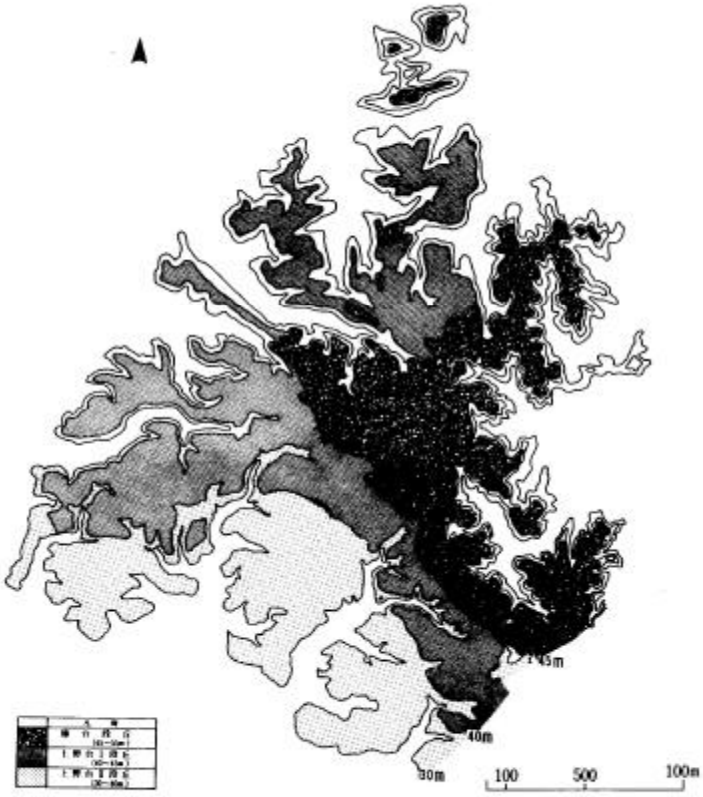
(注1) 「秋田県岩見川流域およびその周辺の段丘について」内藤博夫　1965年　第4紀研究第4巻第1号

(注2) 「地形・表層地質・土じょう、秋田」経済企画庁土地分類基本調査　1966年

「八郎潟の研究」秋田県教育委員会　1965年

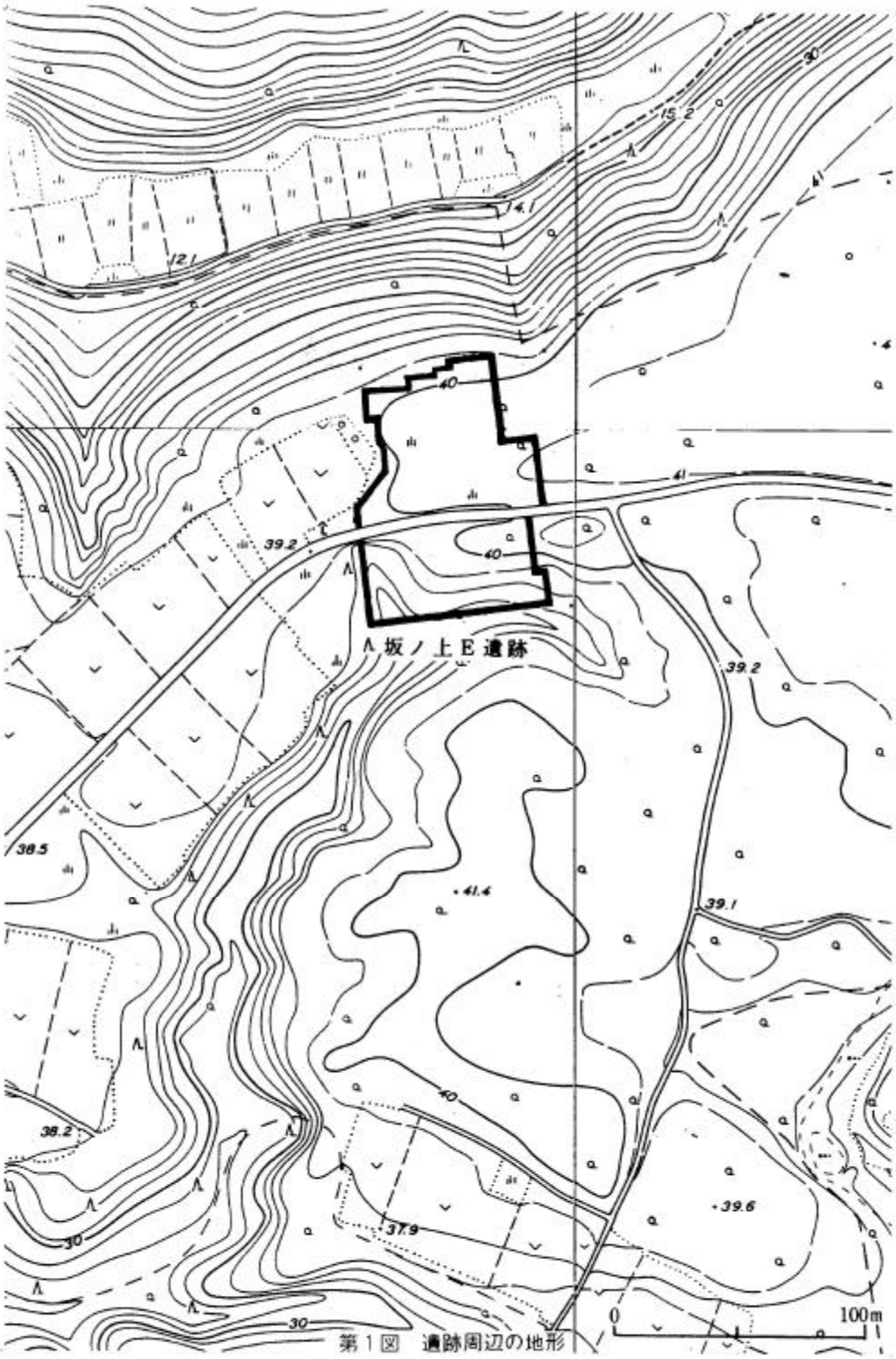
「火山活動と地形」村山　馨　大明堂

「秋田県男鹿半島一の目潟周辺の火山抛出物について」林　宏　地質学雑誌第61巻第717号　1955年

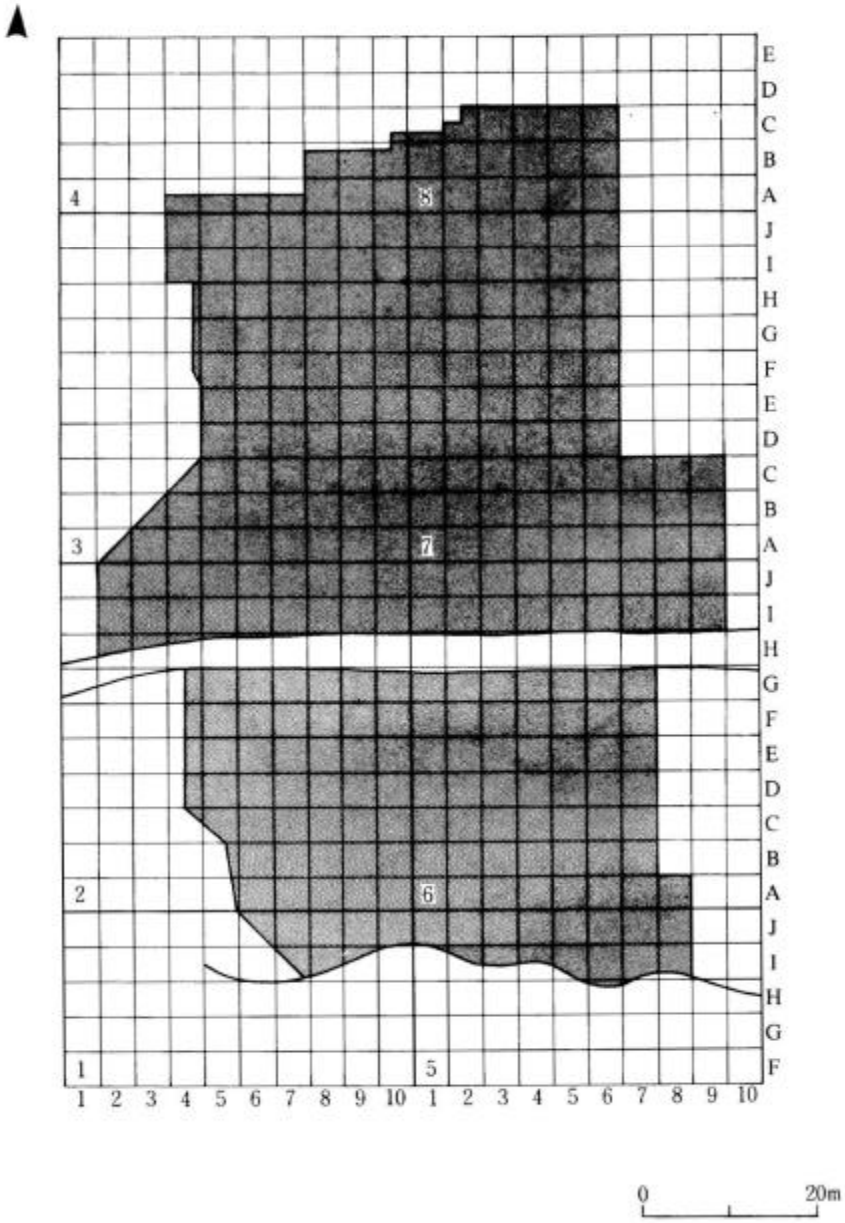


第2図　段　　丘

坂ノ上Ｅ遺跡



第1図　遺跡周辺の地形


E
D
C
B
A
J
I
H
G
F
E
D
C
B
A
J
I
H
G
F
E
D
C
B
A
J
I
H
G
F
4
3
2
1
8
7
6
5
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
0
20m

第2図　グリッド配置図

遺跡の概観

南と北の沢にはさまれた台地上に位置し、南側が斜面となる。

遺跡は縄文時代前期末葉から晩期（中期末葉が主体）にかけてのもので、検出遺構は、住居跡37軒、土坑122基、埋設土器遺構11個、炉２基、製鉄炉１基、炭焼窯１基、その他の遺構である。

縄文時代前期(末)から中期(末)の遺跡は、沢を隔てて北約300ｍに下堤Ａ・Ｂ遺跡、北東約900ｍに下堤Ｄ遺跡、東約700ｍに下堤Ｇ遺跡、西側に坂ノ上Ａ遺跡などが所在する。

遺構と遺物

１号住居跡（第３図）

調査区東側で検出したが、市道により一部破壊されている。

プランは径約5.5ｍのほぼ円形を呈し、確認面からの深さは20cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは深い掘り方のものと浅い掘り方のものがあり、深い掘り方が柱穴と考えられる。炉は土器埋設部、石組部、掘り込みからなる。土器埋設部は埋設土器の抜き取り痕と考えられる。石組部は楕円形、底面が平坦で火熱を受け、石は側面に組まれている。掘り込みは一段浅く、壁に接し、壁際にピットが掘られている。床はほぼ平坦で、全面的に堅い。

出土遺物

土器（第50図62～65）

63・64は炉石組部、他は覆土からの出土である。62は口縁部文様帯に隆帯及び撚糸圧痕を施すもの、63・64は円形の貼り付け及び沈線で文様を構成するものである。

２号住居跡（第４図）

調査区中央部で検出された。

プランは径2.9ｍのほぼ円形を呈し、確認面からの深さは25cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは３個の検出で浅い。炉は土器埋設部、石組部、掘り込みからなる。土器埋設部は深鉢形土器を正立して埋設し、周辺は火熱を受け赤変している。石組部は底面が火熱を受け、北側面に３個の赤化したり亀裂のある石が認められた。掘り込みは一段浅く、壁に接する。床はほぼ平坦で、堅い。

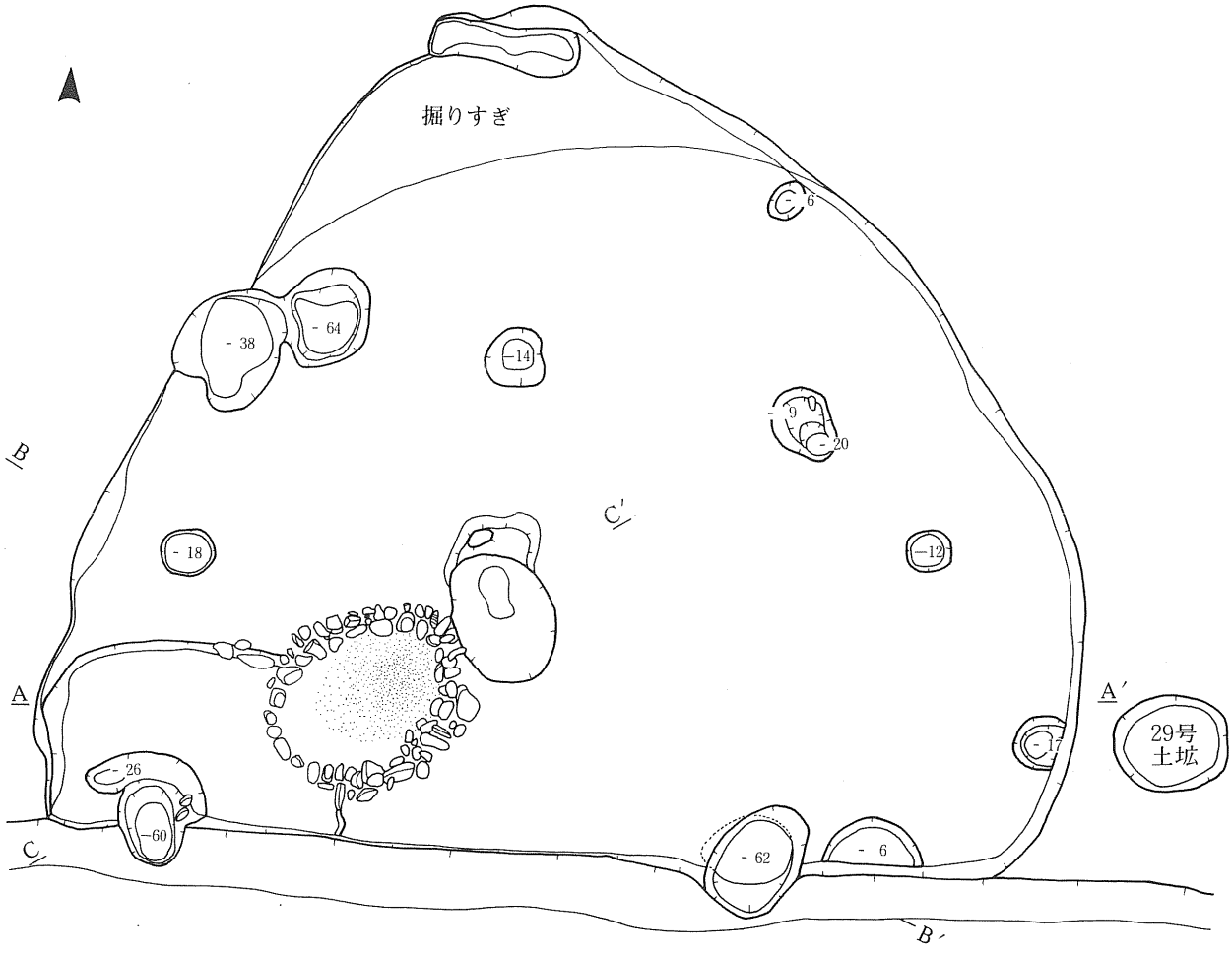
出土遺物

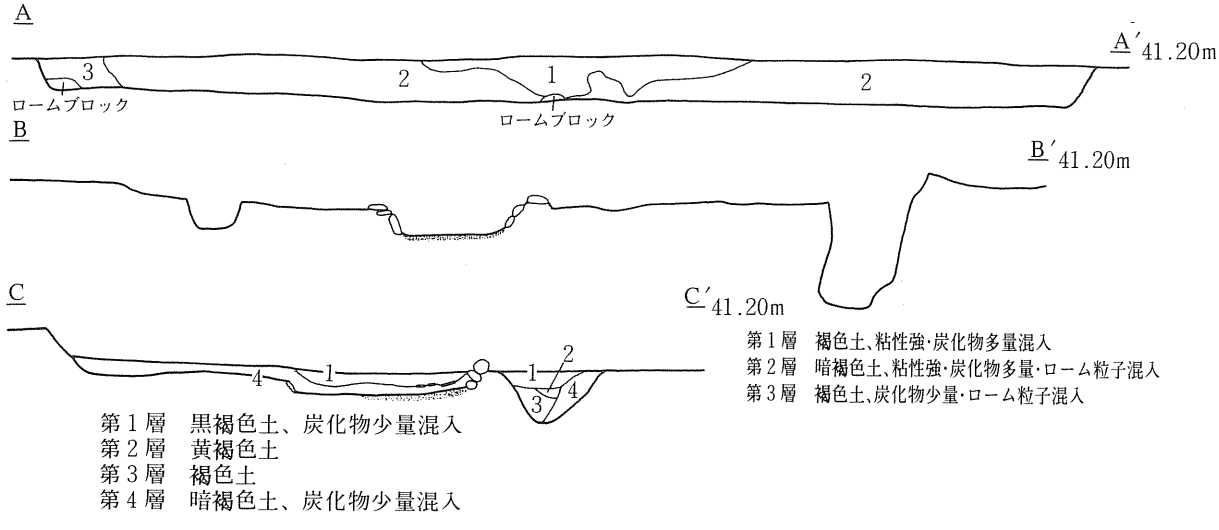
土器（第39図１、第50図66～70）

１は炉埋設土器、他は覆土からの出土である。沈線区画の磨消帯を施すものである。１は胴部の膨らむ器形で、地文はＬＲ単節斜縄文（縦位回転）である。66は口縁部に粘土紐貼り付けがみられる。

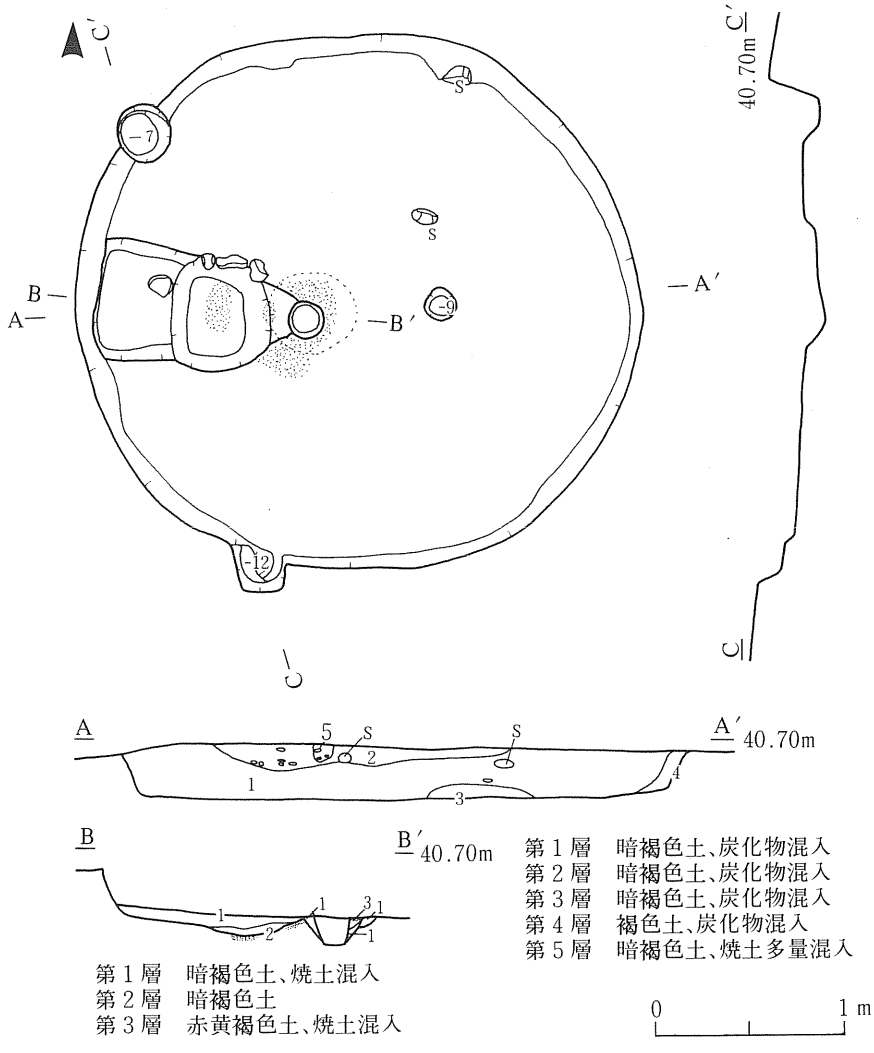
石器（第86図１～５）

１～４は石鏃、５は掻器状石器である。他に剥片が多量に出土している。


掘りすぎ
- 6
- 38
- 64
-14
-9
-20
B
C'
- 18
-12
A
A'
29号
土坑
-7
-26
-60
C
- 62
- 6
B'


A
A'41.20m
3
2
1
2
ロームブロック
ロームブロック
B
B'41.20m
C
C'41.20m
4
1
1
2
3
4
第1層　黒褐色土、炭化物少量混入
第2層　黄褐色土
第3層　褐色土
第4層　暗褐色土、炭化物少量混入
第1層　褐色土、粘性強・炭化物多量混入
第2層　暗褐色土、粘性強・炭化物多量・ローム粒子混入
第3層　褐色土、炭化物少量・ローム粒子混入
0
1m

第3図　1号住居跡



第４図　２号住居跡

３号住居跡（第５図）

調査区中央部で検出された。

プランは長軸３ｍ、短軸2.7ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは20cmで、壁は垂直に立ち上がる。ピットは浅い掘り方のものが数個検出され、４個が主柱穴と考えられる。炉は石囲土器埋設部、敷石石組部、掘り込みからなる。土器埋設部は深鉢形土器の上半分を正立して埋設した石囲炉である。敷石石組部は底・側面に石を組み、埋設土器との間には大きな川原石を据えてあり、底面には炭化物が多量に堆積していた。掘り込みはやや浅く、壁より外側へ張り出している。床は平坦で、堅い。住居の中央部床面に炭化物の散在が認められた。

出土遺物

土器（第39図２～４、第50図71～76）

２は炉埋設土器、３は床面、他は覆土出土である。沈線区画の磨消帯を施すものである。２は口

縁部がやや外傾する深鉢形土器で、地文はＲＬ単節斜縄文（縦位回転）である。

３は口縁部がやや外傾する鉢形土器で、地文はＬＲ単節斜縄文（縦位回転）である。

土製品（第102図14・15）

再利用土製品（円盤状土製品）である。

石製品（第117図２）

有孔石製品で、両方から孔を穿っている。装飾品であろう。

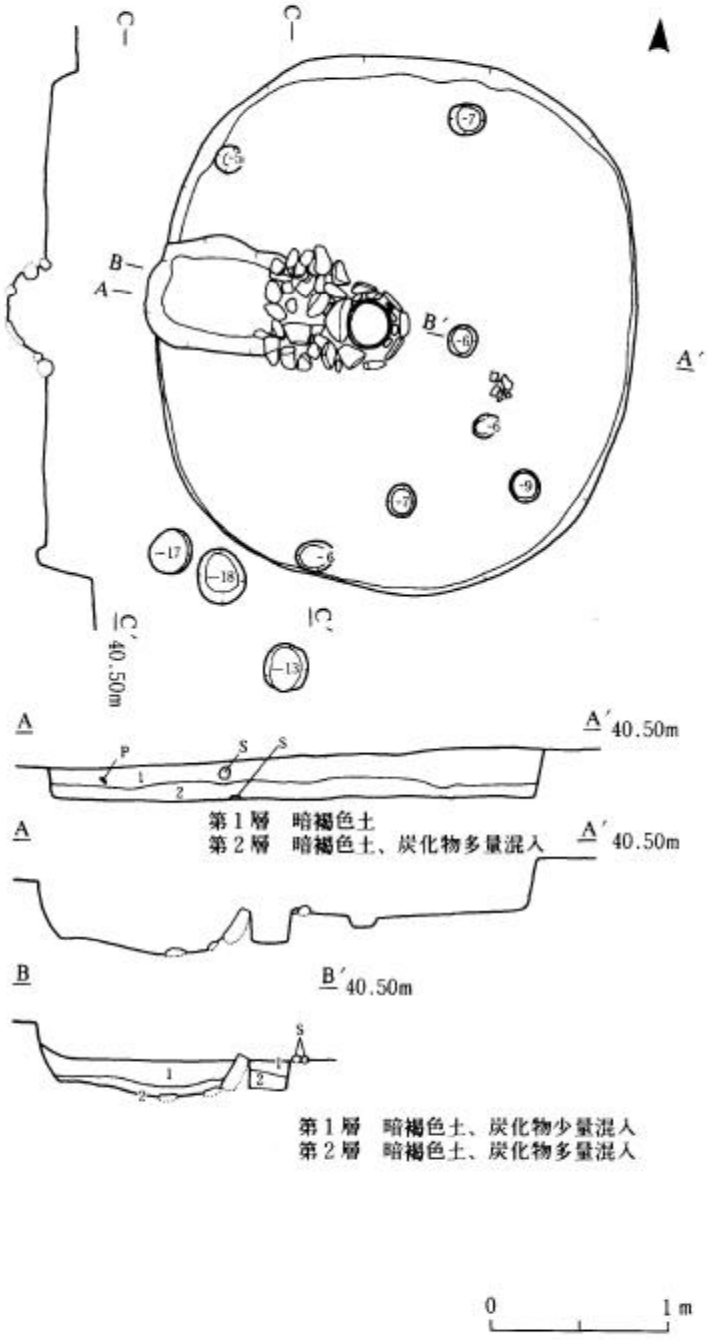
４号住居跡（第６図）

調査区中央部で検出された。

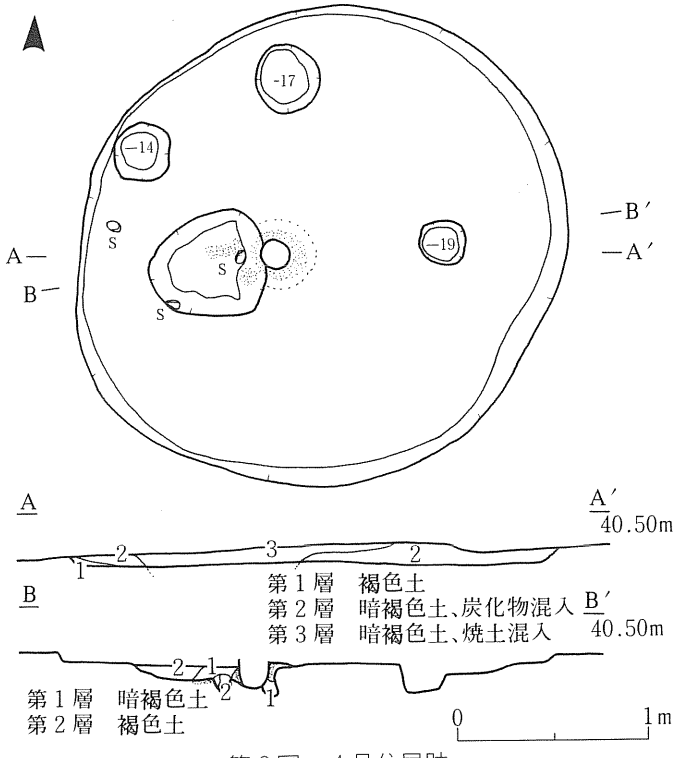
プランは長軸2.7m、短軸2.4mの楕円形を呈し、確認面からの深さは10cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは３個検出された。炉は土器埋設部と掘り込みからなる。土器埋設部は深鉢形土器の胴部を正立して埋設し、周辺は火熱を受け赤変している。掘り込みは底面が火熱を受け、２個の石が焼けている事から石組みであったと考えられる。床は平坦である。

出土遺物

土器（第39図５、第50図77～80）



第５図　３号住居跡



第６図　４号住居跡

５は炉埋設土器、他は覆土からの出土である。沈線区画の磨消帯を施すものである。５は深鉢形土器の胴部で、地文はＲＬ単節斜縄文（縦・横位回転）である。

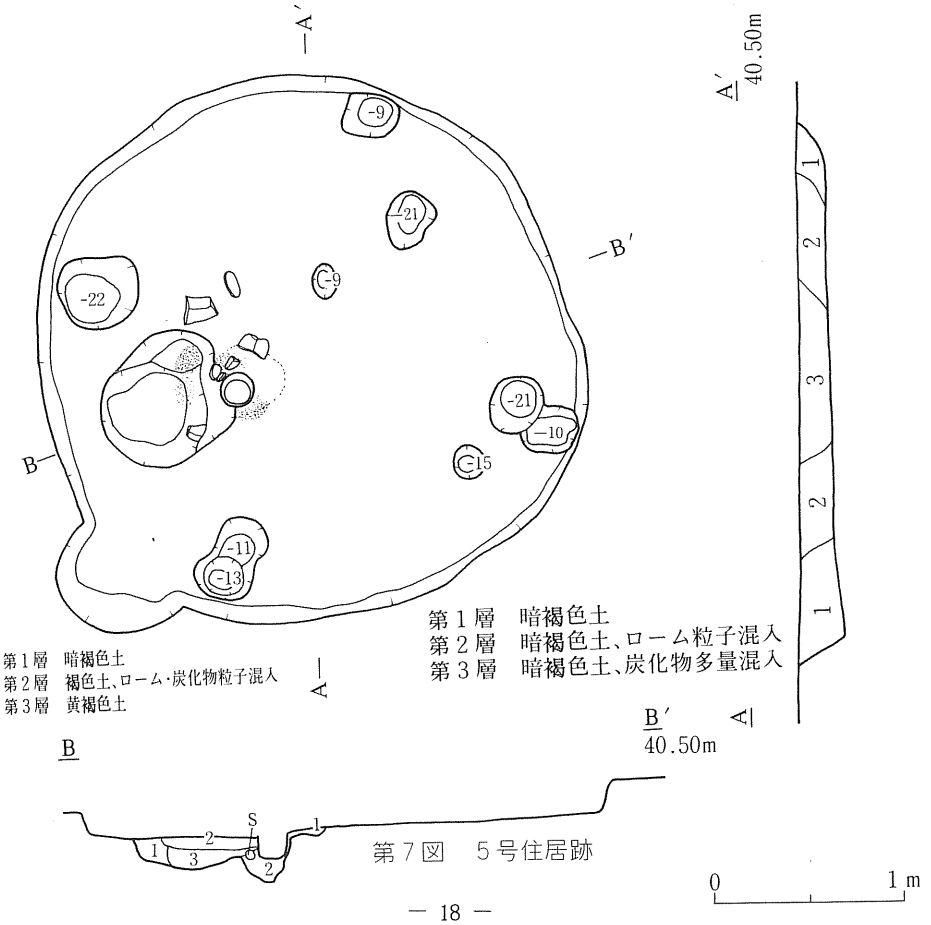
石器（第86図６）

６は磨製石斧で、基部破損部にアスファルトの付着が認められる。他に剝片が２点出土している。

５号住居跡（第７図）

調査区中央部で検出された。

プランは径約３ｍの円形を呈し、南西側に張り出しがある。確認面からの深さは25cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは数個検出され、壁際の４個が主柱穴と考えられる。炉は石囲



第７図　５号住居跡

土器埋設部と掘り込みからなる。土器埋設部は深鉢形土器の上半分を正立して埋設し、周辺は火熱を受け赤変している。掘り込みは底面が火熱を受けている。１個の焼けている石が認められた事と炉の北側に石が散乱している事などから石組みであった可能性が考えられる。床は平坦で、全面的に堅い。

出土遺物

土器（第39図６、第50図81・82）

６は炉埋設土器、他は覆土出土である。沈線区画の磨消帯を施すものである。６は口縁部がやや外傾する深鉢形土器で、地文はＲＬ単節斜縄文（縦位回転）である。

６号住居跡（第８図）

調査区中央部で検出された。

プランは長軸2.9m、短軸2.7mの楕円形を呈し、確認面からの深さは10cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは13個検出され、壁際の４個が主柱穴と考えられる。炉は土器埋設部、石組部、一段浅い掘り込みからなる。土器埋設部は深鉢形土器の胴部を正立して埋設し、周辺は火熱を受け赤変している。掘り込みは底面が火熱を受け、埋設土器との間に大きな川原石を立てて据えてある。浅い掘り込みは壁に接する。床はほぼ平坦で、堅い。

出土遺物

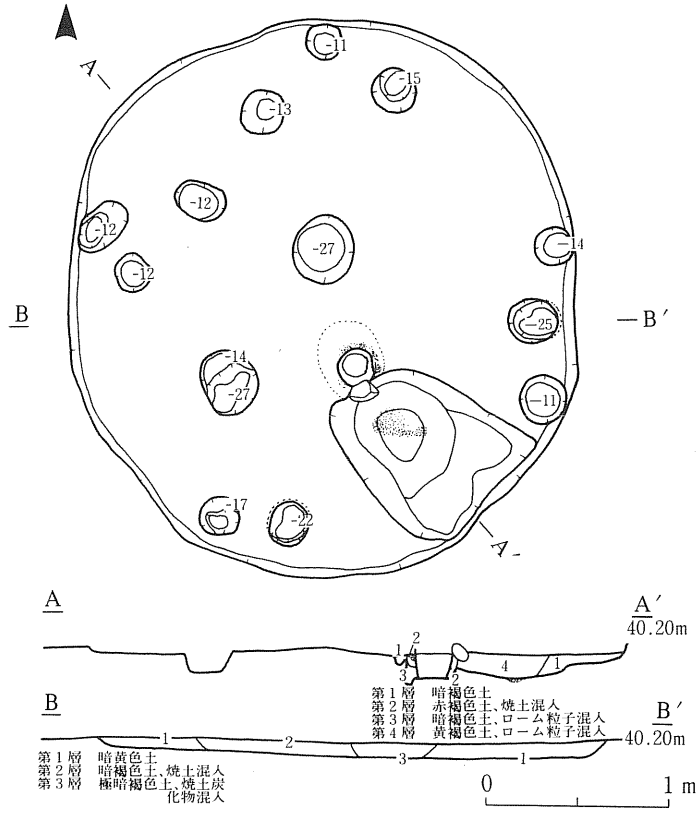
土器（第39図7．第50図83・84）

７は炉埋設土器、84は床面、83は覆土からの出土である。沈線区画の磨消帯を施すものである。７は深鉢形土器の胴部で、地文はＲＬ単節斜縄文である。

７号住居跡（第９図）

調査区中央部で検出された。

プランは径2.4mのほぼ隅丸方形を呈し、確認面からの深さは20cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは数個検出され、壁際の４個が主柱穴と考えられる。炉は土器埋設部と石組部からなる。土器埋設部は深鉢形土器の胴部を正立



第８図　６号住居跡

して埋設し、周辺は火熱を受け赤変している。石組部は底面が火熱を受け、南東側面及び埋設土器との間に石が組まれていた。床はほぼ平坦である。

出土遺物

土器（第40図８、第51図85～89）

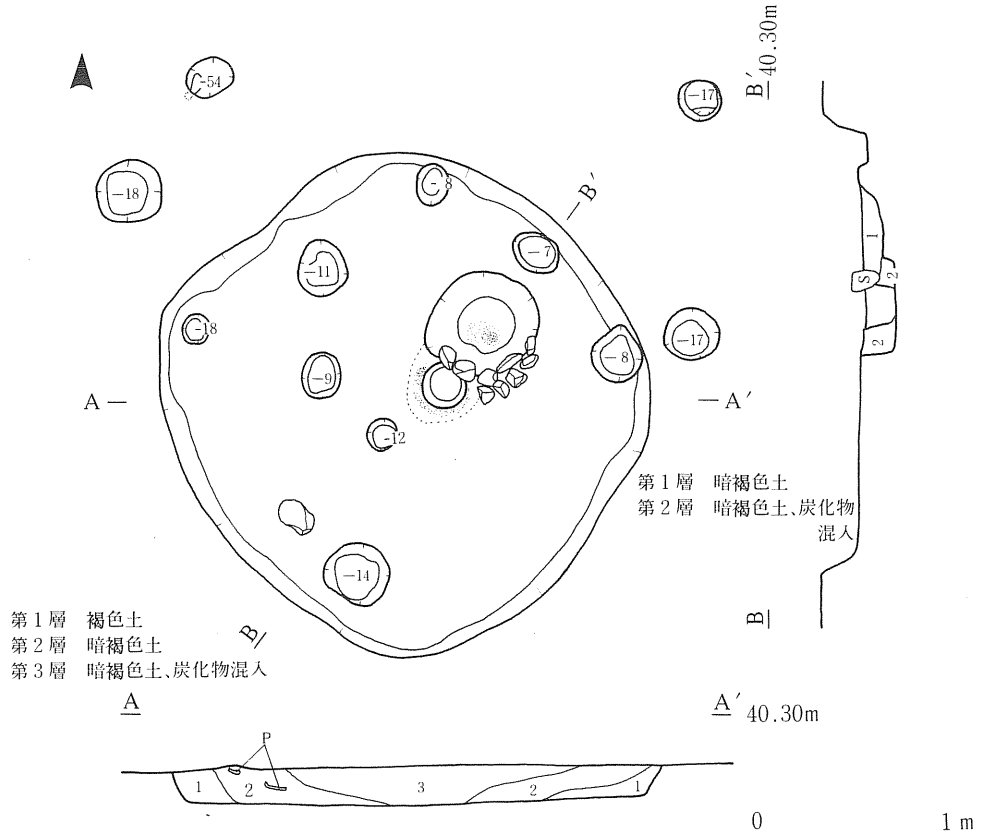
８は炉埋設土器、他は覆土からの出土である。口縁部文様帯に撚糸圧痕を施すもの、沈線区画の磨消帯を施すものである。８は深鉢形土器の胴部で、地文はＲＬ単節斜縄文（縦位回転）である。

土製品（第102図16・17）

再利用土製品（円盤状土製品）である。

石器（第86図７）

石鏃である。他に剝片が数点出土している。

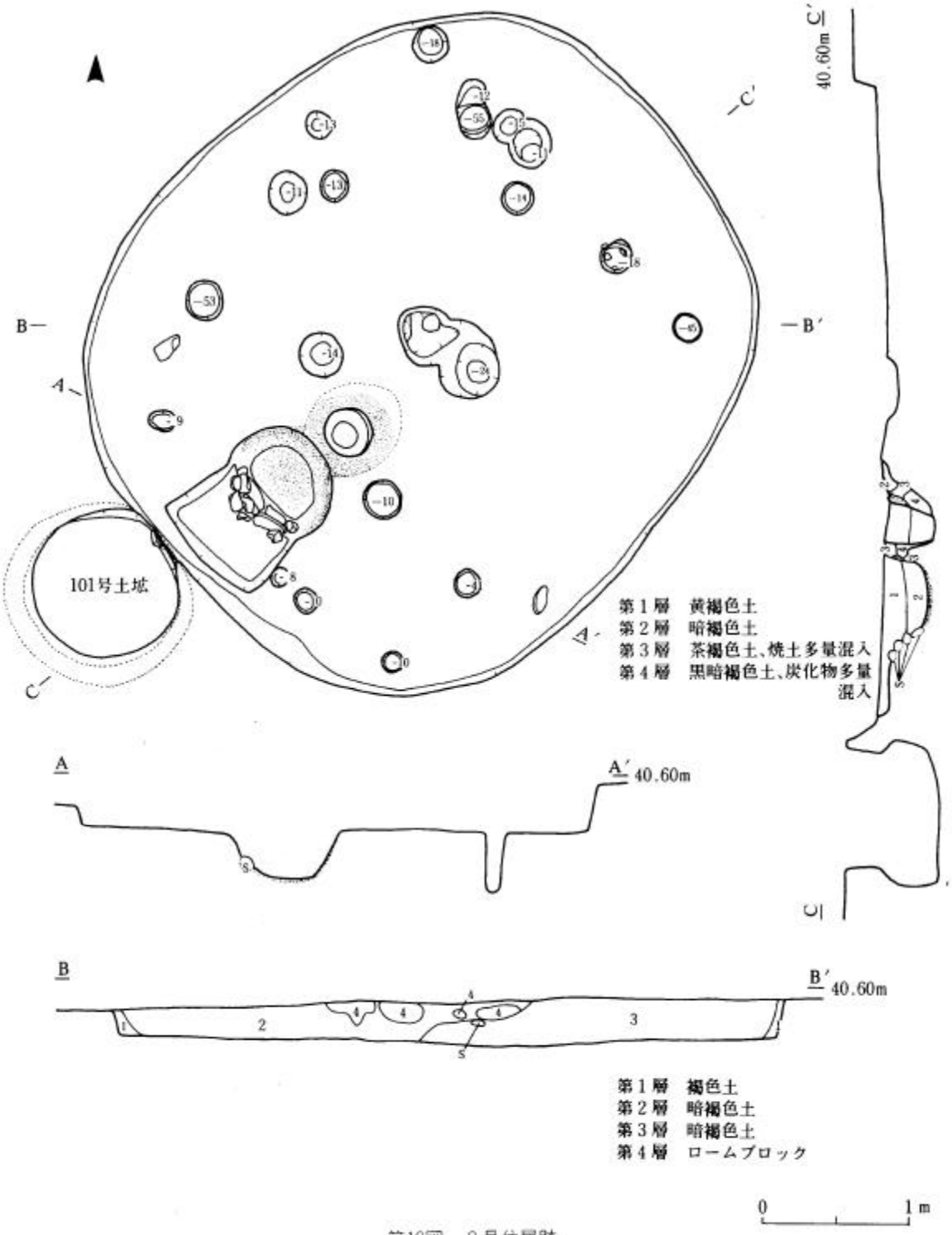


第９図　７号住居跡

８号住居跡（第10図）

調査区中央部で検出された。

プランは長軸4.5m、短軸4.1mのほぼ隅丸方形を呈し、101号土坑と重複する。確認面からの深さは30cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは数個検出され、深い掘り方の４個が主柱穴と考えられる。炉は土器埋設部、石組部、掘り込みからなる。土器埋設部は胴下部を欠く深鉢形土器を正


101号土坑
第1層　黄褐色土
第2層　暗褐色土
第3層　茶褐色土、焼土多量混入
第4層　黒暗褐色土、炭化物多量混入
40.60m
第1層　褐色土
第2層　暗褐色土
第3層　暗褐色土
第4層　ロームブロック
0
1m

第10図　8号住居跡

立して埋設し、周辺は火熱を受け赤変している。石組部は底・側面が火熱を受け、掘り込み側の側面に石が組まれている。掘り込みは一段浅く、壁に近くなる。床はほぼ平坦で、全面的に堅い。

出土遺物

土器（第40図９～11、第51図90～95）

11は炉埋設土器、他は覆土出土である。沈線区画の磨消帯を施すものである。11は口縁部がゆるく外傾する深鉢形土器で、口唇部に４個の突起をもつ。地文は単軸絡条体回転文（縦位回転）である。

土製品（第101図８、第102図18）

８は三角形土製品、18は再利用土製品（円盤状土製品）である。

石器（第86図８・９）

８は縦型石匙、９は掻器状石器である。他に剝片が多量に出土している。

石製品（第119図７）

岩偶で顔部を欠く。石質は硅化木である。いわゆるこけしの源流であろうか。

９号住居跡（第11図）

調査区中央部で検出された。

プランは長軸4.8m、短軸4.5mのほぼ隅丸方形を呈し、南西側に張り出しをもつ。確認面からの深さは20cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは数個検出され、深い掘り方の４個が主柱穴と考えられる。炉は土器埋設部、石組部、掘り込みからなる。土器埋設部は深鉢形土器の胴部を正立して埋設し、周辺が火熱を受け赤変している。石組部は底面が火熱を受け、埋設土器との間に大きな川原石と側面に石を組んでいる。掘り込みは一段浅く、壁より外側に張り出している。床はほぼ平坦で、全面的に堅い。また、床面中央部が焼けている点や、焼土・炭化物が多量に認められる事などから火災住居の可能性も考えられる。

出土遺物

土器（第40図12、第15図96～103）

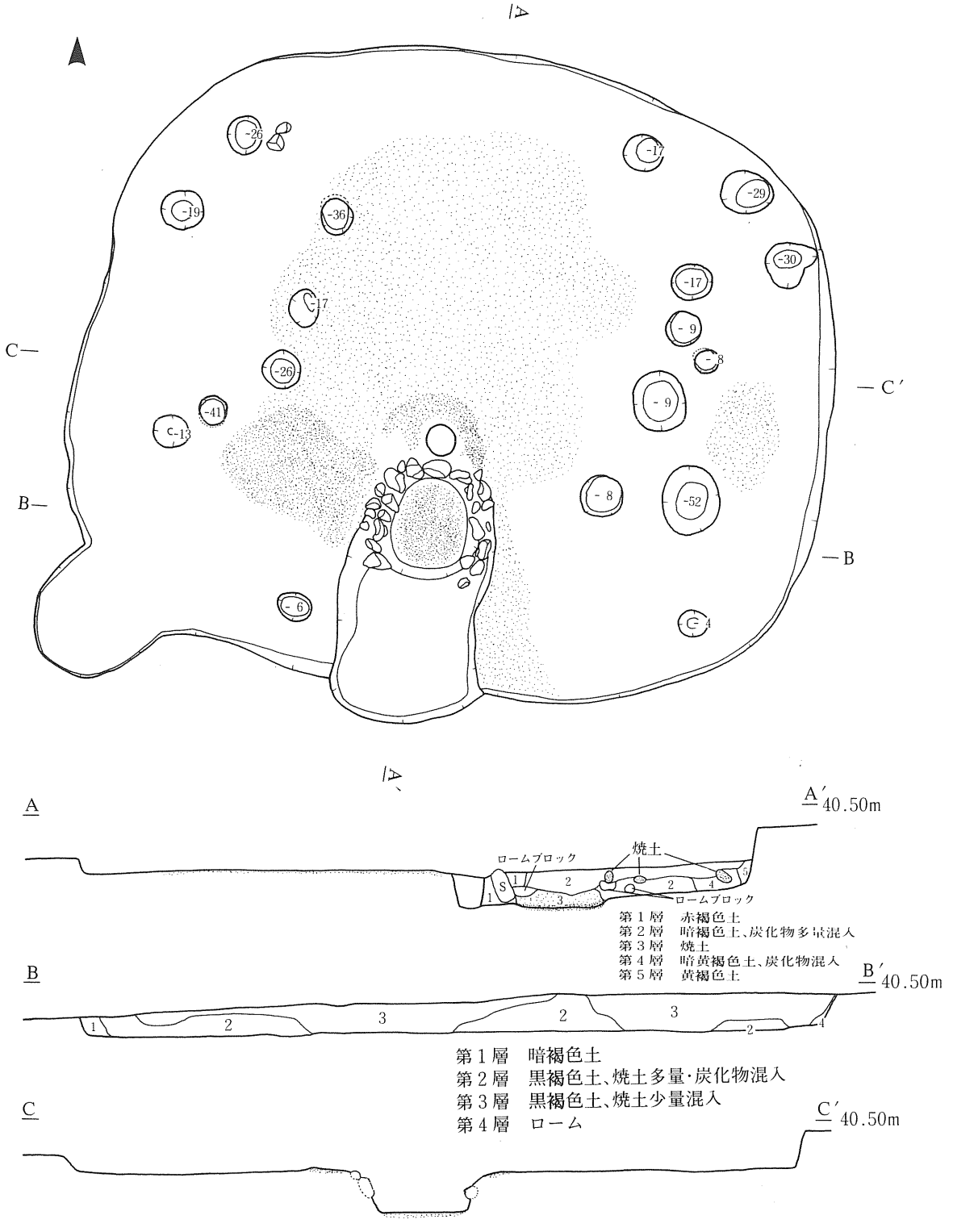
12は炉埋設土器、他は覆土出土である。粘土紐を貼り付けてその両側を沈線で調整するもの、粘土紐を貼り付けるもの、沈線区画の磨消帯を施すものである。12は口縁部がやや外傾する深鉢形土器の胴部で、地文はＲＬ単節斜縄文（縦位回転）である。

土製品（第100図６、第101図11、第102図19・20）

６は三角形土製品で一部欠損する。11はスタンプ状をなす。19・20は再利用土製品（円盤状土製品）である。

石器（第86図10～17、第91図115・116）

10は石鏃、11は石錐、12は縦型石匙、13は撥形状石器、14は掻器、15は削器状石器、16・17は磨製石斧で17は小形である。115は石皿状石器、116は磨石である。他に剝片が多量に出土している。


A
A′ 40.50m
ロームブロック
焼土
ロームブロック
第１層　赤褐色土
第２層　暗褐色土、炭化物多量混入
第３層　焼土
第４層　暗黄褐色土、炭化物混入
第５層　黄褐色土
B
B′ 40.50m
第１層　暗褐色土
第２層　黒褐色土、焼土多量・炭化物混入
第３層　黒褐色土、焼土少量混入
第４層　ローム
C
C′ 40.50m
C—
—C′
B—
—B
0
1m

第11図　９号住居跡

10号住居跡（第12図）

調査区中央部で検出された。

プランは長軸３ｍ、短軸2.7ｍのほぼ隅丸方形を呈し、確認面からの深さは15cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは数個検出され、３本柱のようである。炉は石囲土器埋設部と掘り込みからなるが、掘り込み部側面に石の抜き取り痕が認められることから石組炉であったと考えられる。土器埋設部は深鉢形土器の胴下部を正立して埋設する。周辺は火熱を受け赤変している。掘り込みは楕円形を呈し、壁側がやや浅い。床はほぼ平坦で、堅い。

出土遺物

土器（第40図13、第51図104～111）

13は炉埋設土器、他は覆土出土である。頸部隆帯に刺突を施すもの、沈線区画の磨消帯を施すものである。13は胴部側面にのみ刺突を施す。

土製品（第100図５、第102図21）

５は三角形土製品で一部を欠損する。21は再利用土製品（円盤状土製品）である。

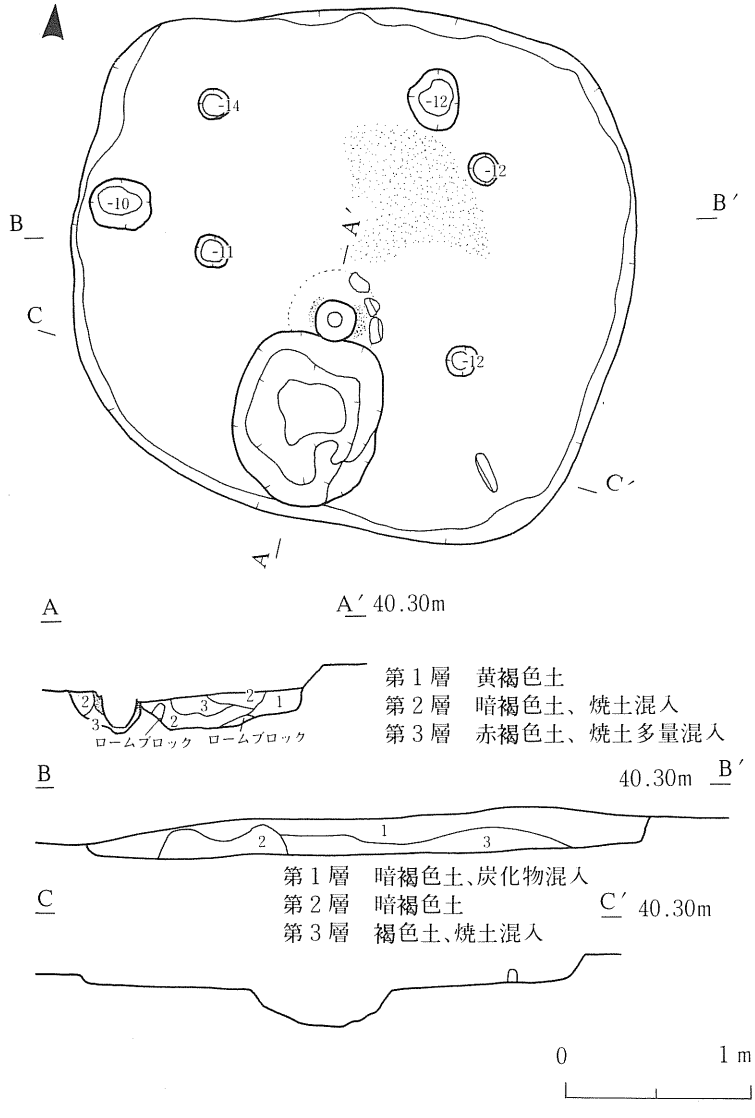
石器（第86図18）

18はヘラ状石器で、両面からの加工がある。他に剝片が多量に出土している。

11号住居跡（第13図）

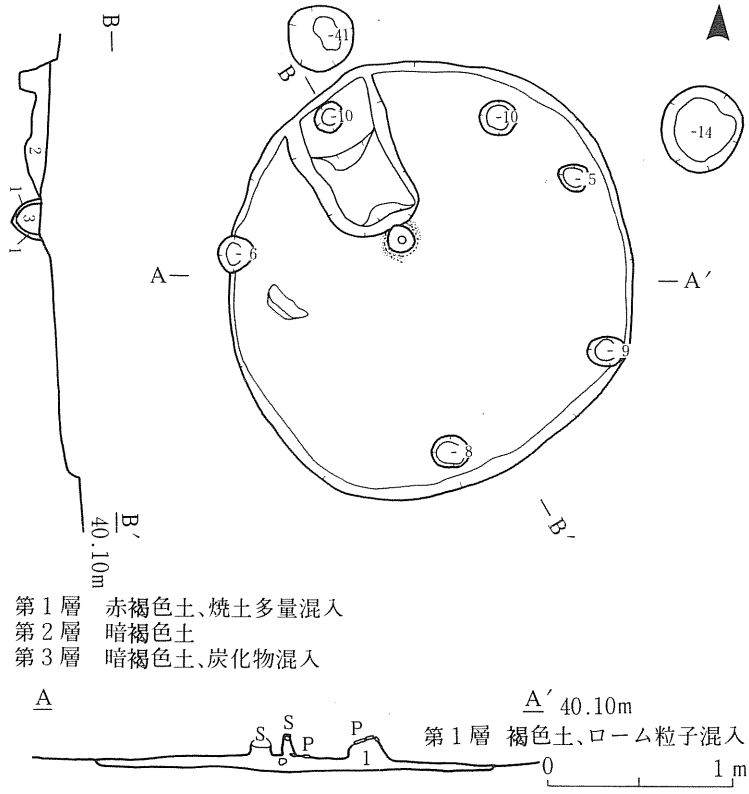
調査区中央部で検出された。

プランは径2.2ｍのほぼ円形を呈し、確認面からの深さは５cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは数個検出され、壁際の４個が



第12図　10号住居跡

主柱穴と考えられる。炉は土器埋設部、掘り込み、一段浅い掘り込みからなる。土器埋設部は深鉢形土器の胴部を正立して埋設し、周辺が火熱を受け赤変している。掘り込みは楕円形を呈する。一段浅い掘り込みにはピットが認められ、壁に接する。床はほぼ平坦で、堅い。



第13図　11号住居跡

出土遺物

土器（第40図14、第51図112～114）

14は炉埋設土器、他は覆土出土である。沈線区画の磨消帯を施すものである。14は深鉢形土器の胴部で、地文はＲＬ単節斜縄文である。

12号住居跡（第14図）

調査区北側で検出された。

プランは径4.1ｍのほぼ円形を呈し、47・120・122号土坑と重複する。住居跡は46・47土坑に切られているが、他は不明である。ピットは深い掘り方が４個検出され、主柱穴と考えられる。炉は石囲土器埋設部、石組部、掘り込みからなる。土器埋設部は切り合いが認められ、古い埋設土器の上部に石囲を施し、新たに深鉢形土器を正立してある。周辺は火熱を受け赤変し、石組部は南及び掘り込み側側面に石組みが残る。掘り込みは一段浅い。床は平坦で、全面的に堅い。また、西側に石の入った掘り込みが認められるが、性格については不明である。

出土遺物

土器（第41図15～18、第52図115～118）

15(新)・16(旧)は炉埋設土器、18は床面、他は覆土出土である。沈線区画の磨消帯を施すものである。15は口縁部がやや外傾する深鉢形土器である。頸部に一条の沈線が巡り、沈線の上部は稜線となる。地文はＲＬＲ複節斜縄文（縦位回転）である。18は波状をなしやや外傾する口縁の深鉢形土器である。口縁部磨消帯には∩状の貼り付けがみられる。地文はＲＬ単節斜縄文(縦・斜位回転)である。

石器（第86図19・20）

19は石鏃、20は削器状石器である。他に剝片が数点出土している。

13号住居跡（第15図）

調査区西側で検出された。

プランは長軸5.7m、短軸5.5mの楕円形を呈し、確認面からの深さは30cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは深い掘り方のものと浅い掘り方のものが検出され、段に沿った深い掘り方5個が主柱穴と考えられる。炉は石囲土器埋設炉で鉢形土器を斜位に埋設してある。底面は火熱を受け赤変している。床は段をもち、段はゆるく立ち上がる。

出土遺物

土器（第41図19、第52図119～124）

19は炉埋設土器、他は覆土出土である。19は口縁部がゆるく外傾する鉢形土器である。ＲＬ単節斜縄文（縦位回転）を施した後に、棒状工具による沈線の直線・曲線で文様を作り出している。他は沈線区画の磨消帯の施されるもので、隆起線や刺突を施すものもある。

土製品（第102図22）

再利用土製品（円盤状土製品）である。

石器（第86図21・22）

いずれも石鏃で、両面にアスファルトの付着が認められる。他に剝片が多量に出土している。

14号住居跡（第16図）

調査区西側で検出された。

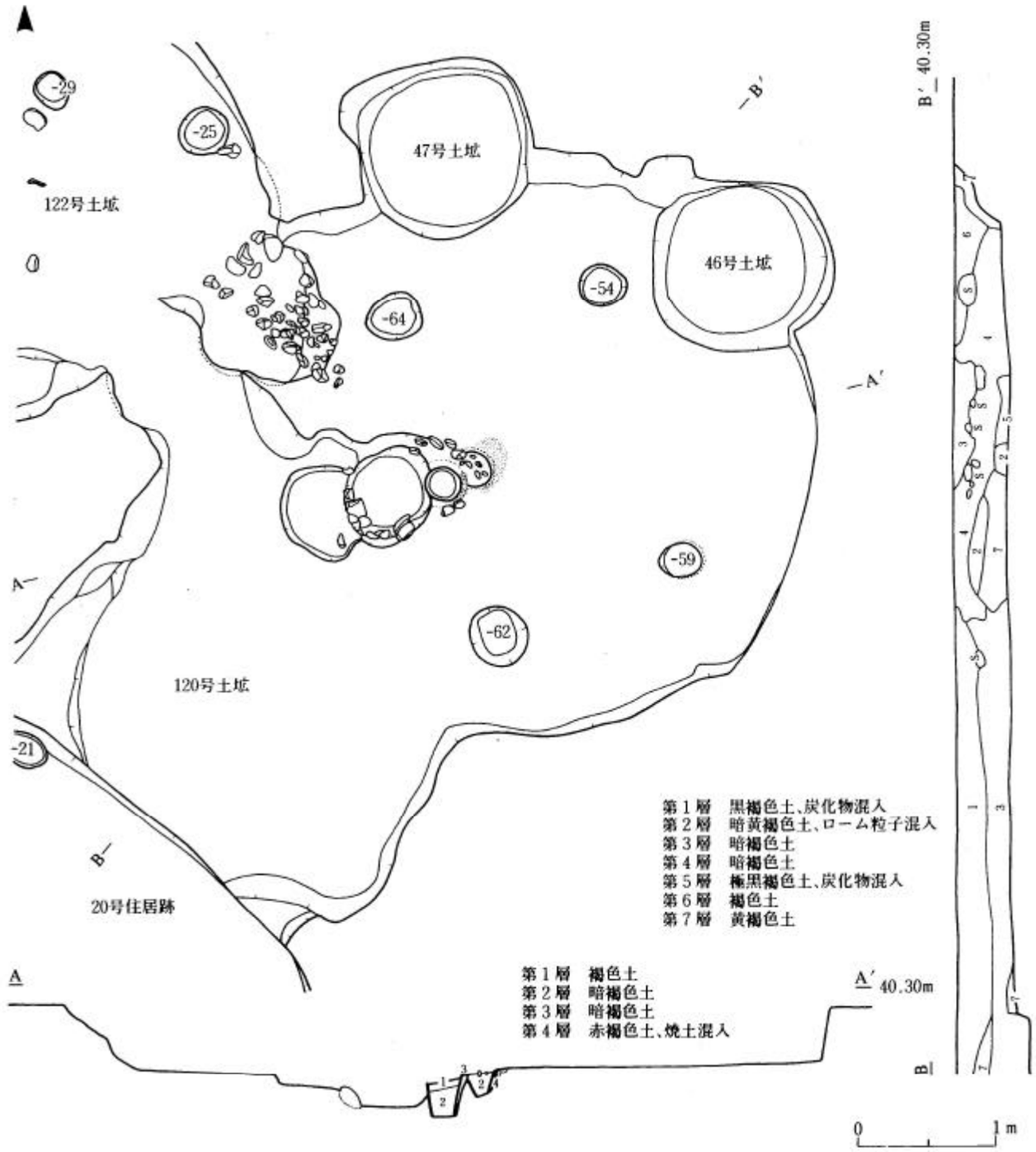
プランは径4.4mのほぼ隅丸方形を呈し、88号土坑と重複する。確認面からの深さは20cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がり、幅15cm、深さ5cmの周溝が認められた。ピットは数個検出され、深い掘り方の5個が支柱穴と考えられる。炉は土器埋設部と掘り込みからなる。土器埋設部は切り合いが認められた。古い埋設土器の上部をこわして、新たに土器を埋設してある。新しい埋設土器の内下部には本土器の下半部が敷かれていた。周辺は火熱を受け赤変している。掘り込みは底面が火熱を受け、壁際が浅くなる。焼けた3個の石が確認された事から石組部であった可能性がある。床は平坦で、全面的に堅い。

出土遺物

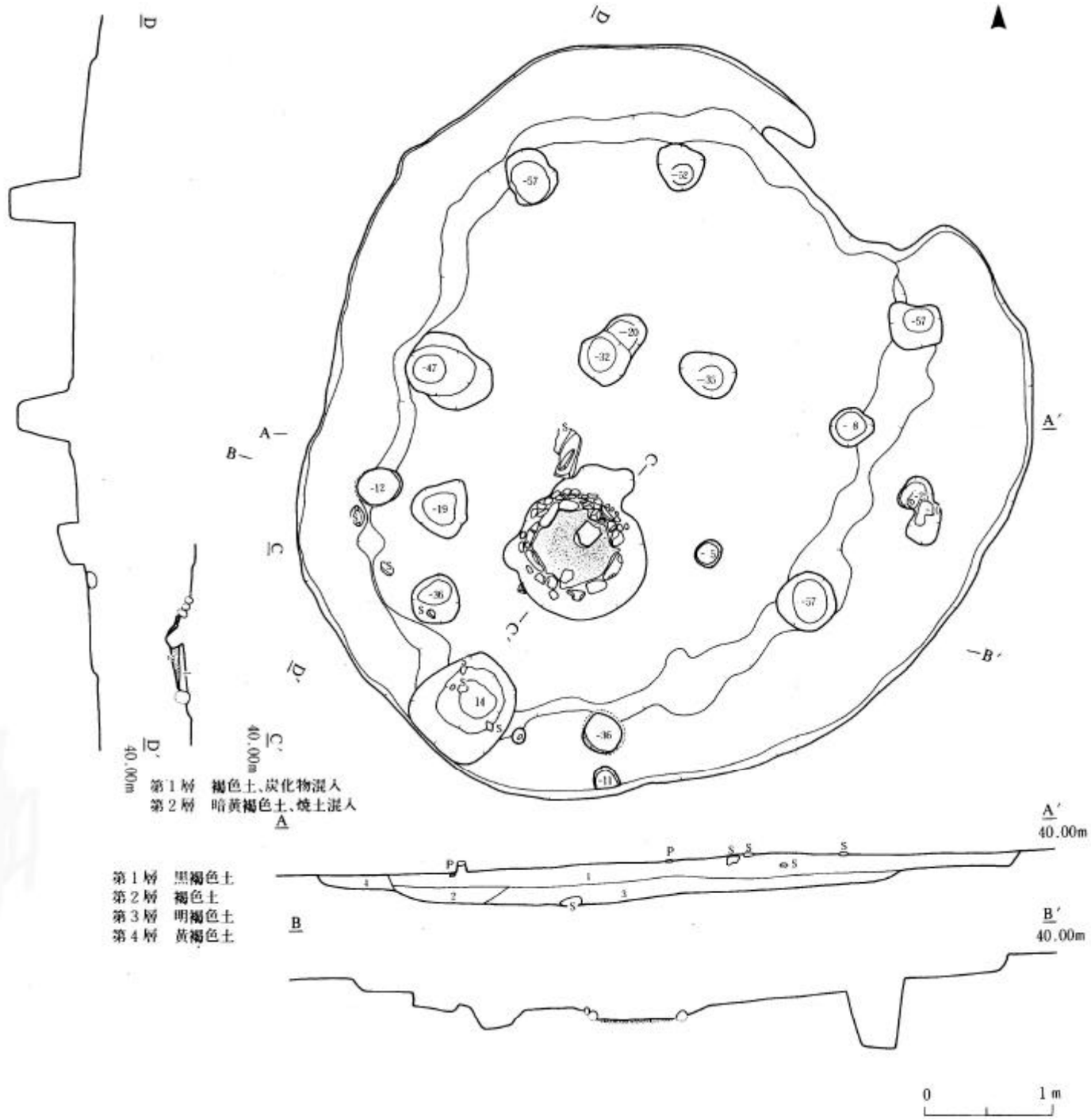
土器（第42図20、第52図125～132）

20は炉埋設土器（上半分が埋設で下半分は敷かれていた）、他は覆土出土である。粘土紐を貼り付けてその両側を沈線で調整するもの、沈線区画の磨消帯を施すもの、網目状撚糸文を施すもの、刻線を網目状に施すものである。20は口縁部がやや外傾する深鉢形土器で、地文はＬＲ単節斜縄文（縦位回転）である。

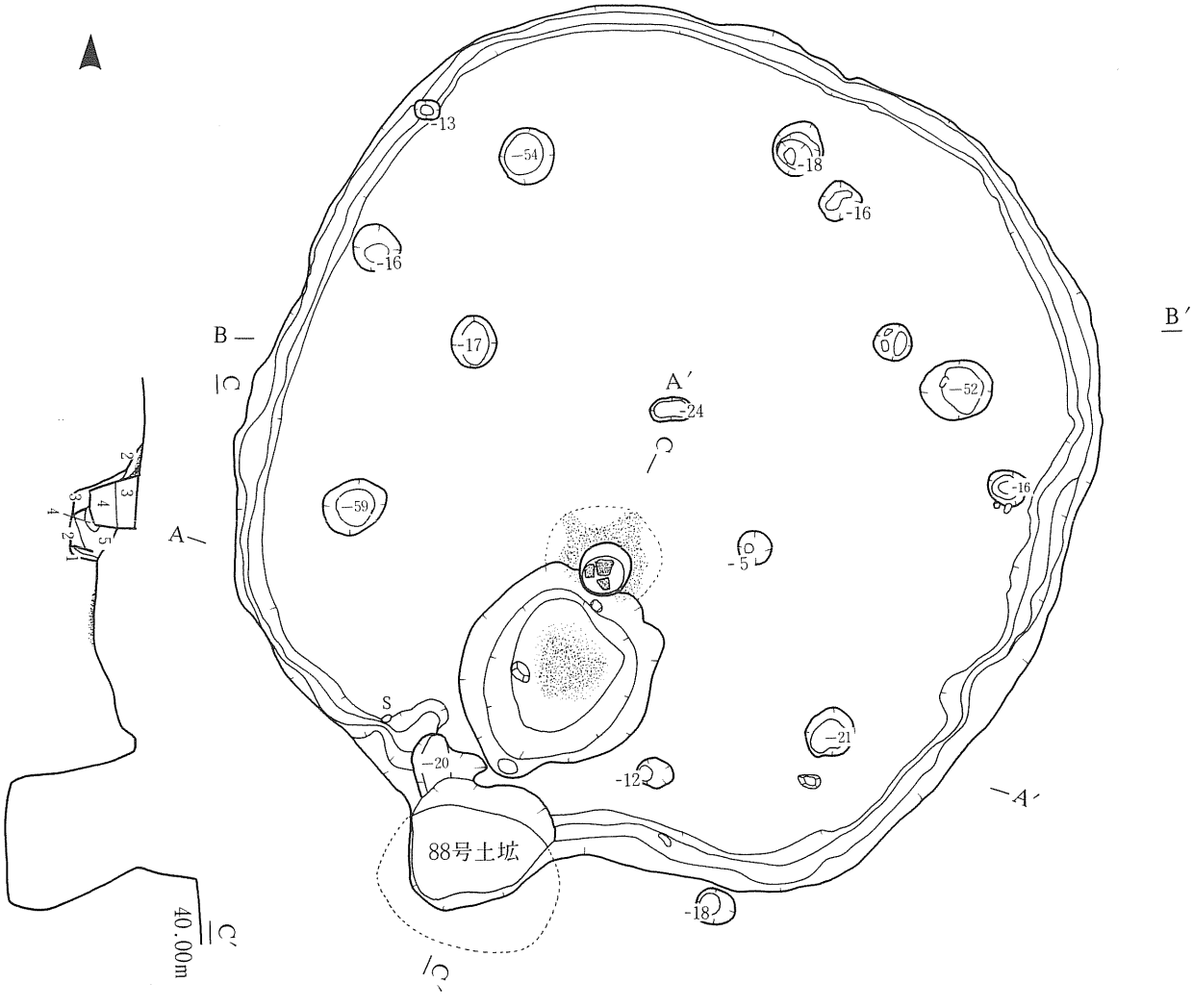
土製品（第102図23～28）

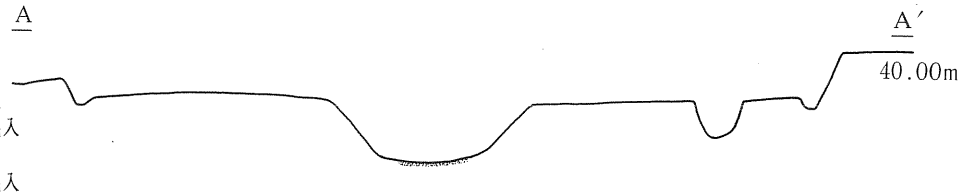

-29
-25
122号土坑
47号土坑
46号土坑
-54
-64
-59
-62
120号土坑
-21
20号住居跡
A
A′
B
B′
40.30m
第1層　黒褐色土、炭化物混入
第2層　暗黄褐色土、ローム粒子混入
第3層　暗褐色土
第4層　暗褐色土
第5層　極黒褐色土、炭化物混入
第6層　褐色土
第7層　黄褐色土
第1層　褐色土
第2層　暗褐色土
第3層　暗褐色土
第4層　赤褐色土、焼土混入
0
1m

第14図　12号住居跡

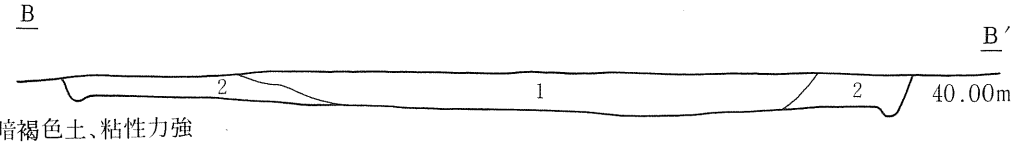

第1層　褐色土、炭化物混入
第2層　暗黄褐色土、焼土混入
第1層　黒褐色土
第2層　褐色土
第3層　明褐色土
第4層　黄褐色土
40.00m
0
1m

第15図　13号住居跡





第1層　赤褐色土、焼土混入
第2層　赤褐色土、炭化物混入
第3層　褐色土
第4層　暗褐色土、炭化物混入
第5層　黄褐色工、ローム粒子混入



第1層　暗褐色土、粘性力強
第2層　黒褐色土、粘性力弱

0　1m

第16図　14号住居跡

いずれも再利用土製品（円盤状土製品）である。

石器（第86図23～27）

23は縦型石匙、24～26は削器状石器、27は小形磨製石斧である。他に剝片が多量に出土している。

15号住居跡（第17図）

調査区西側で検出された。

プランは径５ｍのほぼ隅丸方形を呈し、確認面からの深さは40cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは数個検出され、深い掘り方の６～７個が主柱穴と考えられる。炉は土器埋設部、石組部、掘り込みからなる。石組部には炉埋設土器と考えられる土器が置かれていた。底面には石が組まれ火熱を受けていた。掘り込みはやや浅く壁に接し、東・西側面に一部焼けた痕跡が認められた。床は平坦で、全面的に堅いが、地山の礫が露出していた。床が部分的に焼け、覆土に焼土・炭化材が多量に認められたが火災住居かどうかは不明である。

出土遺物

土器（第42図21、第52図133～140）

21は炉埋設土器、他は覆土出土である。粘土紐を貼り付けてその両側を沈線で調整するもの、沈線区画の磨消帯を施すものである。21は深鉢形土器の胴部で、地文はＬＲ単節斜縄文（縦位回転）である。

土製品（第102図29）

再利用土製品（円盤状土製品）である。

石器（第87図28、29）

28は削器状石器、29は磨製石斧である。他に剝片が少量出土している。

自然遺体

炭化したとちの実が２個出土している。

16号住居跡（第18図）

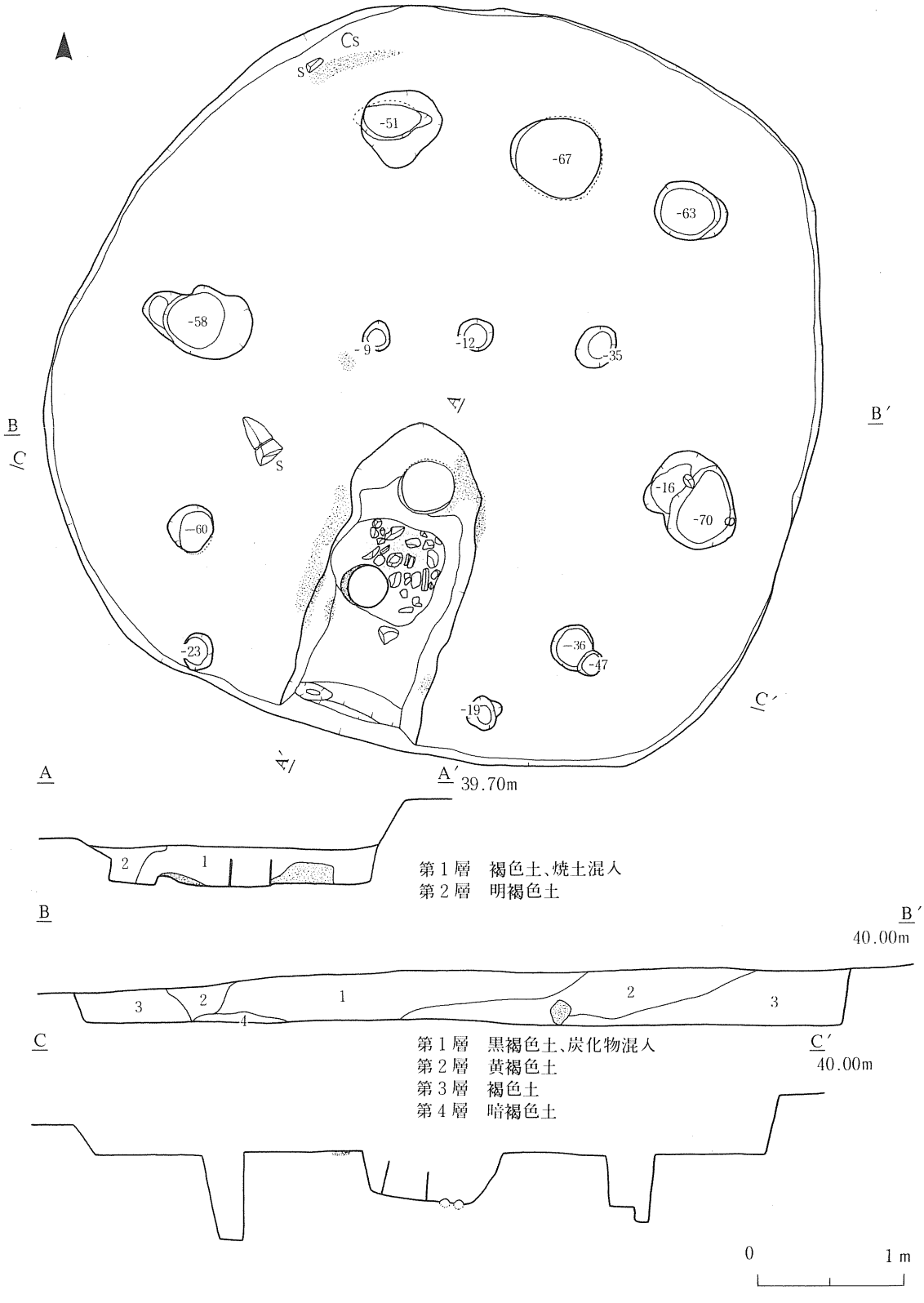
調査区西側で検出された。

プランは長軸5.8ｍ、短軸5.3ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは20ｍで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは多数検出され、深い掘り方の３個が主柱穴と考えられ、壁際のピットについても柱穴と考えられる。炉は１基の埋設土器と、石囲土器埋設部、石組部、掘り込みからなる。土器埋設部は深鉢形土器の胴部を正立して埋設してある。周辺は火熱を受け赤変している。石組部は底・側面が火熱を受け、側面に石が組まれている。掘り込みは一段浅く壁に接する。床は平坦で、全面的に堅い。

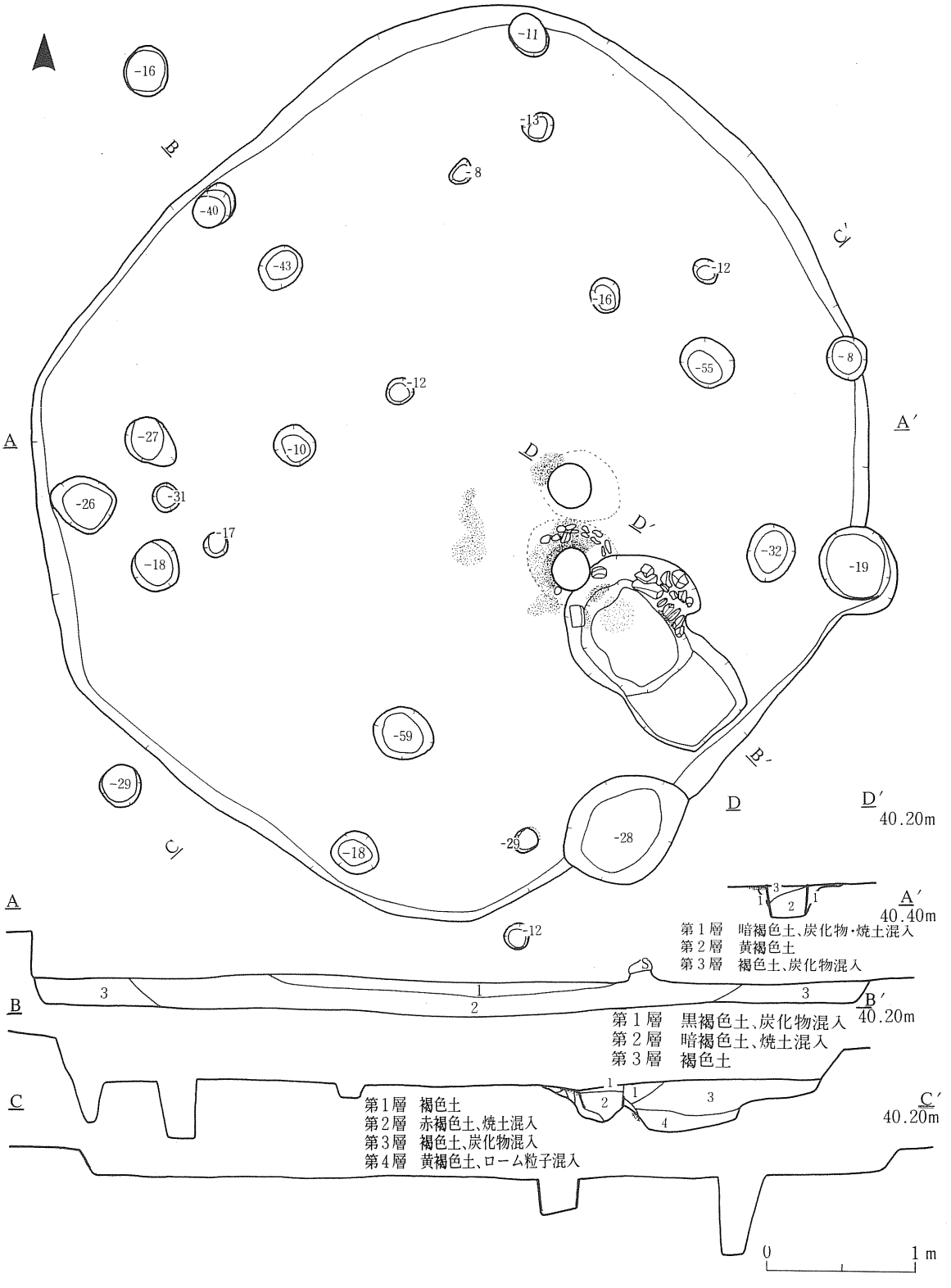
出土遺物

土器（第42図22・23、第52図141～144）

22は複式炉埋設土器、23は炉埋設土器、他は覆土出土である。細い粘土紐を貼り付けるもの、沈


Cs
S
-51
-67
-63
-58
-9
-12
-35
B
C
B′
S
-16
-70
-60
-23
-36
-47
-19
C′
A
A′
39.70m
2
1
第1層　褐色土、焼土混入
第2層　明褐色土
B
B′
40.00m
3
2
1
2
3
4
C
C′
40.00m
第1層　黒褐色土、炭化物混入
第2層　黄褐色土
第3層　褐色土
第4層　暗褐色土
0
1m

第17図　15号住居跡


A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
40.20m
40.40m
40.20m
40.20m
第１層　暗褐色土、炭化物・焼土混入
第２層　黄褐色土
第３層　褐色土、炭化物混入
第１層　黒褐色土、炭化物混入
第２層　暗褐色土、焼土混入
第３層　褐色土
第１層　褐色土
第２層　赤褐色土、焼土混入
第３層　褐色土、炭化物混入
第４層　黄褐色土、ローム粒子混入
0
1 m

第18図　16号住居跡

線区画の磨消帯を施すものである。22は深鉢形土器の胴部で、地文はＲＬ単節斜縄文（縦位回転）である。23は複元不可能で拓本の掲載とした。

土製品（第102図30）

再利用土製品（円盤状土製品）である。

石器（第87図30～35）

30は石鏃、31は石錐、32は掻器、33・34は削器状石器、35は磨製石斧である。他に剥片が少量出土している。

17号住居跡（第19図）

調査区北側で検出された。

プランは長軸4.8ｍ、短軸4.7ｍの変形隅丸方形を呈し、確認面からの深さは20cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは数個検出され、壁際の６個が主柱穴と考えられる。炉は土器埋設部、石組部、掘り込みからなる。土器埋設部は深鉢形土器の胴部を正立して埋設し、周辺は火熱を受け赤変している。石組部は底・側面が火熱を受け、掘り込み側側面に厚味のある平らな石を据えてある。掘り込みは一段浅く壁に近くなる。床は平坦で、全面的に堅い。

出土遺物

土器（第43図24・25、第53図145～150）

24は炉埋設土器、他は覆土出土である。沈線区画の磨消帯を施すものである。24は図上復元したもので、地文はＲＬ単節斜縄文（縦位回転）である。

石器（第87図36～41）

36～38は石鏃、39～41は削器状石器である。他に剥片が数点出土している。

自然遺体

炭化したとちの実が多量に出土している。

18号住居跡（第20図）

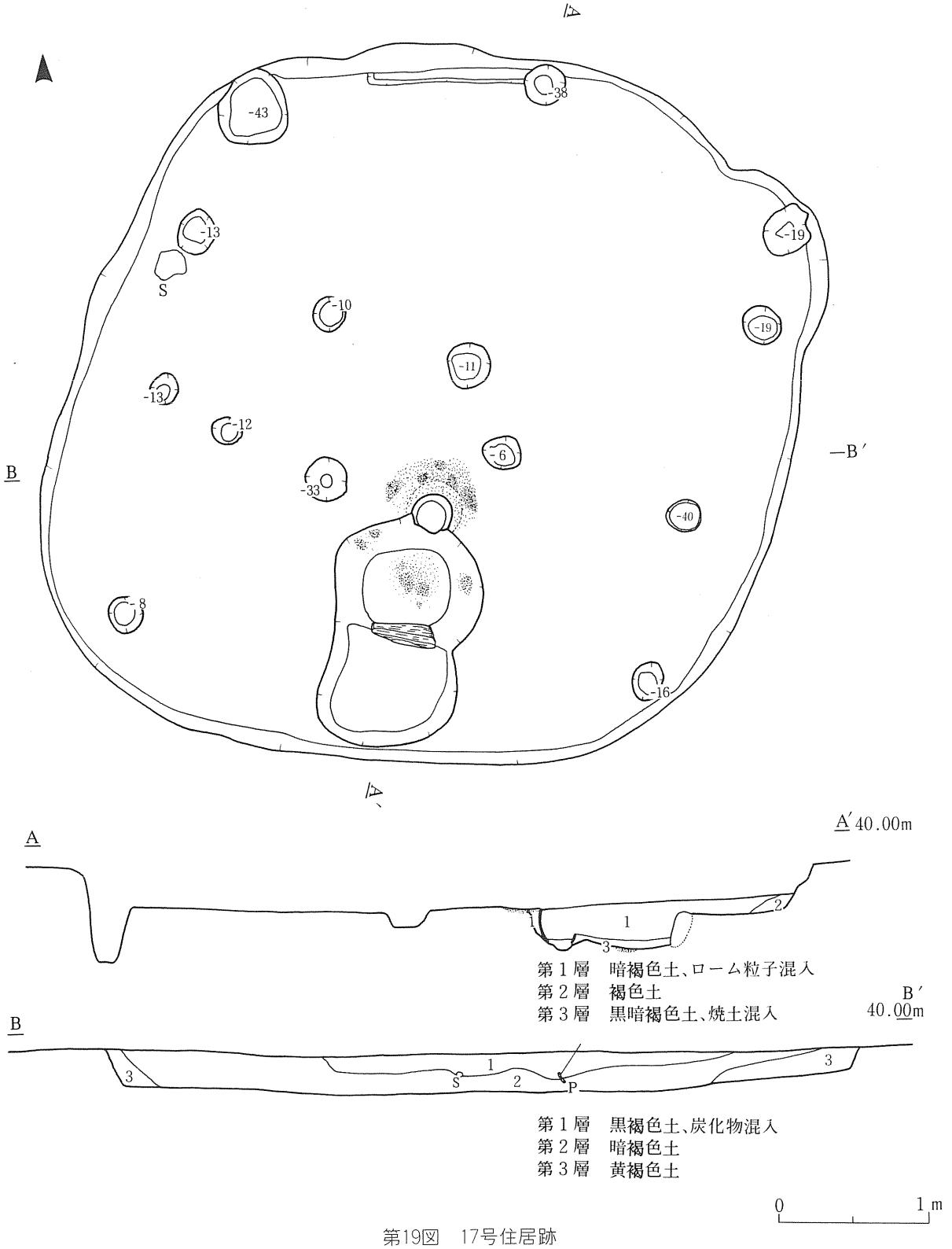
調査区北側で検出された。

プランは長軸3.3ｍ、短軸3.1ｍの楕円形を呈し、西側も一段浅く掘り込まれている。確認面からの深さは20cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。また、西側は確認面から深さ７cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは数個検出され、柱穴は壁際の深い掘り方４個と考えられる。炉は土器埋設部と掘り込みからなる。土器埋設部は深鉢形土器の胴部を正立して埋設し、周辺が火熱を受け赤変している。掘り込みは底・側面が火熱を受けている。床は平坦で、全面的に堅い。

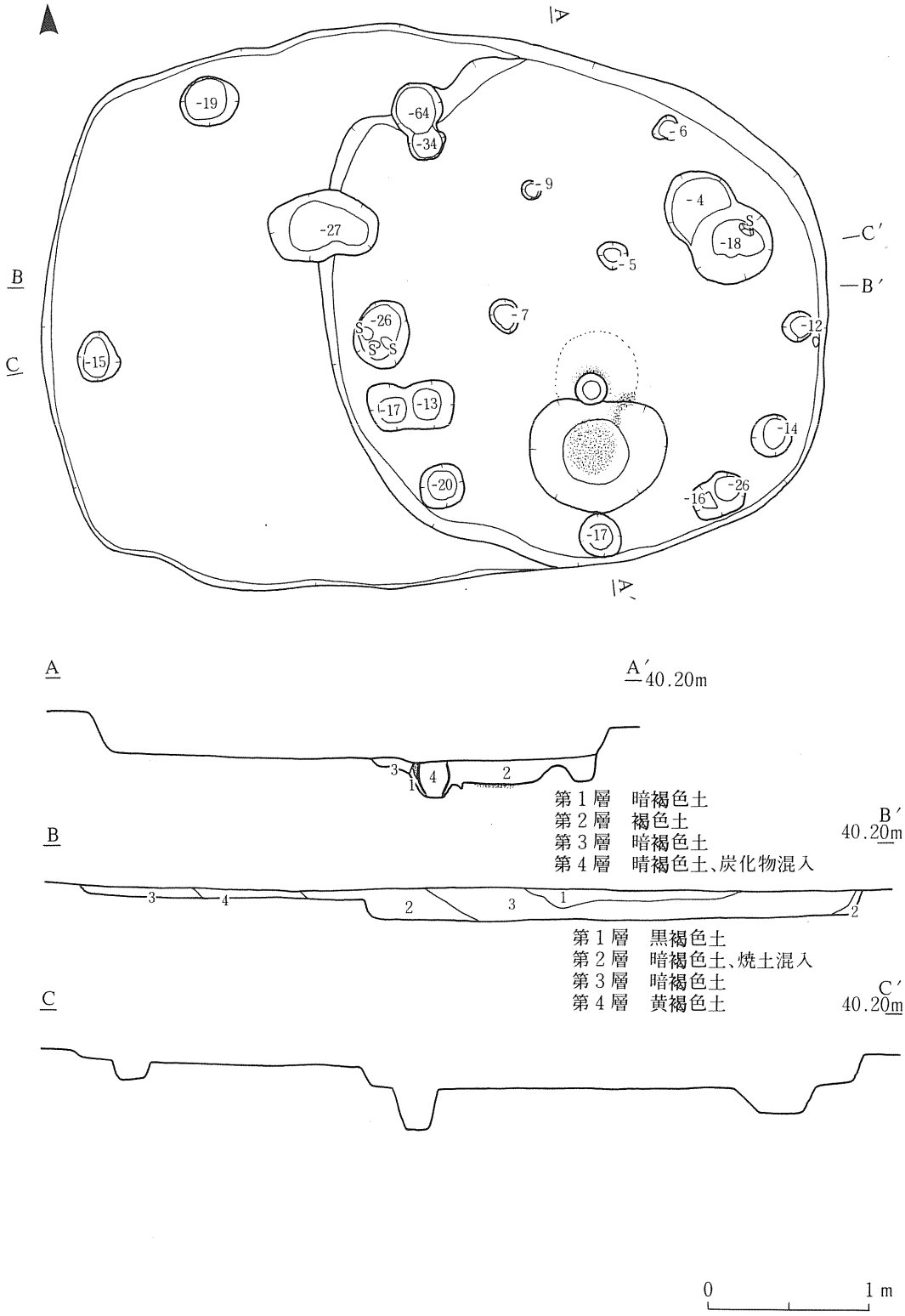
出土遺物

土器（第43図26～28、第53図151～154）

28は炉埋設土器、他は覆土出土である。口縁部文様帯に隆帯を巡らし刺突を加飾し撚糸圧痕を施すもの、沈線区画の磨消帯を施すものである。28は胴部が強く張る深鉢形土器で、地文はＲＬＲ複


A
-43
-38
-13
S
-19
-10
-19
-11
-13
-12
-6
B
—B′
-33
-40
-8
-16
A
A′40.00m
1
2
1
3
第１層　暗褐色土、ローム粒子混入
第２層　褐色土
第３層　黒暗褐色土、焼土混入
B′
40.00m
B
3
1
S
2
P
3
第１層　黒褐色土、炭化物混入
第２層　暗褐色土
第３層　黄褐色土
0
1m

第19図　17号住居跡


A
A′
40.20m
第１層　暗褐色土
第２層　褐色土
第３層　暗褐色土
第４層　晴褐色土、炭化物混入
B
B′
40.20m
第１層　黒褐色土
第２層　暗褐色土、焼土混入
第３層　暗褐色土
第４層　黄褐色土
C
C′
40.20m
0
1 m

第20図　18号住居跡

節斜縄文（縦位回転）である。26は胴下部に刺突が巡る。

石器（第86図42・43、第90図117・118）

42は石鏃、43は掻器、117は石皿、118はくぼみ石である。他に剥片が多量に出土している。

自然遺体

炭化したとちの実が２個、胡桃が２個出土している。

19号住居跡（第21図）

調査区北側、沢の縁辺部で検出された。

プランは径7.3ｍのほぼ円形を呈する。確認面からの深さは40cmで、壁は垂直に立ち上がり、幅20cm、深さ８cmの周溝が認められた。ピットは深い掘り方の５個が主柱穴と考えられる。炉は石囲土器埋設部、石組部、掘り込みからなる。石囲土器埋設部は切り合いが認められた。つまり、古い埋設土器を埋め、その上部に石囲埋設土器炉を構築している。周辺は強く焼け赤変している。石組部は底・側面が火熱を受けている。埋設土器との間に大きな川原石を配置し、側面には拳大の石を組んでいるが、まばらであり、抜き取ったものと考えられる。掘り込みは壁際まで掘られ、一段浅くなっている。床は平坦で、全面的に堅い。

出土遺物

土器（第43図29～31、第53図155～164）

30は炉埋設土器、29は古い炉埋設土器の掘り方、31・160～163はピット、他は覆土出土である。半隆起線文を施すもの、細い粘土紐貼り付け及び粘土紐に連続爪形文を施すもの、木目状撚糸文を施すもの、口縁部文様帯に隆帯を巡らし刺突をし撚糸圧痕を施すもの、沈線区画の磨消帯を施すもの、工字文を施すものである。29は深鉢形土器の胴上半で、地文はＬＲ単節斜縄文（縦・横位回転）である。30は深鉢形土器の胴部で、地文はＬＲ単節斜縄文（縦位回転）である。胴下部は地文を施した後にヘラで整形を行っている。

土製品（第102図31・32）

再利用土製品（円盤状土製品）である。

石器（第87・88図44～49、第91図119）

44・45は石鏃、46・47は縦型石匙、48は削器状石器、49は磨製石斧、119は磨石である。他に剥片が多量に出土している。

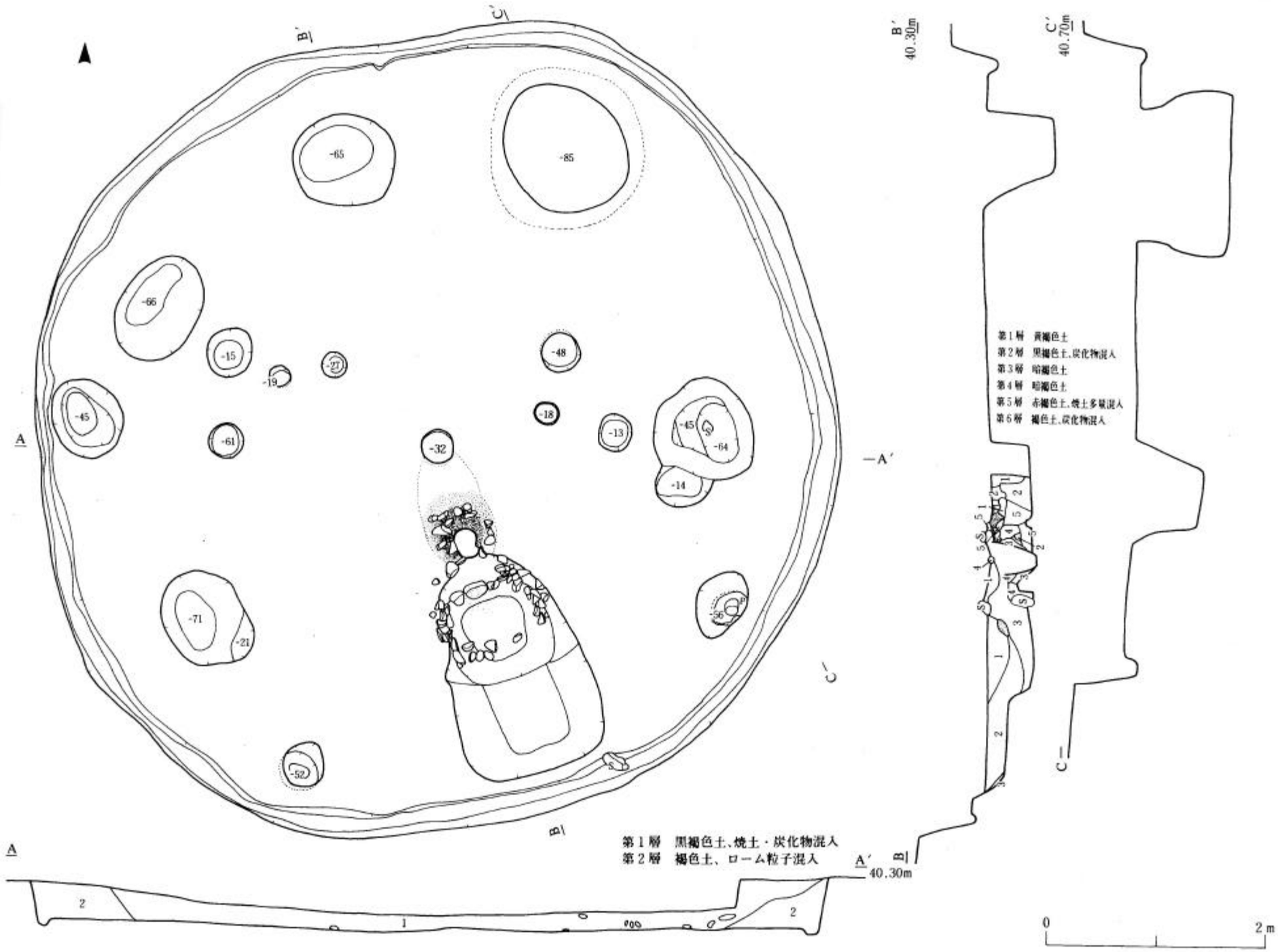
石製品（第118図５）

軽石に孔を穿ったものである。

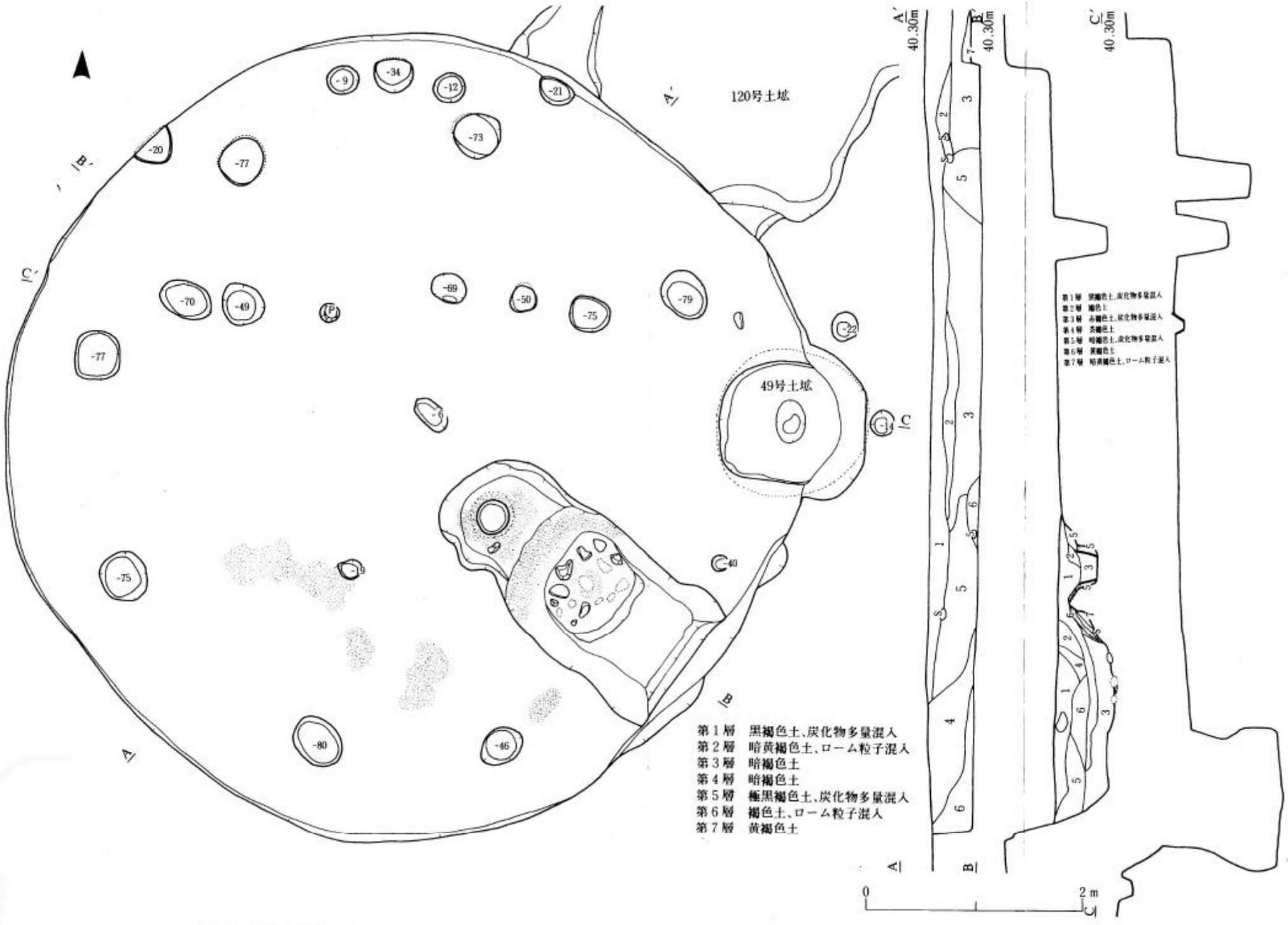
20号住居跡（第22図）

調査区北側、沢の縁辺部で検出された。

プランは径7.3ｍのほぼ円形を呈し、49・120号土坑と重複する。確認面からの深さは40cmで、壁は垂直に立ち上がる。ピットは深い掘り方のものと浅い掘り方のものが検出され、深い掘り方６個


A
A′
B
B′
C
C′
B′ 40.30m
C′ 40.70m
A′ 40.30m
-65
-85
-66
-15
-19
-27
-48
-18
-13
-45
-61
-32
-45
-64
-14
-71
-21
-52
第1層　黒褐色土
第2層　褐色土、ローム粒子混入
第1層　黒褐色土
第2層　黒褐色土、炭化物混入
第3層　暗褐色土
第4層　暗褐色土
第5層　赤褐色土、焼土多量混入
第6層　褐色土、炭化物混入
0
2m

第21図　19号住居跡


120号土坑
49号土坑
A'
B'
C'
40.30m
第1層　黒褐色土、炭化物多量混入
第2層　暗黄褐色土、ローム粒子混入
第3層　暗褐色土
第4層　暗褐色土
第5層　極黒褐色土、炭化物多量混入
第6層　褐色土、ローム粒子混入
第7層　黄褐色土
0
2m

第22図　20号住居跡

が主柱穴と考えられる。炉は石囲土器埋設部、石組部、掘り込みからなる。土器埋設部は深鉢形土器の胴部を倒立させて埋設してある。周辺が火熱を受け赤変し、焼けた石が1個確認された。石組部は底・側面が火熱を受けている。石は底面に数個組まれているが、抜き取った跡が確認された。掘り込みは一段浅く、壁に接する。床は平坦で、全体的に堅く、部分的に焼けた痕跡が認められた。住居跡の覆土には廃棄された石が多量に混入していた。

出土遺物

土器（第44図32～35、第53・54図165～174）

32は炉埋設土器、35・168・171は炉石組部覆土、34はピット、他は覆土出土である。粘土紐を渦巻状に貼り付けるもの、沈線区画の磨消帯を施すものである。32は胴部がやや膨らむ深鉢形土器である。口縁部より垂下する磨消帯の中程に∩状の貼り付けを施す。地文はＲＬ単節斜縄文（縦位回転）で、33は波状口縁をなす深鉢形土器で、地文はＬＲ単節斜縄文（縦位回転）である。34・35の地文はＲＬ単節斜縄文（縦位回転）である。

土製品（第102図33～36）

いずれも再利用土製品（円盤状土製品）である。

石器（第88図50～56、第91図120～123）

50～53は石鏃で50は両面にアスファルトが付着する。54は縦型石匙、55は削器状石器、56は磨製石斧、120～122は石皿、123はくぼみ石である。他に剝片が多量に出土している。

21号住居跡（第23図）

調査区南側、沢の縁辺部で検出された。

プランは長軸3.2ｍ、短軸3.1ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは20cmで、壁は北側がゆるく他はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは数個検出したが、柱穴は不明である。炉は土器埋設部、石組部、掘り込みからなる。土器埋設部は埋設土器が抜き取られている。石組部は全体的に火熱を受け側面に石組みが認められた。掘り込みは一段浅く壁に近くなる。また、炉の東側に火熱を受け赤変した部分と、石の認められる掘り込みがある。床は凹凸が著しい。

出土遺物

土器（第54図175～180）

すべて覆土出土である。粘土紐を貼り付けその両側を沈線で調整するもの、沈線区画の磨消帯を施すもの、断面三角形の隆起線に2個1対の刻みを施すものである。

石器（第88図57～59、第91図124・125）

57は石鏃、58は縦型石匙、59は小形磨製石斧、124は石錘、125は磨石である。他に剝片が少量出土している。

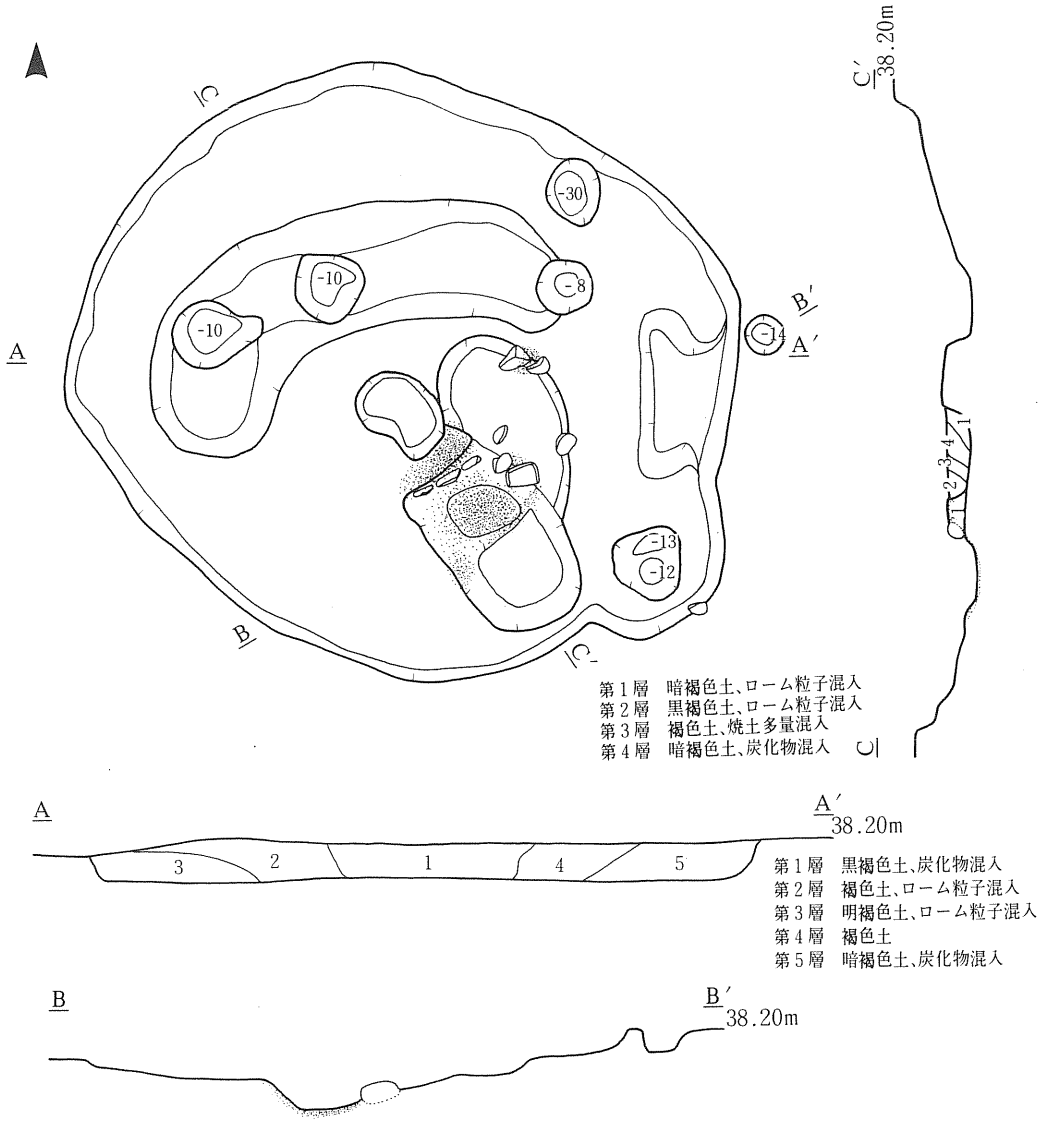
22号住居跡（第24図）

調査区南側、沢の縁辺部で検出された。

プランは長径3.1mの円形を呈し、南側が製鉄炉の周溝により切られ、西側が風倒木により破壊されている。確認面からの深さは20cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。幅15cm、深さ5cmの周溝が認められた。ピットは数個検出され、深い掘り方の4個（南西の柱穴は風倒木により破壊）が主柱穴と考えられる。炉は石囲土器埋設部、敷石石組部、掘り込みからなる。石囲土器埋設部は深鉢形土器の下半部を正立して埋設してある。周辺は火熱を受け赤変している。敷石石組部は底・側面に石を組んでいる。掘り込みは一段浅く、周溝に接する。床はほぼ平坦で、堅い。

出土遺物

土器（第44図36、第54図181～186）



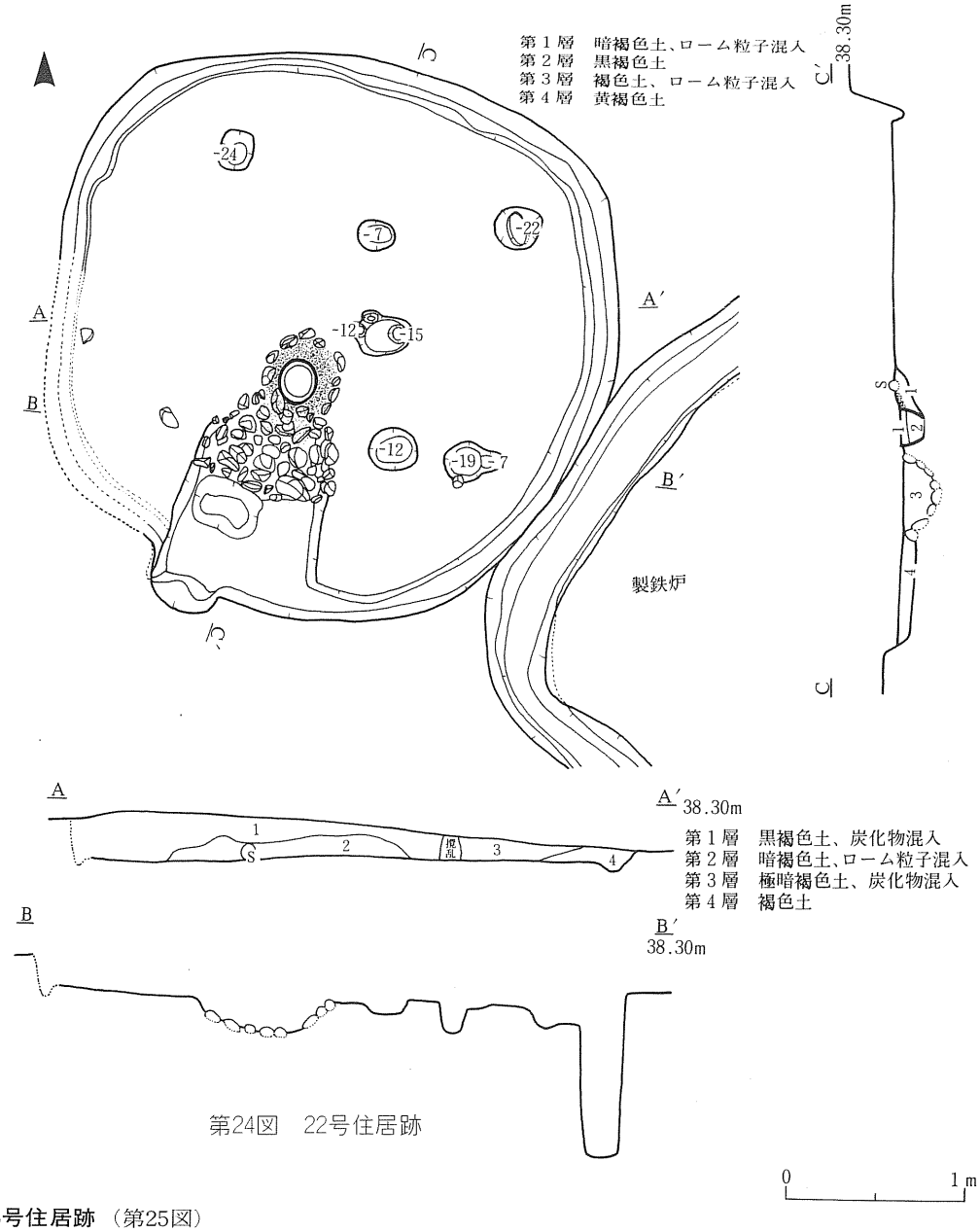
第23図　21号住居跡

0　1m

36は炉埋設土器、他は覆土出土である。沈線区画の磨消帯を施すものである。36は深鉢形土器の下半部で、地文はＬＲ単節斜縄文（縦位回転）である。

（第88図60、第91図126）

60は石鏃、126は３面に磨滅痕のみられる台石である。



第24図　22号住居跡

23号住居跡（第25図）

調査区南側の斜面で検出された。

プランは長軸4.3m、推定短軸3.5mを計る。18号住居跡同様西側にも掘り込みのみられる住居跡で、斜面ゆえに南側の壁は検出されず、86・87号土坑と重複する。確認面からの深さは北側で20cm

を計り、壁は垂直に立ち上がる。また、西側の掘り込みは15cmで、壁は垂直に立ち上がる。ピットは数個検出され、深い掘り方４個が主柱穴と考えられる。炉は石囲土器埋設部、敷石石組部、掘り込みからなる。石囲土器埋設部は深鉢形土器の上半分を正立して埋設してある。周辺は火熱を受け赤変している。敷石組部は底・側面に石が組まれている。掘り込みは一段浅く、底面にピット・石が認められた。床は平坦で、全面的に堅い。

出土遺物

土器（第45図37～39、第54図187～191）

39は炉埋設土器、他は覆土出土である。口縁部文様帯に撚糸圧痕及び隆起線の両側に撚糸圧痕を施すもの、沈線区画の磨消帯を施すもの、隆起線に２個１対の刻みを施すものである。39は胴部がやや膨らむ深鉢形土器で、地文はＬＲ単節斜縄文（縦位回転）である。38は注口土器である。ＬＲ・ＲＬ縄文原体を使用しており、体中央部は羽状縄文となる。地文を施した後に磨消しを行い、頸部に瘤が４個、体中央部に刻みのある瘤が３個付く。

石器（第88図61）

磨製石斧である。他に剝片が９点出土している。

24号住居跡（第26図）

調査区北側で検出された。

プランは長軸2.3ｍ、短軸2.1ｍのほぼ楕円形を呈し、確認面からの深さは15cmで、壁は垂直に立ち上がる。ピットは炉の北側に１個検出されただけである。炉は石囲土器埋設部、石組部、掘り込みからなる。石囲土器埋設部は深鉢形土器の胴上部を正立して埋設し、周辺は火熱を受け赤変している。石組部は底面が火熱を受け、埋設土器との間に平らな石を配し、南側に拳大の石を組んでいる。掘り込みはゆるく立ち上がり、壁に接する。床は平坦で、堅い。

出土遺物

土器（第45図40、第54図192）

40は炉埋設土器、192は覆土出土である。40は口縁部がやや外傾する深鉢形土器で、沈線区画の磨消帯を施す。地文はＲＬ単節斜縄文（縦位回転）であるが、施文方法が特徴的である。

石器（第92図127）

磨石である。他に剝片が３点出土している。

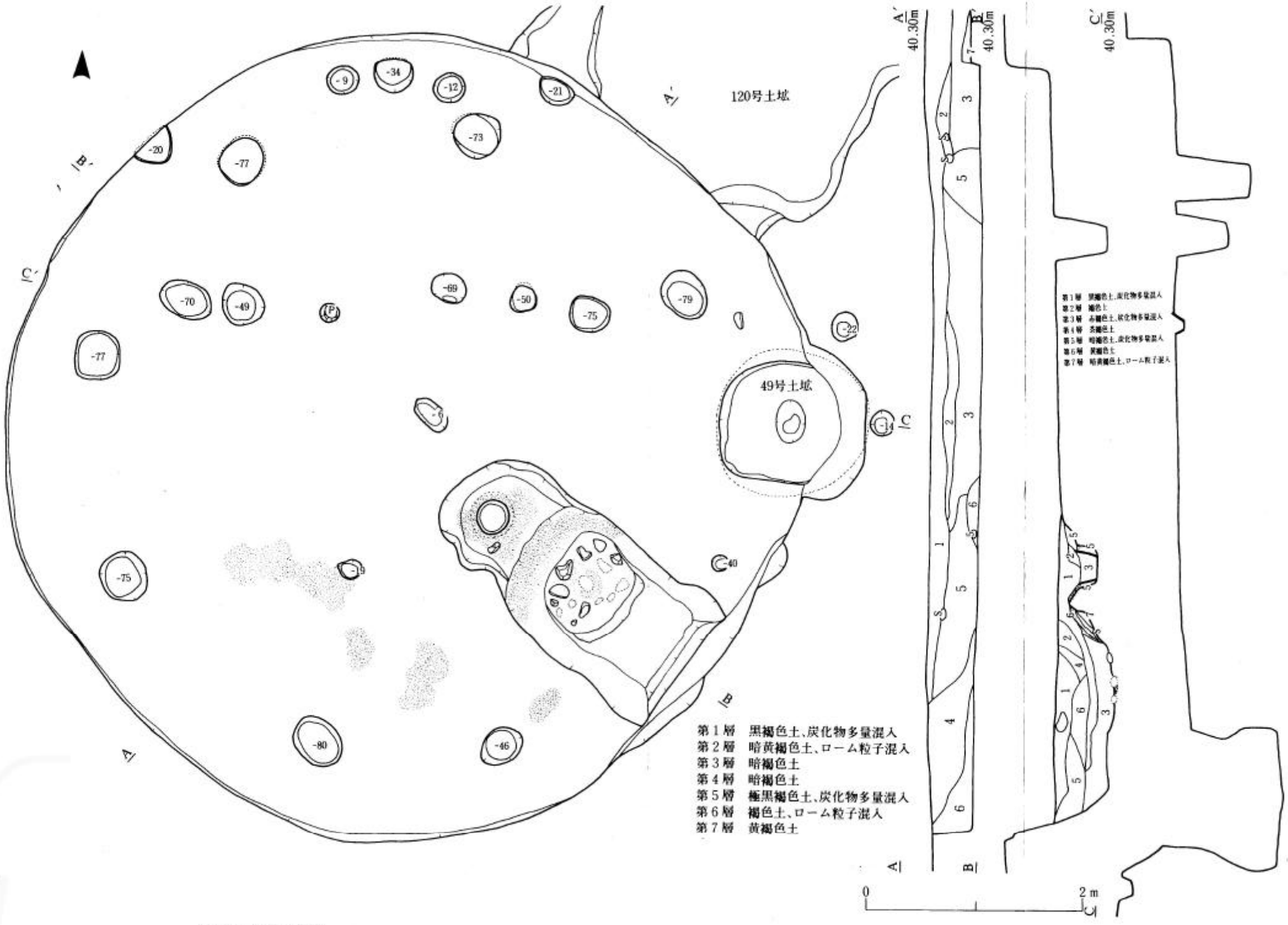
25号住居跡（第27図）

調査区北側で検出された。

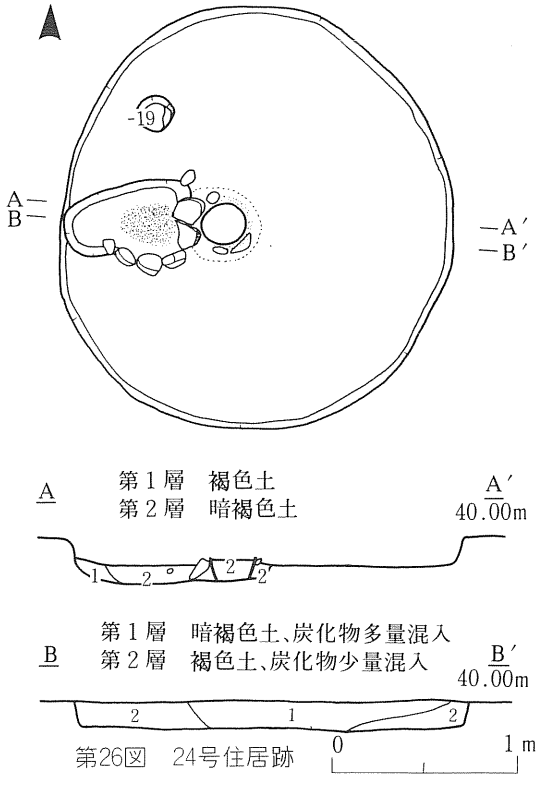
プランは径約3.5ｍの円形を呈し、確認面からの深さは15cmで、壁は垂直に立ち上がる。ピットは住居内に３個、外側に１個検出されたのみである。炉は検出されない。床は平坦で、全面的に堅い。

出土遺物

土器（第54図193～197）


120号土坑
49号土坑
A'
B'
C'
40.30m
第1層　黒褐色土、炭化物多量混入
第2層　暗黄褐色土、ローム粒子混入
第3層　暗褐色土
第4層　暗褐色土
第5層　極黒褐色土、炭化物多量混入
第6層　褐色土、ローム粒子混入
第7層　黄褐色土
0
2m

第22図　20号住居跡



第26図　24号住居跡

全て覆土出土である。半隆起線でもって文様を作り出すもの、刻線を網目状に施すもの、木目状撚糸文を施すもの、沈線区画の磨消帯を施すものである。

土製品（第102図37）

再利用土製品（円盤状土製品）である。

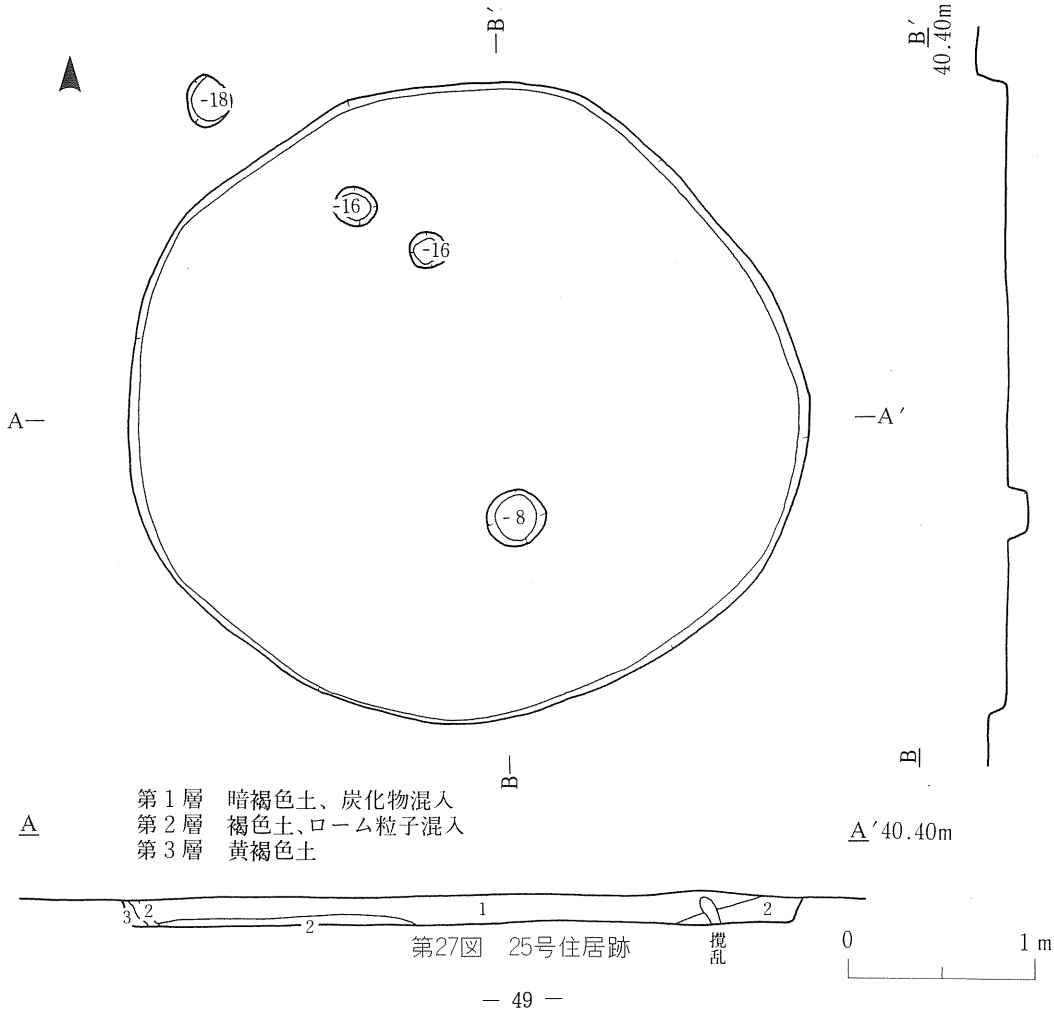
石器（第88図62）

縦型石匙である。他に剝片が3点出土している。

26号住居跡（第28図）

調査区北側で検出された。

プランは長軸2.7ｍ、短軸2.1ｍの楕円形を呈し確認面からの深さは８cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がるが、北側の一部は判然としない。ピットは３個のみの検出である。炉は検出されない。床は



第27図　25号住居跡

平坦で、堅い。

出土遺物

土器（第54図198）

覆土出土で、沈線区画の磨消帯を施すものである。

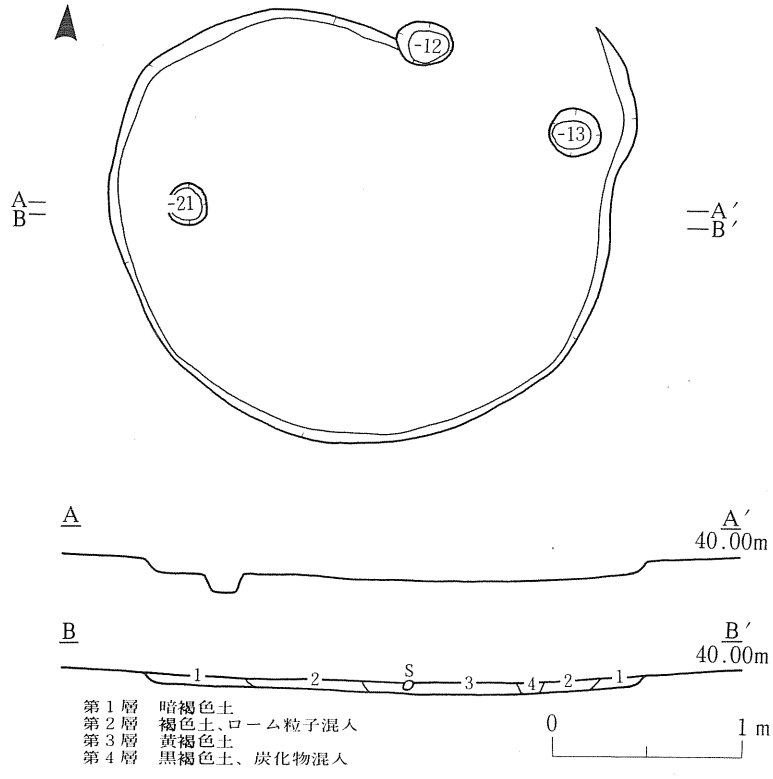
土製品（第102図38）

再利用土製品（円盤状土製品）である。

27号住居跡（第29図）

調査区西側の斜面で検出された。

プランは径4.5mのほぼ円形を呈し、確認面からの深さは15cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは数個検出され、深い掘り方の4個が主柱穴と考えられる。炉は石囲土器埋設部、石組部、掘り込みからなる。土器埋設部は切り合いが認められた。古い埋設土器の上部に、新たに深鉢形土器の胴部を正立して埋設し、周辺は火熱により赤変している。石組部は側面に石が組まれている。掘り込みは一段浅く、壁に接する。不整形を呈し底面には凹凸がみられるが、攪乱を受けたとも考えられる。床は平坦であるが、地山の礫が露出していた。



第28図　26号住居跡

出土遺物

土器（第46図41・42、第54図199）

41（新）・42（旧）は炉埋設土器、199は覆土出土である。41・42は沈線区画の磨消帯を施すものである。41は深鉢形土器の胴部で、地文はＲＬ単節斜縄文（縦位回転）である。42は口縁部がやせ外傾する深鉢形土器で、地文はＬＲ単節斜縄文（縦位回転）である。199は粘土紐を貼り付けその両側を沈線で調整するものである。

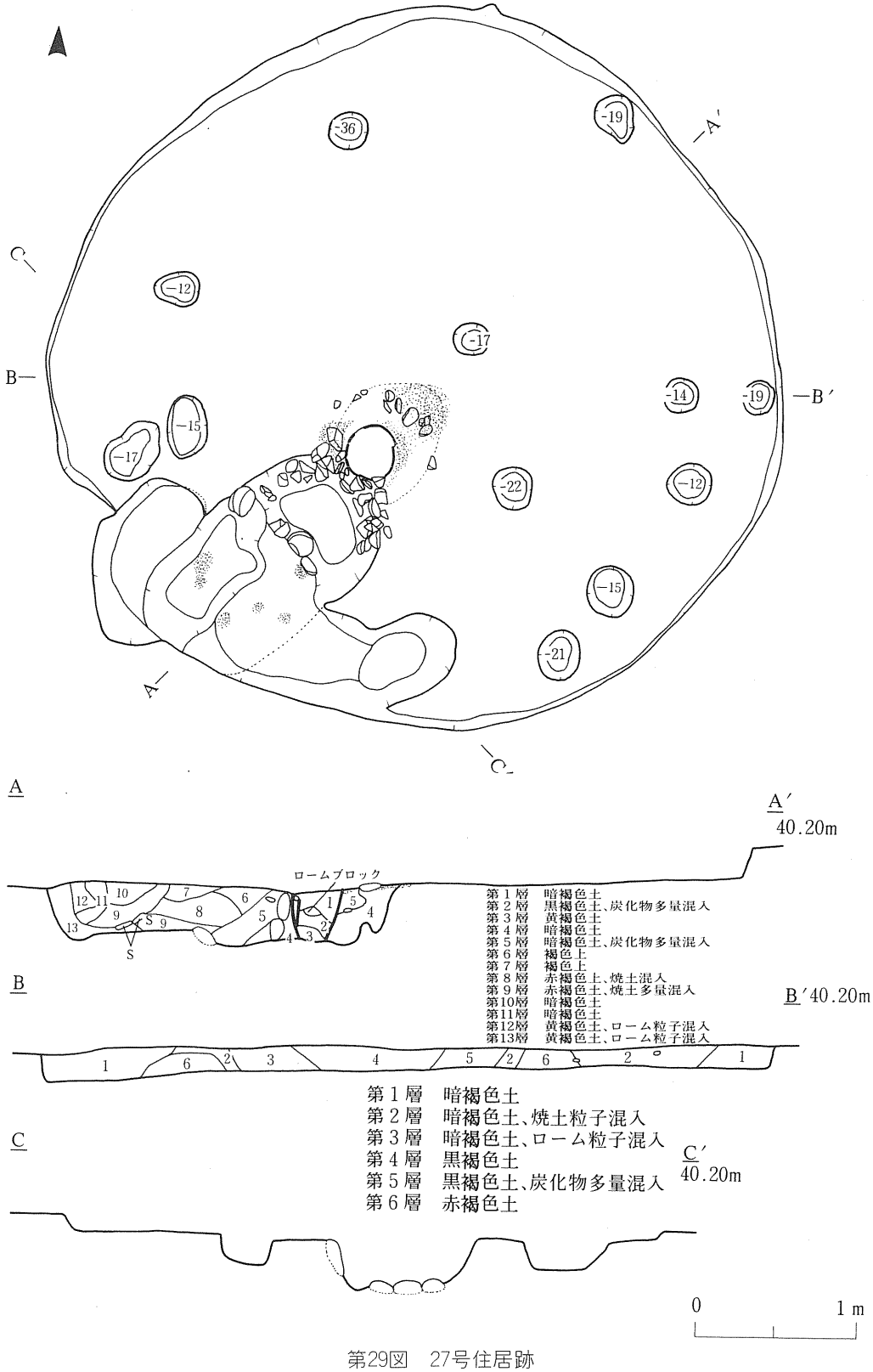
石器（第88図63・64）

63は縦型石匙、64は削器状石器である。他に剝片が数点出土している。

28号住居跡（第30図）

調査区西側で検出された。

プランは長軸7.4m、短軸6.7mの楕円形を呈し、119号土坑と重複し、南側は風倒木による攪乱を


A
A′
40.20m
ロームブロック
第１層　暗褐色土
第２層　黒褐色土、炭化物多量混入
第３層　黄褐色土
第４層　暗褐色土
第５層　暗褐色土、炭化物多量混入
第６層　褐色土
第７層　褐色土
第８層　赤褐色土、焼土混入
第９層　赤褐色土、焼土多量混入
第10層　暗褐色土
第11層　暗褐色土
第12層　黄褐色土、ローム粒子混入
第13層　黄褐色土、ローム粒子混入
B
B′40.20m
第１層　暗褐色土
第２層　暗褐色土、焼土粒子混入
第３層　暗褐色土、ローム粒子混入
第４層　黒褐色土
第５層　黒褐色土、炭化物多量混入
第６層　赤褐色土
C
C′
40.20m
0
1 m

第29図　27号住居跡

受けている。確認面は北側が30cmを計り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは深い掘り方のもの浅い掘り方のものが多数検出され、深い掘り方の６個が主柱穴と考えられる。炉は石囲土器埋設部、石組部、掘り込みからなる。石囲土器埋設部は、胴部がやや膨らむ深鉢形土器を正立して埋設し、周辺は火熱により赤変している。石組部は底・側面が火熱を受けている。石はまばらであるが、抜き取ったと考えられる。掘り込みは一段浅く壁に近くなる。床は平坦で、全面的に堅いが、地山の礫が露出していた。

出土遺物

土器（第46図43～45、第55図200～211）

43は炉埋設土器、210は床面、206はピット、他は覆土出土である。細い粘土紐を貼り付けるもの半隆起線文を施すもの、沈線区画の磨消帯を施すもの、平行沈線文の施すものである。43は胴部がやや膨らむ深鉢形土器である。口縁部より垂下する磨消帯の下方を沈線で囲み地文を残している。地文はＲＬ単節斜縄文（縦位回転）である。44は三脚付土器底部である。45は波状口縁をなし、頸部に段をもつ鉢形土器で、地文はＬＲ単節斜縄文（縦・斜位回転）である。211はいわゆる縄巻縄文（付加条）である。

土製品（第100図１、第102図40）

１は無節斜縄文の施された土偶である。40は再利用土製品（円盤状土製品）である。

石器（第88・89図65～72、第92図128・129）

65は石鏃、66～68は石錐、69は撥形状石器、70は掻器、71は削器状石器、72は磨製石斧、128は石皿、129は磨面のある台石である。他に剝片が多量に出土している。

石製品（第118図３）

細長い自然石の両端に、両面から孔を穿ったものである。装飾品と考えられる。

29号住居跡（第31図）

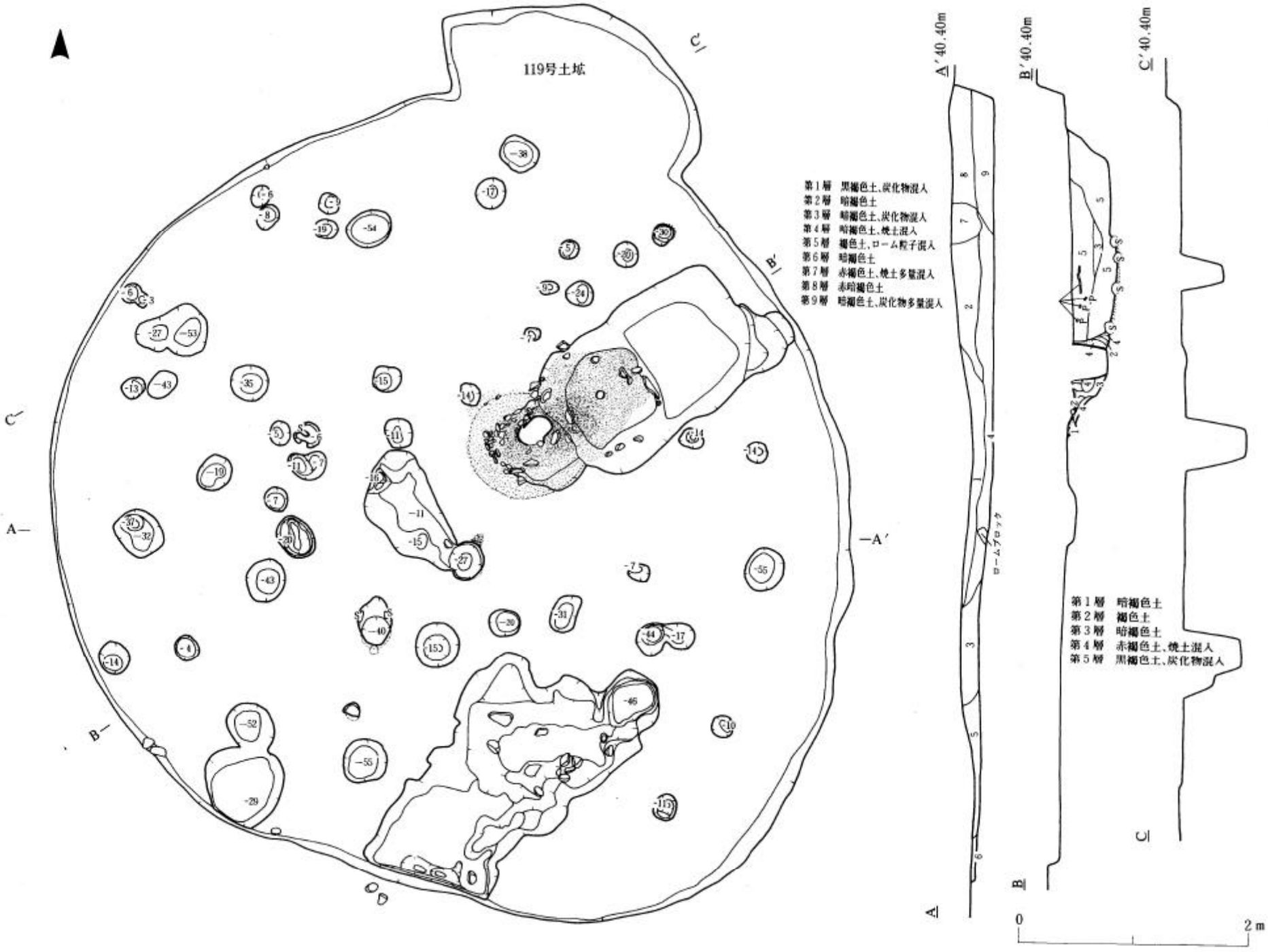
調査区西側の斜面で検出された。

プランは長軸4.1ｍ、短軸3.7ｍの楕円形を呈し、34号住居跡と重複する。確認面からの深さは北側で40cmを計り、壁は垂直に立ち上がる。ピットは数個検出され、深い掘り方４個が主柱穴と考えられる。炉は土器埋設部、石組部、掘り込みからなる。土器埋設部は埋設土器が抜き取られ、焼けた痕跡のみが認められた。石組部は底・側面が火熱を受けている。石は底面に１個、側面に数個組まれているが、抜き取られたと考えられる。掘り込みは一段浅く、壁に接する。床は平坦で、全面的に堅いが、地山の礫が露出している。

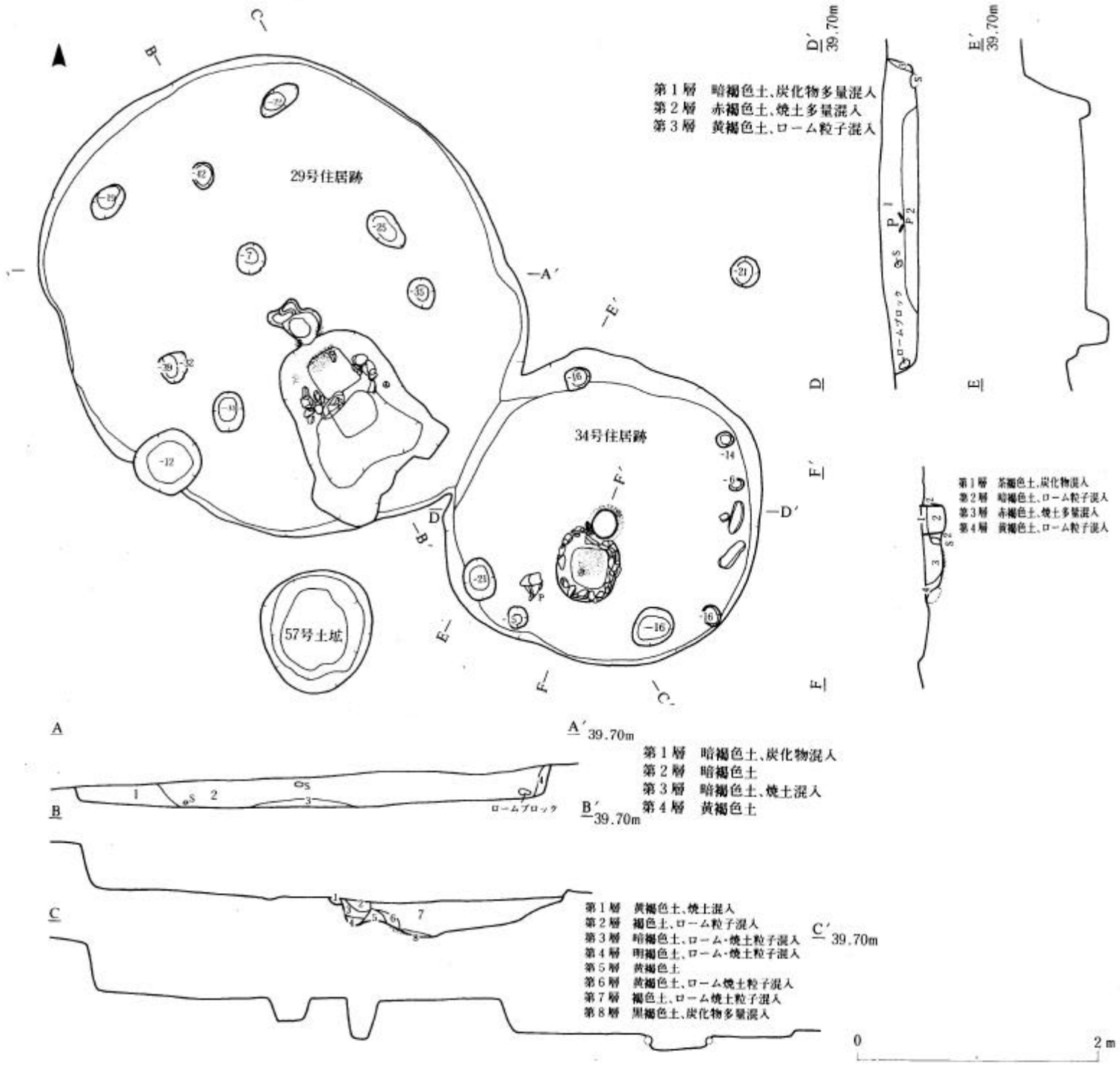
出土遺物

土器（47図46・49、第55図212～215）

全て覆土出土である。沈線区画の磨消帯を施すもの、また磨消帯に稜線がみられるものもある。46は口縁部がゆるく外傾する鉢形土器で、磨消帯を稜線で画している、磨消部にベニガラが塗布さ


119号土坑
A
A′
B
B′
C
C′
A′ 40.40m
B′ 40.40m
C′ 40.40m
第1層　黒褐色土、炭化物混入
第2層　暗褐色土
第3層　暗褐色土、炭化物混入
第4層　暗褐色土、焼土混入
第5層　褐色土、ローム粒子混入
第6層　暗褐色土
第7層　赤褐色土、焼土多量混入
第8層　赤暗褐色土
第9層　暗褐色土、炭化物多量混入
ロームブロック
第1層　暗褐色土
第2層　褐色土
第3層　暗褐色土
第4層　赤褐色土、焼土混入
第5層　黒褐色土、炭化物混入
0
2m

第30図　28号住居跡



第31図　29・34号住居跡

れ、地文はＬＲ単節斜縄文（縦位回転）である。

土製品（第102図41）

再利用土製品（円盤状土製品）である。

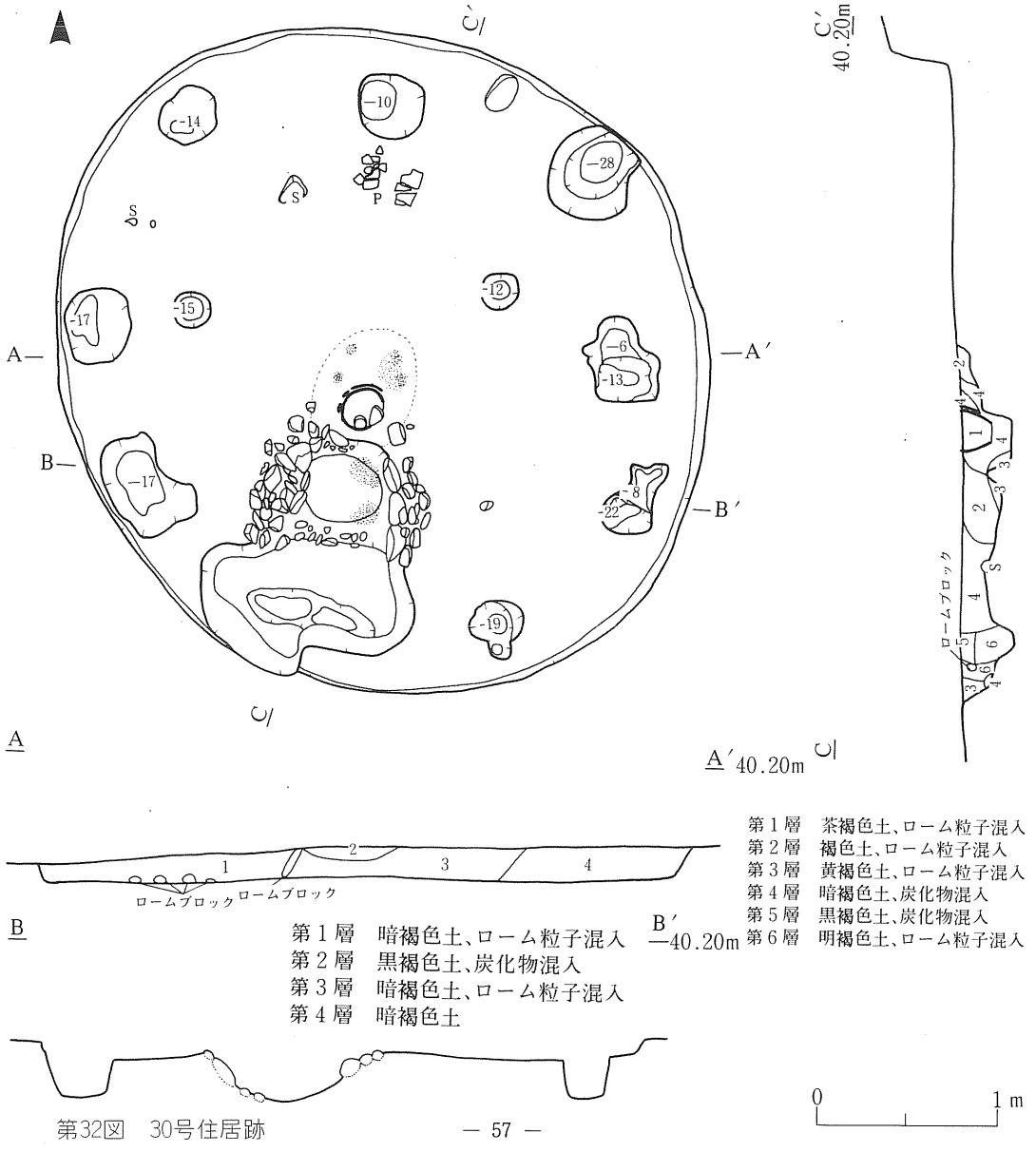
石器（第89図73～75）

73は石鏃、74は掻器状石器、75は削器状石器である。他に剝片が多量に出土している。

30号住居跡（第32図）

調査区西側の斜面、沢の縁辺部で検出された。

プランは長軸４ｍ、短軸3.6ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは北側で35cmを計り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは数個検出され、壁際の４個が主柱穴と考えられる。炉は土器埋設部、石組部、掘り込みからなる。土器埋設部は、二重（二個体）に埋設し、周辺は火熱を受けている。



第32図　30号住居跡

石組部は底面が火熱を受け、側面に石が組まれている。掘り込みは一段浅く、壁に接する。また、不整形を呈し底面に凹部がみられるが攪乱の可能性も考えられる。床はほぼ平坦で、全面的に堅い。

出土遺物

土器（第47図47・48・51、第55図216・217）

47（内側）・48（外側）は炉埋設土器、他は覆土出土である。沈線区画の磨消帯を施すもの、カキ目の施されるものである。47は口縁部が内湾する鉢形土器で、地文は0段多条の複節斜縄文（縦位回転）である。48は深鉢形土器の胴部で、地文はＬＲ単節斜縄文（縦位回転）である。51は深鉢形土器の胴下部で櫛状工具で直線、曲線にカキ目を施す。

石器（第89図76）

横型石匙である。他に剝片が数点出土している。

31号住居跡（第33図）

調査区西側の斜面、沢の縁辺部で検出された。

プランは径は3.7ｍのほぼ円形を呈し。確認面からの深さは北側で50cmを計り、壁はほぼ垂直に立ち上る。ピットは数個検出されたが、規則的でない。炉は石囲土器埋設部、石組部、掘り込みからなる。石囲土器埋設部は深鉢形土器の胴部を正立して埋設し、周辺が火熱を受け赤変し、二～三重に石を組んでいる。石組部は底面が火熱を受け、数個の石が組まれている。掘り込みは石組部と同じベルである。床は平坦で、全面的に堅い。床の一部及びピットの外周に焼けた痕跡がある事や、覆土に多量の焼土・炭化物が認められた事などから火災住居の可能性がある。

出土遺物

土器（第47図50、第55図218～223）

50は炉埋設土器、他は覆土出土である。口縁部文様帯に撚糸圧痕及び隆帯の両側に撚糸圧痕を施すもの、粘土紐を貼り付けその両側を沈線で調整するもの、沈線区画の磨消帯を施すものである。50は深鉢形土器の胴部で、地文はＲＬ単節斜縄文（縦位回転）である。223はいわゆる縄巻縄文（付加条）である。

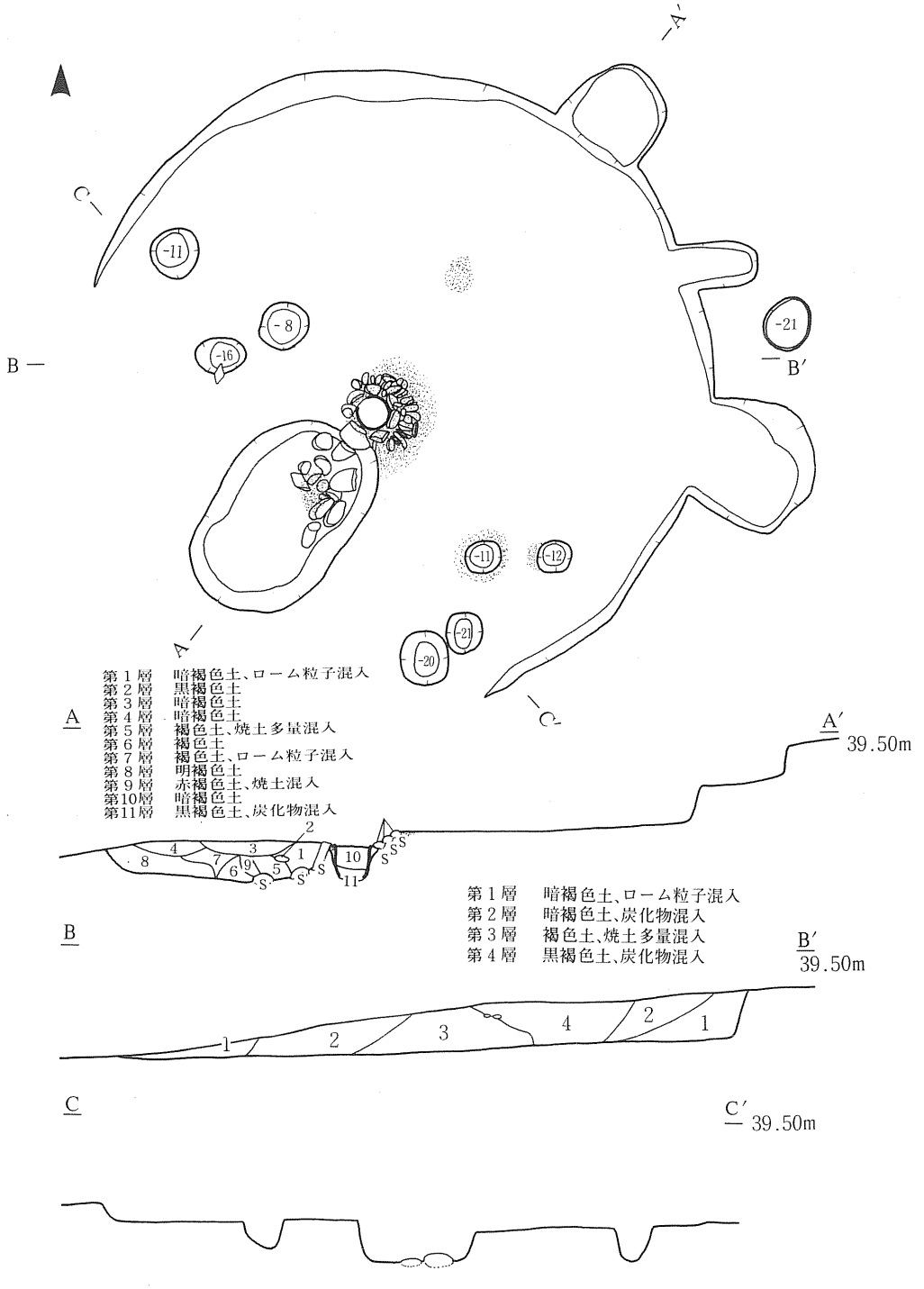
石器（第89図77～82）

77～80は石鏃で、77の片面にはアスファルトの付着が認められる。81は縦型石匙、82は撥形状石器である。他に剝片が多量に出土している。

32号住居跡（第34図）

調査区中央部で検出された。

プランは径5.8ｍのほぼ円形を呈し、106・107号土坑と重複する。確認面からの深さは30cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは数個検出され、深い掘り方の５個が主柱穴と考えられる。炉は西側と北側に検出された。西側の炉は土器埋設部、掘り込み、一段浅い掘り込みからなる。土器埋設部は埋設土器が抜き取られ、周辺には火熱を受けた痕跡が認められた。掘り込みは底・側面が火


A
第１層　暗褐色土、ローム粒子混入
第２層　黒褐色土
第３層　暗褐色土
第４層　暗褐色土
第５層　褐色土、焼土多量混入
第６層　褐色土
第７層　褐色土、ローム粒子混入
第８層　明褐色土
第９層　赤褐色土、焼土混入
第10層　暗褐色土
第11層　黒褐色土、炭化物混入
A′
39.50m
B
第１層　暗褐色土、ローム粒子混入
第２層　暗褐色土、炭化物混入
第３層　褐色土、焼土多量混入
第４層　黒褐色土、炭化物混入
B′
39.50m
C
C′
39.50m
0
1m

第33図　31号住居跡

熱を受けている。一段浅い掘り込みは不整形を呈する。北側の炉は土器埋設部、掘り込み、一段浅い掘り込みからなる。土器埋設部は先に住居の中央側に埋設した土器を抜き取り、新たに北側に深鉢形土器の上半分を正立して埋設している。周辺に火熱を受け、石が1個認められた。また、古い土器埋設部の底面には、埋設土器の破片が残っていた。掘り込みは底・側面が火熱を受け、古い炉の掘り込みも認められた。一段浅い掘り込みは不整形を呈し、壁に近くなる。床は平坦で、全体的に堅い。覆土に礫を含むロームが多量に堆積しており、107号土坑及び60号土坑の掘り方の土を捨てたと考えられる。

出土遺物

土器（第48図52、第55・56図224～231）

52は炉埋設土器、他は覆土出土である。細い粘土紐を貼り付けるもの、撚糸圧痕の施されるもの沈線区画の磨消帯を施すもの、工字文の施されるものである。52は口縁部がやや開く深鉢形土器で頸部に一条の沈線が巡る。地文はＲＬ単節斜縄文（縦位回転）である。

土製品（第102図42）

再利用土製品（円盤状土製品）である。

石器（第89図83～85）

83は石鏃で両面にアスファルトの付着が認められる。84は石錐、85は磨製石斧である。他に剝片が多量に出土している。

33号住居跡（第35図）

調査区南側の緩斜面で検出された。

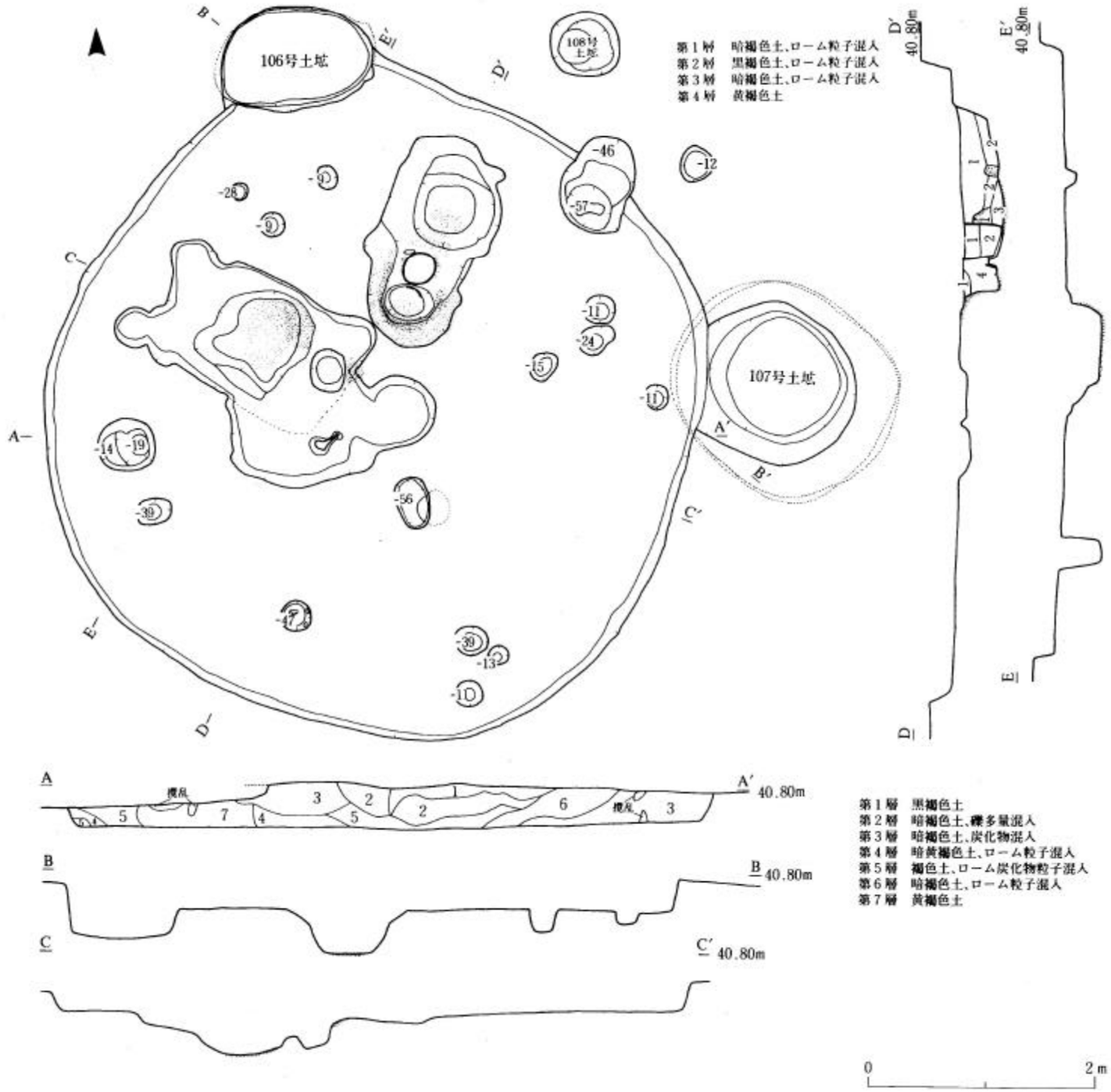
プランは径5.5ｍのほぼ円形を呈し、118号土坑と重複する。確認面からの深さ北側で35cmを計り壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは数個検出され、深い掘り方6個が主柱穴と考えられる。炉は土器埋設部、石組部、掘り込みからなる。土器埋設部は深鉢形土器の下半分を正立してやや斜めに埋設し、周辺は火熱を受け赤変している。石組部は底面が火熱を受け、西側面と南底面に石が組まれている。掘り込みは一段浅く、壁に接する。幅広の不整形を呈するが、斜面である為に検出状況は良くなかった。床は若干凹凸が見られ、地山の礫が露出していた。

出土遺物

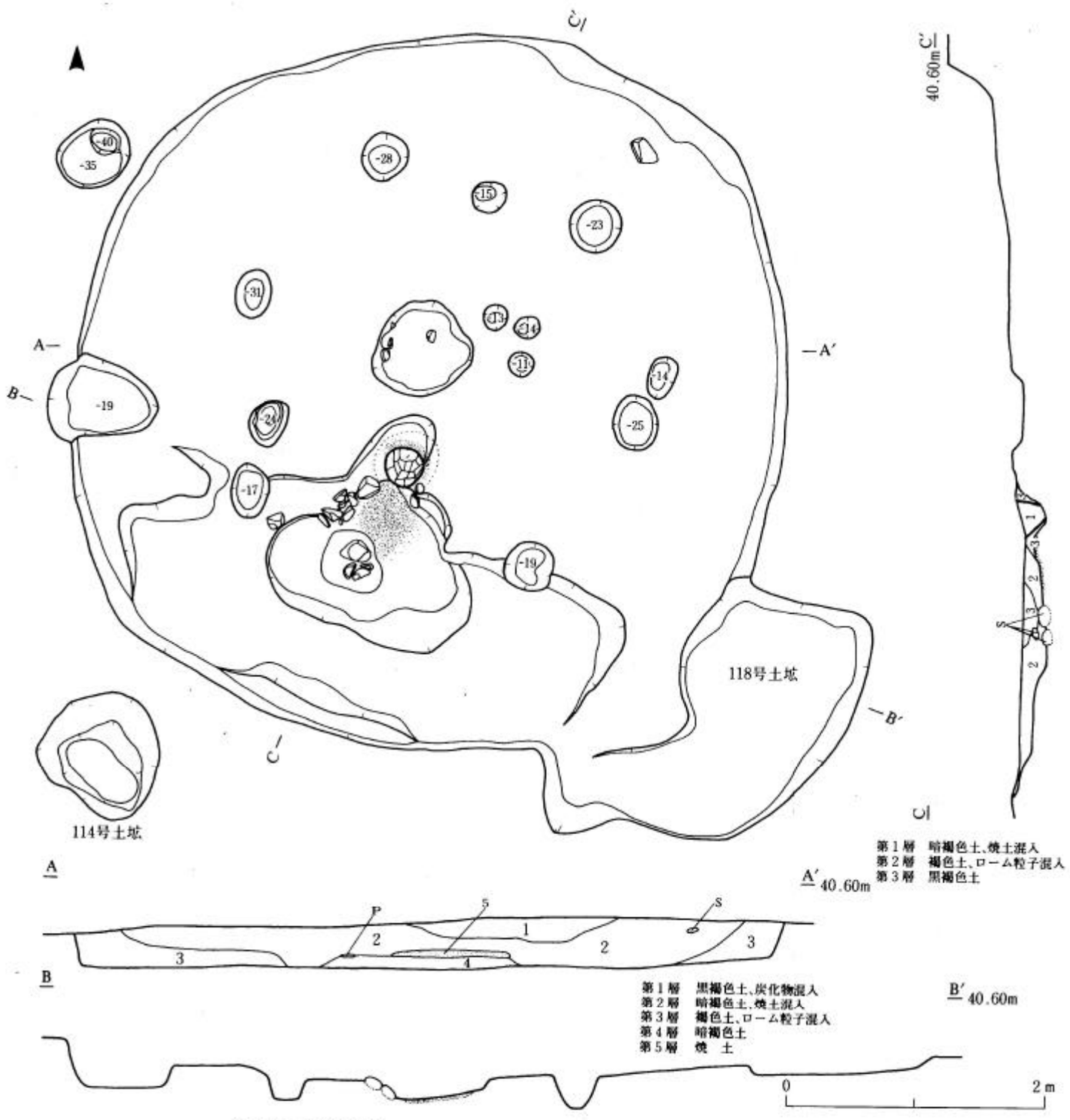
土器（第48図53～55、第55図232～248）

54は炉埋設土器、他は覆土出土である。口縁部文様帯に撚糸圧痕及び隆起線の両側に撚糸圧痕を施すもの、隆起線文を施すもの、沈線区画の磨消帯を施すもの、断面三角状の隆起線に2個1対の刻みを施すもの、綱目状撚糸文の施されるもの、刻線を綱目状に施すもの、カキ目を施すものである。54は胴部に膨らみのある深鉢形土器で、地文はＲＬ単節斜縄文である。53は手づくね土器。54は小形の壺形土器である。

土製品（第100図２、第102図43・44）


106号土坑
108号土坑
107号土坑
第1層　暗褐色土、ローム粒子混入
第2層　黒褐色土、ローム粒子混入
第3層　暗褐色土、ローム粒子混入
第4層　黄褐色土
D′ 40.80m
E′ 40.80m
A′ 40.80m
B′ 40.80m
C′ 40.80m
第1層　黒褐色土
第2層　暗褐色土、礫多量混入
第3層　暗褐色土、炭化物混入
第4層　暗黄褐色土、ローム粒子混入
第5層　褐色土、ローム炭化物粒子混入
第6層　暗褐色土、ローム粒子混入
第7層　黄褐色土
0
2m

第34図　32号住居跡


A
A′
B
B′
C
C′
40.60m
118号土坑
114号土坑
第1層　暗褐色土、焼土混入
第2層　褐色土、ローム粒子混入
第3層　黒褐色土
第1層　黒褐色土、炭化物混入
第2層　暗褐色土、焼土混入
第3層　褐色土、ローム粒子混入
第4層　暗褐色土
第5層　焼　土
0
2m

第35図　33号住居跡

２は刺突を施す土偶で、性器と思われる盛り上がりを貼り付けている。43･44は再利用土製品（円盤状土製品）である。

石器（第89図86～94、第92図130・131）

86～87は石鏃、89は石錐、90・91は縦型石匙、99は横型石匙、93・94は掻器、130はくぼみ石、131は石錘である。他に剥片が多量に出土している。

34号住居跡（第29図）

調査区南側の緩斜面で検出された。

プランは径2.5ｍの円形を呈する。29号住居跡と重複し土層断面等で明確な新旧関係をつかむ事が出来なかったが本住居が切っていると考えられる。確認面からの深さは北側で50cmを計り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは数個検出され、壁際の４個が主柱穴と考えられる。炉は土器埋設部と石組部からなる。土器埋設部は深鉢形土器を正立して埋設し、周辺が火熱を受け赤変している。石組部は底面が火熱を受け、側面に石が組まれている。床は平坦で、全面的に堅い。

出土遺物

土器（第49図56～58、第56図249～251）

56は炉埋設土器、57はピット、58は床面、他は覆土出土である。粘土紐を貼り付けその両側を沈線で調整するもの、沈線区画の磨消帯を施すものである。56は口縁部がやや開く深鉢形土器で、地文はＲＬ単節斜縄文（縦位回転）である。57は口縁部が外傾する鉢形土器で、地文はＲＬ単節縄文（縦位回転）である。58は胴部にやや膨らみのある深鉢形土器で、胴部にＲＬ単節斜縄文（縦位回転）が施される。

石器（第90図95、第92図132～134）

95は石鏃、132はくぼみ石、133は石皿状石器、134は磨石である。他に剥片が少量出土している。

35号住居跡（第36図）

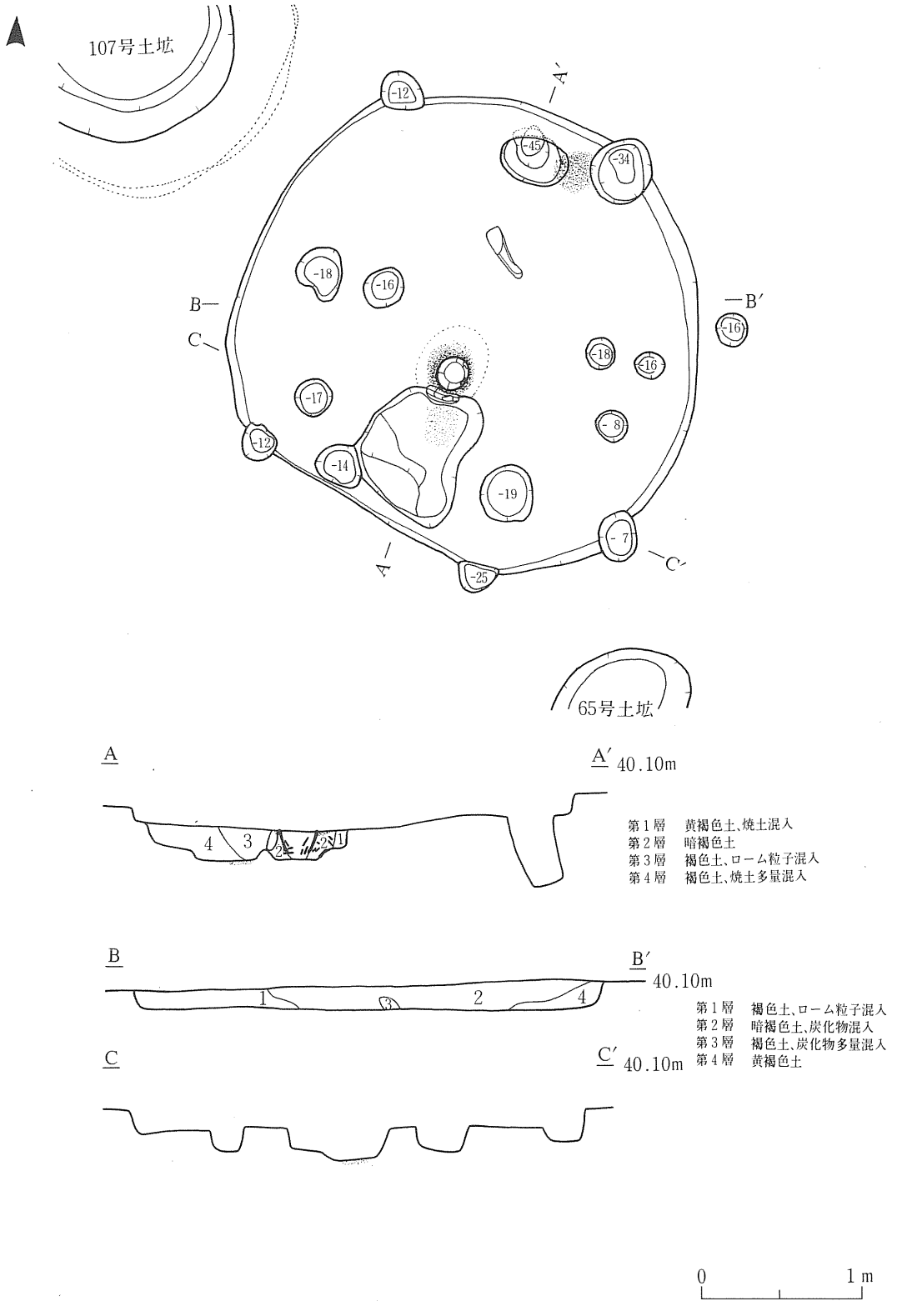
調査区中央部で検出された。

プランは径３ｍのほぼ円形を呈し、確認面からの深さは20cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは数個検出され、壁際の４個が主柱穴と考えられる。炉は土器埋設部、石組部、掘り込みからなる。土器埋設部は鉢形土器の上半部を正立して埋設し、周辺が火熱を受けている。石組部は底が火熱を受け、埋設土器との間に厚味のある平らな石を据えてある。掘り込みは一段浅く、壁に近くなる。床は平坦で、堅い。

出土遺物

土器（第49図59・60、第56図252～254）

59は炉埋設土器、60はピット、他は覆土出土である。沈線区画の磨消帯を施すものである。59は口縁部が内湾する鉢形土器、地方はＲＬ単節斜縄文（縦位回転）である、60はＲＬＲ複節斜縄文（縦位回転）を施し、底部に網代痕をもつ。


107号土坑
65号土坑
A
A′
40.10m
B
B′
40.10m
C
C′
40.10m
第1層　黄褐色土、焼土混入
第2層　暗褐色土
第3層　褐色土、ローム粒子混入
第4層　褐色土、焼土多量混入
第1層　褐色土、ローム粒子混入
第2層　暗褐色土、炭化物混入
第3層　褐色土、炭化物多量混入
第4層　黄褐色土
0
1m

第36図　35号住居跡

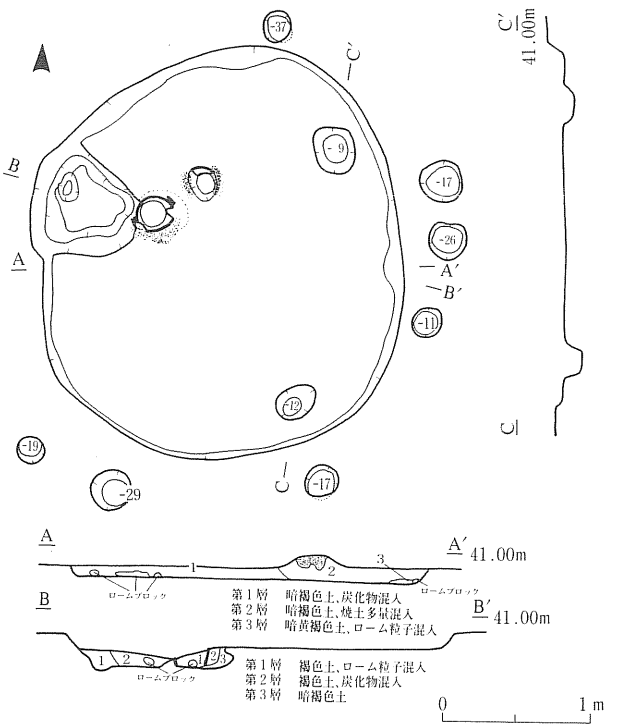
石器（第90図96）

縦型石匙である。他に剝片が数点出土している。

36号住居跡（第37図）

調査区東側で検出された。

プランは長軸2.7m、短軸2.4mの楕円形を呈し、確認面からの深さは10cmで、壁はほぼ垂直に立ち上る。ピットは数個検出されたが、柱穴は不明である。炉は土器埋設部と掘り込みからなる。土器埋設部は鉢形土器（復元不可）を埋設し、周辺が火熱を受けて赤変している、掘り込みは楕円形を呈し、ピットが認められる。また、炉の北東側にも土器埋設炉が検出され、周辺が火熱を受け赤変している。床は一部に凹凸が認められたが、他は平坦である。



第37図　36号住居跡

出土遺物

土器（第56図255・256）

いずれも覆土出土で、沈線区画の磨消帯を施すものである。

石器（第90図97）

縦型石匙である。他に剝片が4点出土している。

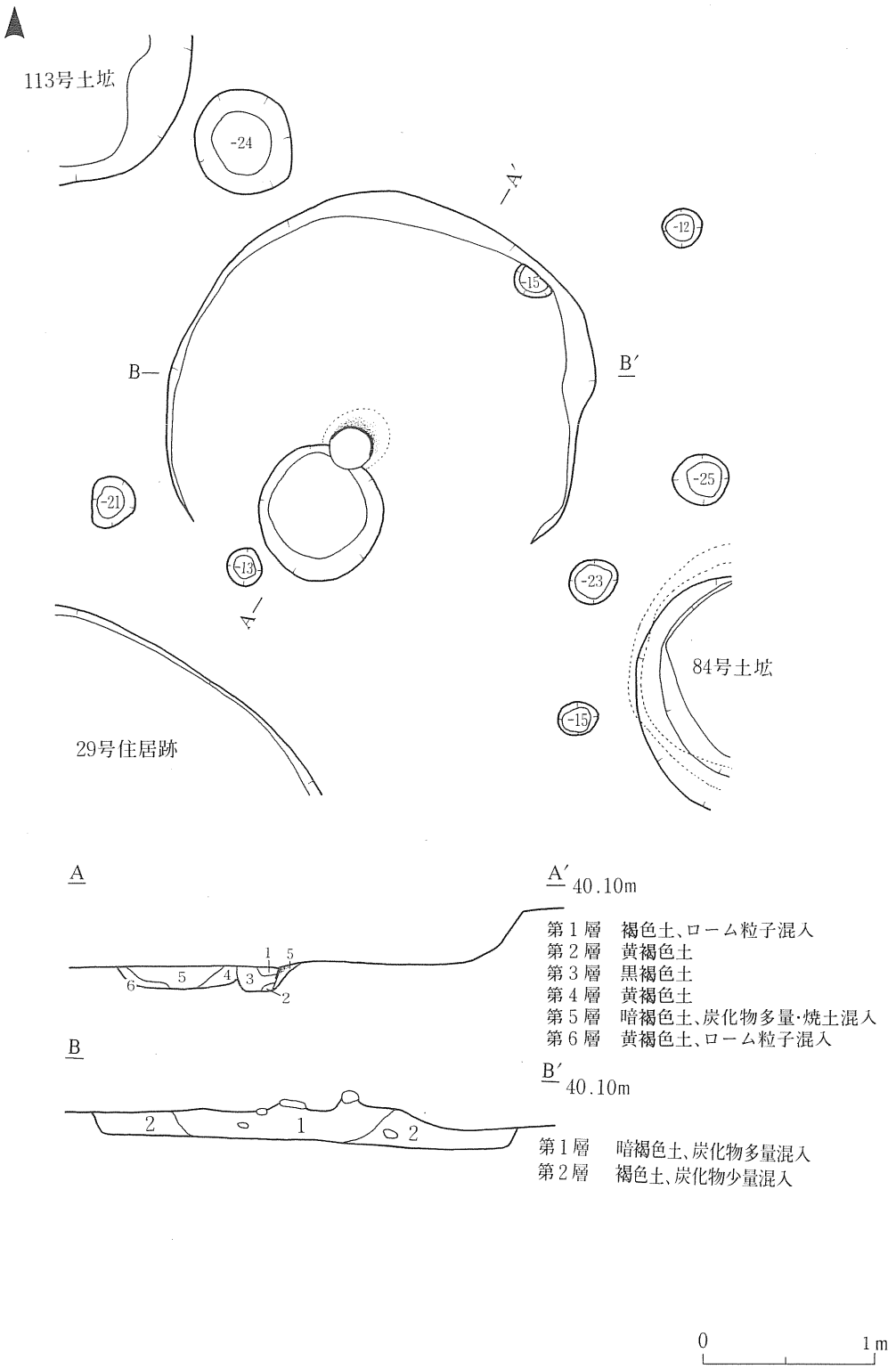
37号住居跡（第38図）

調査区西側の斜面で検出された。プランは径2.5mのほぼ円形を呈するが、南壁は斜面ゆえに検出されなかった。確認面からの深さは北側で30cmを計り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは数個検出されたが、柱穴は不明である。炉は土器埋設部と、掘り込みからなる。土器埋設部は深鉢形土器の胴部を輪切りにして埋設し、周辺が火熱を受け赤変している。掘り込みはほぼ円形を呈し、深さ13cmを計る。床は平坦であるが、地山の礫が露出していた。

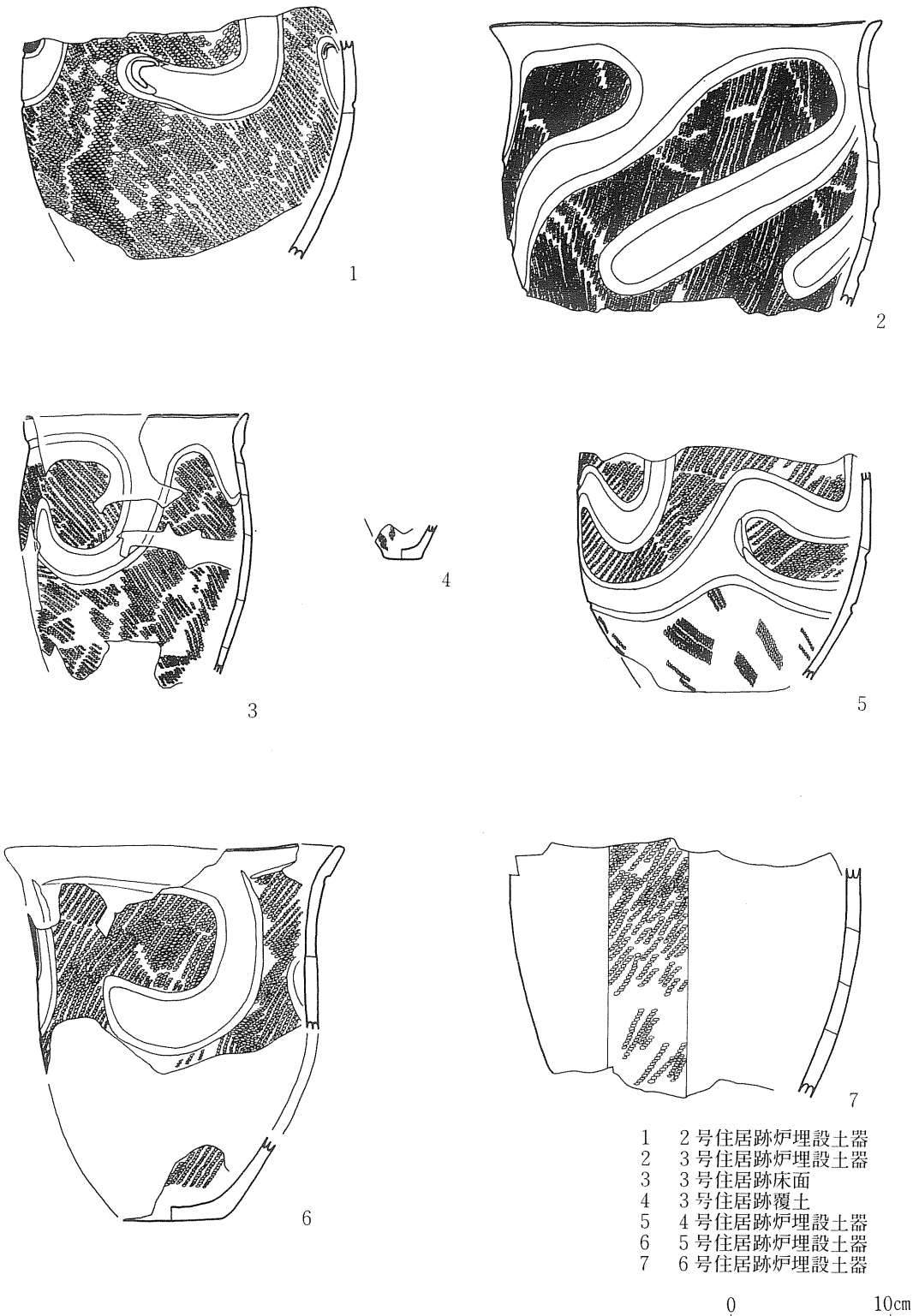
出土遺物

土器（第49図61、第56図257・258）

61は炉埋設土器、他は覆土出土である。沈線区画の磨消帯を施すものである。61は深鉢形土器の胴部で、ＲＬ単節斜縄文（縦位回転）が施される。

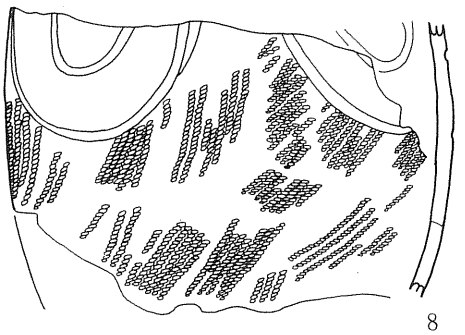

113号土坑
-24
A′
-12
-15
B—
B′
-25
-21
-13
-23
A—
84号土坑
-15
29号住居跡
A
A′ 40.10m
第1層　褐色土、ローム粒子混入
第2層　黄褐色土
第3層　黒褐色土
第4層　黄褐色土
第5層　暗褐色土、炭化物多量・焼土混入
第6層　黄褐色土、ローム粒子混入
B
B′ 40.10m
第1層　暗褐色土、炭化物多量混入
第2層　褐色土、炭化物少量混入
0
1m

第38図　37号住居跡



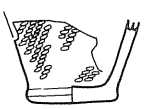
1　2号住居跡炉埋設土器
2　3号住居跡炉埋設土器
3　3号住居跡床面
4　3号住居跡覆土
5　4号住居跡炉埋設土器
6　5号住居跡炉埋設土器
7　6号住居跡炉埋設土器

第39図　遺構内出土土器

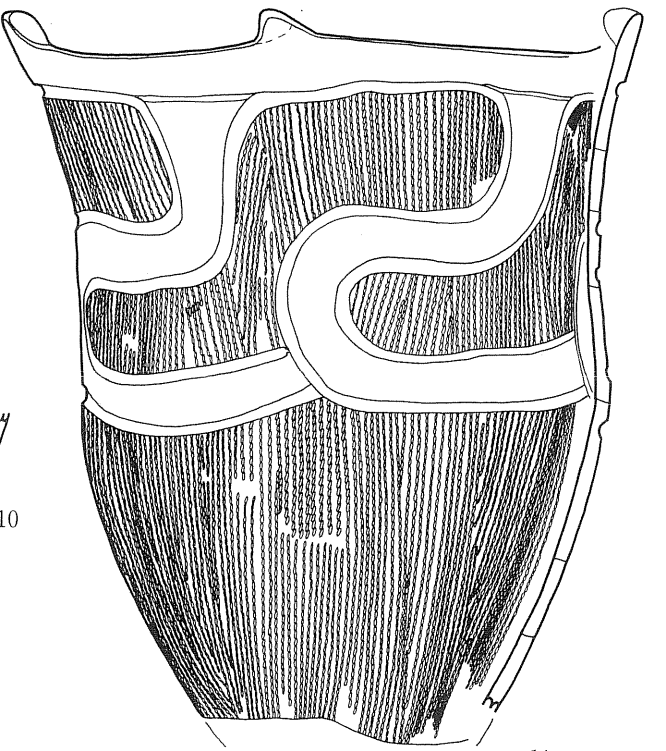


8

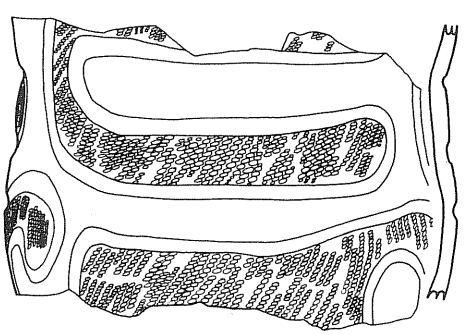
9



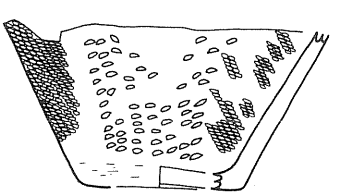
10



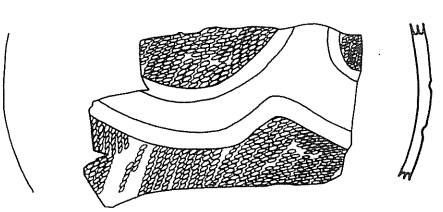
11



12



13

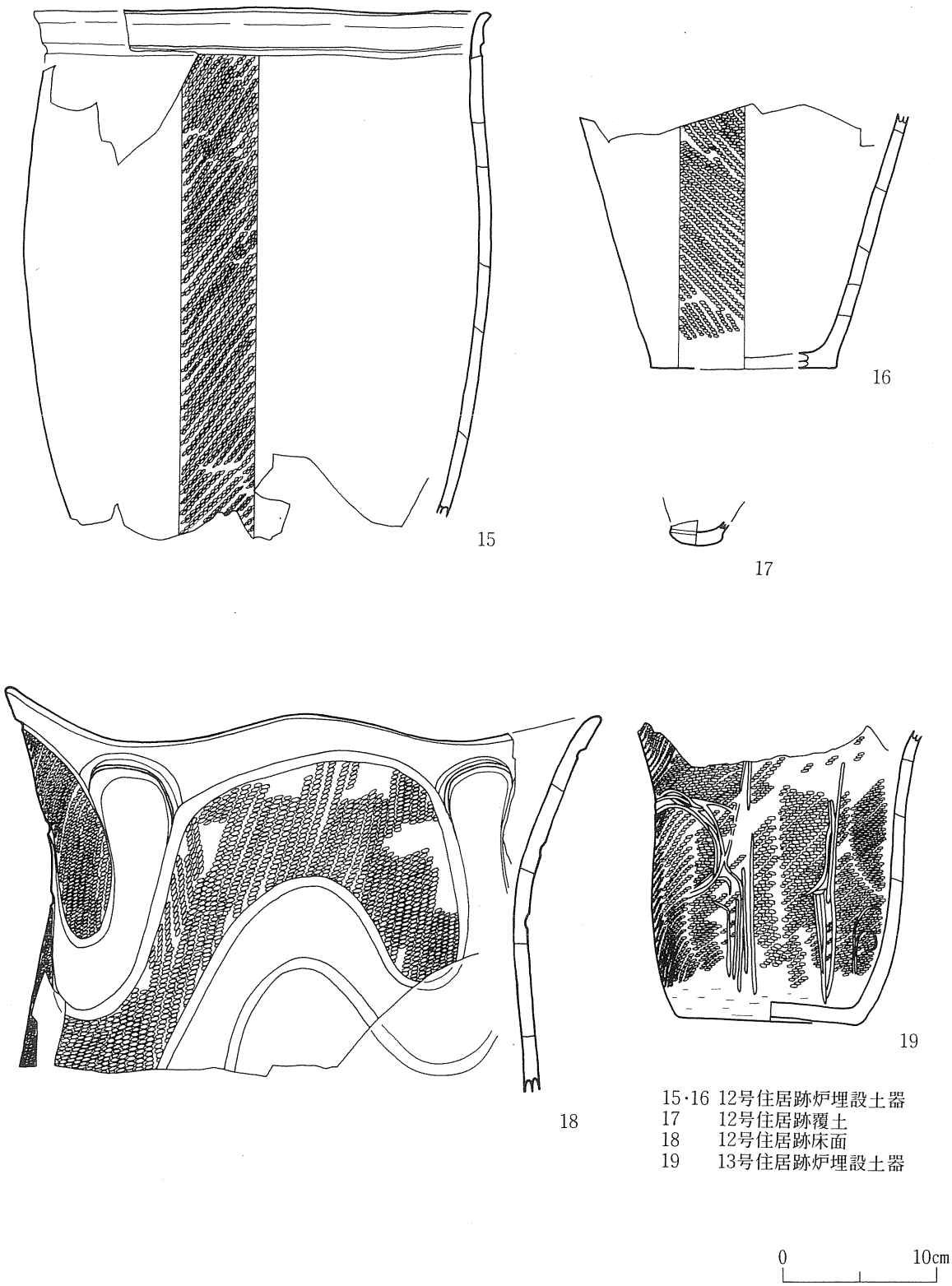


14

8　　7号住居跡炉埋設土器
9·10　8号住居跡覆土
11　　8号住居跡炉埋設土器
12　　9号住居跡炉埋設土器
13　　10号住居跡炉埋設土器
14　　11号住居跡炉埋設土器

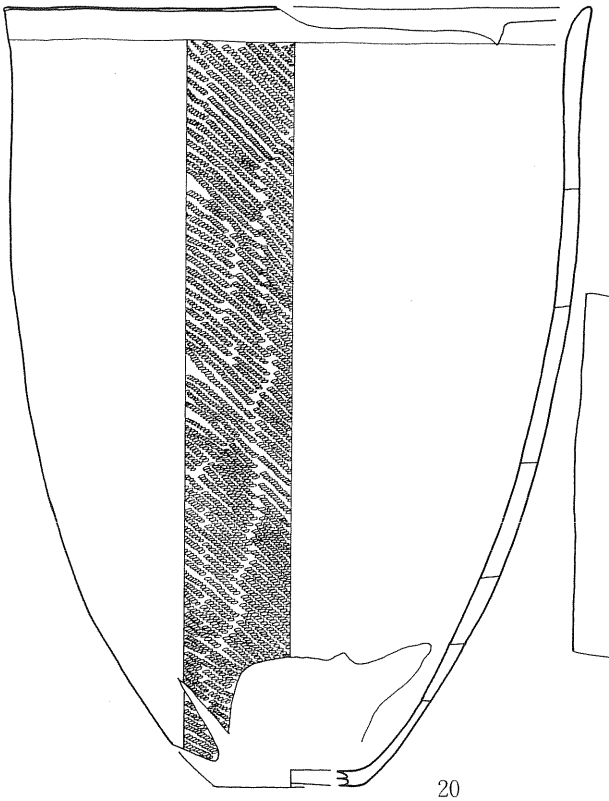
0　10cm

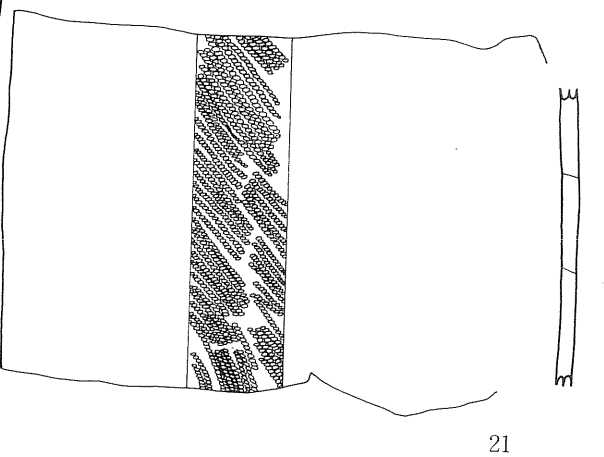
第40図　遺構内出土土器

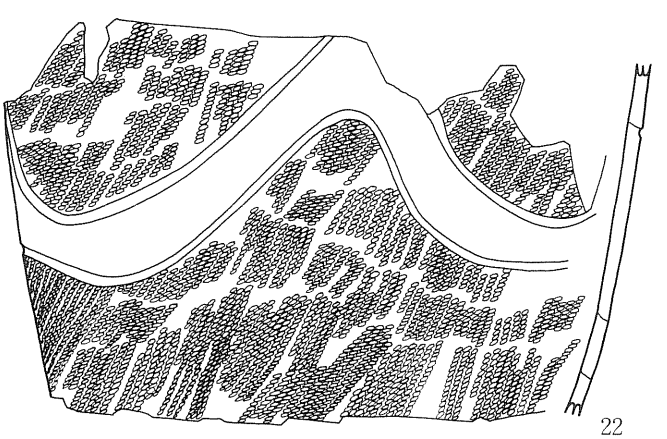


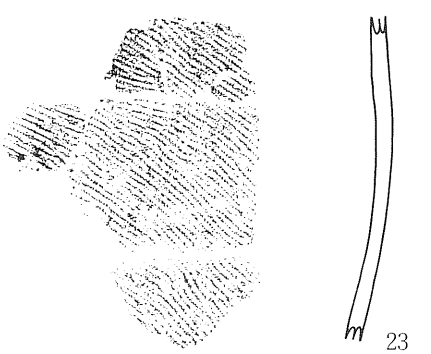
15･16　12号住居跡炉埋設土器
17　　12号住居跡覆土
18　　12号住居跡床面
19　　13号住居跡炉埋設土器

第41図　遺構内出土土器





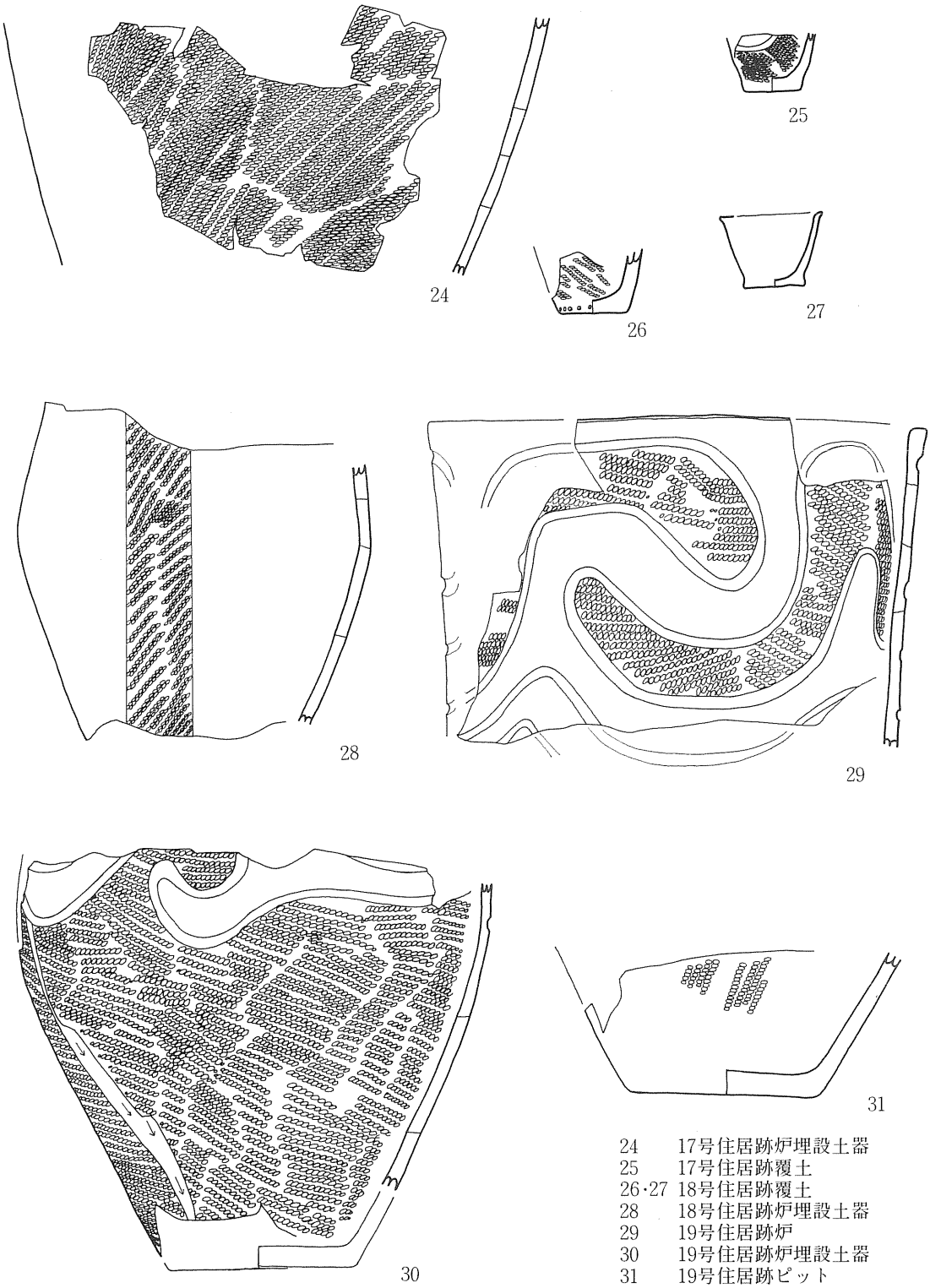




20　　14号住居跡炉埋設土器
21　　15号住居跡炉埋設土器
22・23 16号住居跡炉埋設土器

0　　10cm

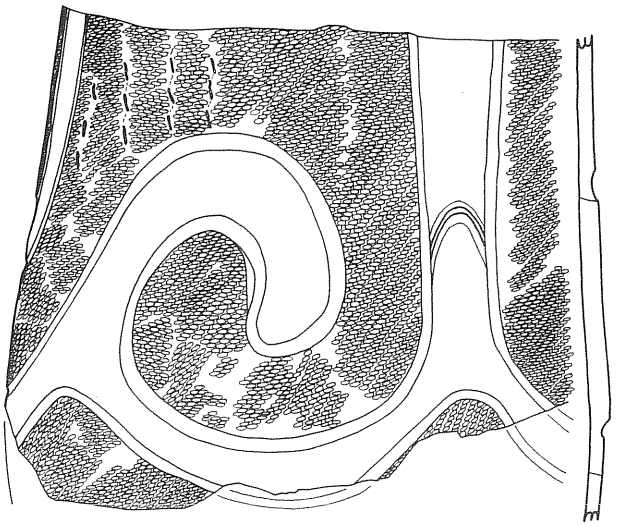
第42図　遺構内出土土器

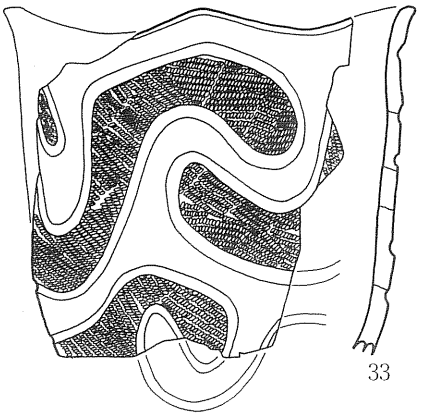


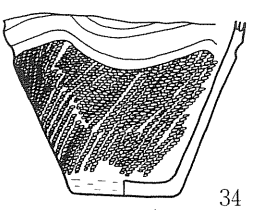
24　17号住居跡炉埋設土器
25　17号住居跡覆土
26・27　18号住居跡覆土
28　18号住居跡炉埋設土器
29　19号住居跡炉
30　19号住居跡炉埋設土器
31　19号住居跡ピット

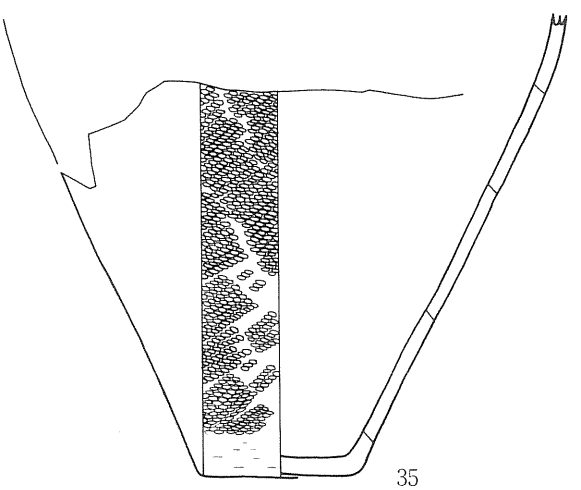
0　10cm

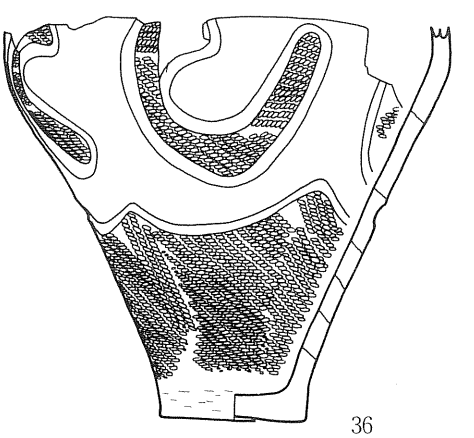
第43図　遺構内出土土器







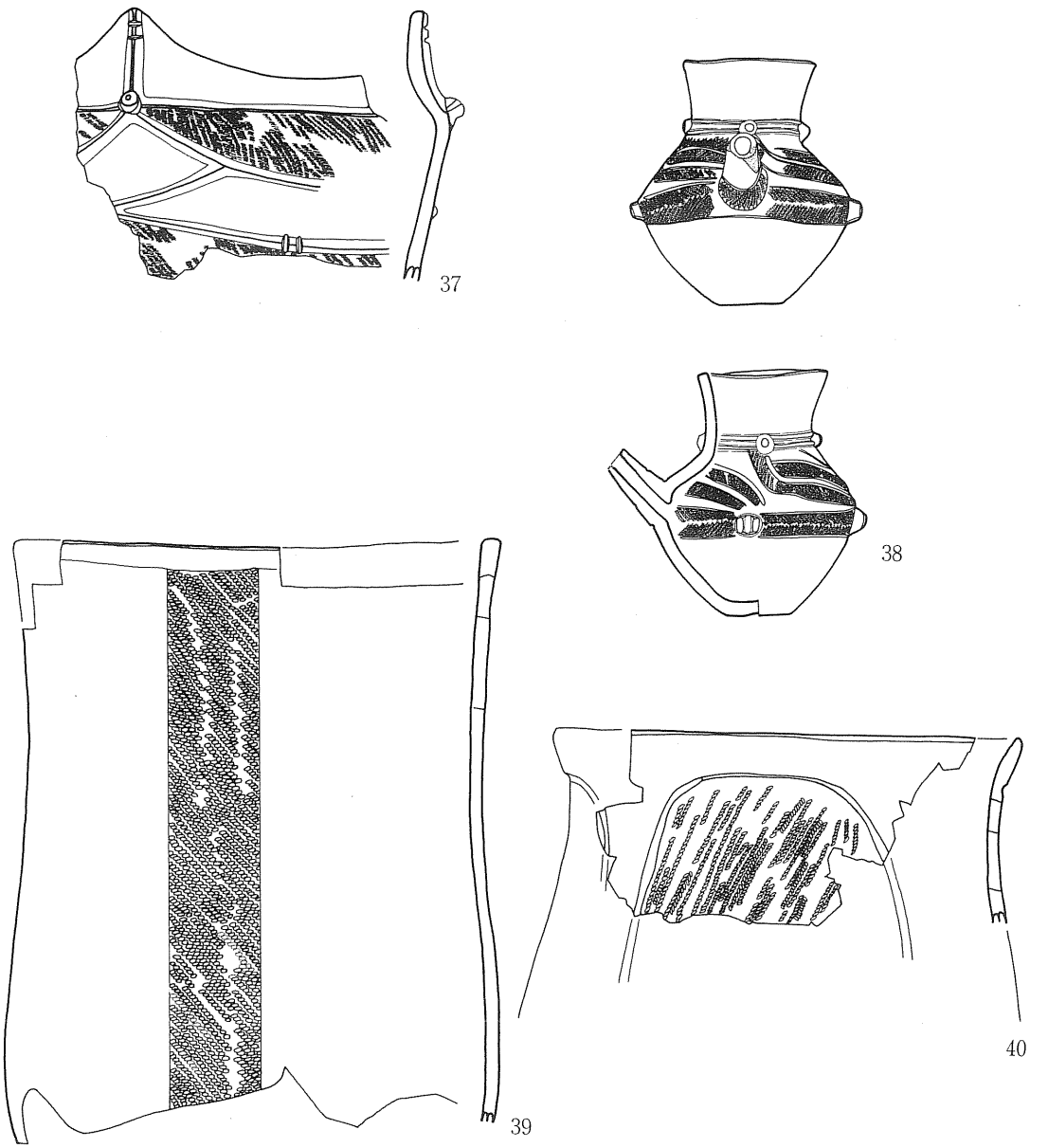




32　20号住居跡炉埋設土器
33　20号住居跡覆土
34　20号住居跡ピット
35　20号住居跡炉石組部覆土
36　22号住居跡炉埋設土器

0　10cm

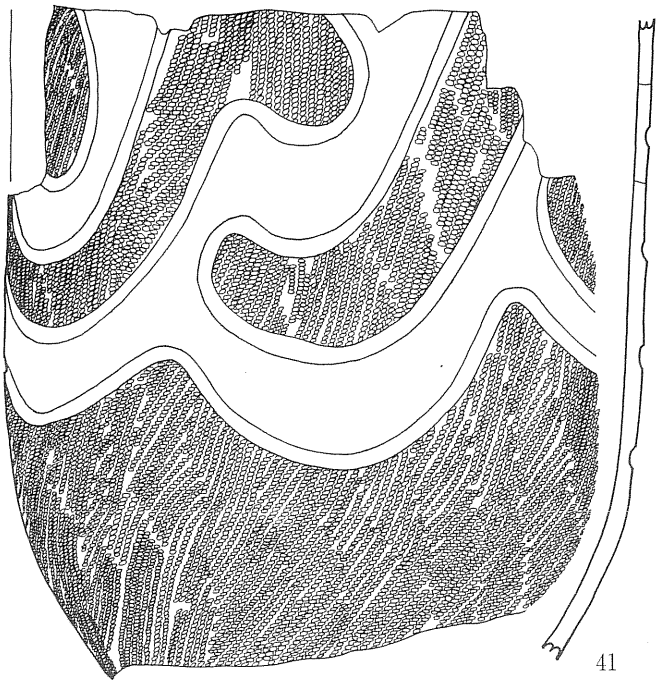
第44図　遺構内出土土器

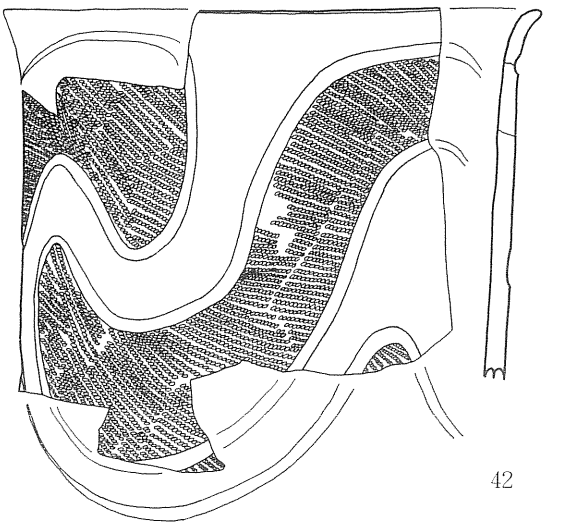


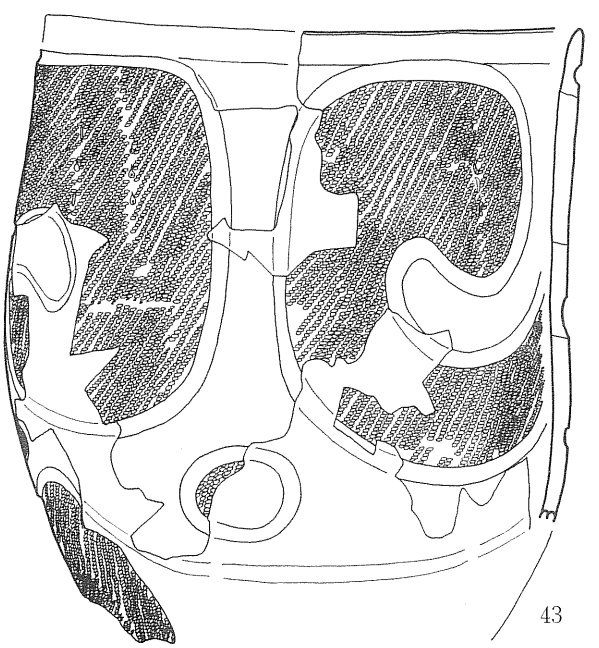
37・38 23号住居跡覆土
39　　23号住居跡炉埋設土器
40　　24号住居跡炉埋設土器

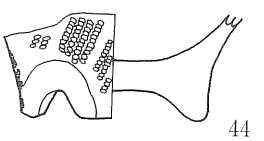
0　10cm

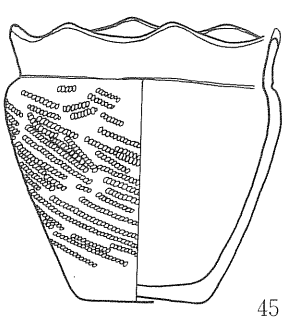
第45図　遺構内出土土器







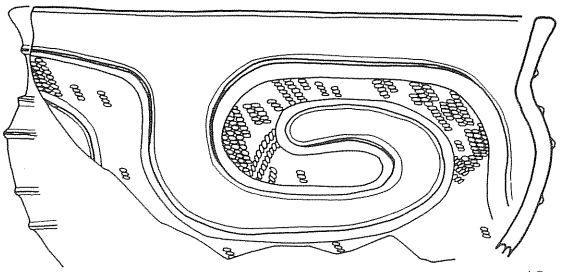


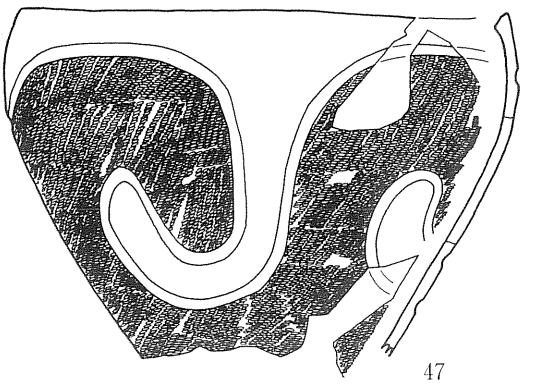


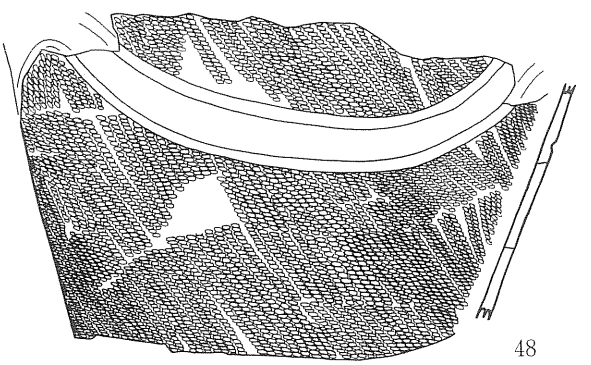
41　　27号住居跡炉埋設土器
42　　27号住居跡炉埋設土器
43　　28号住居跡炉埋設土器
44・45 28号住居跡覆土

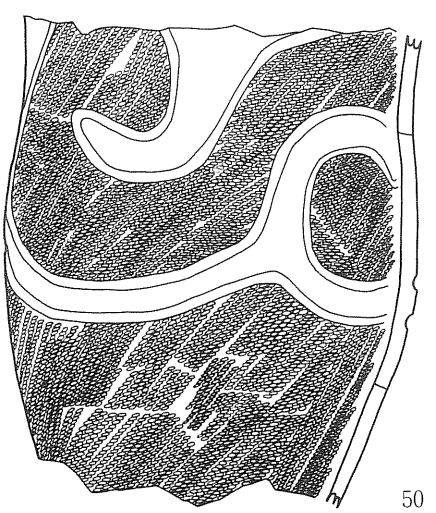
0　　10cm

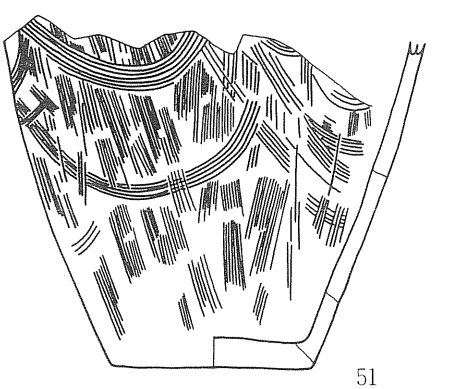
第46図　遺構内出土土器







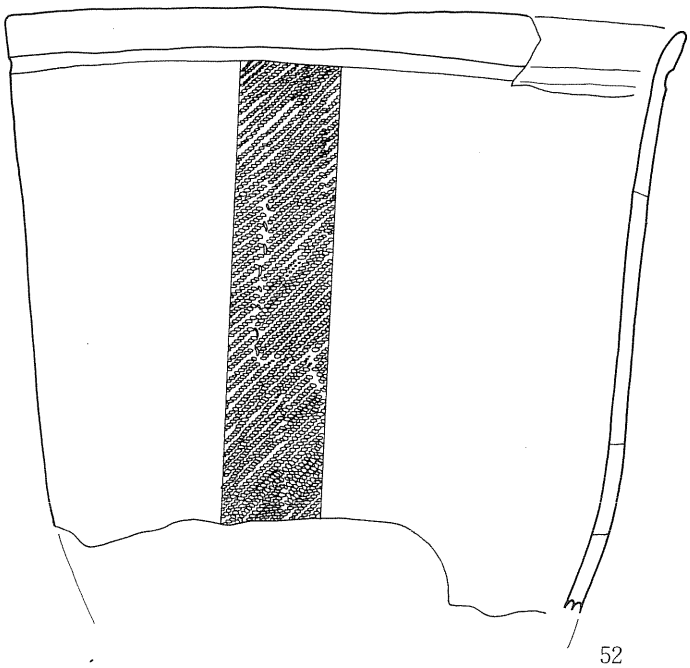


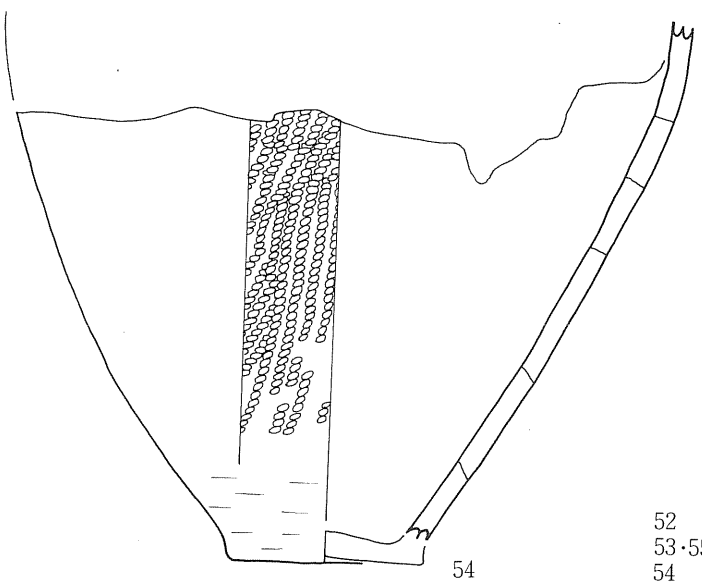


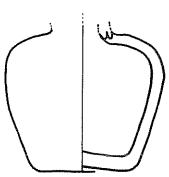
46・49　29号住居跡覆土
47・48　30号住居跡炉埋設土器
50　　31号住居跡炉埋設土器
51　　30号住居跡覆土

0　　10cm

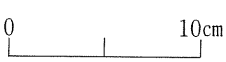
第47図　遺構内出土土器



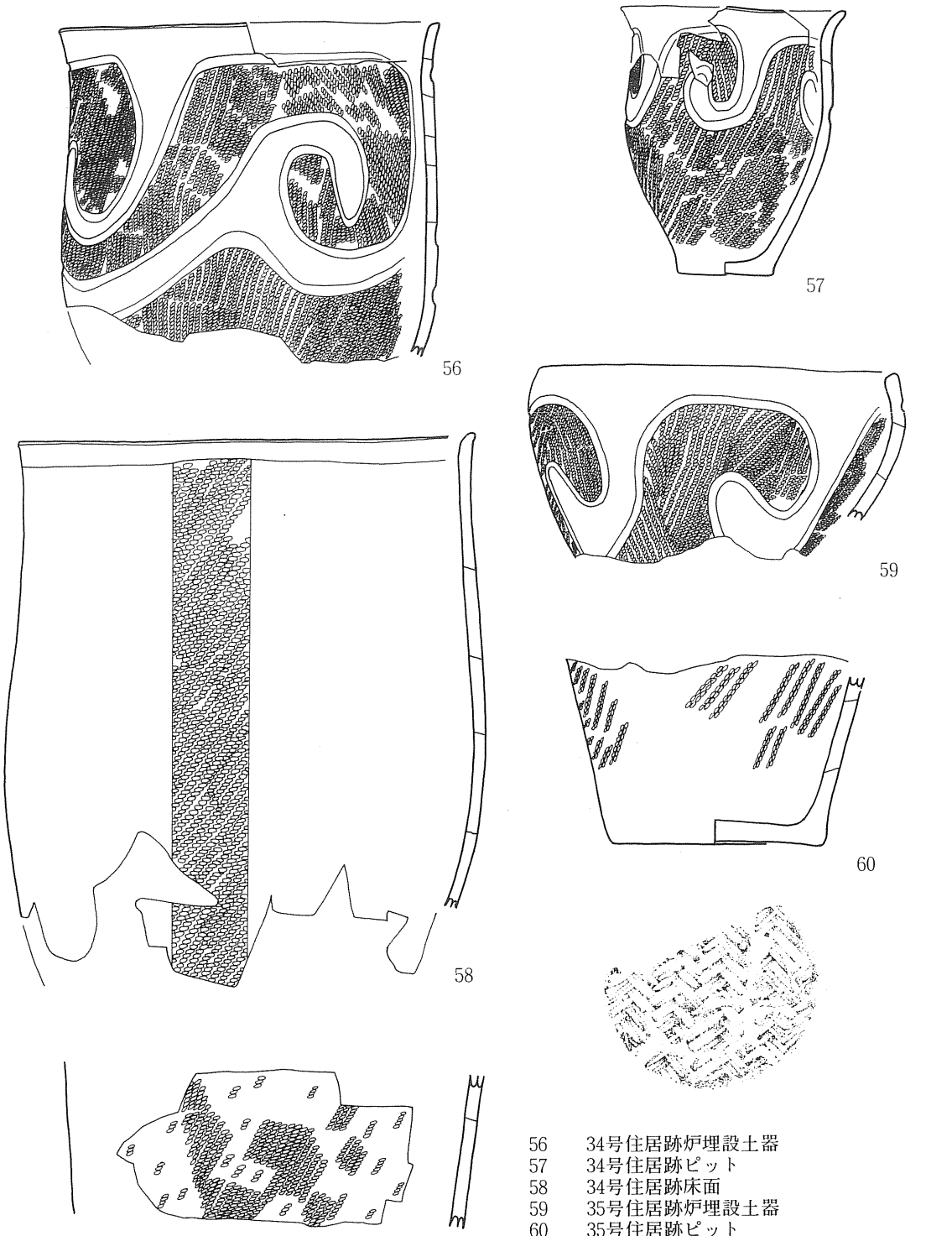




52　32号住居跡炉埋設土器
53・55　33号住居跡覆土
54　33号住居跡炉埋設土器



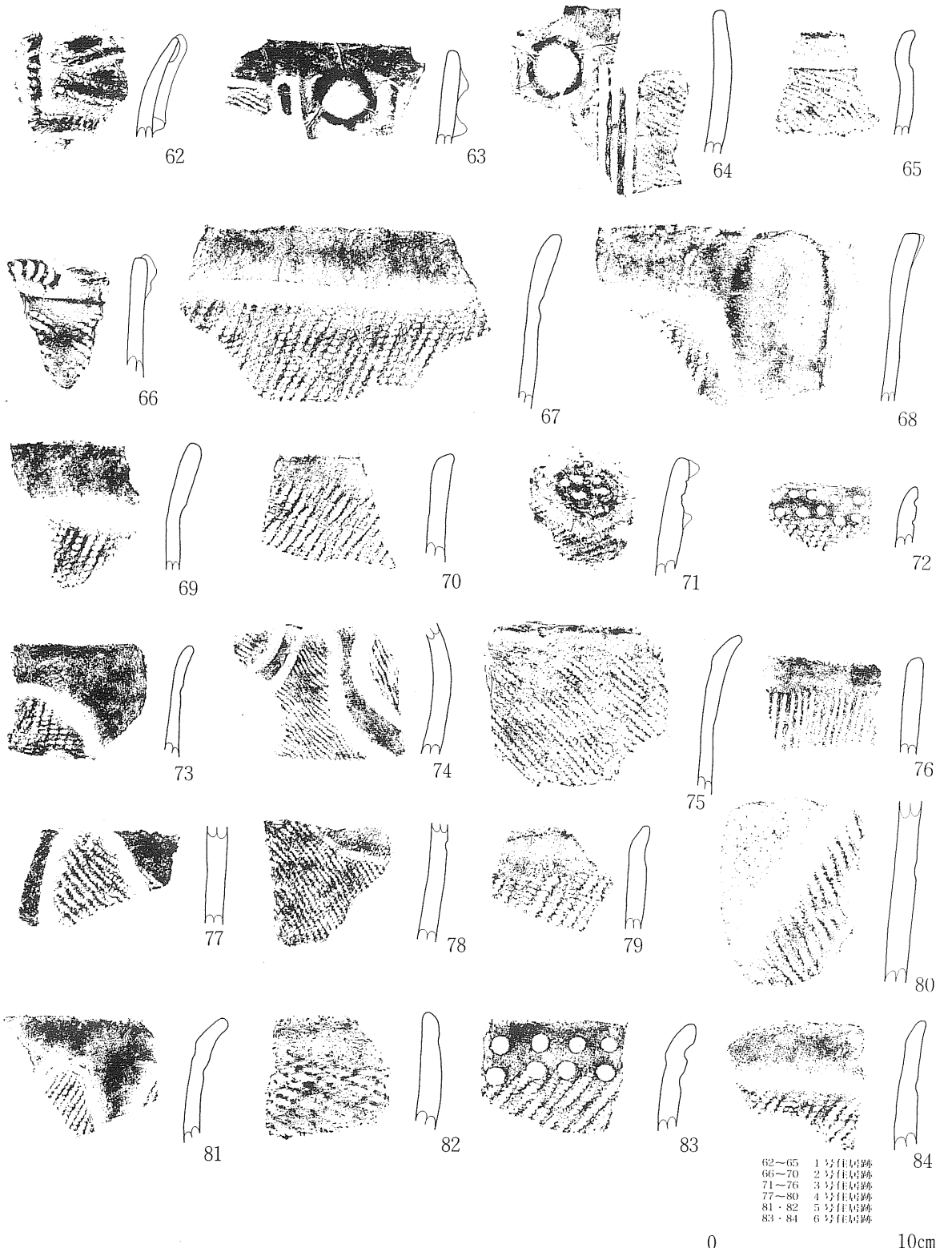
第48図　遺構内出土土器



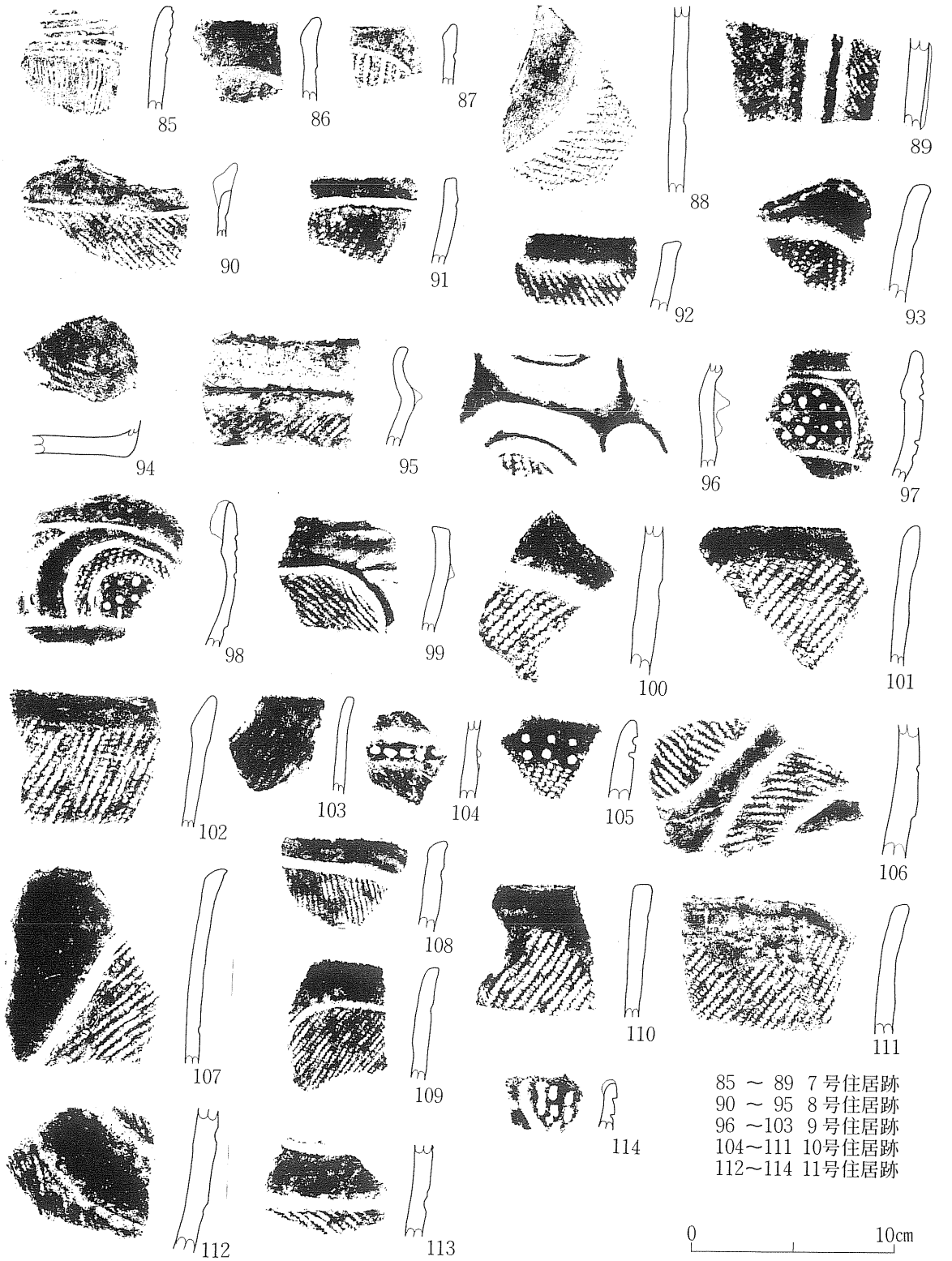
56　34号住居跡炉埋設土器
57　34号住居跡ピット
58　34号住居跡床面
59　35号住居跡炉埋設土器
60　35号住居跡ピット
61　37号住跡炉埋設土器

0　10cm

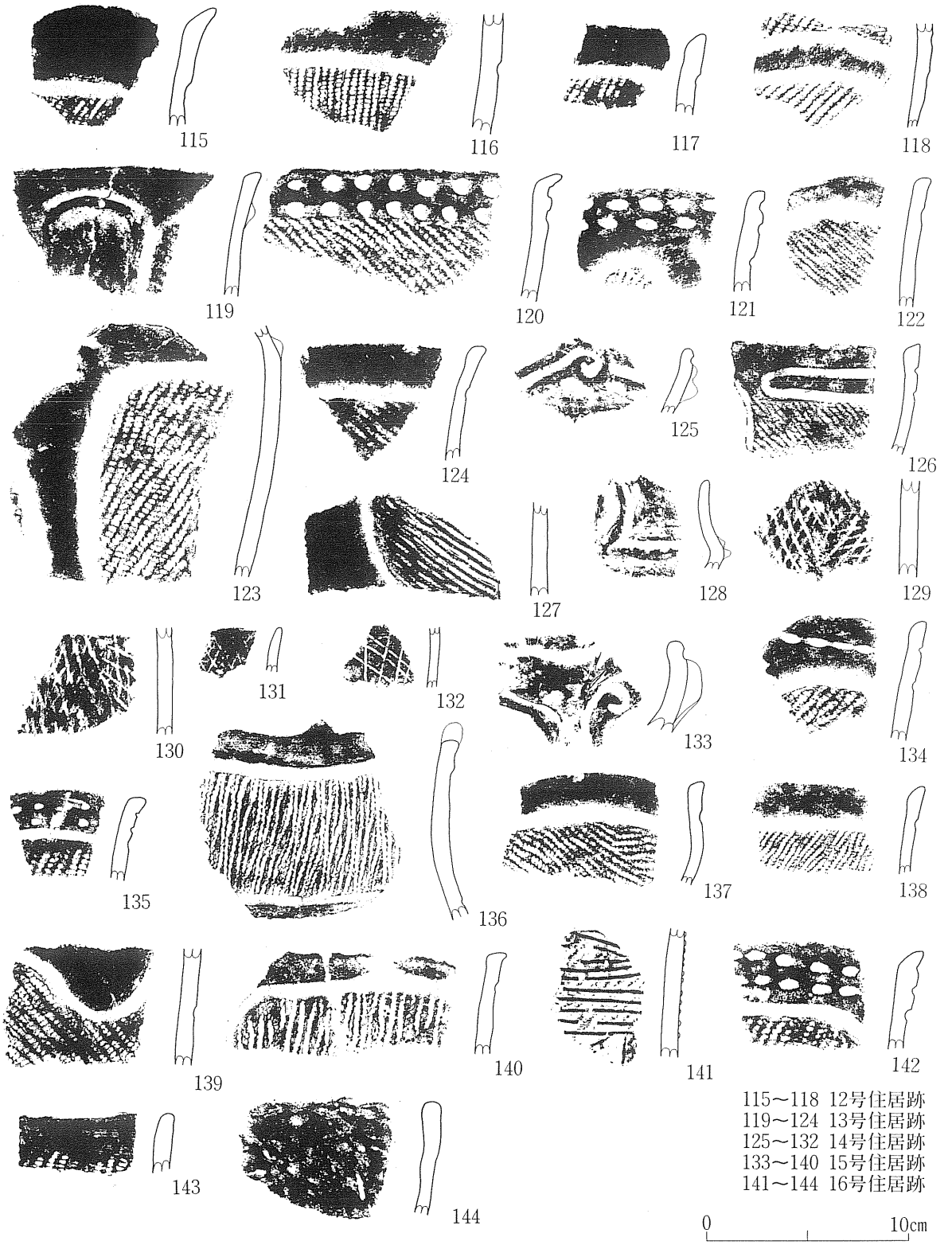
第49図　遺構内出土土器



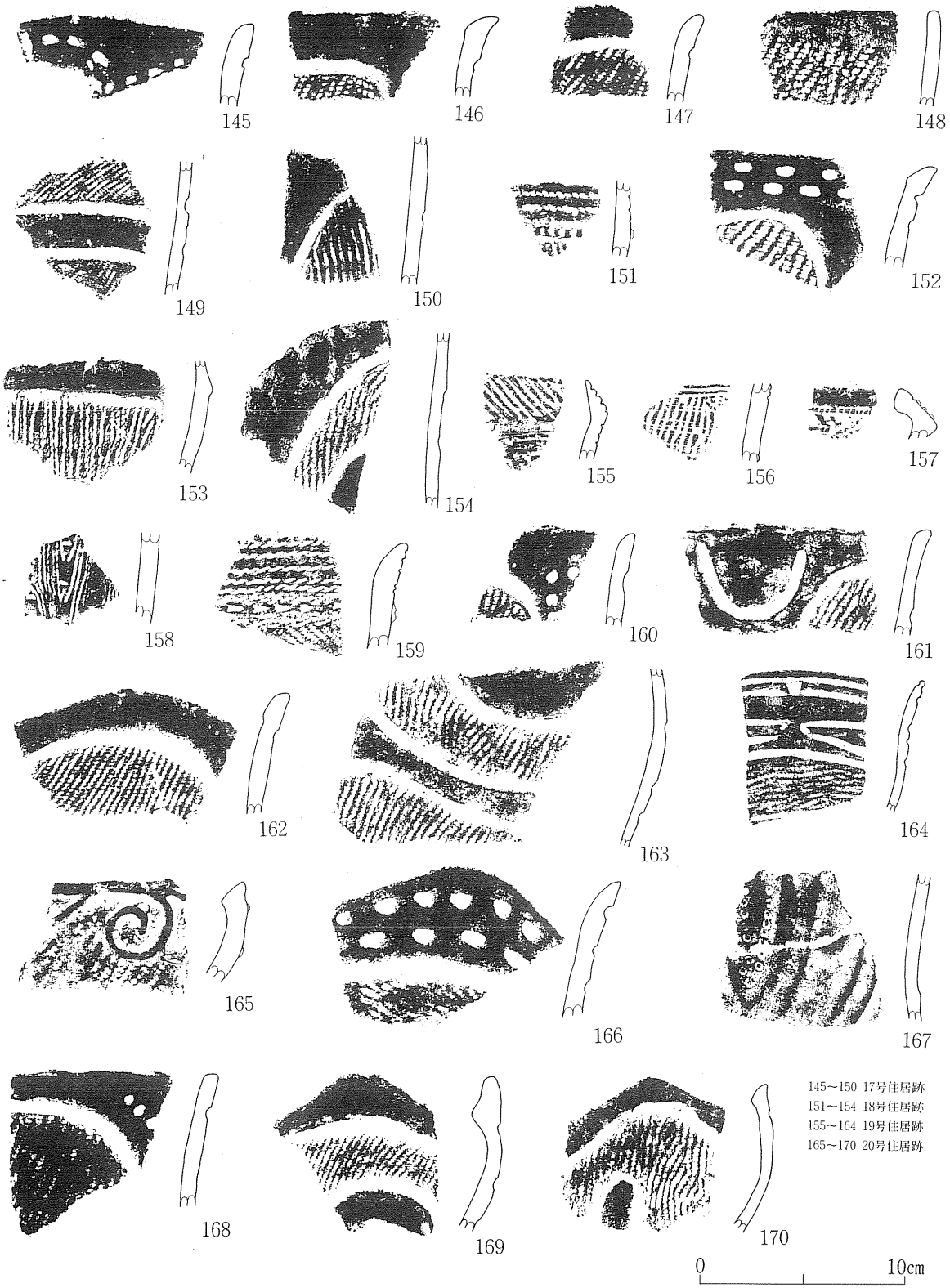
第50図　遺構内出土土器



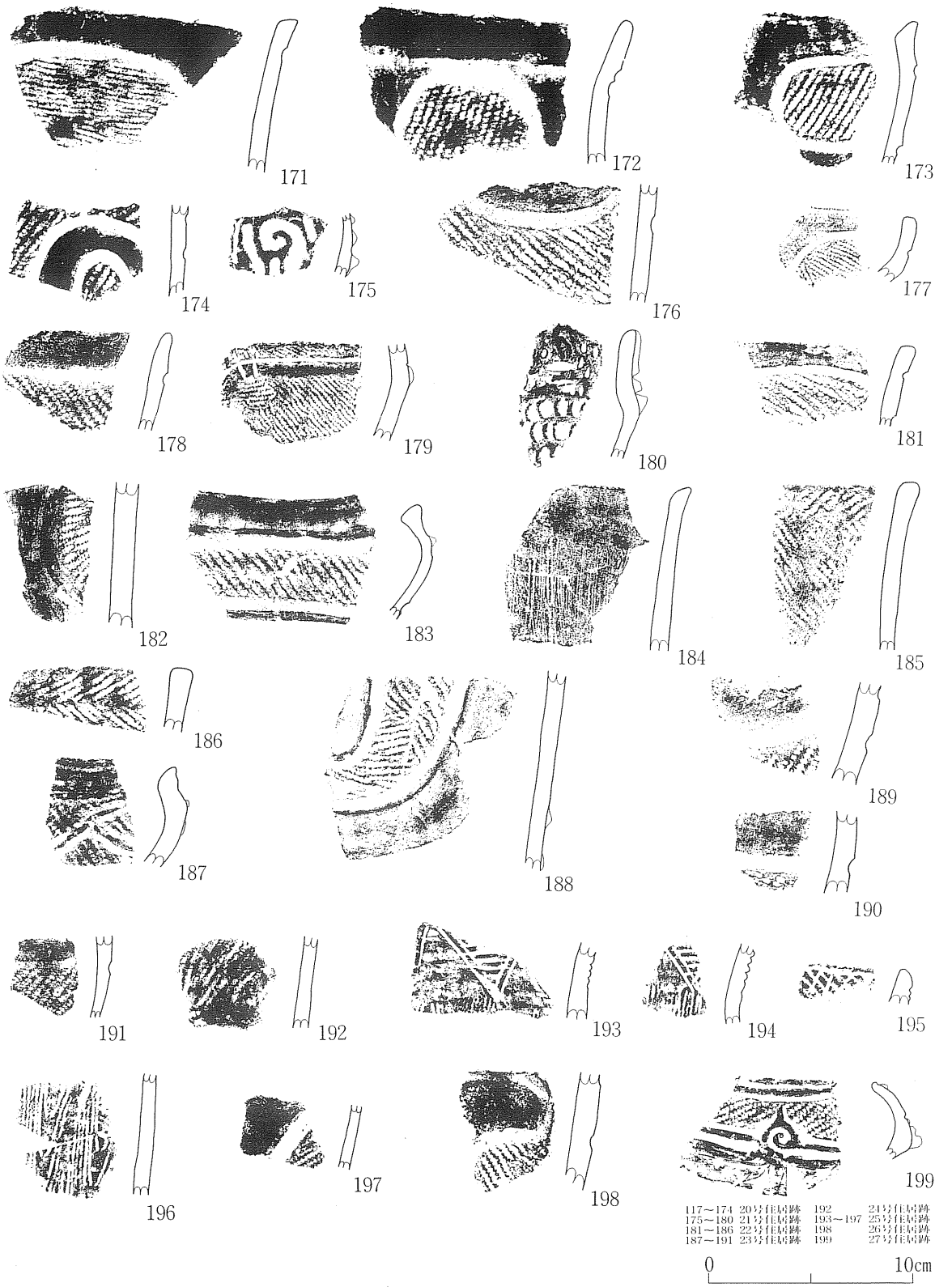
第51図　遺構内出土土器



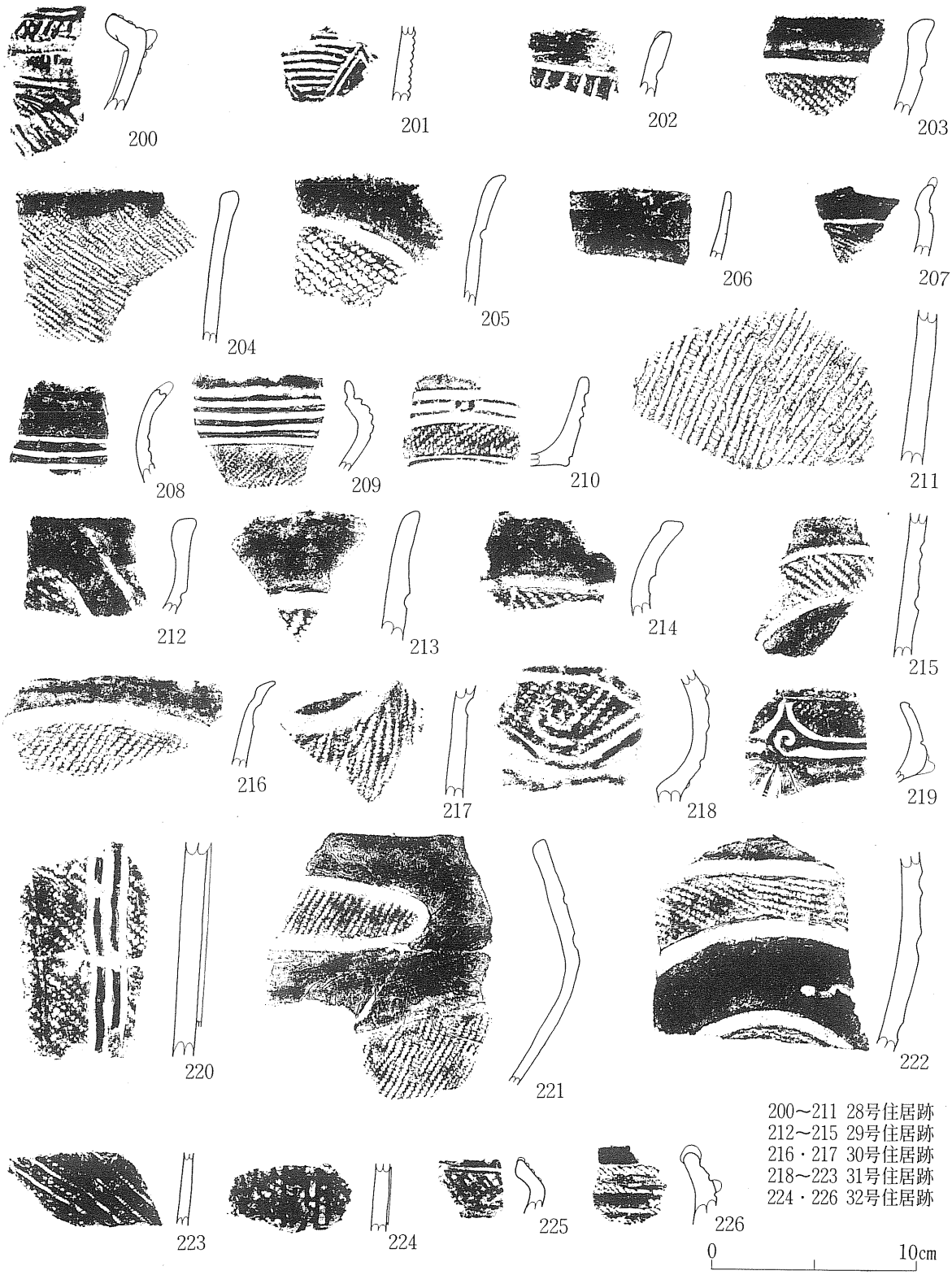
第52図　遺構内出土土器



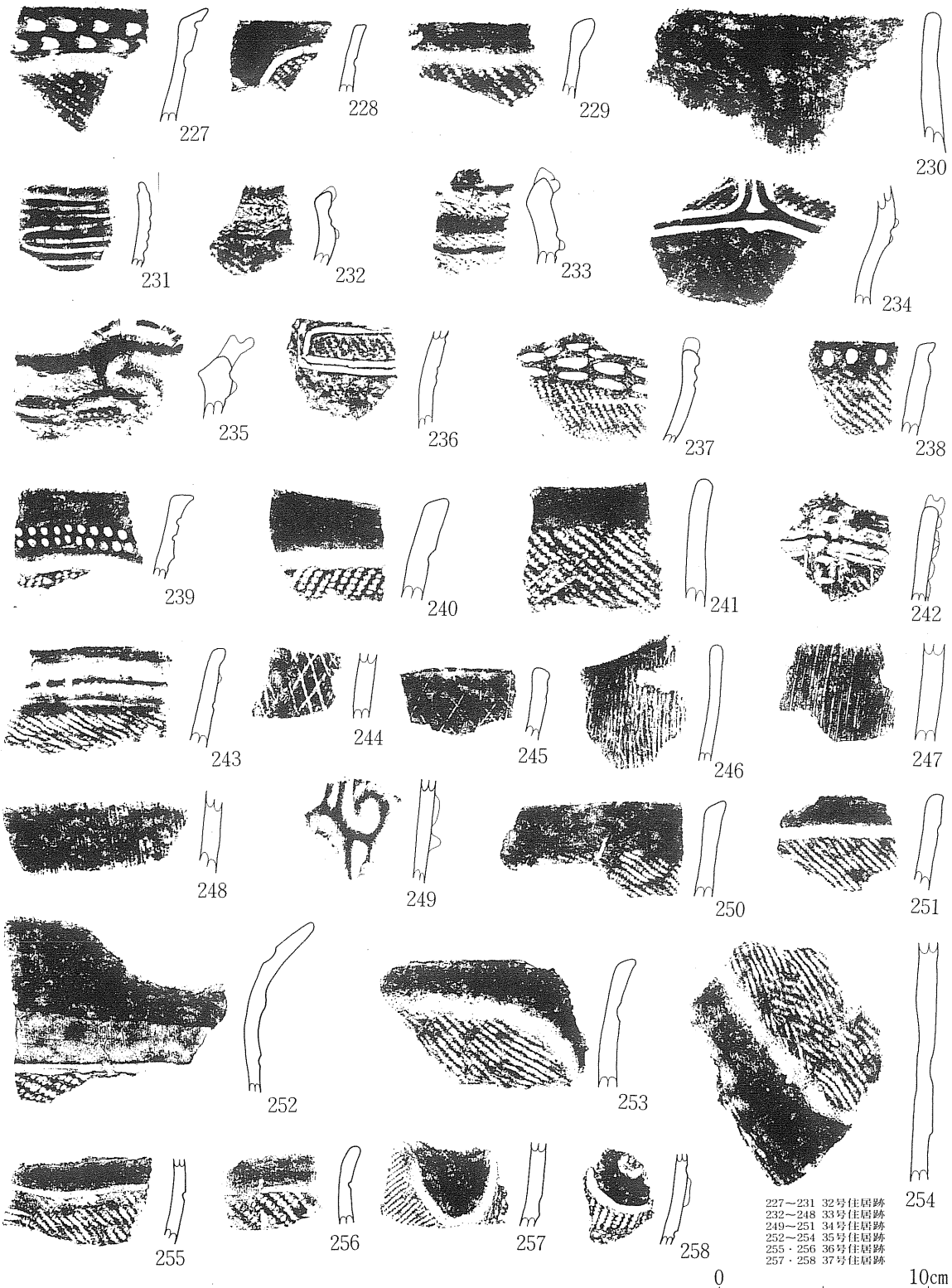
第53図　遺構内出土土器



第54図　遺構内出土土器



第55図　遺構内出土土器



第56図　遺構内出土土器

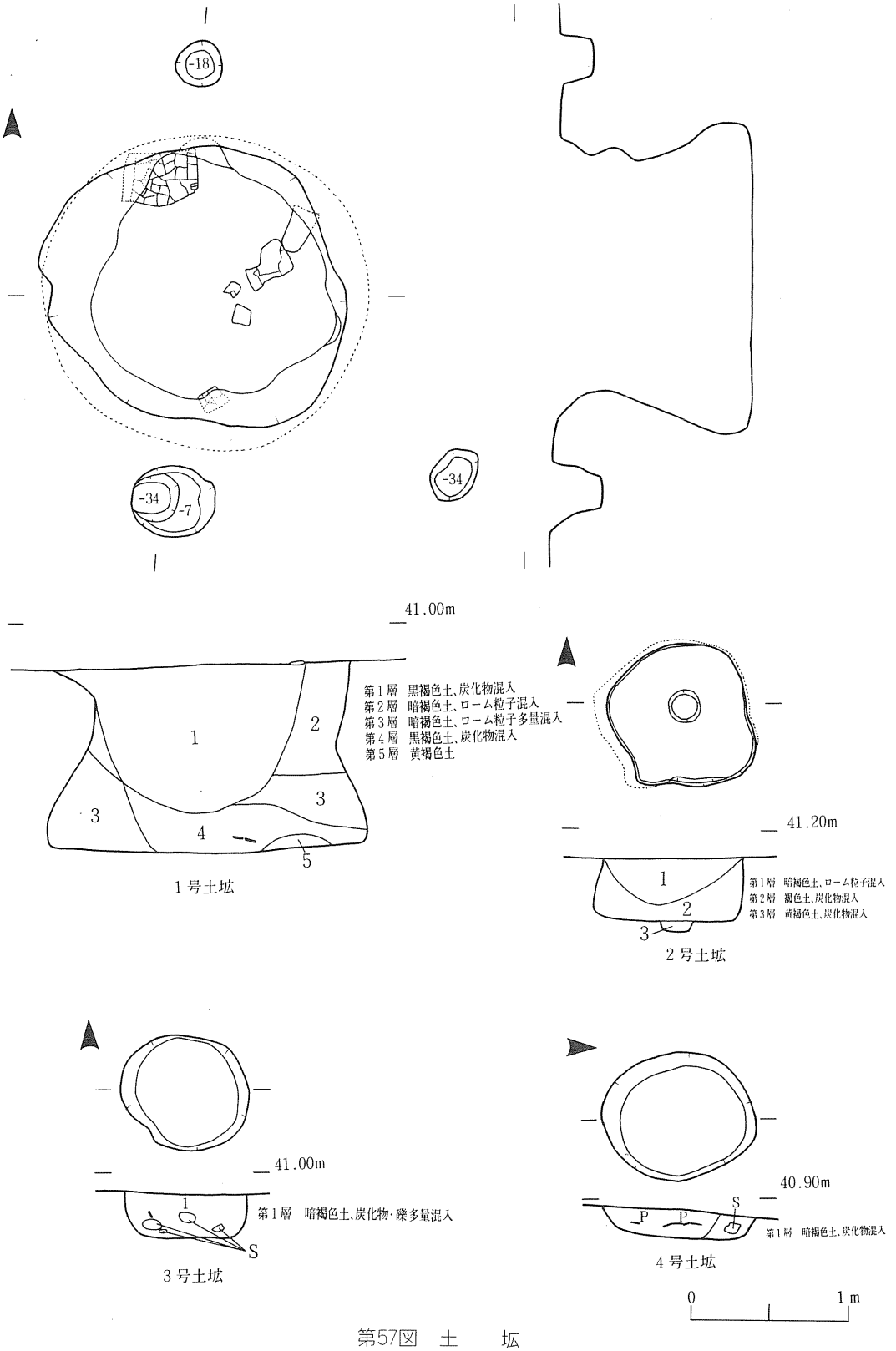
土 坑 一 覧 表

番号	規模 (cm)			平面形	断面形	出土遺物
	長軸	短軸	深さ			
1号土坑	186	172	120	楕円形	袋状	第78図259・26、第82図286・287、縄文前期末（円筒下層d式）、第90図98（石鏃）
2	90	88	40	不整形	袋状	第82図288～290、縄文中期末（大木10式）
3	80	70	28	楕円形	鍋底状	第82図291、縄文
4	99	81	18	楕円形	鍋底状	第82図292、縄文中期
5	135	62	16	長形	皿状	縄文
6	89	81	20	楕円形	鍋底状	
7	93		13	円形	袋状	第79図261・262、第82図293、縄文中期末（大木10式）
8	100	88	103	楕円形	袋状	第82図294～298、縄文中期末（大木10式）、第92図135（くぼみ石）
9	87		15	円形	鍋底状	第82図299・300、縄文中期末（大木10式）
10	80		23	円形	鍋底状	第82図301、縄文中期末（大木10式）
11	83	76	55	楕円形	袋状	第82図302、縄文中期末（大木10式）
12	77		35	円形	鍋底状	第82図303・304、縄文
13	90	78	35	楕円形	鍋底状	第82図305・306、縄文中期末
14	150	122	18	楕円形	皿状	
15	110		20	円形	鍋底状	縄文
16	88		70	円形	袋状	第82図307・308、縄文中期末（大木10式）
17	180	170	20	楕円形	鍋底状	第82図309、縄文前期末（大木6式）
18	60		16	円形	鍋底状	縄文
19	88	83	42	楕円形	袋状	第82図310～312、縄文中期末、第92図136（磨石）
20	93		33	円形	平底	第82図313・314、縄文中期末（大木10式）、第90図99・100（石鏃）、第90図101（石錐）
21	87		39	円形	袋状	第82図315、縄文中期末
22	88		56	円形	袋状	第82図316、縄文
23	103	95	40	楕円形	鍋底状	第82図317～320、縄文中期末（大木10式）
24	132	88	22	楕円形	鍋底状	第83図321、縄文
25	100	87	42	楕円形	鍋底状	第83図322・323、縄文中期（大木8b式・大木10式）
26	84		53	円形	袋状	第83図324、縄文中期末（大木10式）
27	105	75	13	楕円形	鍋底状	第83図325、縄文中期末（大木10式）
28	102		31	円形	鍋底状	第83図326・327、縄文中期末（大木10式）
29	68		18	円形	鍋底状	縄文
30	98		16	円形	鍋底状	
31	88		11	円形	鍋底状	第83図328、縄文中期末（大木10式）

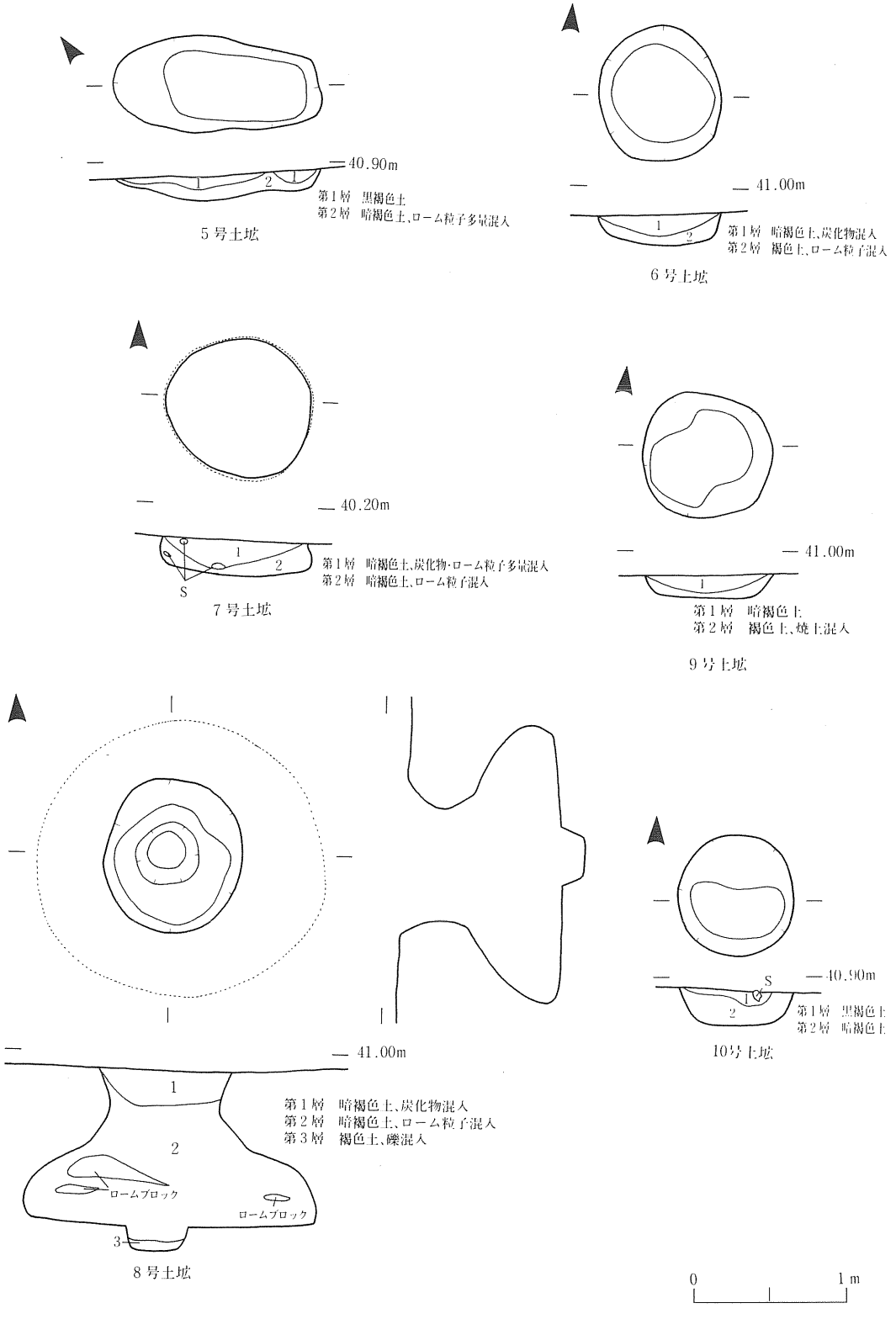
番号	規模（cm）			平面形	断面形	出土遺物
	長軸	短軸	深さ			
32号土坑	103	91	18	楕円形	平底	第83図329～331、縄文中期末（大木10式）
33	92	82	38	不整形	鍋底状	第83図332・333、縄文中期末（大木10式）
34	105	83	20	楕円形	鍋底状	第83図334・335、縄文中期末（大木10式）
35	80		28	円形	鍋底状	第83図336～338、縄文中期末（大木10式）
36	82		15	円形	鍋底状	第83図339・340、縄文中期末（大木10式）
37	172	150	50	楕円形	鍋底状	第83図341・342、縄文中期末（大木10式）、
						第101図12（土製品）
38	103	75	12	楕円形	鍋底状	縄文
39	95	83	52	楕円形	袋状	
40	123	105	60	楕円形	袋状	第83図343・344、縄文中期末（大木10式）
41	205	105	65	楕円形	鍋底状	第79図263・264、縄文晩期
42	62	58	18	楕円形	鍋底状	
43	58	55	18	楕円形	鍋底状	
44	127		37	円形	鍋底状	
45	118	105	70	楕円形	袋状	第79図265・266、第83図345・346
						縄文中期末（大木10式）、縄文晩期
46	135	125	69	楕円形	袋状	第79図267・268、第83図347・348、
						縄文中期末（大木10式）、縄文晩期
						第90図102（石錐）、第92図137（くぼみ石）
47	130	126	70	楕円形	袋状	第83図349・350、縄文中期末（大木10式）
48	136	108	13	楕円形	鍋底状	縄文
49	135	112	142	楕円形	袋状	第79図269、縄文中期末（大木10式）
50	80		31	円形	鍋底状	第83図351・352、縄文前期末（大木６式）
51	73	50	25	楕円形		第83図353、縄文中期末（大木10式）
52	85	77	35	楕円形	平底	第83図354・355、縄文中期末（大木10式）
53	105	90	39	楕円形		第84図356、縄文中期（大木８b式）
54	155	145	39	円形		第84図357、縄文中期末（大木10式）、
						第100図７（三角形土製品）
55	160	140	22	楕円形	鍋底状	
56	94	85	25	楕円形		第84図358、縄文中期末（大木10式）
57	102	95	38	楕円形	鍋底状	
58	120	105	7	楕円形	平底	
59	126	113	82	楕円形	袋状	第84図359・360、縄文
60	170	123	85	楕円形	袋状	第84図361～364、縄文中期末（大木10式）、
						第92図138（磨石）

番　号	規　模　(cm)			平面形	断面形	出　土　遺　物
	長軸	短軸	深さ			
61号土坑	118	113	28	楕円形	鍋底状	縄文
62	78	72	30	楕円形	丸　底	
63	84	65	15	不整形		第84図365～367、縄文、第92図139(磨石)
64	153	92	31	長　形		
65	92	71	21	楕円形	鍋底状	縄文
66	113	110	18	楕円形	鍋底状	第84図368、縄文中期末(大木10式)
67	150		48	円　形	平　底	第80図270、第84図369～373、縄文中期末(大木10式)
						第102図45(再利用土製品)
68	83	76	18	楕円形	鍋底状	縄文
69	114	87	25	楕円形		
70	65	60	16	楕円形	鍋底状	
71	75	63	44	楕円形	平　底	第84図374、縄文
72	115	72	32	楕円形	鍋底状	
73	78	56	15	楕円形	平　底	
74	138	133	14	楕円形	平　底	
75	63	60	18	楕円形		
76	175	105	19	長　形	平　底	
77	78	65	22	楕円形	鍋底状	
78	98	87	15	不整形	鍋底状	第84図375～377、縄文前期末～中期
79	80	70	40	楕円形	鍋底状	縄文
80	136	108	12	不整形		縄文
81	75	65	47	隅丸方形	袋　状	第84図378、縄文
82	83	68	27	楕円形	鍋底状	第84図379、縄文中期末(大木10式)
83	118	108	16	不整形	平　底	第84図380、縄文中期末(大木10式)
84	154	138	143	楕円形	袋　状	第84図381・382、縄文中期末(大木10式)
						第90図103(石錐)
85	60	50	38	隅丸方形	バケツ状	第84図383、縄文中期末(大木10式)
86	65		27	円　形	平　底	
87	58		17	円　形	鍋底状	
88	78	74	98	不整形	袋　状	第80図273～275、第85図384、縄文中期末(大木10式)
						第90図104(石錐)
89	64	51	23	楕円形	平　底	第85図385～387、縄文前期末(大木6式)、縄文中期末(大木10式)
90	148	98	58	不整形	鍋底状	縄文
91	123	41	43	溝　状	U字状	縄文
92	60		32	円　形	逆台形状	第85図389、縄文

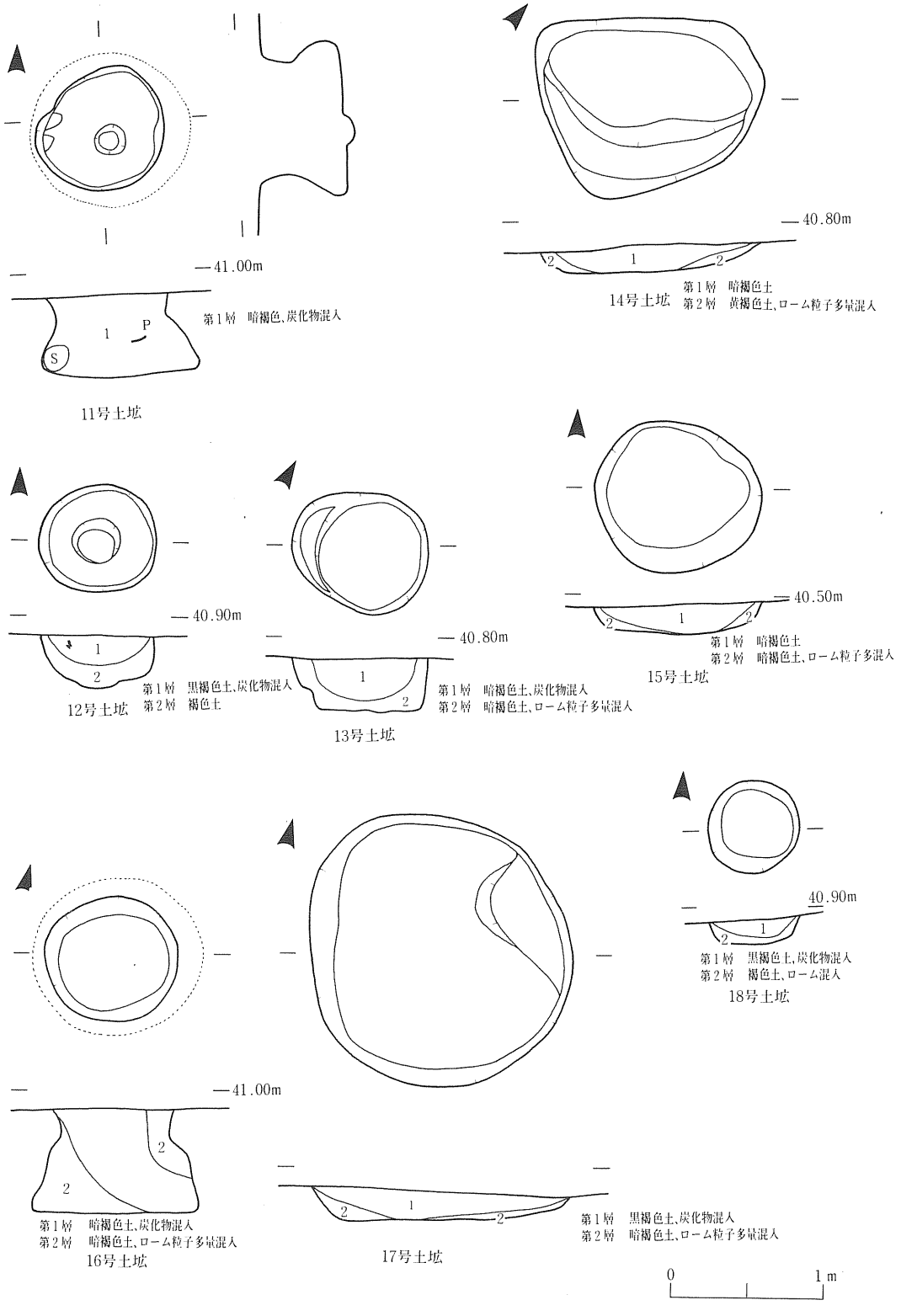
番号	規模 (cm)			平面形	断面形	出土遺物
	長軸	短軸	深さ			
93号土坑	69	62	19	楕円形	鍋底状	
94	45		18	円形	鍋底状	第85図390・391、縄文
95	65	46	16	楕円形	鍋底状	縄文
96	60		16	円形	鍋底状	
97	120	60	54	長形	平底	第85図388・392・393、縄文前期末(大木6式)
						第90図105(石鏃)、106(石錐)
98	77	75	15	隅丸方形	鍋底状	第90図107(石鏃)
99	58	53	16	楕円形	平底	
100	240	156	22	不整形	鍋底状	第85図394、縄文中期末(大木10式)
101	100		65	円形	袋状	
102	198	38	15	溝状	鍋底状	
103	89	84	28	楕円形	鍋底状	
104	107	95	26	楕円形	平底	第85図395・396、縄文中期末(大木10式)
105	168	131	30	楕円形	鍋底状	第90図108(石鏃)
106	140	96	53	楕円形	平底	第80図271・272・276、縄文後期、第102図46(再利用土製品)
107	160		150	円形	袋状	第85図397、縄文中期末(大木10式)、
						第90図109(石鏃)、第93図140(くぼみ石)
108	68		17	円形	鍋底状	
109	140	105	20	楕円形	平底	
110	70	58	21	楕円形		第85図398・399、縄文中期末(大木10式)
111	53	42	15	楕円形	鍋底状	第80図277、縄文
112	85	76	13	楕円形	鍋底状	
113	63		27	円形	鍋底状	
114	90	84	30	不整形	鍋底状	
115	186	114	17	不整形	鍋底状	第85図400・401、縄文中期末(大木10式)、第93図141(磨石)
116	128	73	13	不整形	鍋底状	
117	270	105	50	不整形	鍋底状	
118	228	170	12	不整形	平底	
119	250	150	15	不整形	平底	
120	300	250	10	楕円形	平底	第85図402・403・405、縄文前期末(大木6式)
						縄文中期末(大木10式)
121	300	250	45	楕円形	平底	第85図404・406、縄文中期末(大木10式)
122	400	270	45	楕円形	平底	第85図407～410、縄文前期末(大木6式)
						縄文中期末(大木10式)
						第93図142(くぼみ石)、143(石棒)


-18
-34
-7
-34
41.00m
第1層　黒褐色土、炭化物混入
第2層　暗褐色土、ローム粒子混入
第3層　暗褐色土、ローム粒子多量混入
第4層　黒褐色土、炭化物混入
第5層　黄褐色土
1
2
3
3
4
5
1号土坑
41.20m
第1層　暗褐色土、ローム粒子混入
第2層　褐色土、炭化物混入
第3層　黄褐色土、炭化物混入
1
2
3
2号土坑
41.00m
第1層　暗褐色土、炭化物・礫多量混入
1
S
3号土坑
40.90m
P
P
S
第1層　暗褐色土、炭化物混入
4号土坑
0
1m

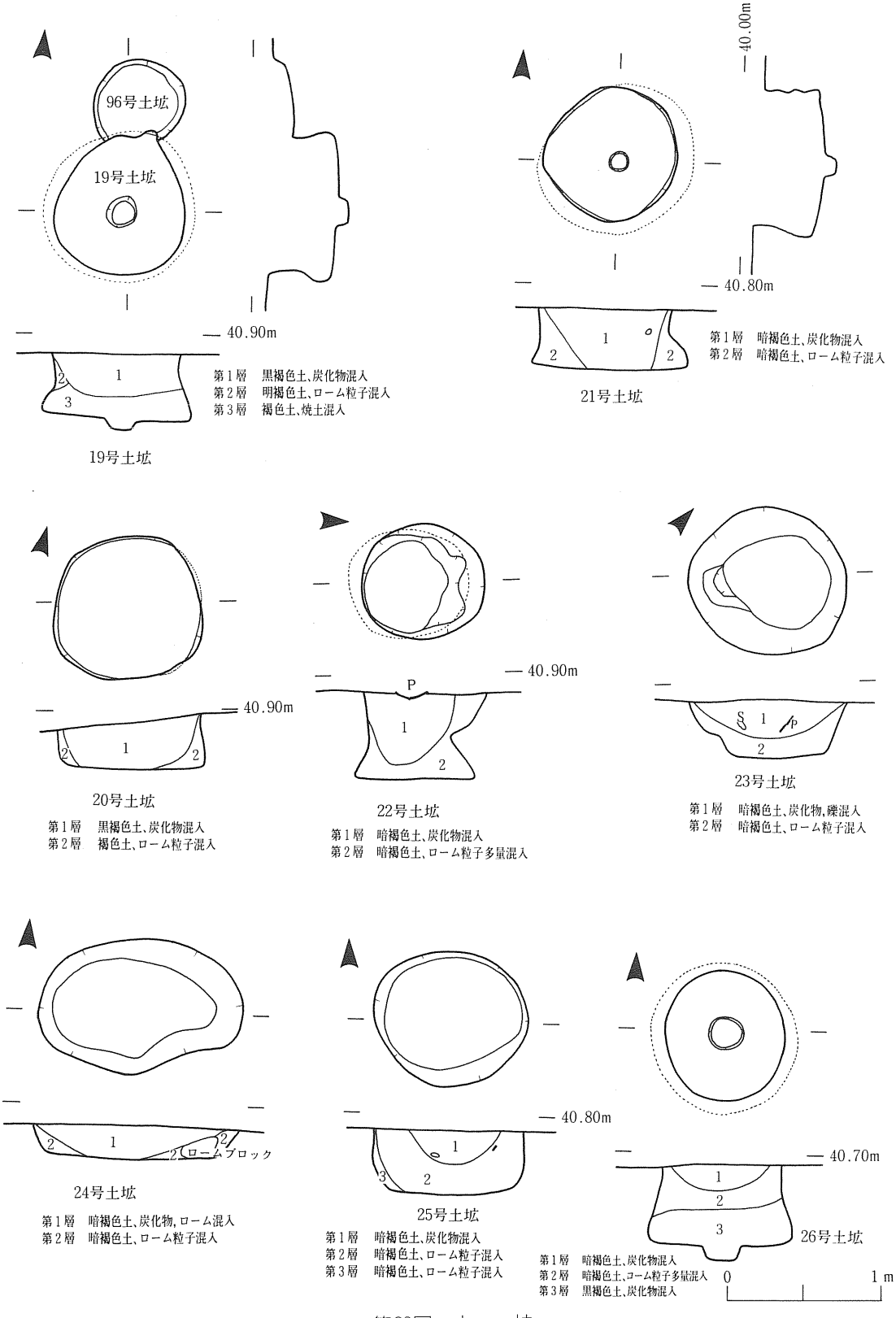
第57図　土　　坑


40.90m
1
2
1
第1層　黒褐色土
第2層　暗褐色土、ローム粒子多量混入
5号土坑
41.00m
1
2
第1層　暗褐色土、炭化物混入
第2層　褐色土、ローム粒子混入
6号土坑
40.20m
1
2
S
第1層　暗褐色土、炭化物・ローム粒子多量混入
第2層　暗褐色土、ローム粒子混入
7号土坑
41.00m
1
第1層　暗褐色土
第2層　褐色土、焼土混入
9号土坑
41.00m
1
2
3
第1層　暗褐色土、炭化物混入
第2層　暗褐色土、ローム粒子混入
第3層　褐色土、礫混入
ロームブロック
ロームブロック
8号土坑
S
40.90m
1
2
第1層　黒褐色土
第2層　暗褐色土
10号土坑
0
1m

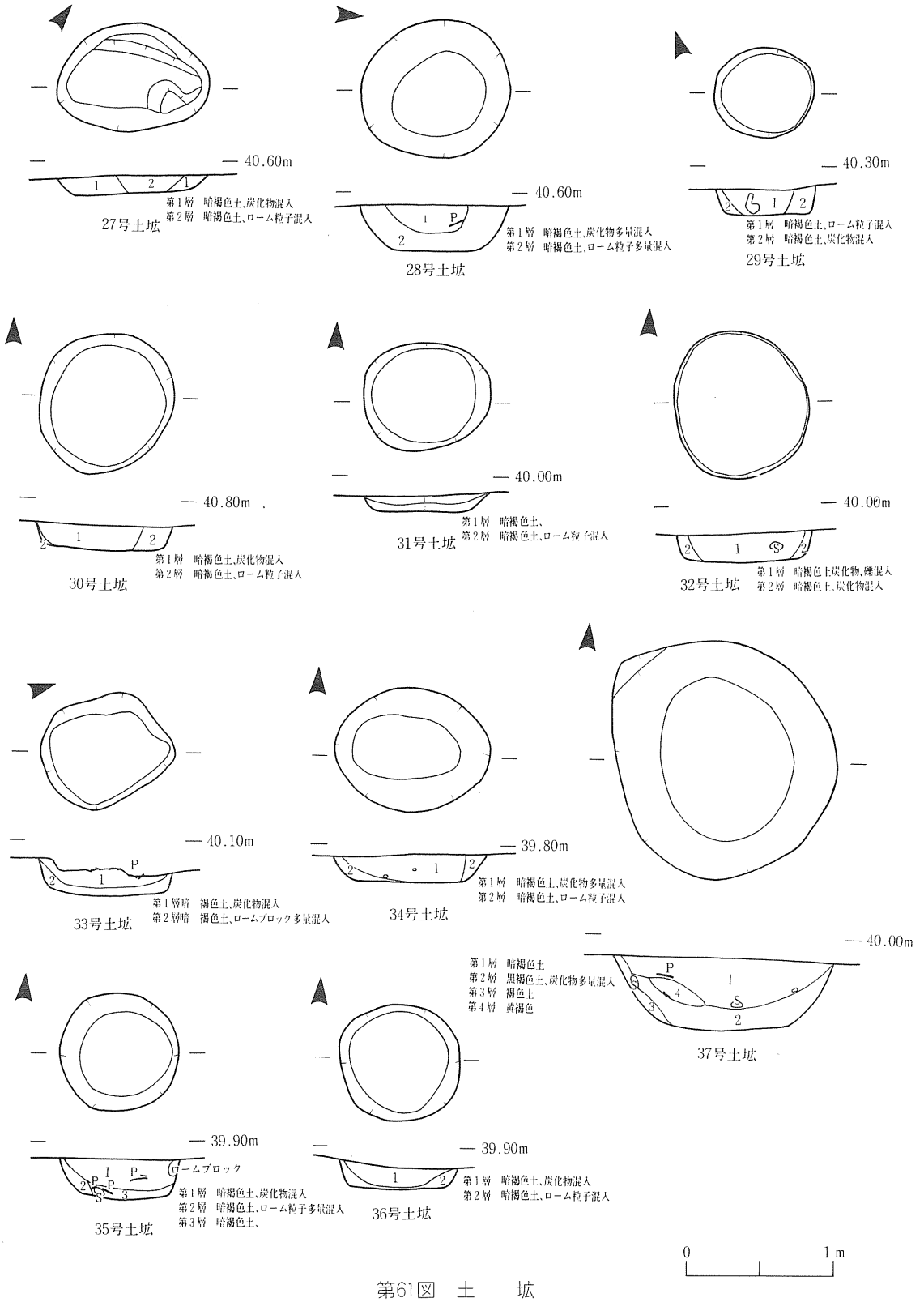
第58図　土　　坑


41.00m
第1層　暗褐色、炭化物混入
11号土坑
40.80m
第1層　暗褐色土
第2層　黄褐色土、ローム粒子多量混入
14号土坑
40.90m
第1層　黒褐色土、炭化物混入
第2層　褐色土
12号土坑
40.80m
第1層　暗褐色土、炭化物混入
第2層　暗褐色土、ローム粒子多量混入
13号土坑
40.50m
第1層　暗褐色土
第2層　暗褐色土、ローム粒子多混入
15号土坑
40.90m
第1層　黒褐色土、炭化物混入
第2層　褐色土、ローム混入
18号土坑
41.00m
第1層　暗褐色土、炭化物混入
第2層　暗褐色土、ローム粒子多量混入
16号土坑
第1層　黒褐色土、炭化物混入
第2層　暗褐色土、ローム粒子多量混入
17号土坑
0
1m

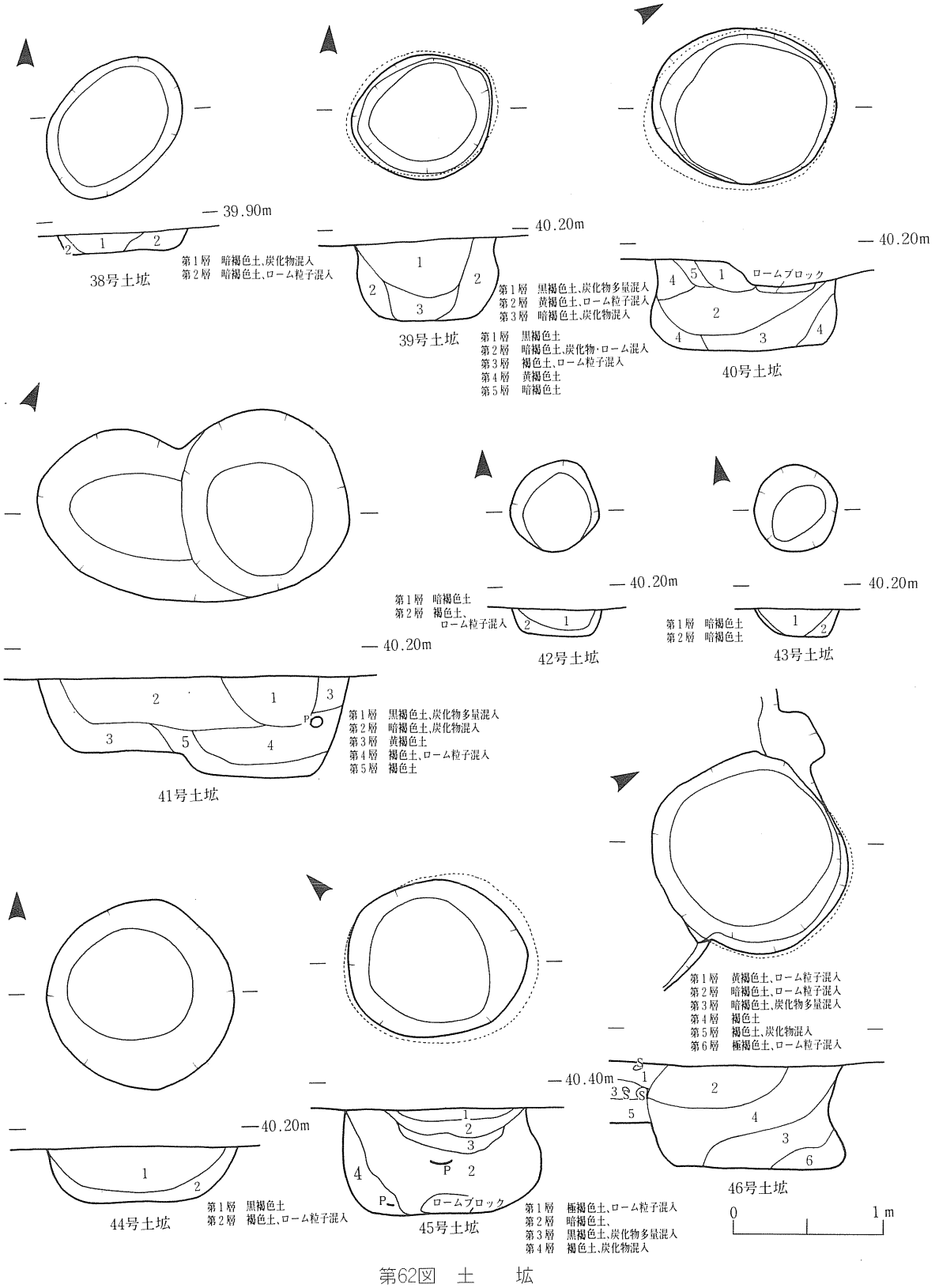
第59図　土　　坑


96号土坑
19号土坑
40.90m
1
2
3
第1層　黒褐色土、炭化物混入
第2層　明褐色土、ローム粒子混入
第3層　褐色土、焼土混入
19号土坑
40.00m
40.80m
1
2
2
第1層　暗褐色土、炭化物混入
第2層　暗褐色土、ローム粒子混入
21号土坑
40.90m
1
2
2
20号土坑
第1層　黒褐色土、炭化物混入
第2層　褐色土、ローム粒子混入
40.90m
P
1
2
22号土坑
第1層　暗褐色土、炭化物混入
第2層　暗褐色土、ローム粒子多量混入
S
1
P
2
23号土坑
第1層　暗褐色土、炭化物、礫混入
第2層　暗褐色土、ローム粒子混入
1
2
2
2
ロームブロック
24号土坑
第1層　暗褐色土、炭化物、ローム混入
第2層　暗褐色土、ローム粒子混入
40.80m
1
2
3
25号土坑
第1層　暗褐色土、炭化物混入
第2層　暗褐色土、ローム粒子混入
第3層　暗褐色土、ローム粒子混入
40.70m
1
2
3
26号土坑
第1層　暗褐色土、炭化物混入
第2層　暗褐色土、コーム粒子多量混入
第3層　黒褐色土、炭化物混入
0
1m

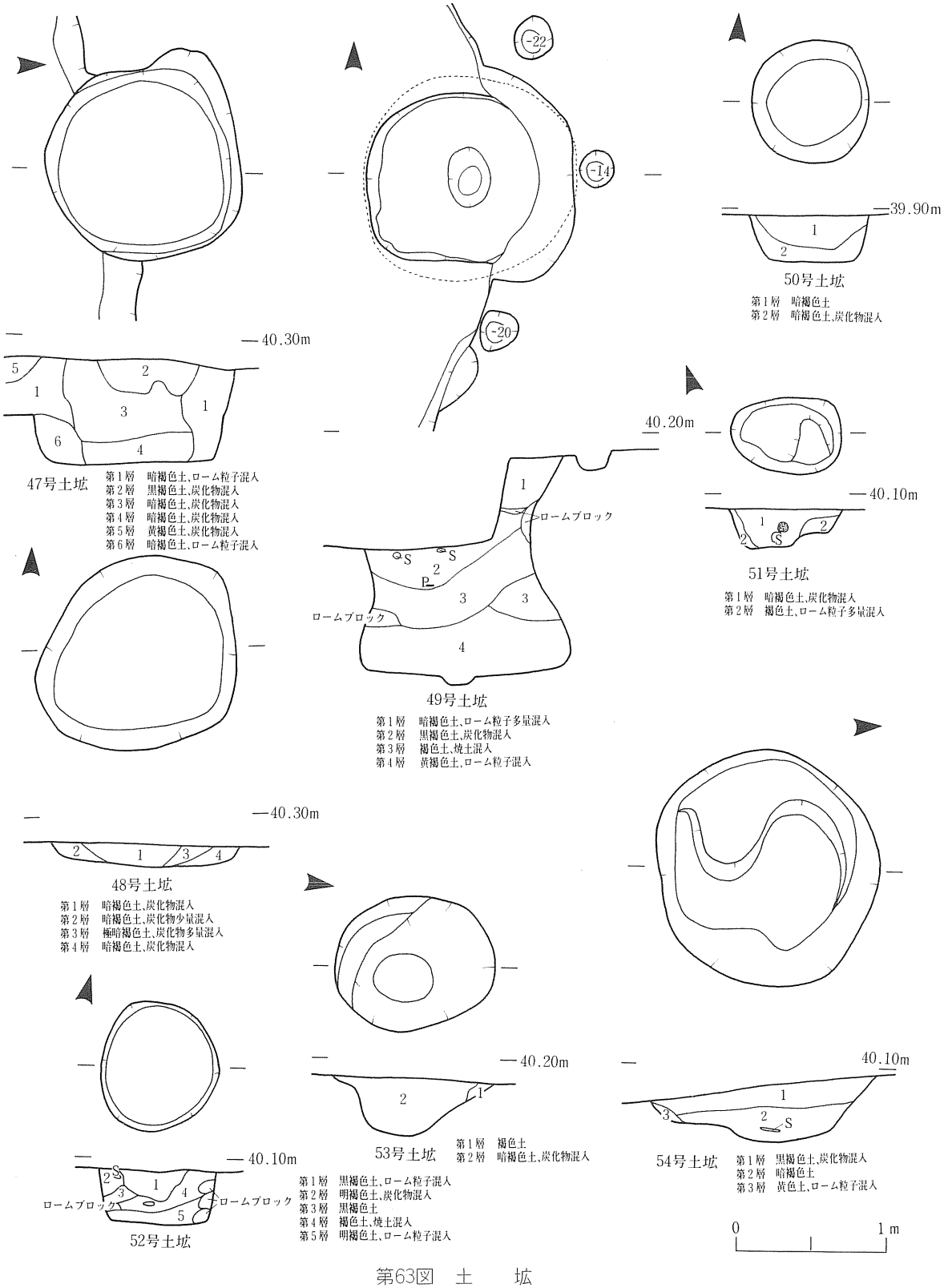
第60図　土　　坑


40.60m
第1層　暗褐色土、炭化物混入
第2層　暗褐色土、ローム粒子混入
27号土坑
40.60m
第1層　暗褐色土、炭化物多量混入
第2層　暗褐色土、ローム粒子多量混入
28号土坑
40.30m
第1層　暗褐色土、ローム粒子混入
第2層　暗褐色土、炭化物混入
29号土坑
40.80m
第1層　暗褐色土、炭化物混入
第2層　暗褐色土、ローム粒子混入
30号土坑
40.00m
第1層　暗褐色土、
第2層　暗褐色土、ローム粒子混入
31号土坑
40.00m
第1層　暗褐色土炭化物、蹄混入
第2層　暗褐色土、炭化物混入
32号土坑
40.10m
第1層暗　褐色土、炭化物混入
第2層暗　褐色土、ロームブロック多量混入
33号土坑
39.80m
第1層　暗褐色土、炭化物多量混入
第2層　暗褐色土、ローム粒子混入
34号土坑
40.00m
第1層　暗褐色土
第2層　黒褐色土、炭化物多量混入
第3層　褐色土
第4層　黄褐色
37号土坑
39.90m
ロームブロック
第1層　暗褐色土、炭化物混入
第2層　暗褐色土、ローム粒子多量混入
第3層　暗褐色土、
35号土坑
39.90m
第1層　暗褐色土、炭化物混入
第2層　暗褐色土、ローム粒子混入
36号土坑
0
1m

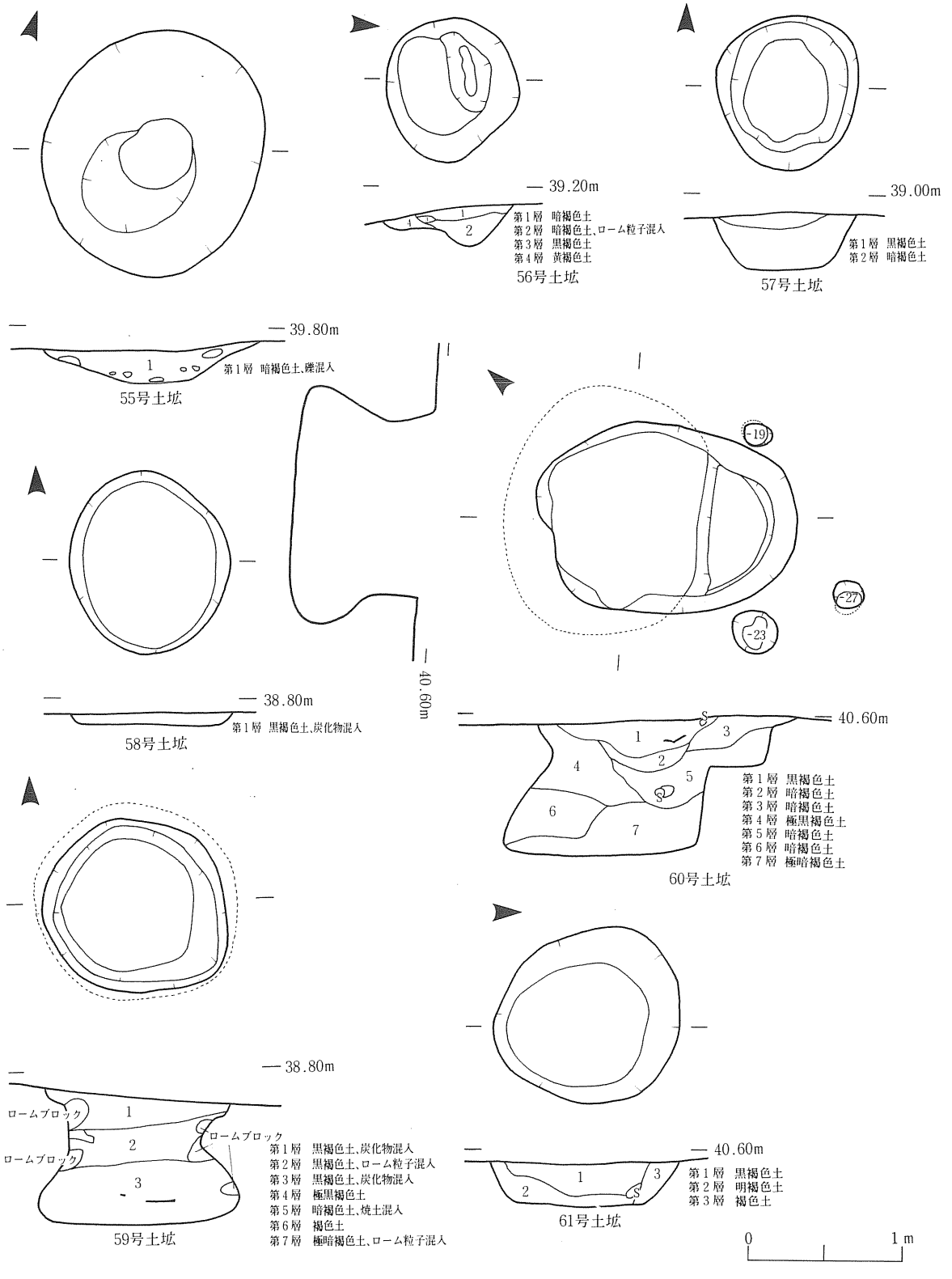
第61図　土　　坑


39.90m
第1層　暗褐色土,炭化物混入
第2層　暗褐色土,ローム粒子混入
38号土坑
40.20m
第1層　黒褐色土,炭化物多量混入
第2層　黄褐色土,ローム粒子混入
第3層　暗褐色土,炭化物混入
39号土坑
40.20m
ロームブロック
第1層　黒褐色土
第2層　暗褐色土,炭化物・ローム混入
第3層　褐色土,ローム粒子混入
第4層　黄褐色土
第5層　暗褐色土
40号土坑
40.20m
第1層　黒褐色土,炭化物多量混入
第2層　暗褐色土,炭化物混入
第3層　黄褐色土
第4層　褐色土,ローム粒子混入
第5層　褐色土
41号土坑
40.20m
第1層　暗褐色土
第2層　褐色土,
ローム粒子混入
42号土坑
40.20m
第1層　暗褐色土
第2層　暗褐色土
43号土坑
40.20m
第1層　黒褐色土
第2層　暗褐色土
44号土坑
40.40m
第1層　黒褐色土
第2層　褐色土,ローム粒子混入
ロームブロック
第1層　極褐色土,ローム粒子混入
第2層　暗褐色土,
第3層　黒褐色土,炭化物多量混入
第4層　褐色土,炭化物混入
45号土坑
第1層　黄褐色土,ローム粒子混入
第2層　暗褐色土,ローム粒子混入
第3層　暗褐色土,炭化物多量混入
第4層　褐色土
第5層　褐色土,炭化物混入
第6層　極褐色土,ローム粒子混入
46号土坑
0
1m

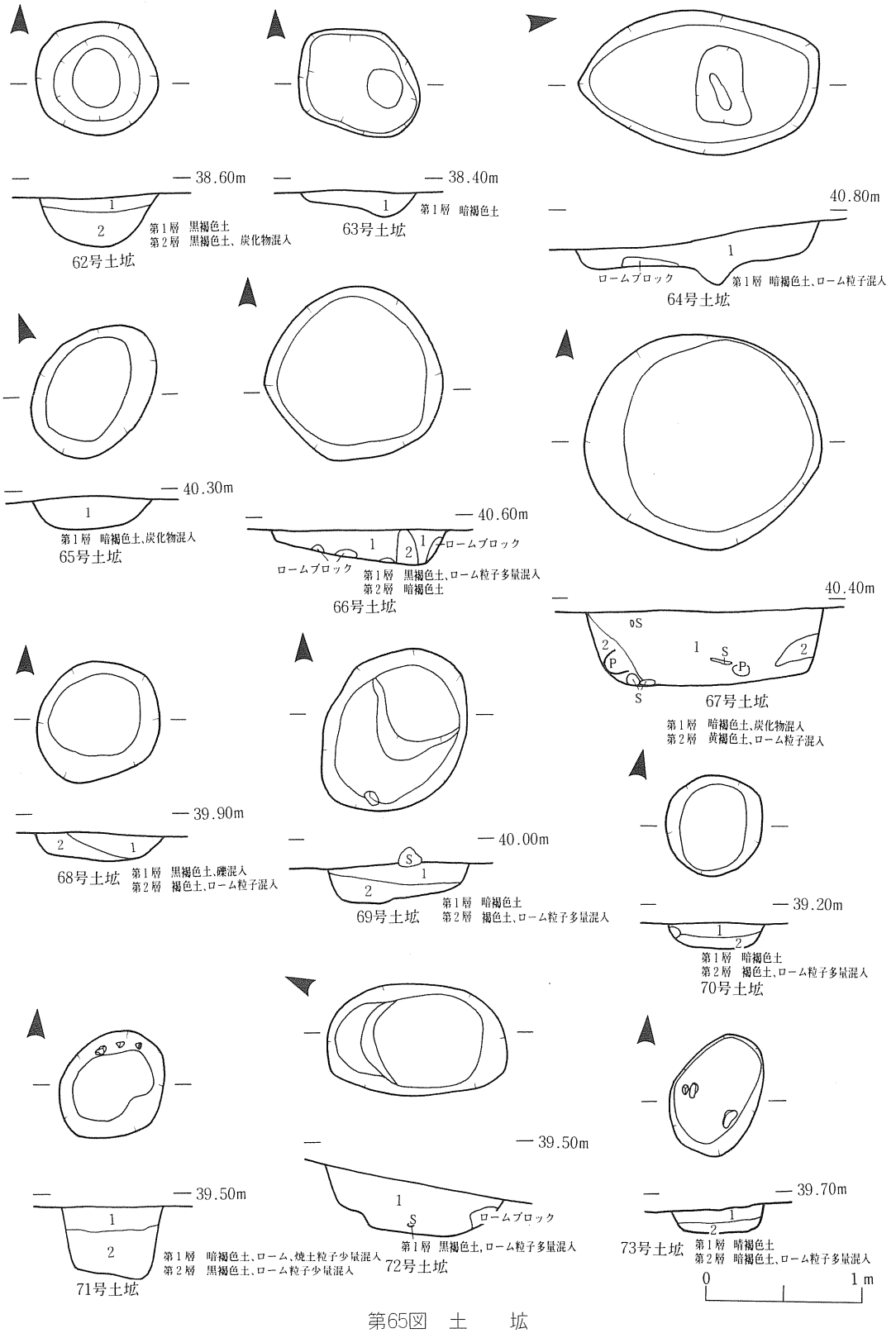
第62図　土　　坑


47号土坑
第1層　暗褐色土、ローム粒子混入
第2層　黒褐色土、炭化物混入
第3層　暗褐色土、炭化物混入
第4層　暗褐色土、炭化物混入
第5層　黄褐色土、炭化物混入
第6層　暗褐色土、ローム粒子混入
40.30m
48号土坑
第1層　暗褐色土、炭化物混入
第2層　暗褐色土、炭化物少量混入
第3層　極暗褐色土、炭化物多量混入
第4層　暗褐色土、炭化物混入
40.30m
49号土坑
第1層　暗褐色土、ローム粒子多量混入
第2層　黒褐色土、炭化物混入
第3層　褐色土、焼土混入
第4層　黄褐色土、ローム粒子混入
ロームブロック
40.20m
50号土坑
第1層　暗褐色土
第2層　暗褐色土、炭化物混入
39.90m
51号土坑
第1層　暗褐色土、炭化物混入
第2層　褐色土、ローム粒子多量混入
40.10m
52号土坑
第1層　黒褐色土、ローム粒子混入
第2層　明褐色土、炭化物混入
第3層　黒褐色土
第4層　褐色土、焼土混入
第5層　明褐色土、ローム粒子混入
ロームブロック
40.10m
53号土坑
第1層　褐色土
第2層　暗褐色土、炭化物混入
40.20m
54号土坑
第1層　黒褐色土、炭化物混入
第2層　暗褐色土
第3層　黄色土、ローム粒子混入
40.10m
0
1m

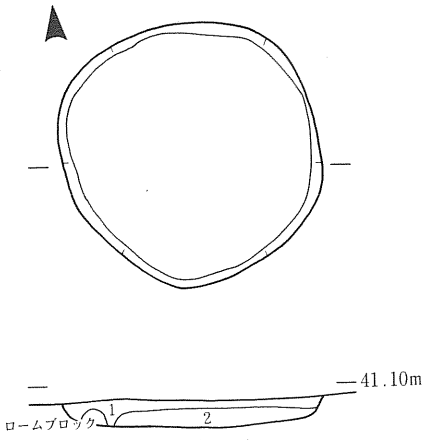
第63図　土　　坑


39.20m
第1層 暗褐色土
第2層 暗褐色土、ローム粒子混入
第3層 黒褐色土
第4層 黄褐色土
56号土坑
39.00m
第1層 黒褐色土
第2層 暗褐色土
57号土坑
39.80m
第1層 暗褐色土、礫混入
55号土坑
40.60m
38.80m
第1層 黒褐色土、炭化物混入
58号土坑
40.60m
第1層 黒褐色土
第2層 暗褐色土
第3層 暗褐色土
第4層 極黒褐色土
第5層 暗褐色土
第6層 暗褐色土
第7層 極暗褐色土
60号土坑
38.80m
ロームブロック
ロームブロック
ロームブロック
第1層 黒褐色土、炭化物混入
第2層 黒褐色土、ローム粒子混入
第3層 黒褐色土、炭化物混入
第4層 極黒褐色土
第5層 暗褐色土、焼土混入
第6層 褐色土
第7層 極暗褐色土、ローム粒子混入
59号土坑
40.60m
第1層 黒褐色土
第2層 明褐色土
第3層 褐色土
61号土坑
0
1m

第64図　土　　坑

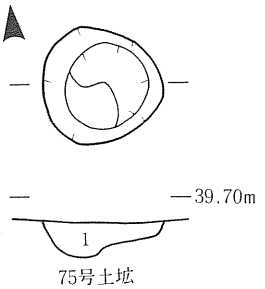

38.60m
1
2
第1層　黒褐色土
第2層　黒褐色土、炭化物混入
62号土坑
38.40m
1
第1層　暗褐色土
63号土坑
40.80m
1
ロームブロック
第1層　暗褐色土、ローム粒子混入
64号土坑
40.30m
1
第1層　暗褐色土、炭化物混入
65号土坑
40.60m
1
2
1
ロームブロック
ロームブロック
第1層　黒褐色土、ローム粒子多量混入
第2層　暗褐色土
66号土坑
40.40m
S
2
P
1
S
P
2
S
67号土坑
第1層　暗褐色土、炭化物混入
第2層　黄褐色土、ローム粒子混入
39.90m
2
1
68号土坑
第1層　黒褐色土、礫混入
第2層　褐色土、ローム粒子混入
40.00m
S
1
2
第1層　暗褐色土
第2層　褐色土、ローム粒子多量混入
69号土坑
39.20m
1
2
第1層　暗褐色土
第2層　褐色土、ローム粒子多量混入
70号土坑
39.50m
1
2
第1層　暗褐色土、ローム、焼土粒子少量混入
第2層　黒褐色土、ローム粒子少量混入
71号土坑
39.50m
1
S
ロームブロック
第1層　黒褐色土、ローム粒子多量混入
72号土坑
39.70m
1
2
第1層　暗褐色土
第2層　暗褐色土、ローム粒子多量混入
73号土坑
0
1m

第65図　土　　坑



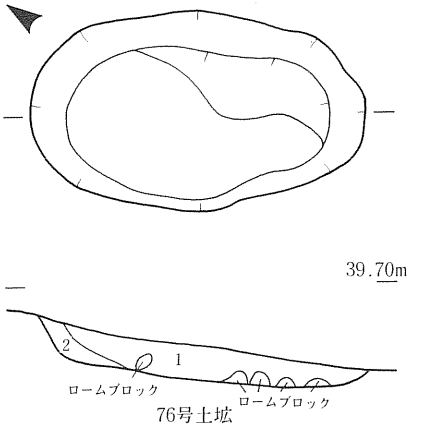
74号土坑

第1層　暗褐色土
第2層　褐色土、ローム粒子混入



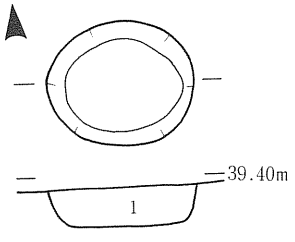
75号土坑

第1層　暗褐色土、ローム粒子混入



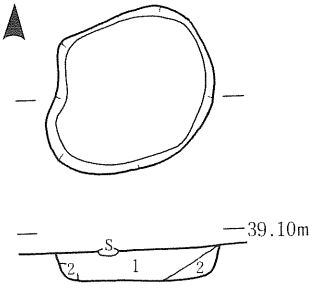
76号土坑

第1層　黒褐色土
第2層　暗褐色土、ローム粒子多量混入



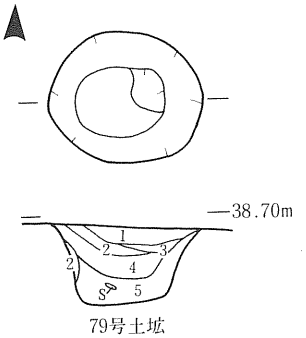
77号土坑

第1層　暗褐色土、炭化物混入



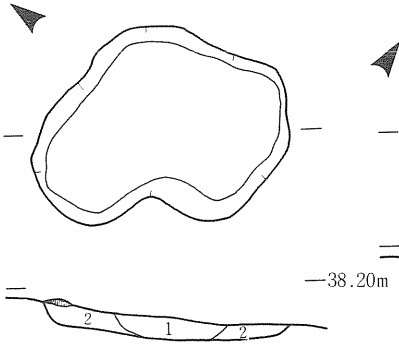
78号土坑

第1層　暗褐色土、炭化物混入
第2層　褐色土



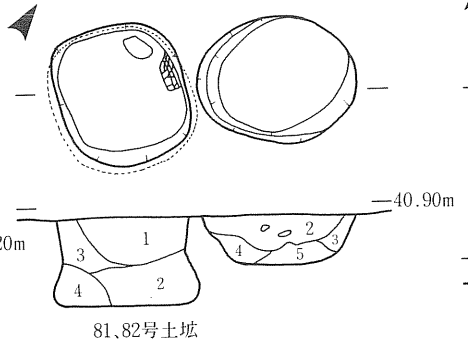
79号土坑

第1層　黒褐色土
第2層　黒褐色土
第3層　黒褐色土、ローム粒子多量混入
第4層　黒褐色土
第5層　黒褐色土



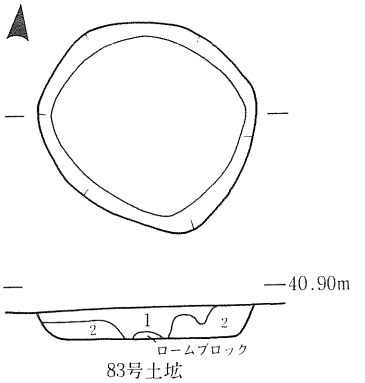
80号土坑

第1層　黒褐色土、炭化物混入
第2層　褐色土



81、82号土坑

第1層　黒褐色土、炭化物混入
第2層　暗褐色土、炭化物混入
第3層　明褐色土、ローム粒子混入
第4層　暗黄褐色土、炭化物混入
第5層　黄褐色土、ローム粒子混入

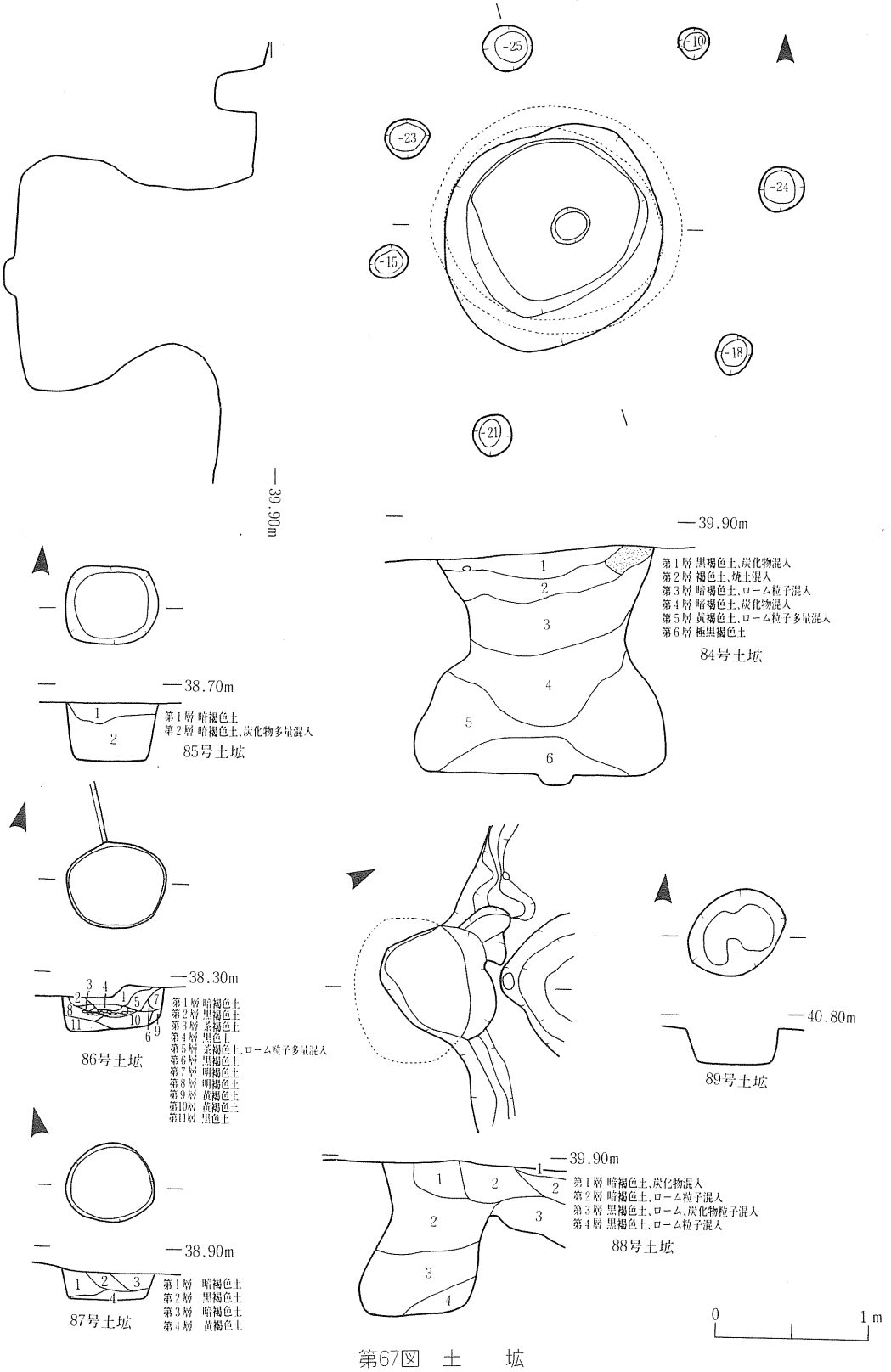


83号土坑

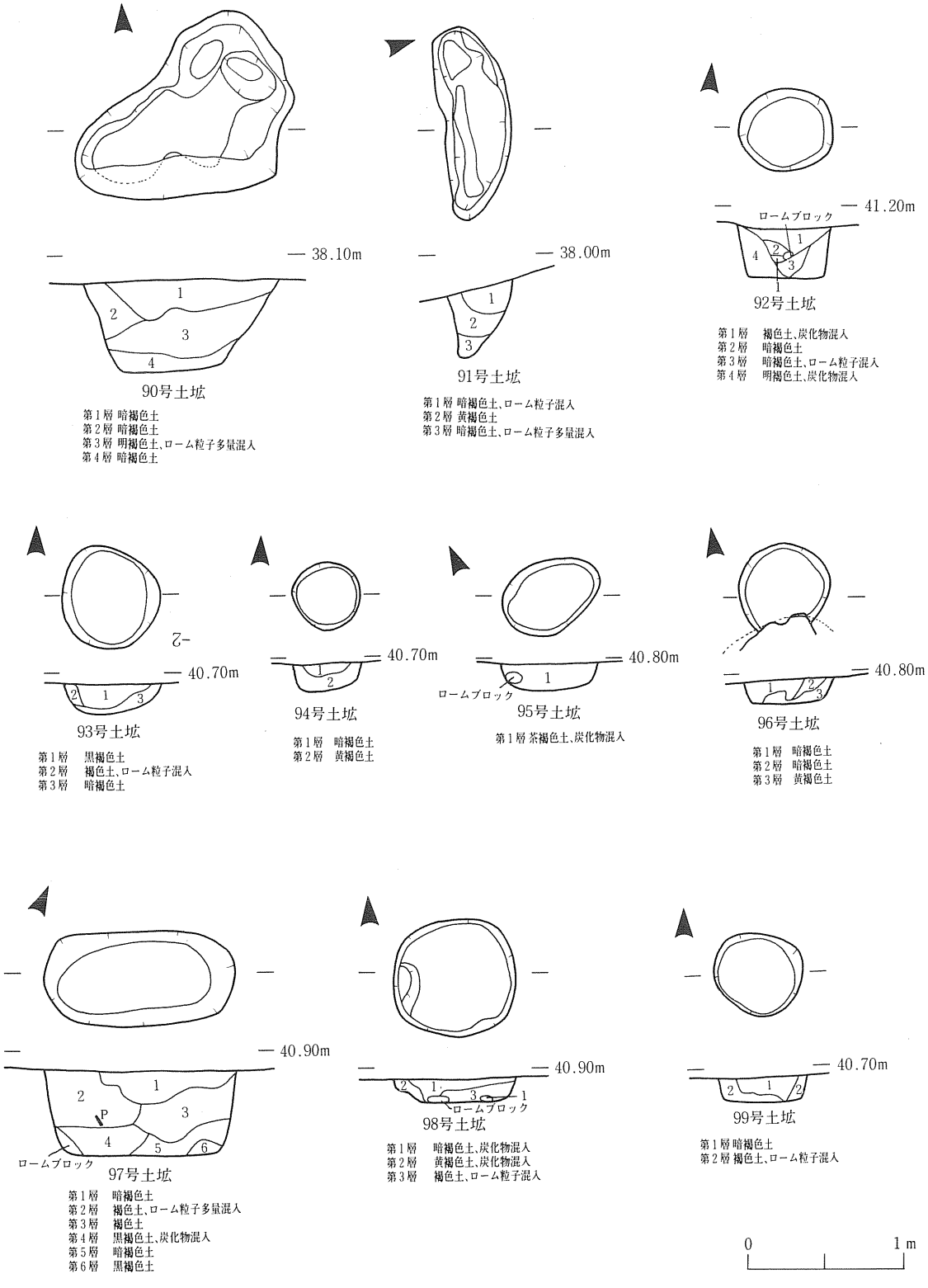
第1層　暗褐色土、炭化物混入
第2層　黄褐色土、ローム粒子混入

0　1m

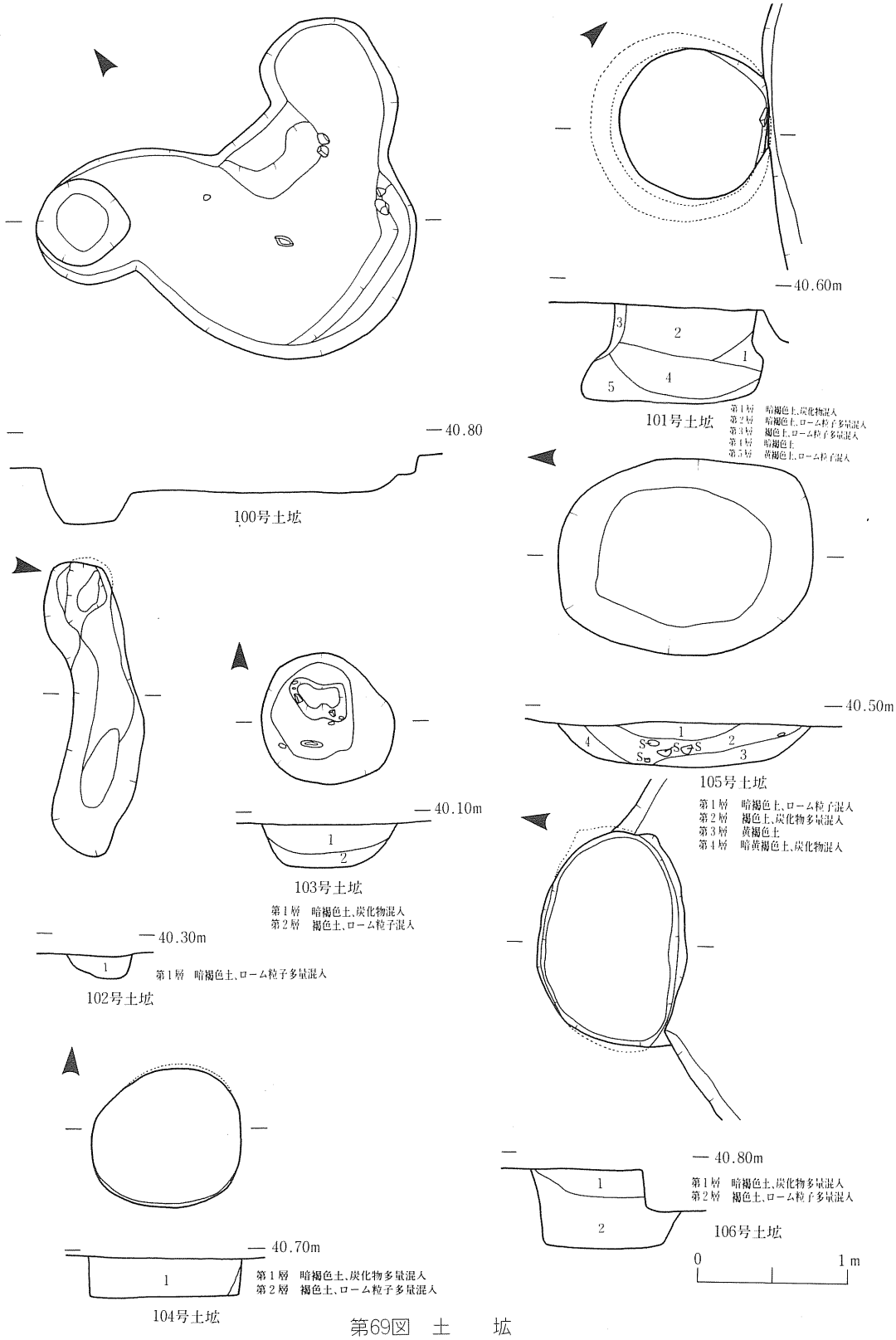
第66図　土　　坑


-25
-10
-23
-24
-15
-18
-21
39.90m
39.90m
第1層 黒褐色土、炭化物混入
第2層 褐色土、焼土混入
第3層 暗褐色土、ローム粒子混入
第4層 暗褐色土、炭化物混入
第5層 黄褐色土、ローム粒子多量混入
第6層 極黒褐色土
84号土坑
38.70m
第1層 暗褐色土
第2層 暗褐色土、炭化物多量混入
85号土坑
38.30m
第1層 暗褐色土
第2層 黒褐色土
第3層 茶褐色土
第4層 黒色土
第5層 茶褐色土、ローム粒子多量混入
第6層 黒褐色土
第7層 明褐色土
第8層 明褐色土
第9層 黄褐色土
第10層 黄褐色土
第11層 黒色土
86号土坑
40.80m
89号土坑
39.90m
第1層 暗褐色土、炭化物混入
第2層 暗褐色土、ローム粒子混入
第3層 黒褐色土、ローム、炭化物粒子混入
第4層 黒褐色土、ローム粒子混入
88号土坑
38.90m
第1層 暗褐色土
第2層 黒褐色土
第3層 暗褐色土
第4層 黄褐色土
87号土坑
0
1m

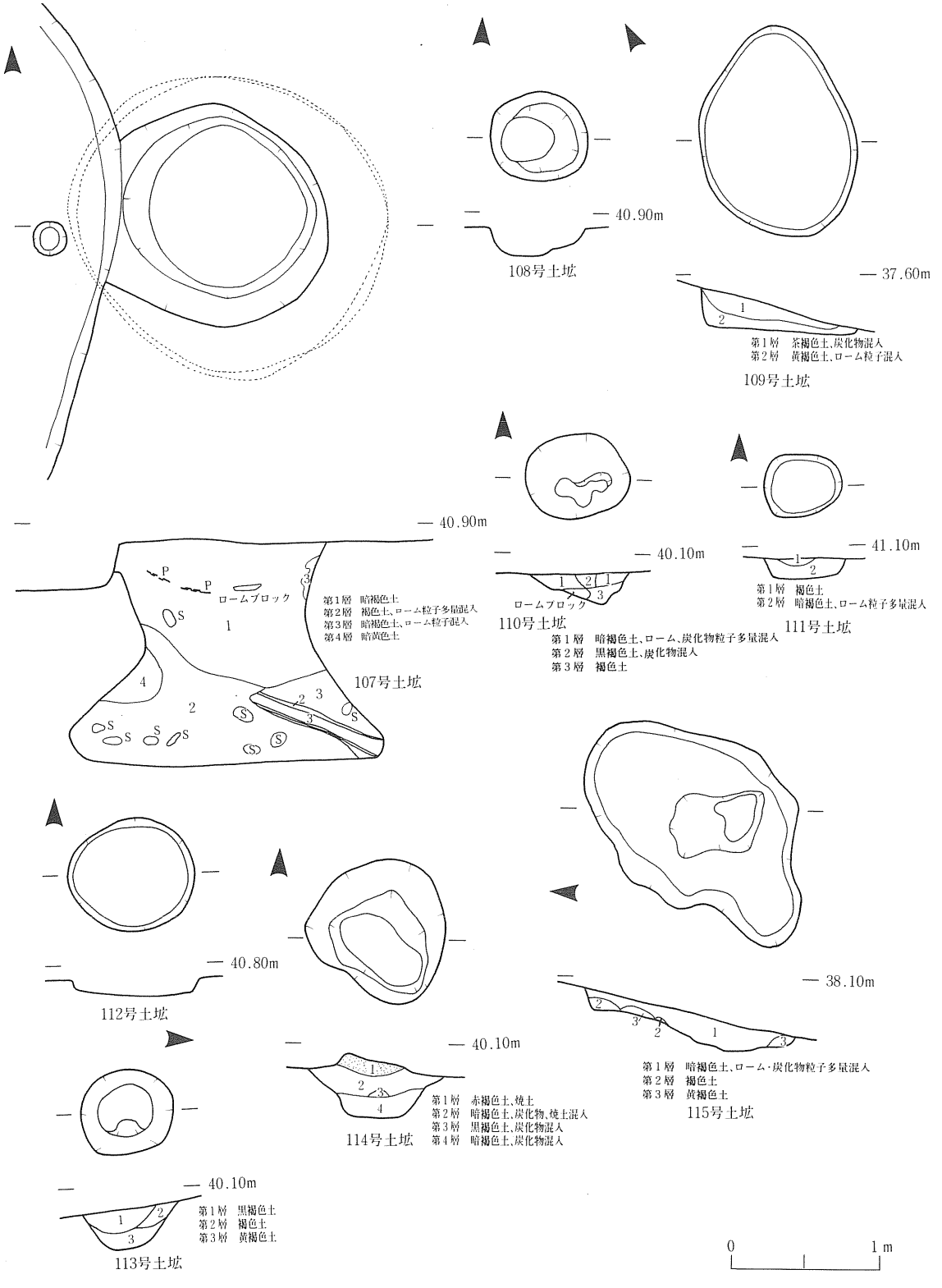
第67図　土　　坑


38.10m
90号土坑
第1層 暗褐色土
第2層 暗褐色土
第3層 明褐色土、ローム粒子多量混入
第4層 暗褐色土
38.00m
91号土坑
第1層 暗褐色土、ローム粒子混入
第2層 黄褐色土
第3層 暗褐色土、ローム粒子多量混入
41.20m
ロームブロック
92号土坑
第1層 褐色土、炭化物混入
第2層 暗褐色土
第3層 暗褐色土、ローム粒子混入
第4層 明褐色土、炭化物混入
40.70m
93号土坑
第1層 黒褐色土
第2層 褐色土、ローム粒子混入
第3層 暗褐色土
40.70m
94号土坑
第1層 暗褐色土
第2層 黄褐色土
40.80m
ロームブロック
95号土坑
第1層 茶褐色土、炭化物混入
40.80m
96号土坑
第1層 暗褐色土
第2層 暗褐色土
第3層 黄褐色土
40.90m
ロームブロック
97号土坑
第1層 暗褐色土
第2層 褐色土、ローム粒子多量混入
第3層 褐色土
第4層 黒褐色土、炭化物混入
第5層 暗褐色土
第6層 黒褐色土
40.90m
ロームブロック
98号土坑
第1層 暗褐色土、炭化物混入
第2層 黄褐色土、炭化物混入
第3層 褐色土、ローム粒子混入
40.70m
99号土坑
第1層 暗褐色土
第2層 褐色土、ローム粒子混入
0
1m

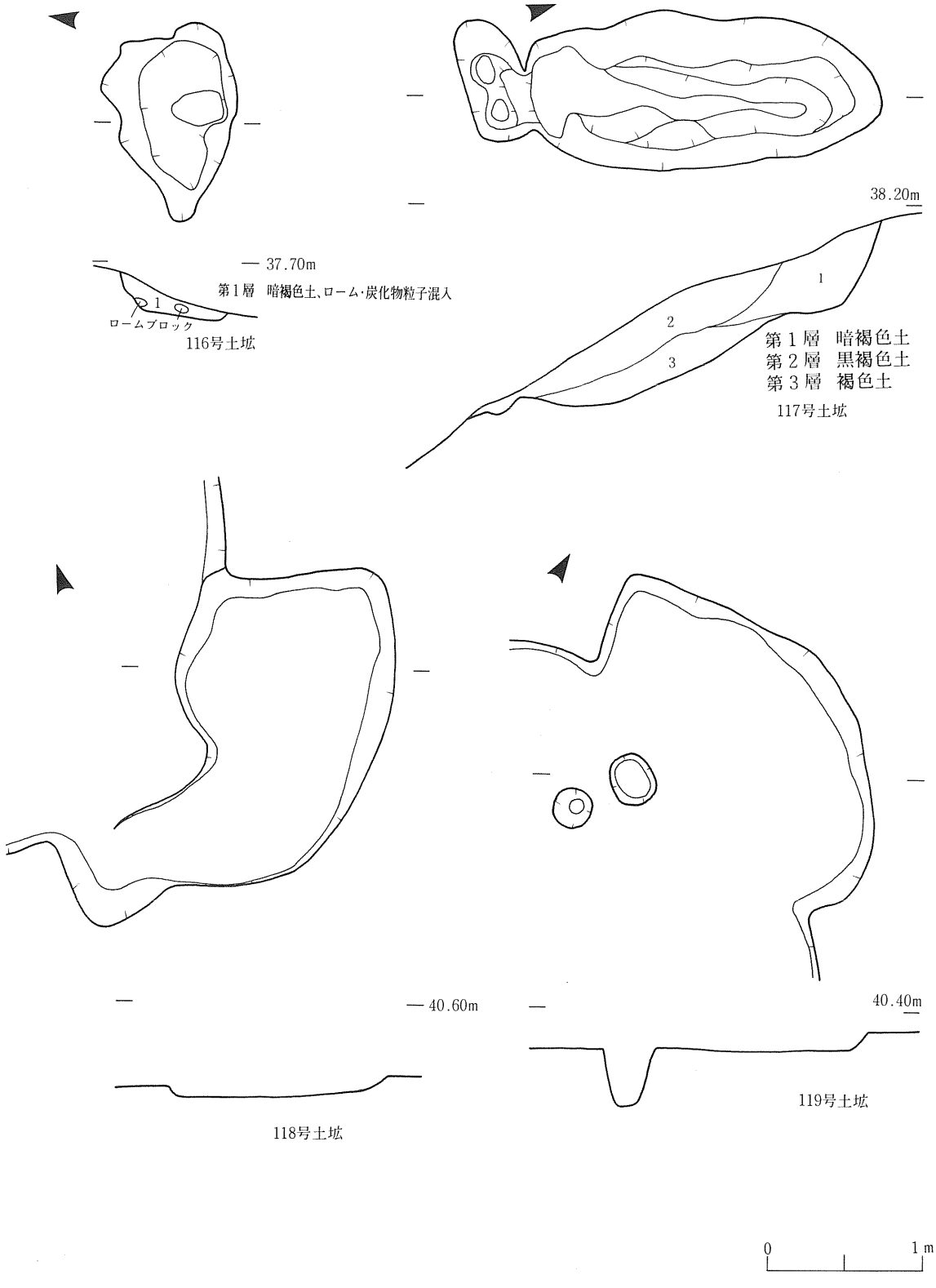
第68図　土　　坑


40.60m
3
2
1
4
5
101号土坑
第1層　暗褐色土、炭化物混入
第2層　暗褐色土、ローム粒子多量混入
第3層　褐色土、ローム粒子多量混入
第4層　暗褐色土
第5層　黄褐色土、ローム粒子混入
40.80
100号土坑
40.50m
1
2
3
4
S
105号土坑
第1層　暗褐色土、ローム粒子混入
第2層　褐色土、炭化物多量混入
第3層　黄褐色土
第4層　暗黄褐色土、炭化物混入
40.10m
1
2
103号土坑
第1層　暗褐色土、炭化物混入
第2層　褐色土、ローム粒子混入
40.30m
1
第1層　暗褐色土、ローム粒子多量混入
102号土坑
40.80m
1
2
第1層　暗褐色土、炭化物多量混入
第2層　褐色土、ローム粒子多量混入
106号土坑
40.70m
1
第1層　暗褐色土、炭化物多量混入
第2層　褐色土、ローム粒子多量混入
104号土坑
0
1 m

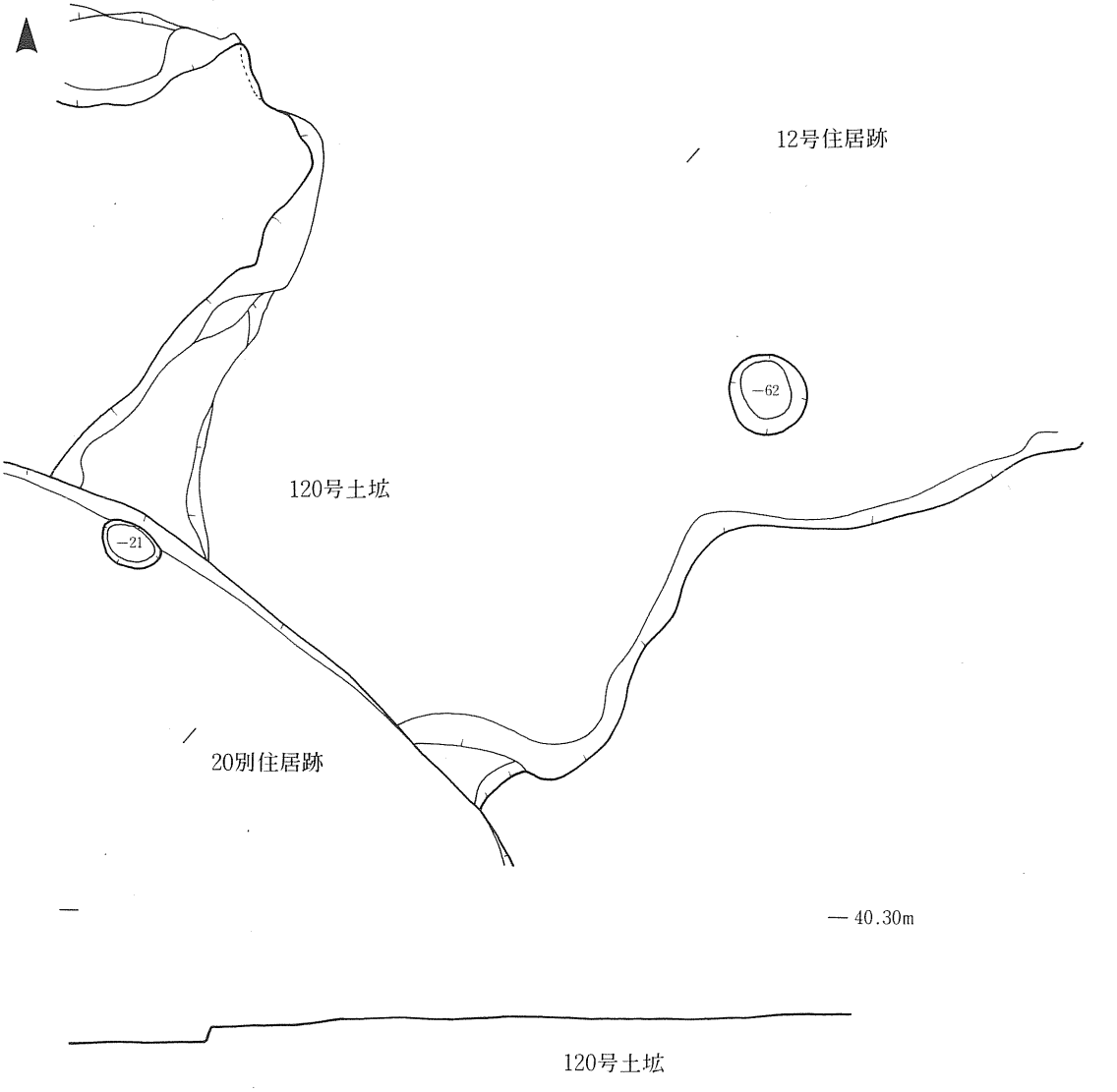
第69図　土　　坑


40.90m
108号土坑
37.60m
第1層　茶褐色土、炭化物混入
第2層　黄褐色土、ローム粒子混入
109号土坑
40.90m
ロームブロック
第1層　暗褐色土
第2層　褐色土、ローム粒子多量混入
第3層　暗褐色土、ローム粒子混入
第4層　暗黄色土
107号土坑
40.10m
ロームブロック
110号土坑
第1層　暗褐色土、ローム、炭化物粒子多量混入
第2層　黒褐色土、炭化物混入
第3層　褐色土
41.10m
第1層　褐色土
第2層　暗褐色土、ローム粒子多量混入
111号土坑
40.80m
112号土坑
40.10m
第1層　赤褐色土、焼土
第2層　暗褐色土、炭化物、焼土混入
第3層　黒褐色土、炭化物混入
第4層　暗褐色土、炭化物混入
114号土坑
38.10m
第1層　暗褐色土、ローム・炭化物粒子多量混入
第2層　褐色土
第3層　黄褐色土
115号土坑
40.10m
第1層　黒褐色土
第2層　褐色土
第3層　黄褐色土
113号土坑
0
1m

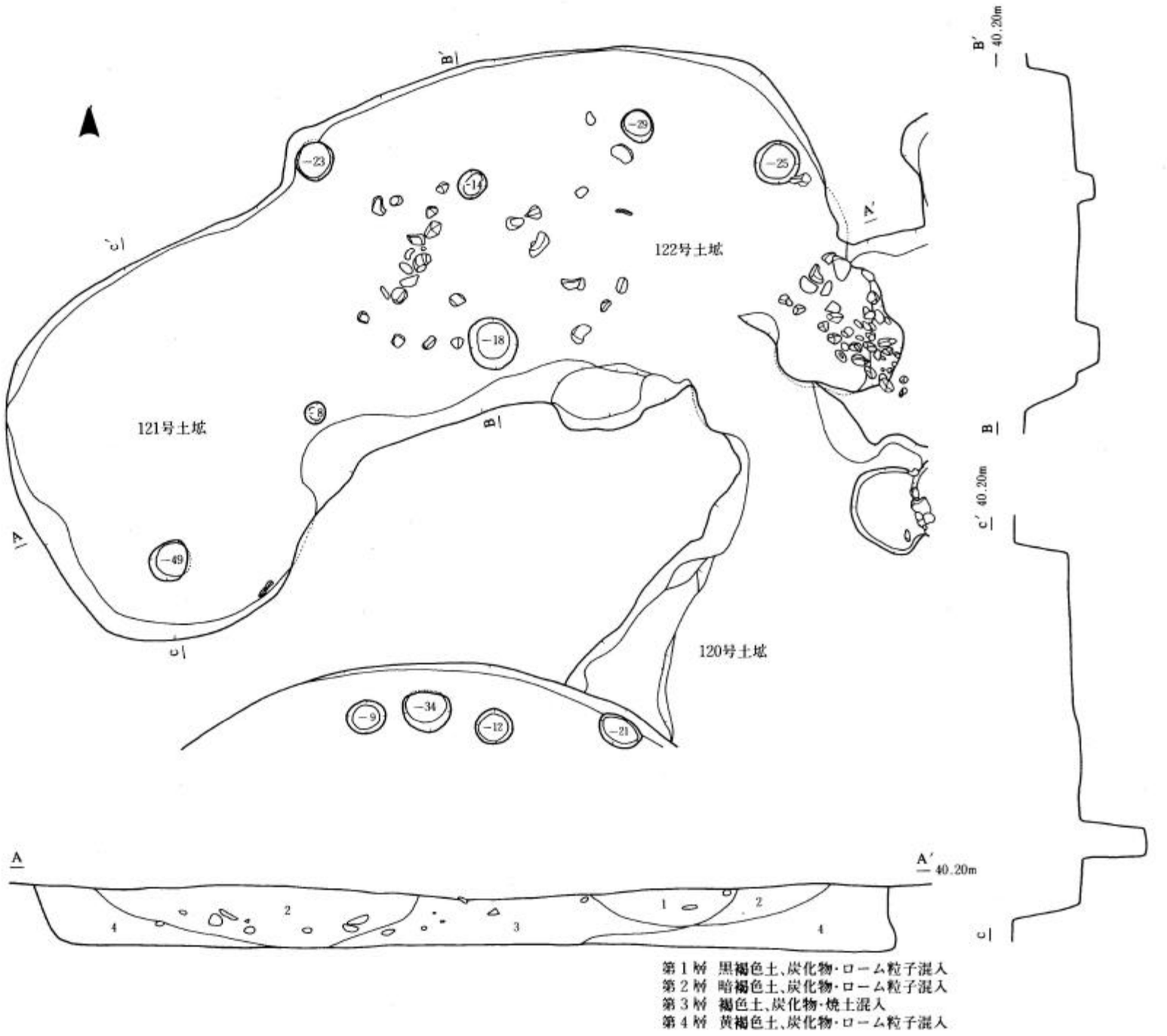
第70図　土　　坑


37.70m
第1層　暗褐色土、ローム・炭化物粒子混入
1
ロームブロック
116号土坑
38.20m
1
2
3
第1層　暗褐色土
第2層　黒褐色土
第3層　褐色土
117号土坑
40.60m
118号土坑
40.40m
119号土坑
0
1m

第71図　土　　坑



第72図　土　　坑


121号土坑
122号土坑
120号土坑
A
A′
40.20m
B
B′
40.20m
C
C′
40.20m
第1層　黒褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第2層　暗褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第3層　褐色土、炭化物・焼土混入
第4層　黄褐色土、炭化物・ローム粒子混入
0
1m

第73図　土　坑

埋設土器遺構（第74図）

11個検出され、全てローム面で確認された。深鉢形・鉢形土器の埋設で、６号埋設土器の北東側には掘り込みが、７号埋設土器の回りには石が認められた。

炉（第74図）

２基検出された。石囲をなし、火熱を受けている。第２層面検出で、住居の壁、柱穴は検出されなかった。

製鉄炉（第75図）

調査区南側、沢の急斜面で検出された。炉は楕円形を呈し、末広がりとなる。残存壁高は65cmで壁は内湾気味に立ち上がる。２～３cmのスサ入り粘土を貼り付け、２～３回の貼り付けが認められる。高熱を受けガチンガチンに焼け、上部はガラス状と化している。また、壁全面には指の跡が認められた。炉底は南に緩傾斜し、前庭部の壁とともに火熱によりガチンガチンである。炉を画す溝が西・北・東側に認められた。溝は確認面から北側が最深１ｍを計り、沢の方へ若干傾斜する。排水溝と考えられ、22号住居跡を切っている。ピットが数個検出されているが、性格は不明である。

炭焼窯（第76図）

調査区南側、沢の縁辺部で検出された。窯体は全長6.5ｍ、最大幅1.3ｍを計る地下式である。当初はトンネル状に掘られていたが、調査中に崩落してしまった。窯は作り変えが認められ、検出された底面は古いもので、新しい底面は20cm上である。煙出しは先端と左右両側にある。先端の煙出しの西側には、煙出しを作ろうとして途中まで掘った痕跡が認められた。窯改築時に幅を広げた際煙突状に掘られた煙出しの一部が崩れ、粘土及び鉄滓などで補修を行ない、新しい底面のやや上から煙排出の口が作られていた。焼成部には取り出さなかった炭が整然と認められた。材の長さは50～60cmで、鉈状の工具で尖らせたものである。燃焼部は火熱により壁が赤化していた。前庭部は沢の斜面にある。煙出しの補修には鉄滓も使用されており、西側に検出された製鉄炉との関係が考えられる。

その他の遺構（第77図）

調査区南側の斜面、沢の縁辺部で検出された。沢へ向かって末広がりとなり、深さ60cmを計る。沢の地形を利用したと考えられる。109号土坑を内包し、覆土には礫が多量に混入していた。

出土遺物

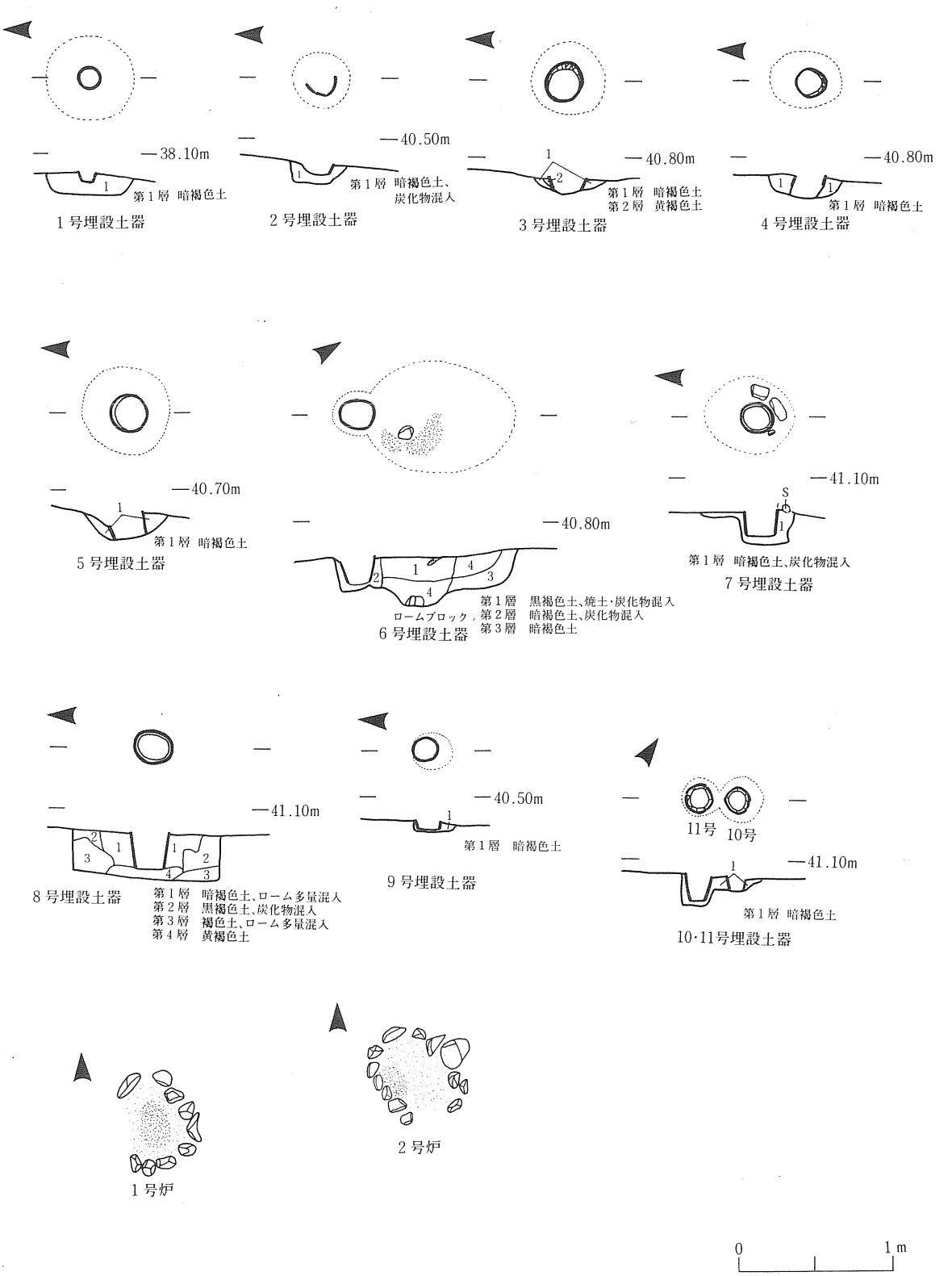
土器（第85図411～416）

全て覆土出土である。沈線区画の磨消帯を施すもの、平行沈線を施した後に縦位に２条の列点文を施すもの、入組文の施されるものである。

出土土器

遺構内、遺構外の土器について、群に大別し類に細別して述べてみたい。

１群土器



第74図　埋設土器遺構，炉

1類（53図157、第55図200・225、第85図385・392、第94図426、第95図427～432）

細い粘土紐を直線・鋸歯状に貼り付け、平行する隆線に半截竹管状工具内面による連続爪形文を施すものである。器形は鉢形で、口唇部がくの字状に折れるものもある。426は把手部である。

2類（第52図141、第55図224、第83図351・352）

細い粘土紐を貼り付けるもので、1類のように鋸歯状の貼り付けや連続爪形文を施さないものである。器形は鉢形である。

3類（第53図155・156、第85図393、第95図433～435）

細い半截竹管状工具内面による半隆起線文を施すものである。口縁部に縦・斜位、口唇部・口頸部に横走する半隆起線文を施して文様を作り出す。口縁部がくの字に折れる鉢形土器もみられる。435は半隆起線の上に細い粘土紐を格子目状に貼り付けている。

4類（第54図193・194、第55図201、第85図402・403・407、第95図436～438）

半截竹管状工具内面による半隆起線文を施すもので、半隆起線は三角形及び菱形にも区画されている。口縁部がやや外傾する鉢形土器が多い。

5類（第51図85、第53図151・159、第78図259・260、第95図439～445）

頸部隆帯に刺突を施し、口縁部に撚糸圧痕及び単軸絡条圧痕を施すものである。器形は深鉢形で器肉が厚い。地文は撚糸文、木目状撚糸文、単節斜縄文などである。260は波状口縁をもつ深鉢形土器で、口径33.6cm、高さ45.8cmである。

6類（第54図196、第84図375、第85図388）

木目状撚糸文の施されるもので、深鉢形土器である。

2群土器

1類（第54図187、第55図218・226、第56図232・233・235、第95図446～450）

口縁部文様帯に粘土紐貼り付け及び撚糸圧痕を施すものである。撚糸圧痕は平行、渦巻状に施され、隆起線の両側も撚糸圧痕を施して調整している。器形は鉢形・浅鉢形のものがある。

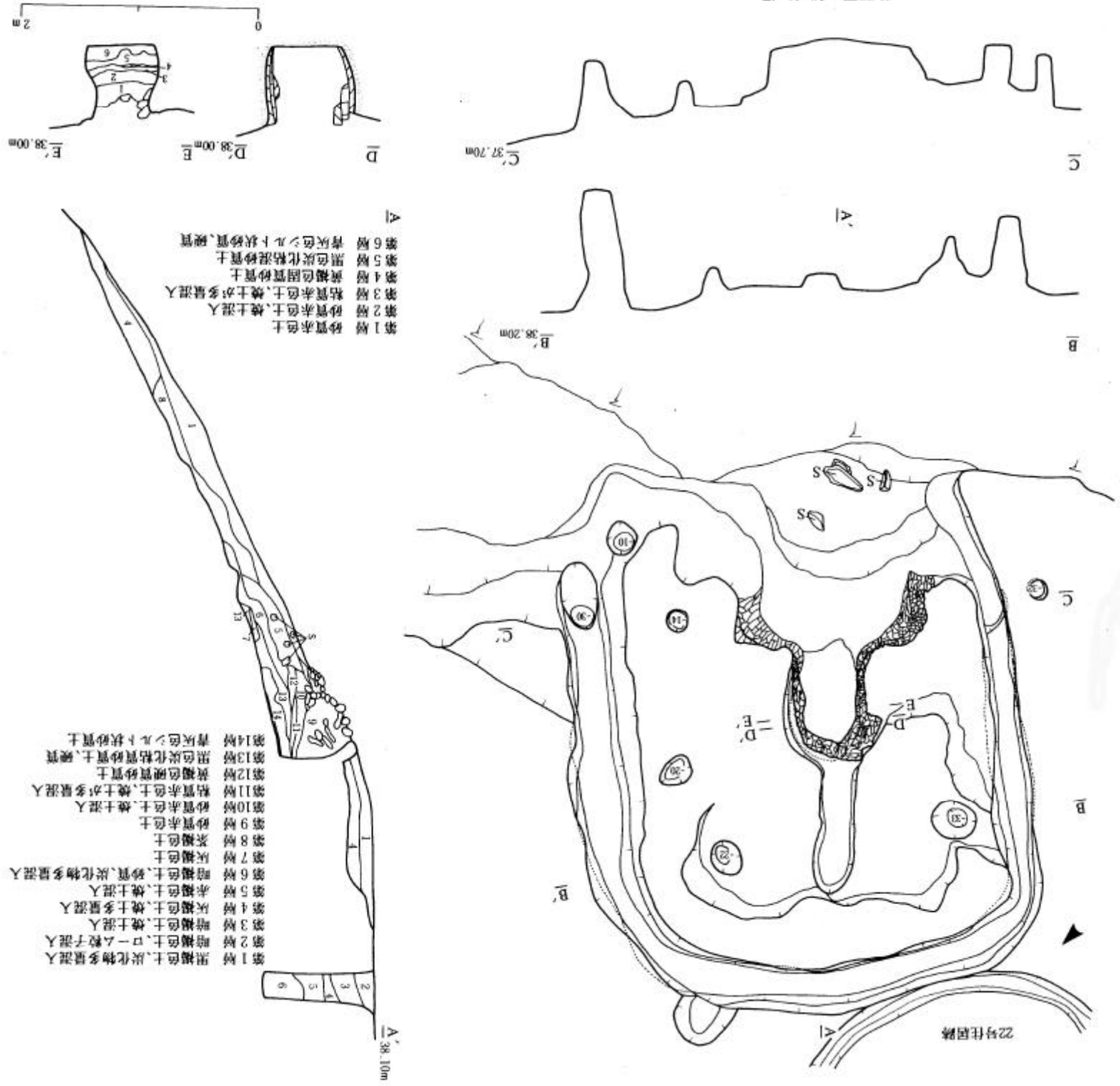
2類（第41図19、第51図96、第52図125・133、第53図165、第54図175・199、第55図219・220、第56図234・249、第83図322、第84図356、第95・96図451～463）

粘土紐を貼り付けてその両側を沈線で調整するものである。沈線で調整された隆起線は円形文・渦巻文となる。器形は深鉢形土器で、器肉が厚く、口縁部がくの字状に折れるものもある。また、沈線による直線・曲線で文様を作り出すものもある。

3類（第50図63・64）

粘土紐貼り付けによる円形文や、沈線を直線・曲線的に施すものである。平縁口縁の鉢形土器である。

4類（第39図1～3、5～7、第40図8・11・12・14、第41図15・16・18、第42図20～23、第43図24～31、第44図32～36、第45図39・40、第46図41～43、第47図46～50、第48図52・54、第49図56

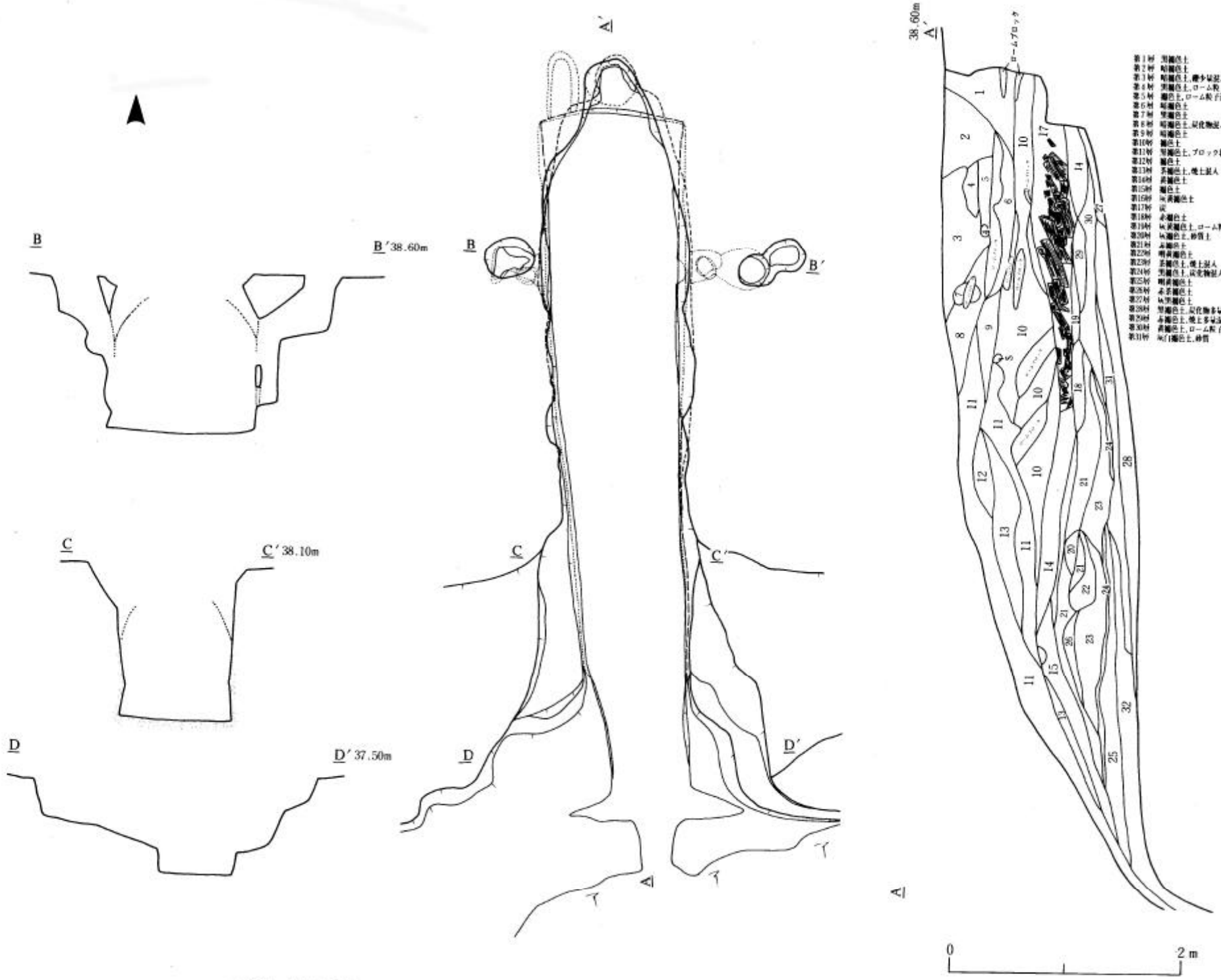


22号住居跡
A
A′ 38.10m
B
B′
B′ 38.20m
C
C′
C′ 37.70m
D
D′
D′ 38.00m
E
E′
E′ 38.00m
-33
-22
-20
-14
-30
-10
-32
S
0
2 m

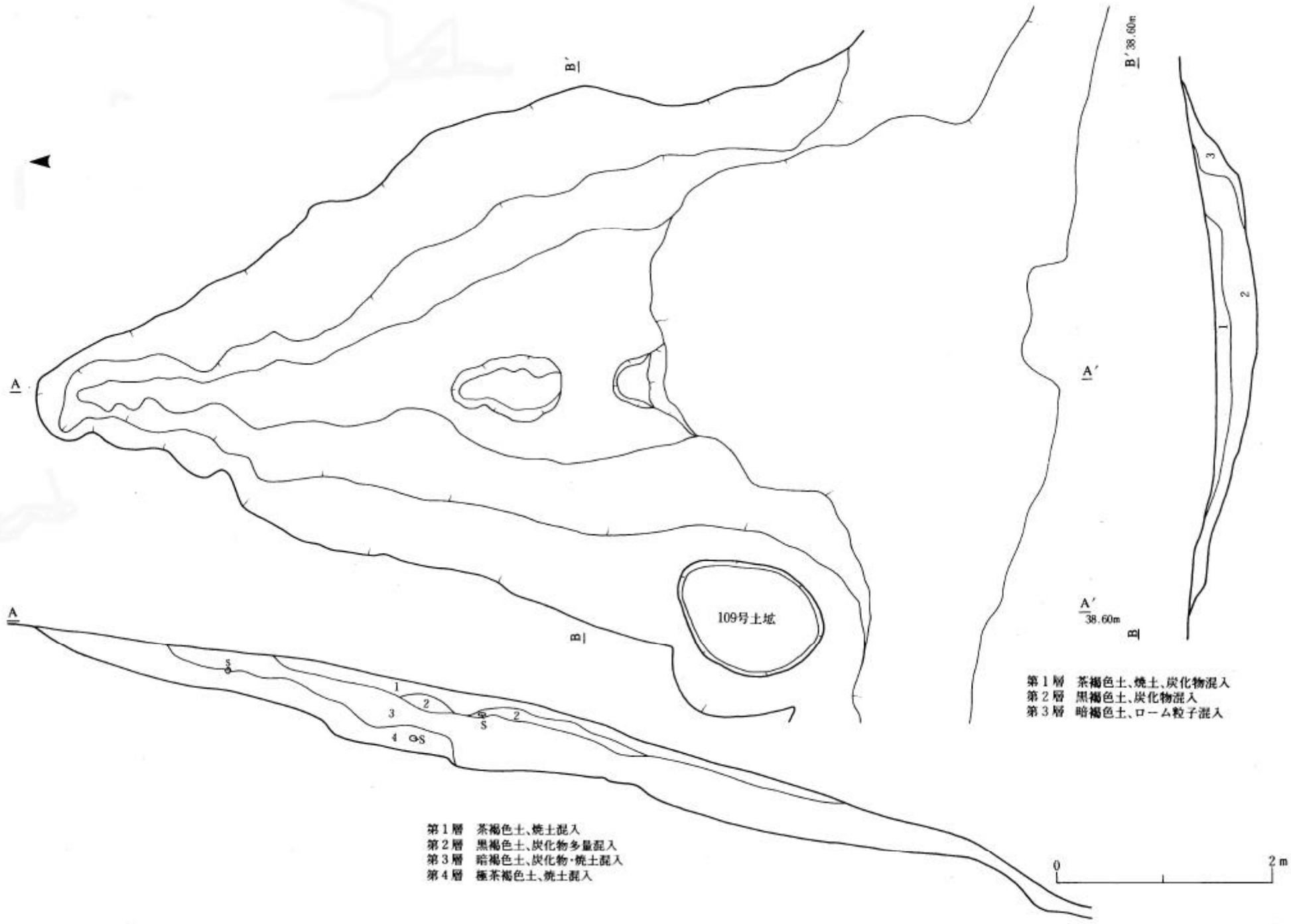
第1層	黒褐色土、炭化物多量混入
第2層	暗褐色土、ローム粒子混入
第3層	暗褐色土、焼土混入
第4層	灰褐色土、焼土多量混入
第5層	赤褐色土、焼土混入
第6層	暗褐色土、砂質、炭化物多量混入
第7層	灰褐色土
第8層	茶褐色土
第9層	砂質赤色土
第10層	砂質赤色土、焼土混入
第11層	粘質赤色土、焼土が多量混入
第12層	黄褐色硬質砂質土
第13層	黒色炭化粘質砂質土、硬質
第14層	青灰色シルト状砂質土

第1層	砂質赤色土
第2層	砂質赤色土、焼土混入
第3層	粘質赤色土、焼土が多量混入
第4層	黄褐色固質砂質土
第5層	黒色炭化粘混砂質土
第6層	青灰色シルト状砂質、硬質

第75図 製鉄炉



第76図　炭焼窯


A
A′
B
B′
109号土坑
A′
38.60m
B′ 38.60m
1
2
3
4
S
第1層　茶褐色土、焼土、炭化物混入
第2層　黒褐色土、炭化物混入
第3層　暗褐色土、ローム粒子混入
第1層　茶褐色土、焼土混入
第2層　黒褐色土、炭化物多量混入
第3層　暗褐色土、炭化物・焼土混入
第4層　極茶褐色土、焼土混入
0
2 m

第77図　その他の遺構

～61、第50図67～84、第51図86～88・90～93・97・98・100～104、第52図115～124・126・127・134～140・142・143、第53図145～150・152～154・160～163・166～170、第54図171～174・176～178・181～183・188～192・197・198、第55図203～205・212～217・221・222、第56図227～229・236～241・250～258、第79図269、第80図270、第81図280・281、第82図286・288・293・301・302・305・307・308・313・317～320、第83図323～327・329～350・353・354、第84図357・358・361～364・368～370・376・379～383、第85図384・387・394・395・397・398・400・401・404～406・408～412、第94図421・424、第96～98図465～519）

地文を施した後に、沈線区画の磨消帯を曲線的に施すものである。磨消帯は、Ｊ字状・Ｕ字状・Ｓ字状・波状などがみられ、稜線区画のもの、地文部よりも浮き上がるもの、刺突を施すものもある。器形・口縁部・口唇部には数種類の作りがみられるが、口縁部がやや外傾する平縁口縁で、胴部にやや膨らみのある深鉢形土器が多い。

5類（第45図37、第51図95、第54図179・180、第56図242・243、第80図276、第81図279、第82図290・292・297・306・311・315、第84図371～373、377、第98・99図520～530）

粘土紐を貼り付けて２個１対の刻みを施すもので、口縁部は粘土紐貼り付けなどで複雑な作りをなす。隆起線で区画された部分を磨消しするものもある。器形は頸部が内傾し、口縁が立ち上がる鉢形土器である。

6類（第50図62、第96図464）

口縁部文様帯に粘土紐を貼り付け、隆帯及び文様帯に撚糸圧痕を施すものである。口縁部がやや外傾する深鉢形土器である。

3群土器（第52図129～132、第53図158、第54図195、第56図244・245、第79図263・264・266、第82図299・303・312、第85図391・413～416、第94図423、第99図533～546）

工字文、変形工字文の施されるものである。口縁部に２個１対の瘤が付くもの、口唇部に刻みを施したり突起をもつものがある。器形は鉢形・台付鉢形・浅鉢形などである。

4群土器（第99図554・555）

須恵器甕の破片である。表面に条線状の叩き板痕、裏面に条線状の当て具板痕が認められる。

5群土器

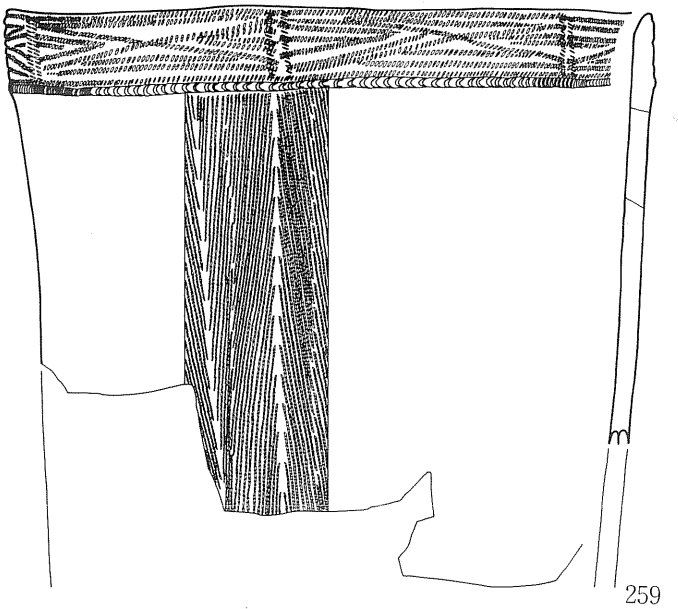
上述の分類に該当しないものや、地文のみのものを本群とした。

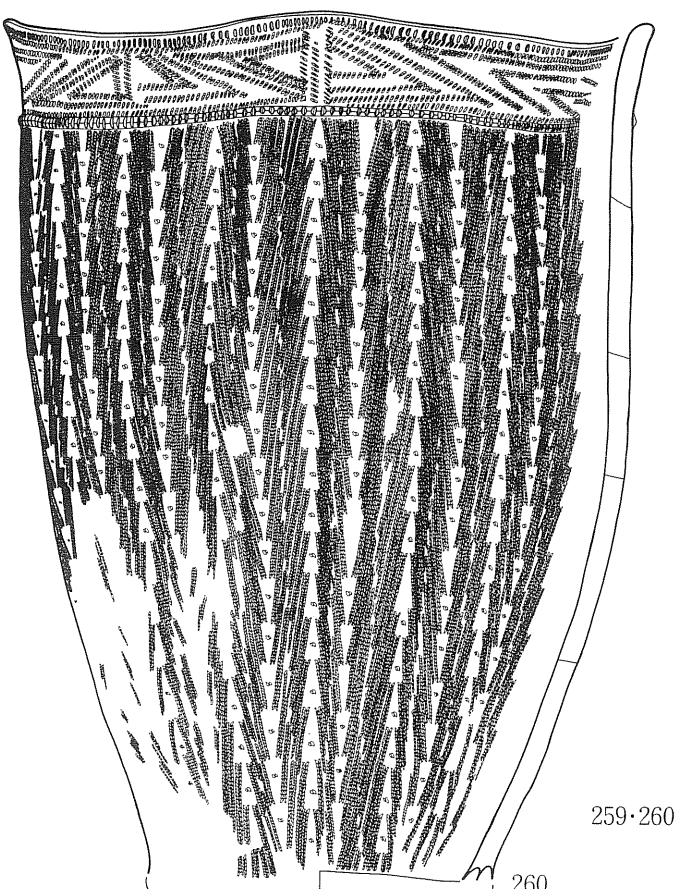
1類（第47図51、第80図272）

カキ目文を施すものである。櫛状工具によるもので、口唇部から底部の方へ施すものが主であるが、Ｕ字状、もしくは曲線的に施すのもみられる。272は平縁口縁をなす深鉢形土器で、口径33cm高さ44cmである。

2類（第45図38）

注口土器である。ＬＲ・ＲＬ縄文原体を使用し、器体中央部は羽状縄文となる。地文を施した後

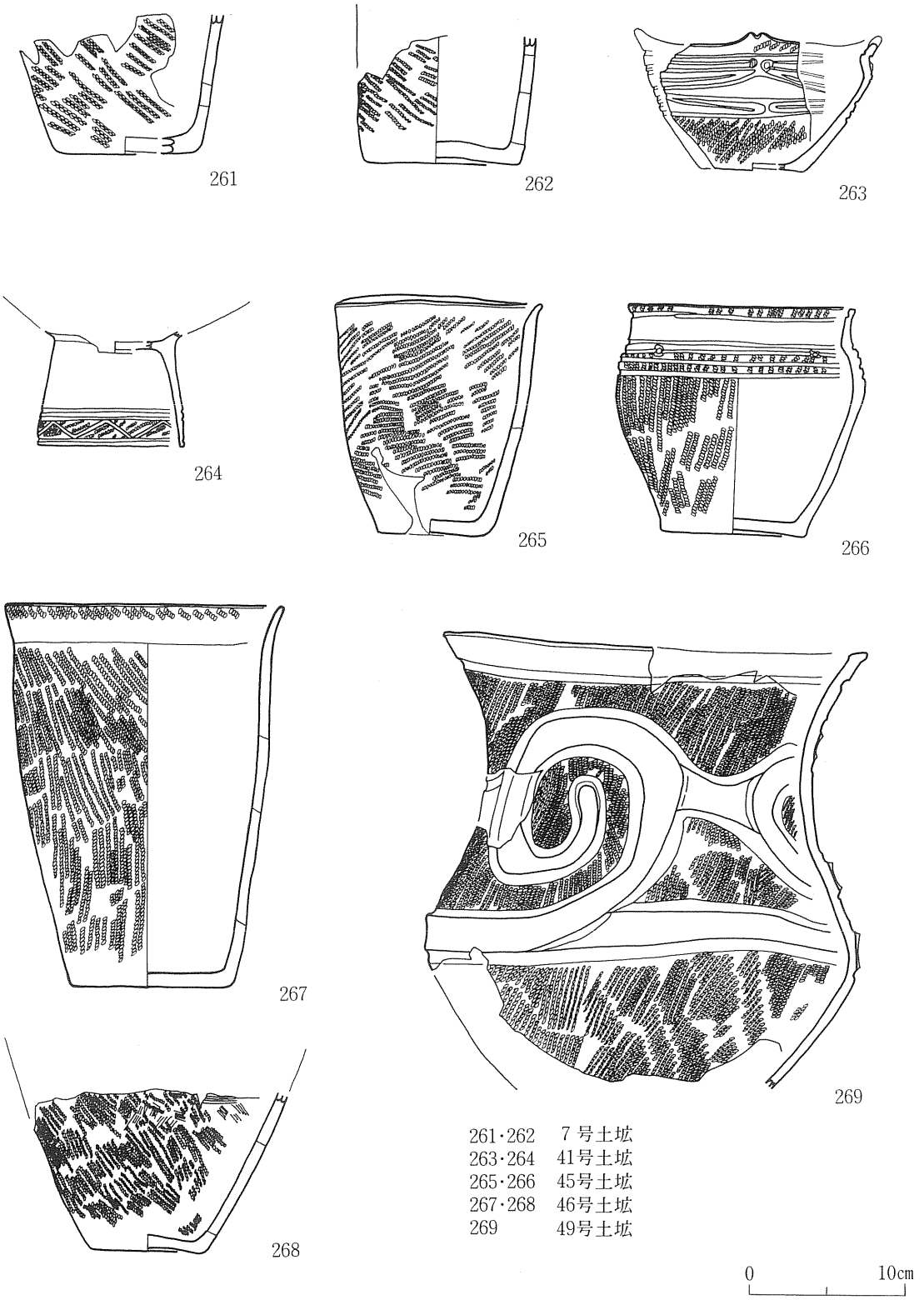




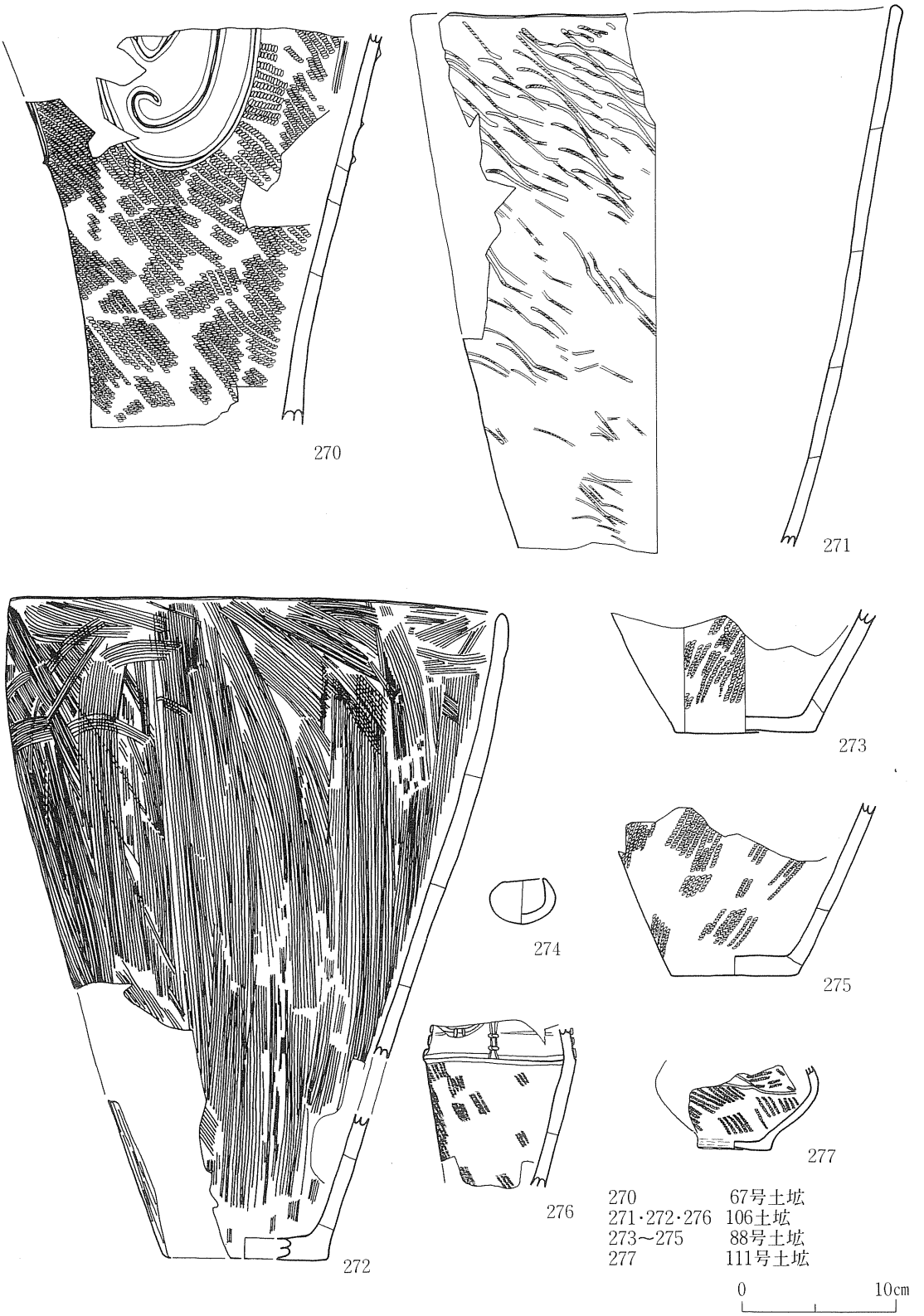
259・260　1号土坑

0　10cm

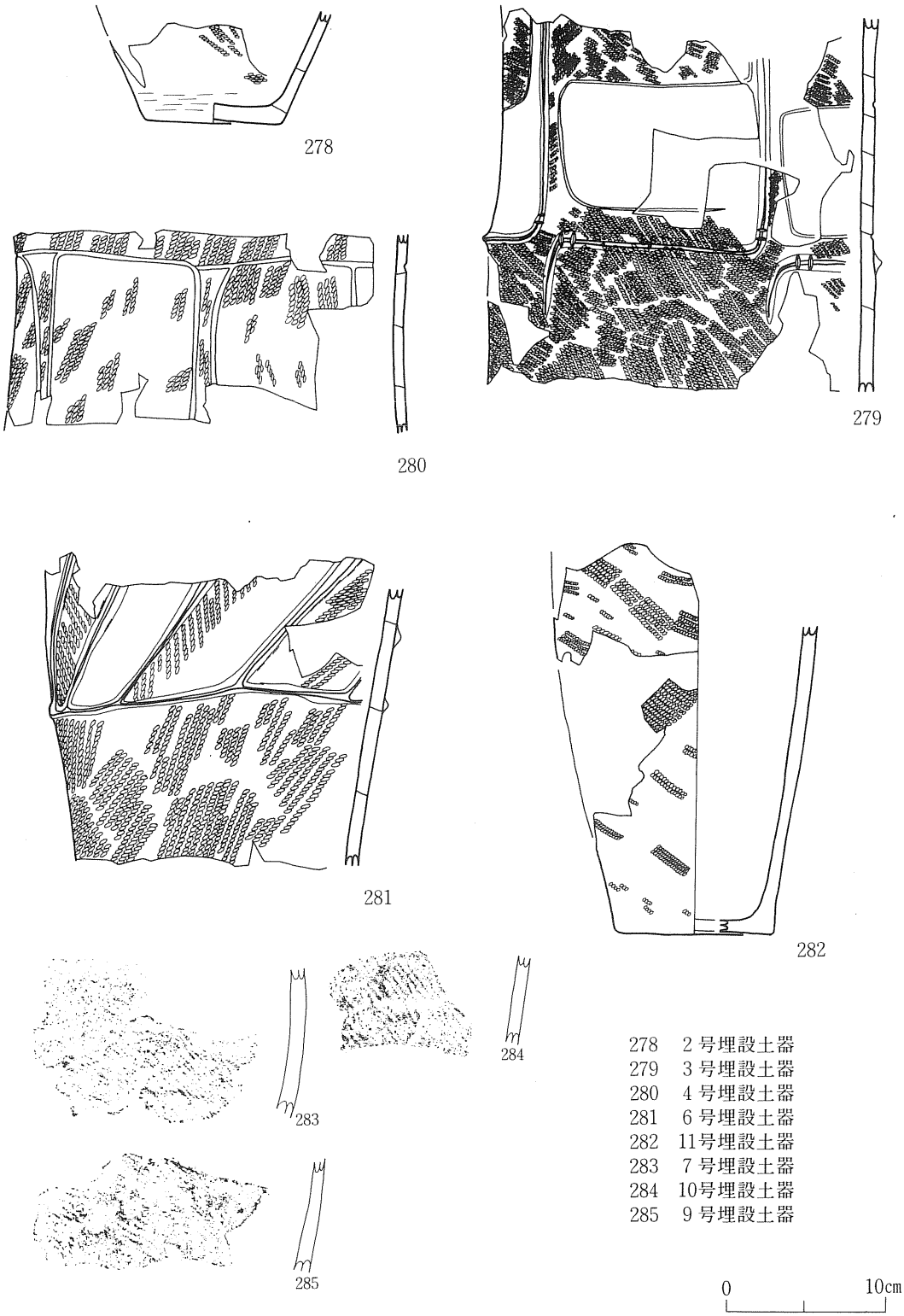
第78図　遺構内出土土器



第79図　遺構内出土土器

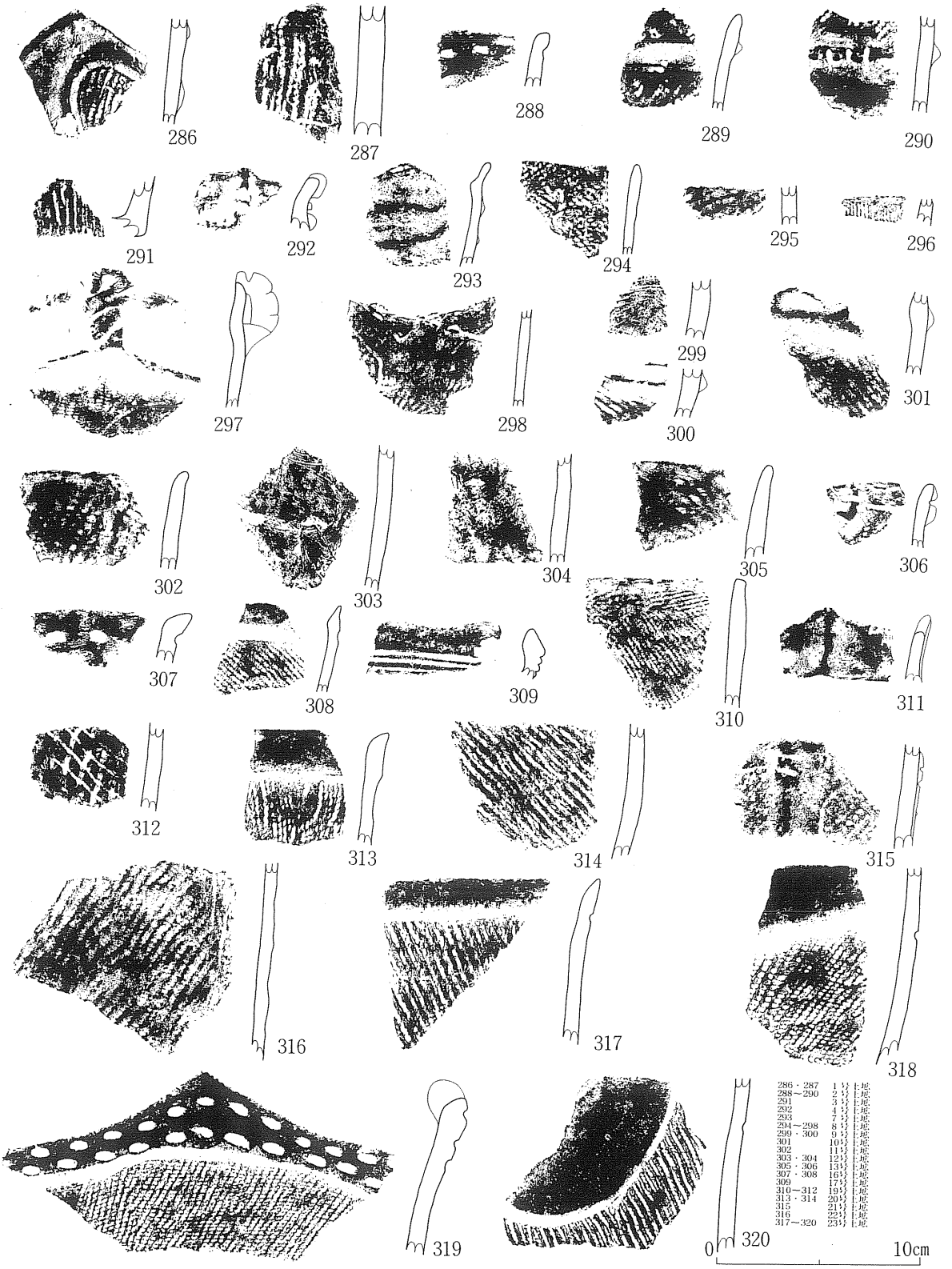


第80図　遺構内出土土器

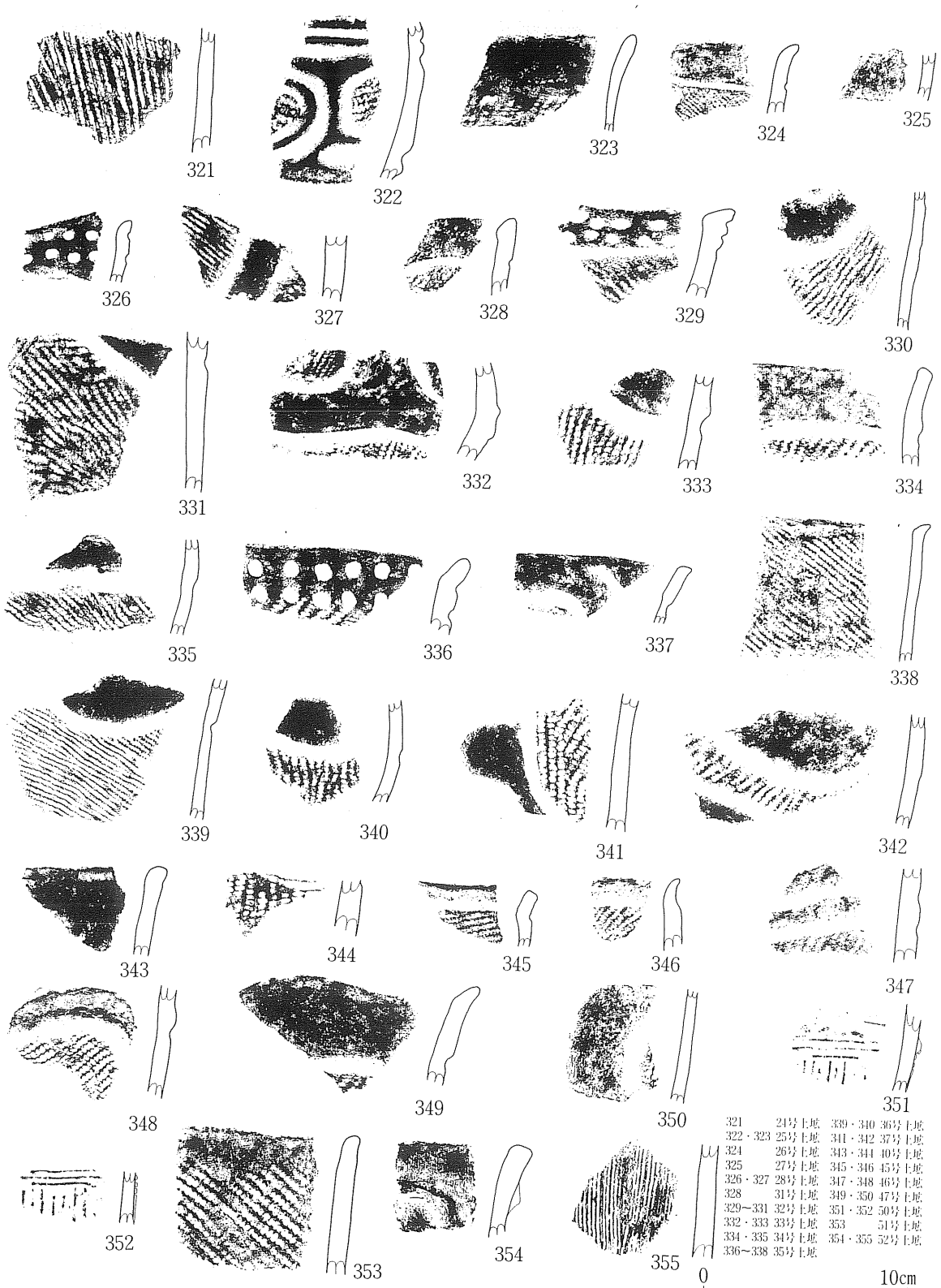


278　2号埋設土器
279　3号埋設土器
280　4号埋設土器
281　6号埋設土器
282　11号埋設土器
283　7号埋設土器
284　10号埋設土器
285　9号埋設土器

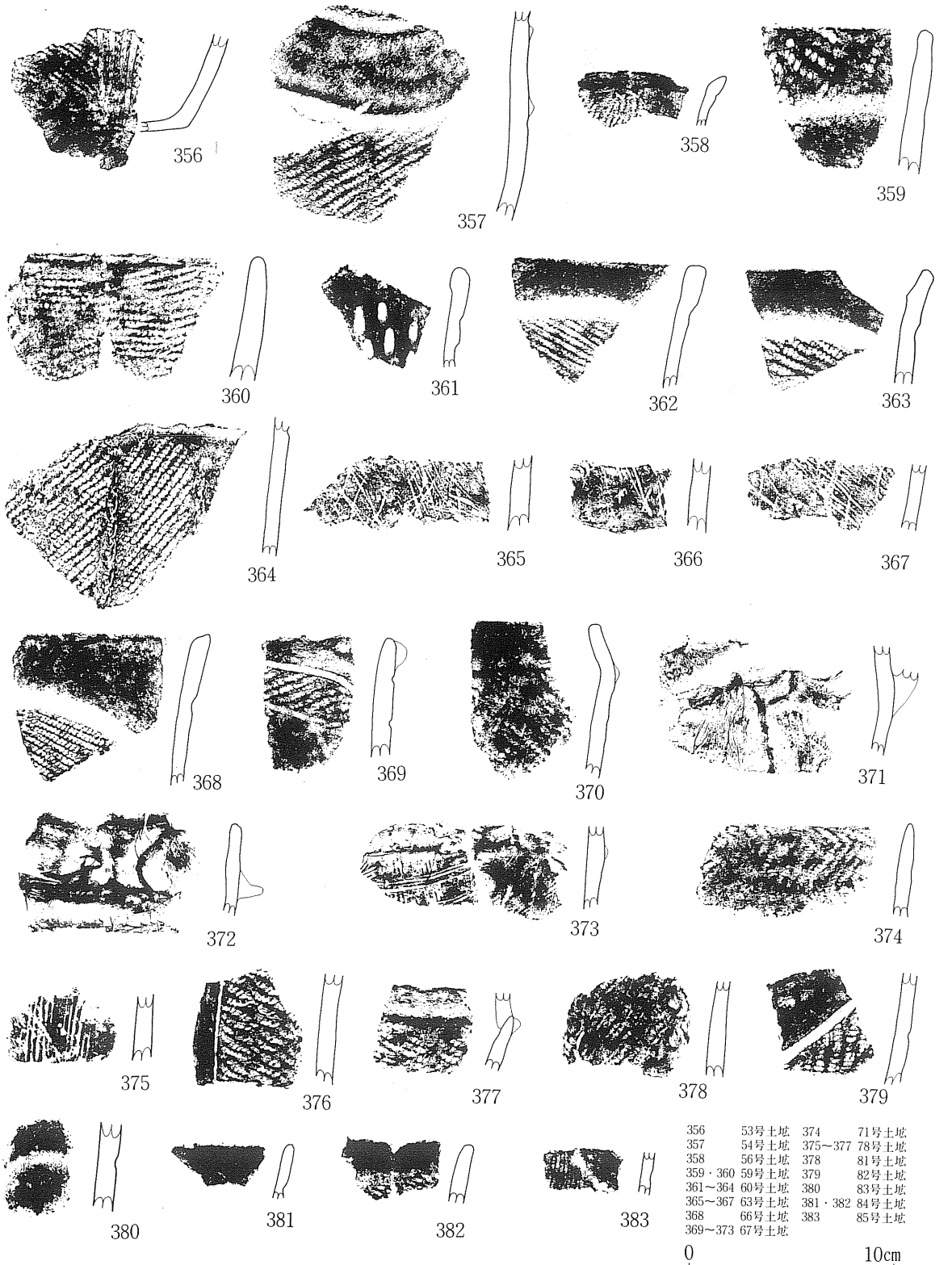
第81図　遺構内出土土器



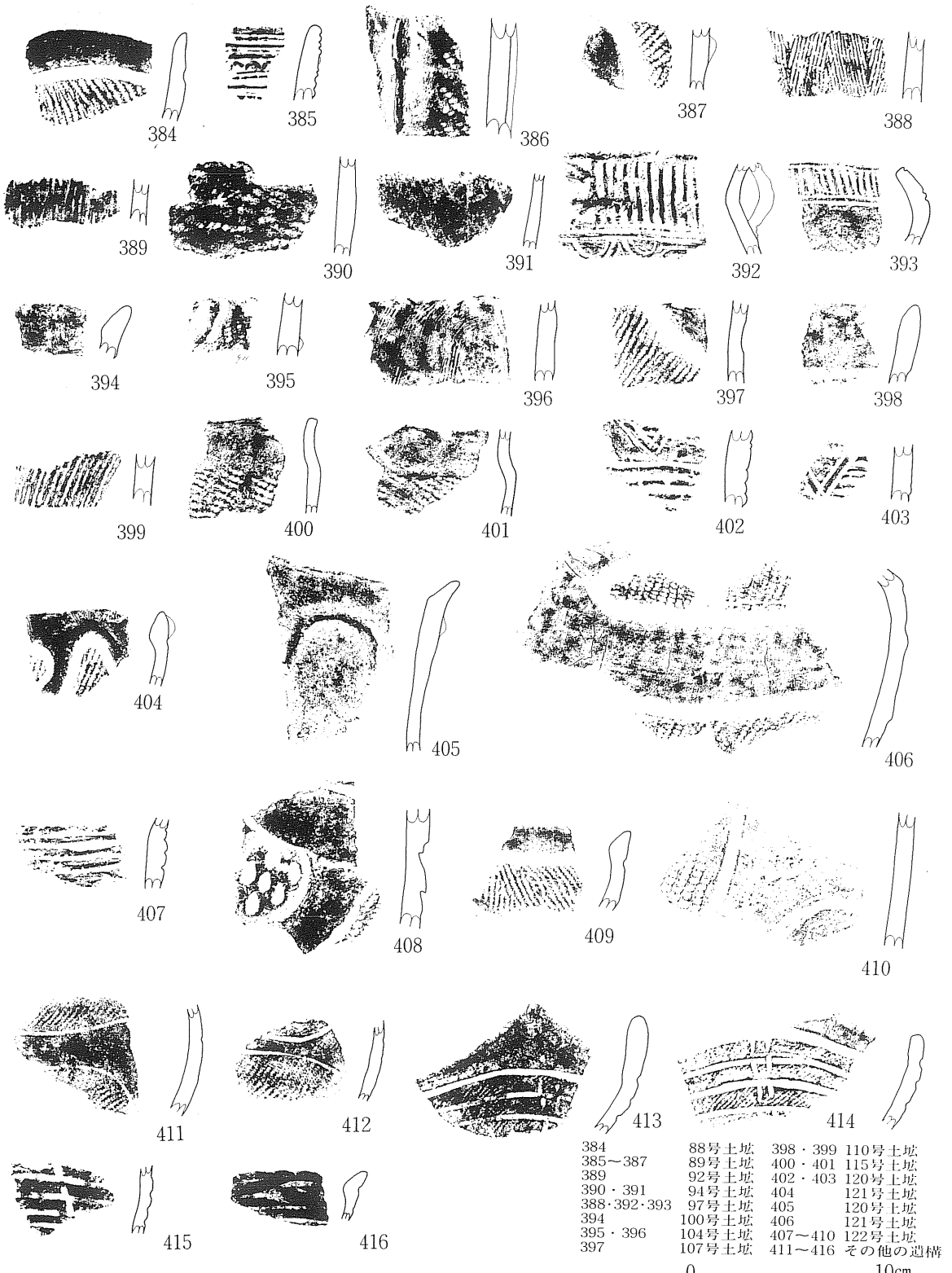
第82図　遺構内出土土器



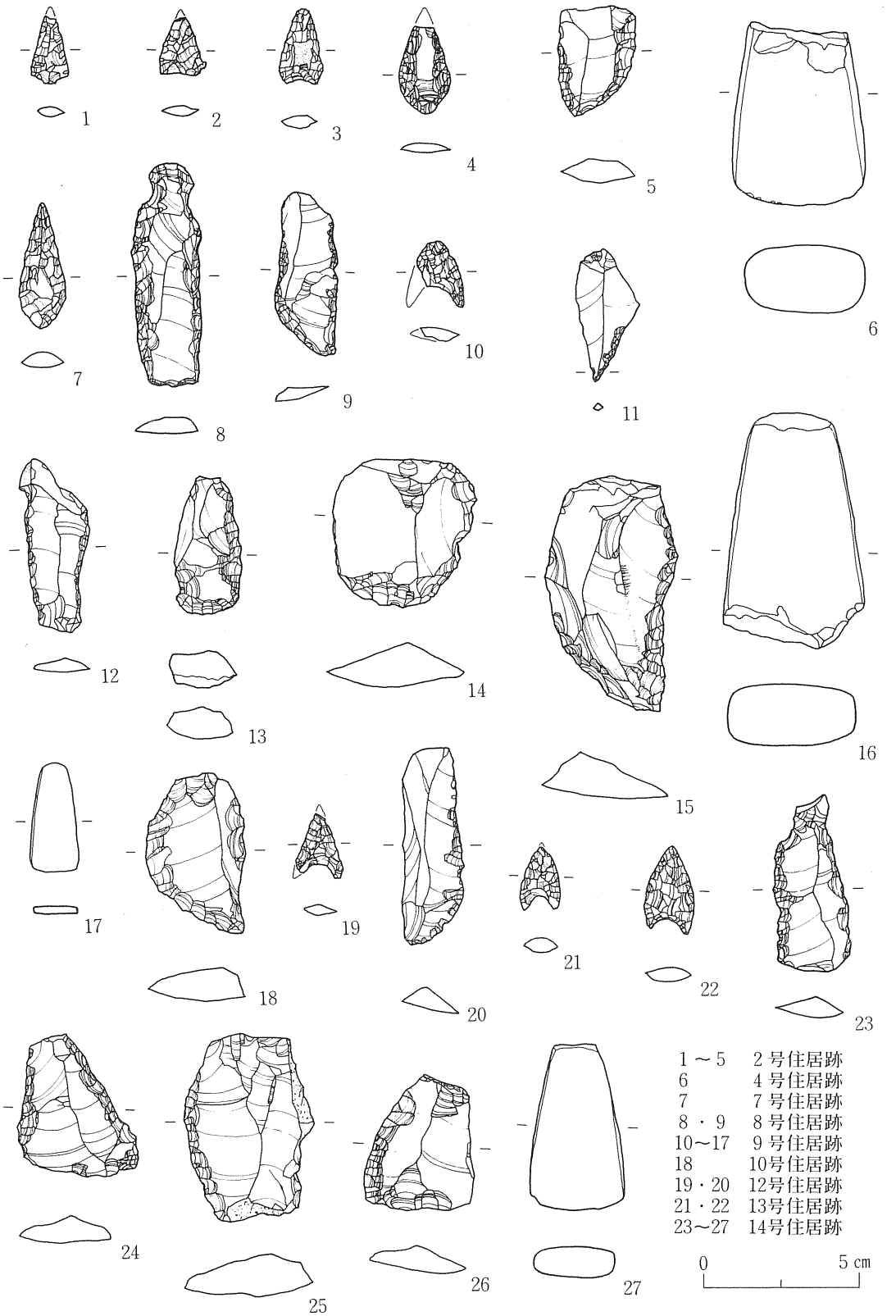
第83図　遺構内出土土器



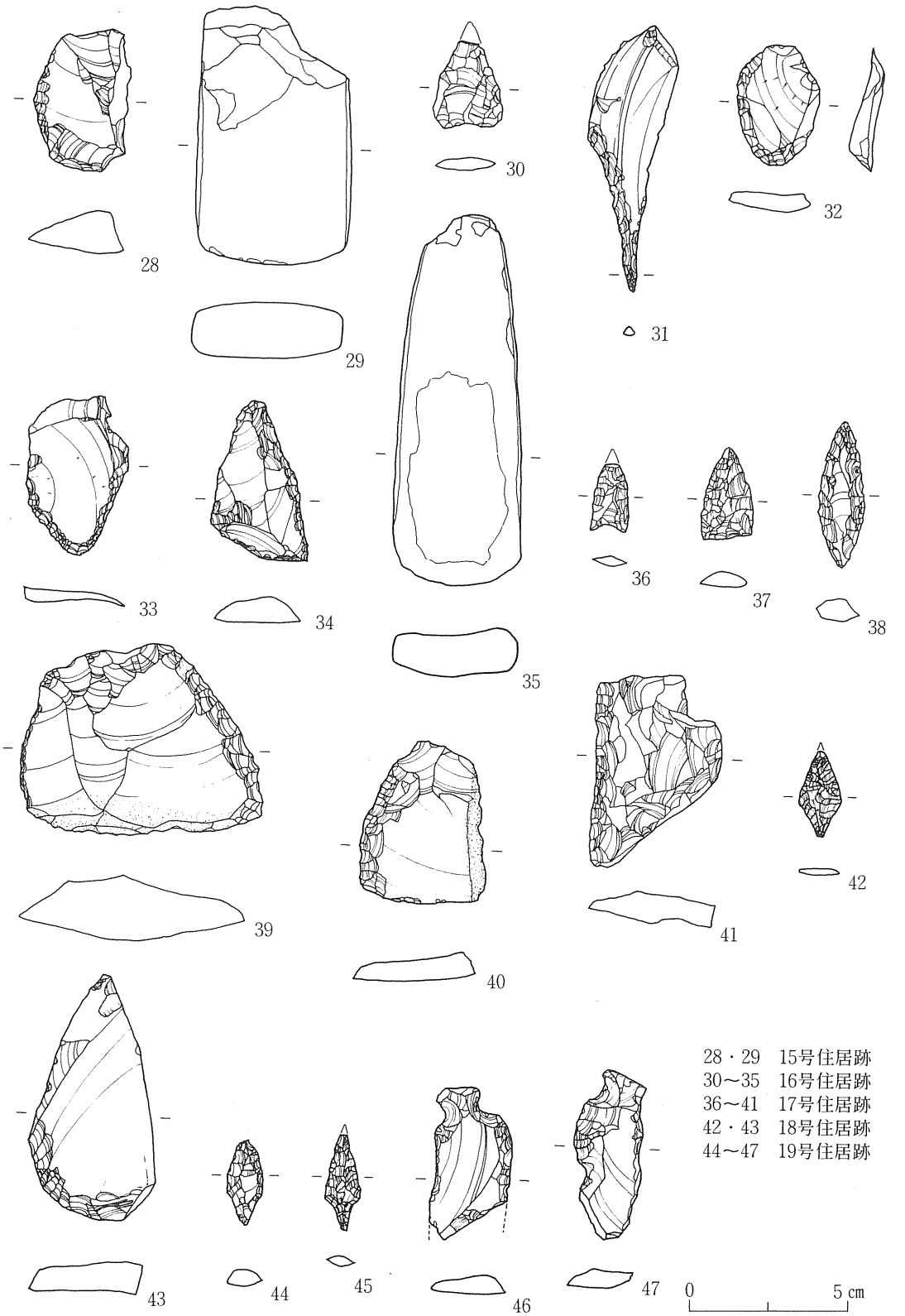
第84図　遺構内出土土器



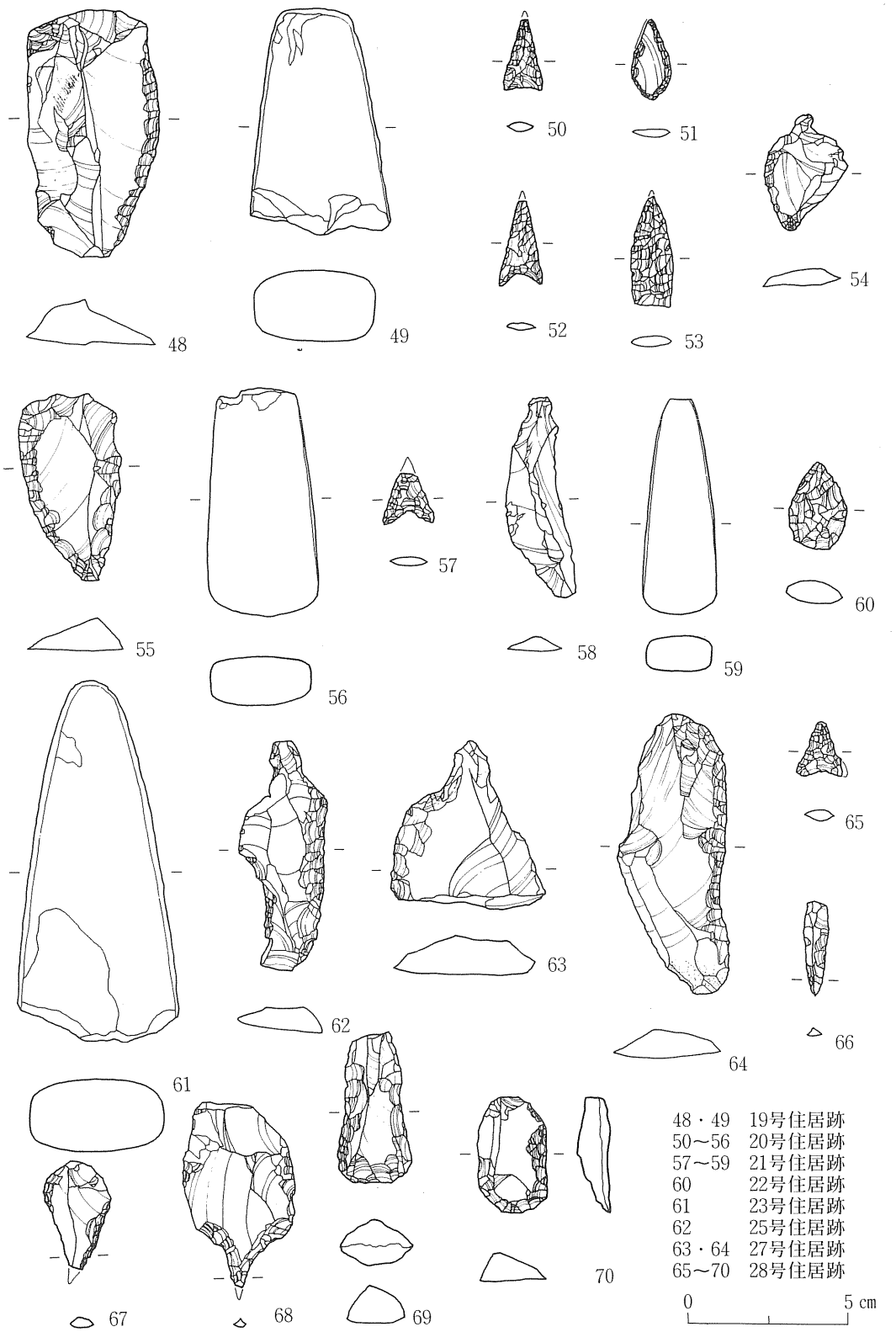
第85図　遺構内出土土器



第86図　遺構内出土石器



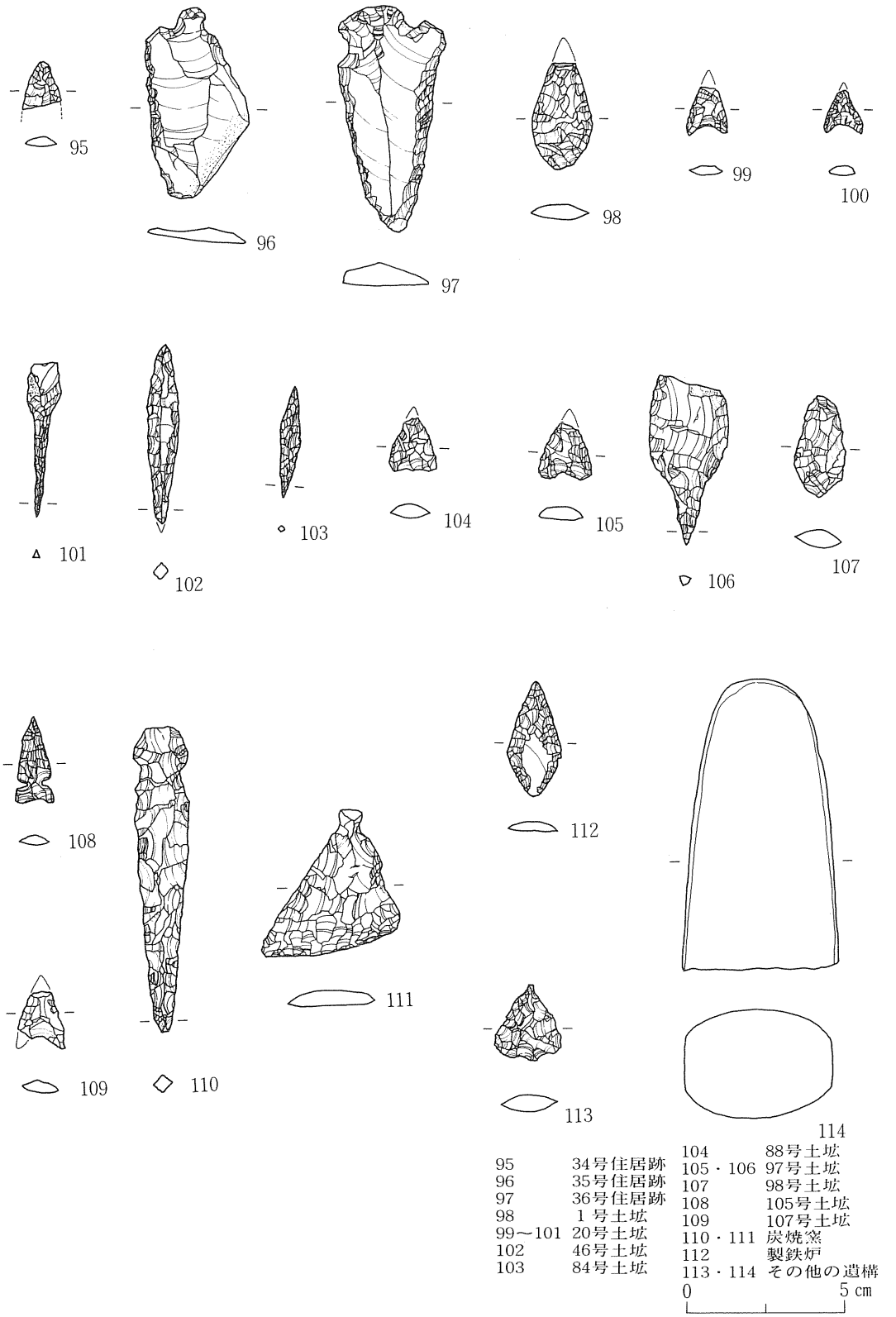
第87図　遺構内出土石器



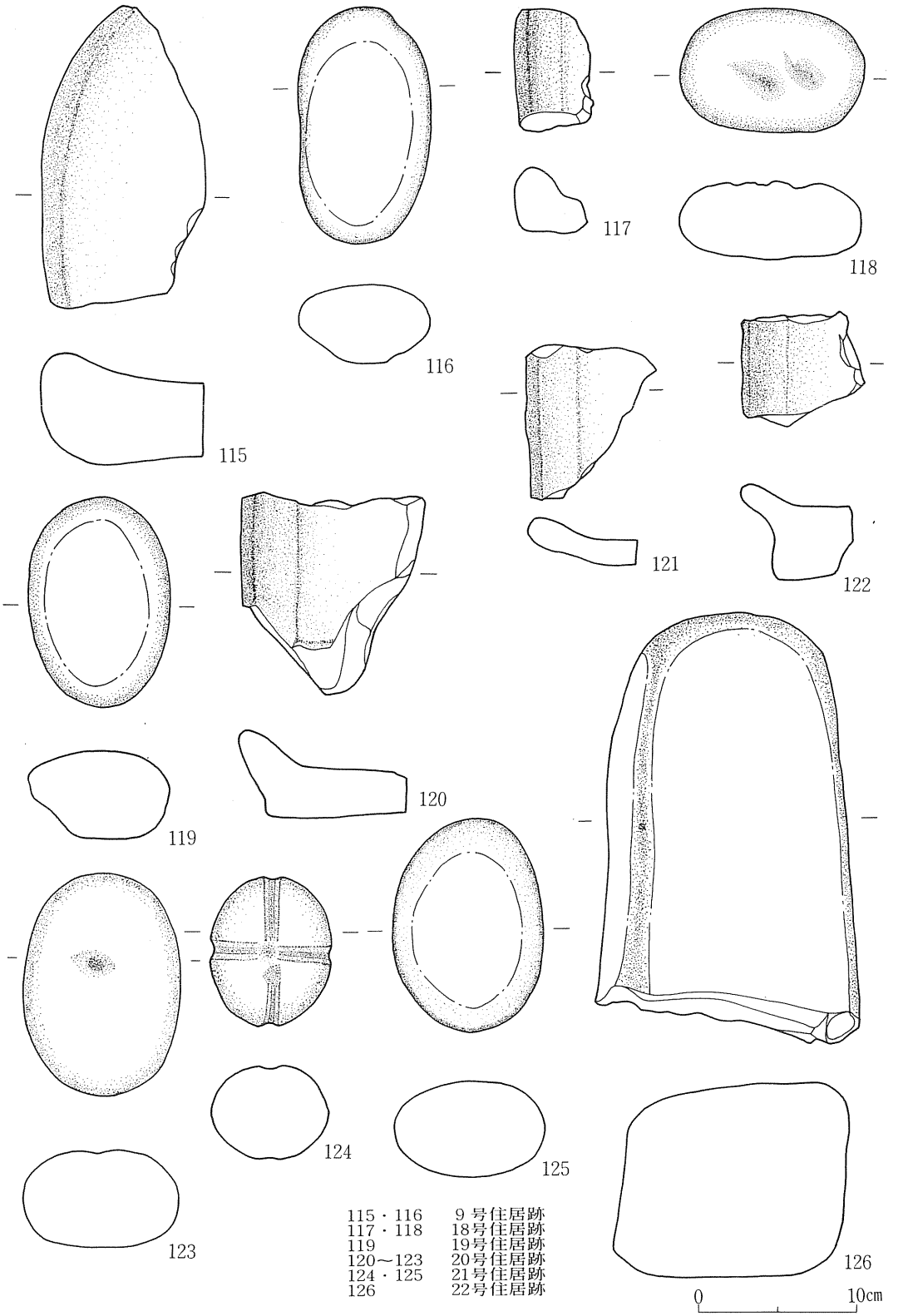
第88図　遺構内出土石器

71・72　28号住居跡
73～75　29号住居跡
76　30号住居跡
77～82　31号住居跡
83～85　32号住居跡
86～94　33号住居跡

第89図　遺構内出土石器

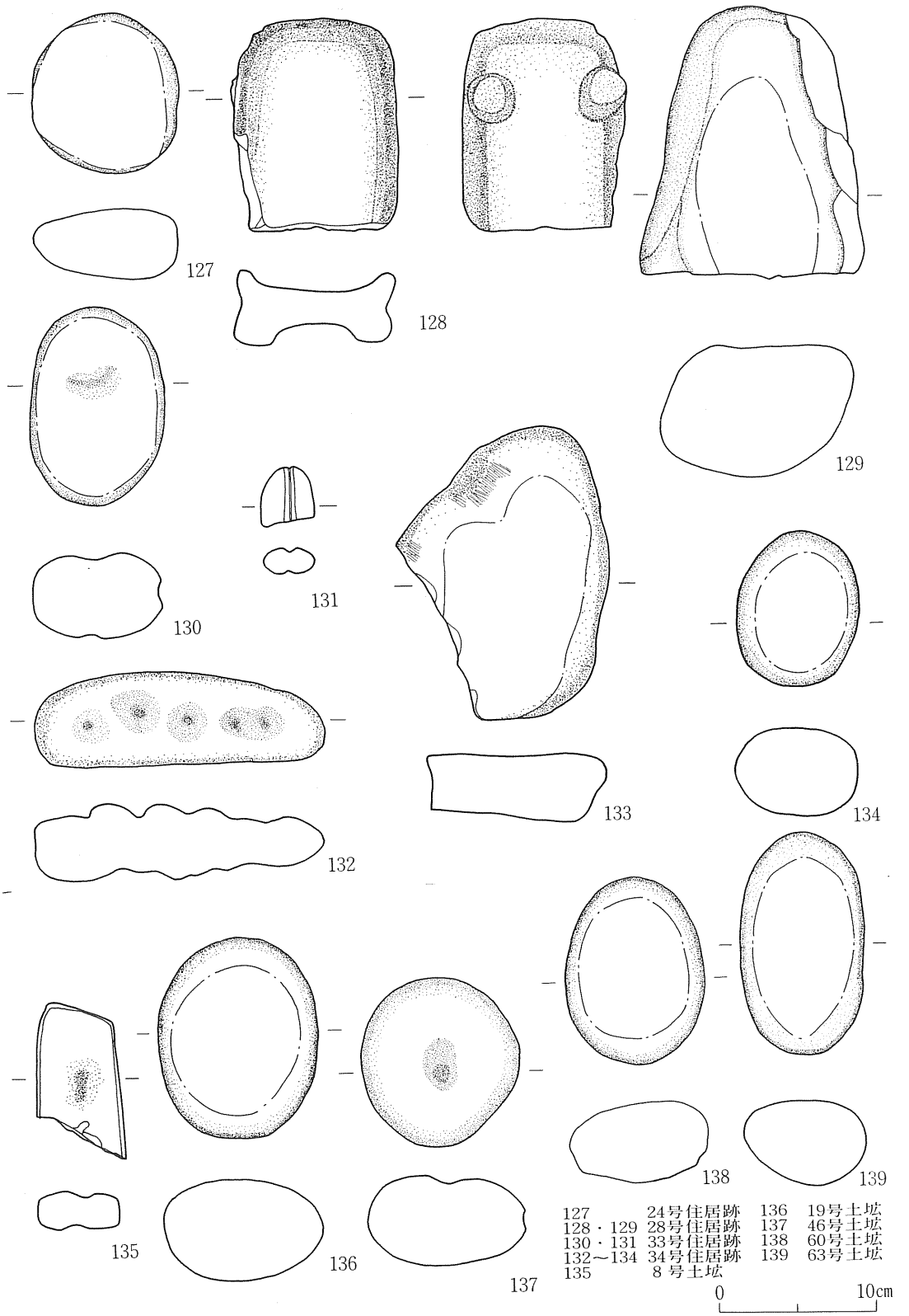


第90図　遺構内出土石器

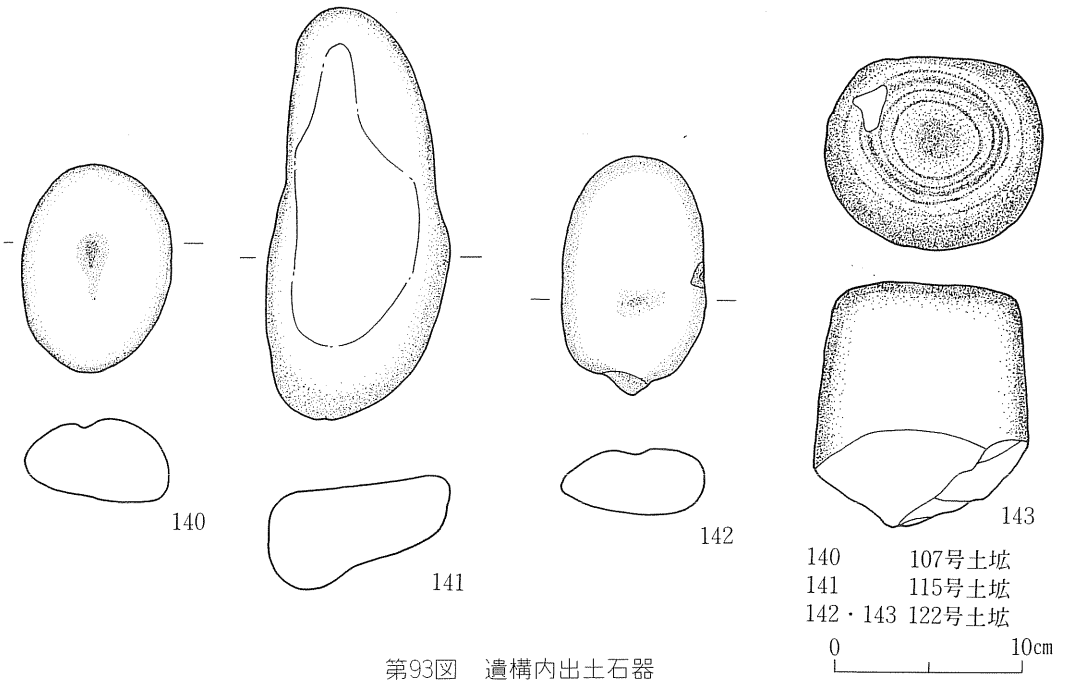


115・116	9号住居跡
117・118	18号住居跡
119	19号住居跡
120～123	20号住居跡
124・125	21号住居跡
126	22号住居跡

第91図　遺構内出土石器



第92図　遺構内出土石器



第93図　遺構内出土石器

に磨消しを行い、頸部に瘤が4個、器体中央部に刻みのある瘤が3個付く。

3類（第94図422）

小型の鉢形土器である。口唇部及び頸部に刻みが施され、口唇部には2個1対の突起が4個付く。口縁部と胴下部に沈線が巡り、胴部には不規則な波状の刻線を施し、器面全体には鋭利な工具による刺突を施す。

4類（第46図45、第79図265・267）

縄文地文及び口縁部無文帯の鉢形土器である。45は7個の山形突起をもち、頸部に沈線が巡る。265は口縁部がやや外傾し、器肉が厚い。267は口縁部がやや外傾し、口唇部付近にも縄文がみられる。

5類（第54図196、第84図375、第85図388、第99図547～549）

網目状撚糸文、刻線を網目状に施すものである。

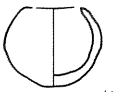
6類（第99図551・552）

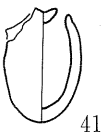
同一個体で、葉脈状に文様を施すものである。

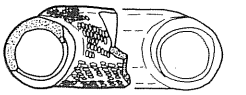
土製品（第100～103図）

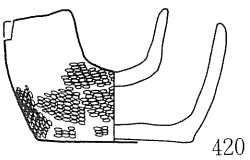
1～4は土偶である。1は無節縄文、2・3は刺突を施す。4は乳部があり、全面的に磨滅が著しい。全て欠損品である。5～9は三角形土製品である。刺突及び刻線を施し、全て欠損品である。10～12はスタンプ状をなすものである。13は三角形をなす土製品で、上部に孔が認められる事から装飾品と考えられる。14～106は再利用土製品（円盤状土製品）である。土器片を再利用したもので

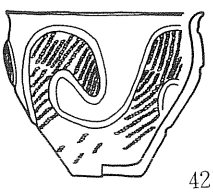
417

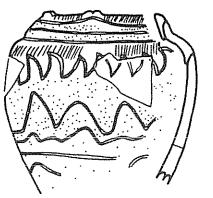

418

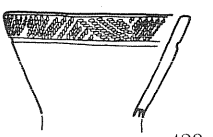

419

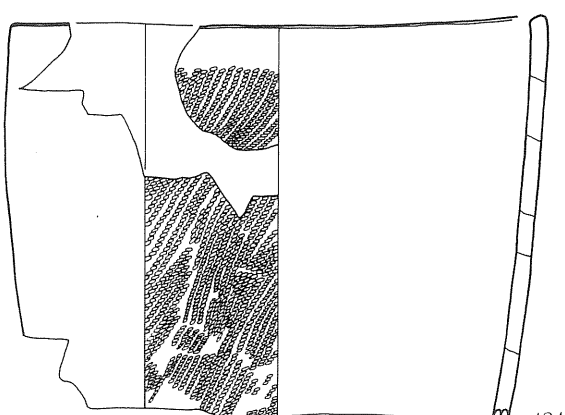


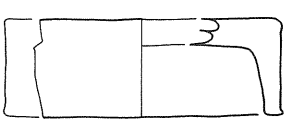

420

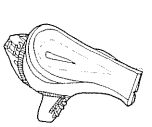

421

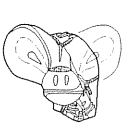

422


423


424


425

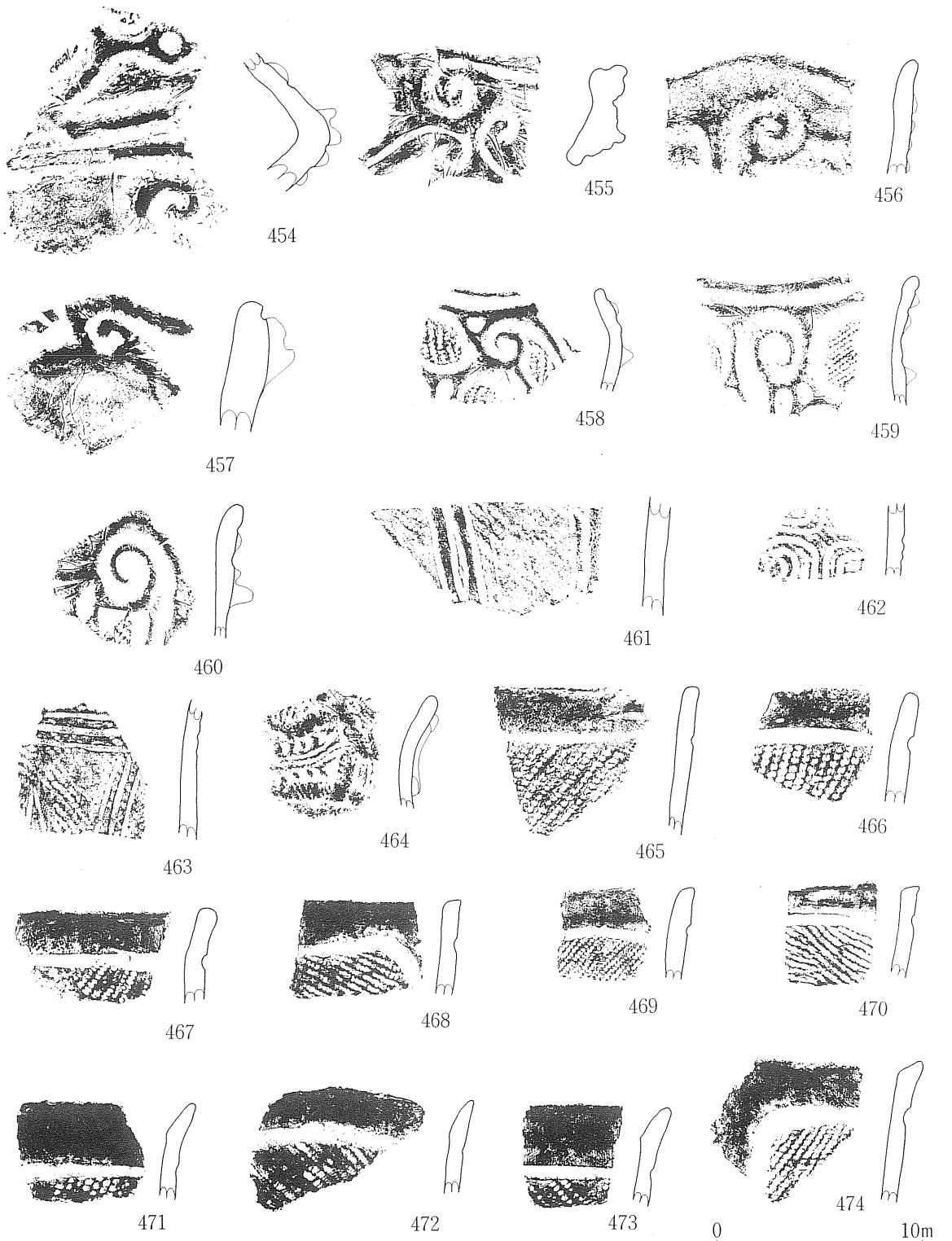




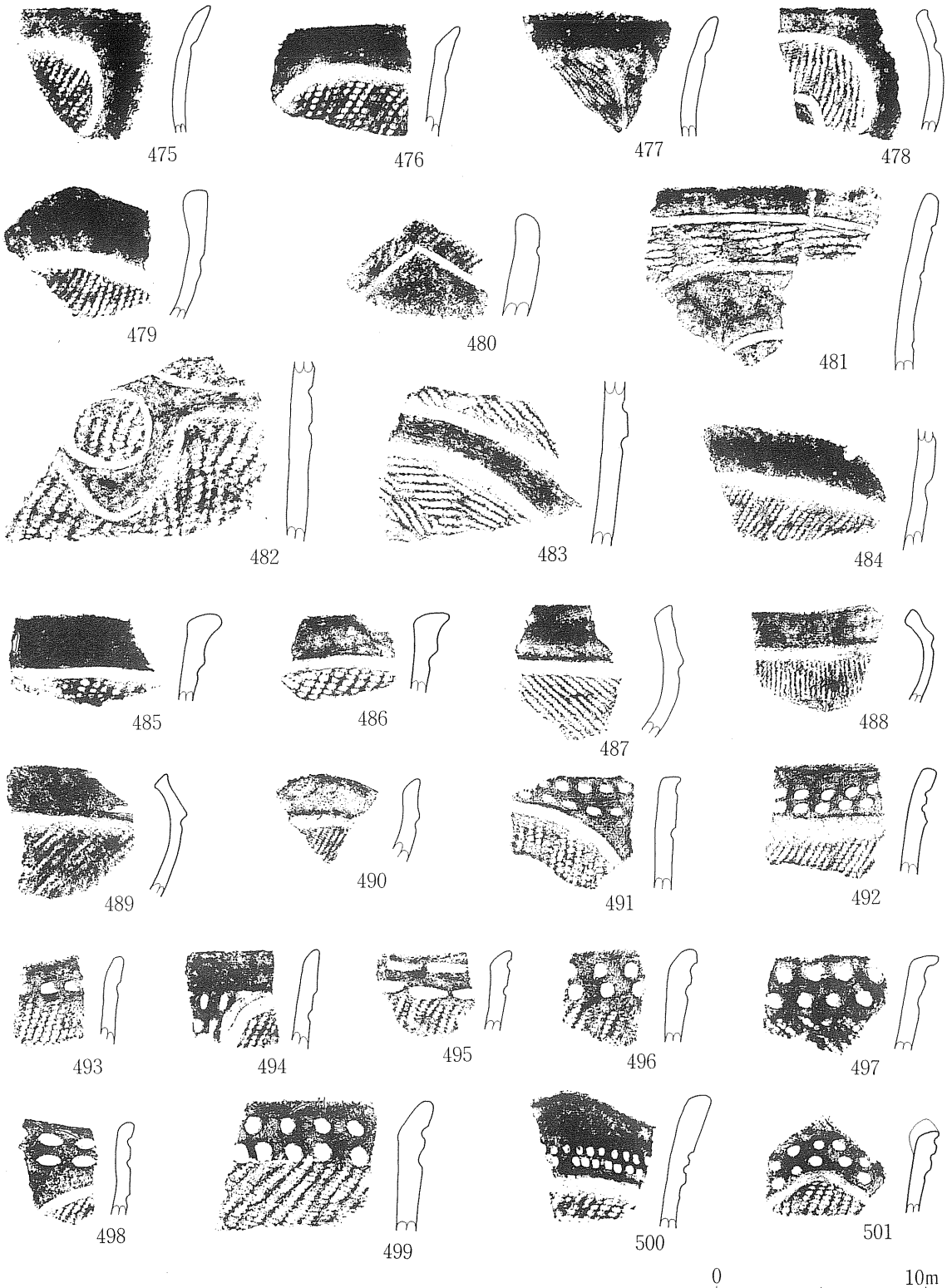
426

第94図　遺構外出土土器

第95図　遺構外出土土器

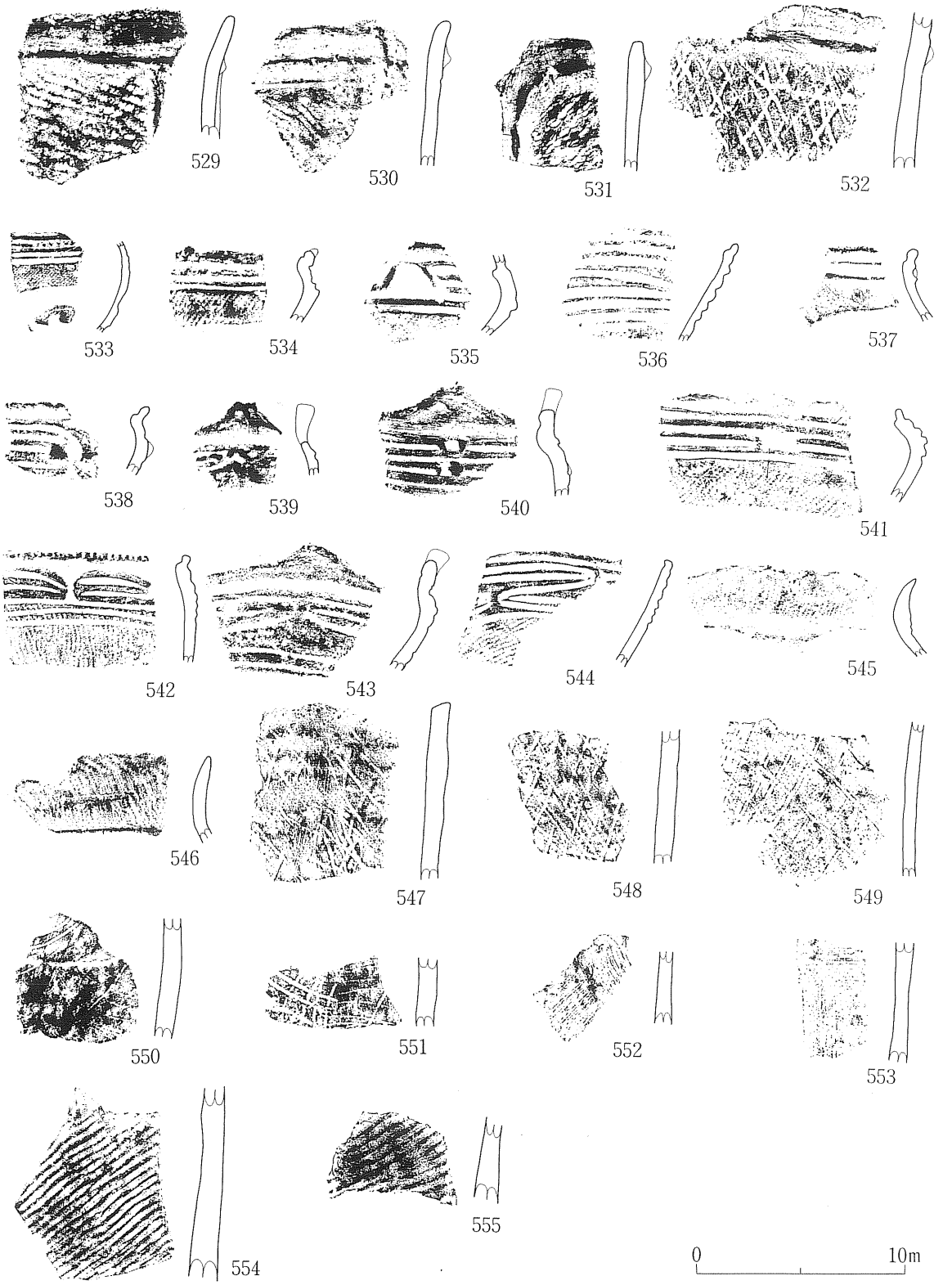


第96図　遺構外出土土器



第97図　遺構外出土土器

第98図　遺構外出土土器



第99図　遺構外出土土器

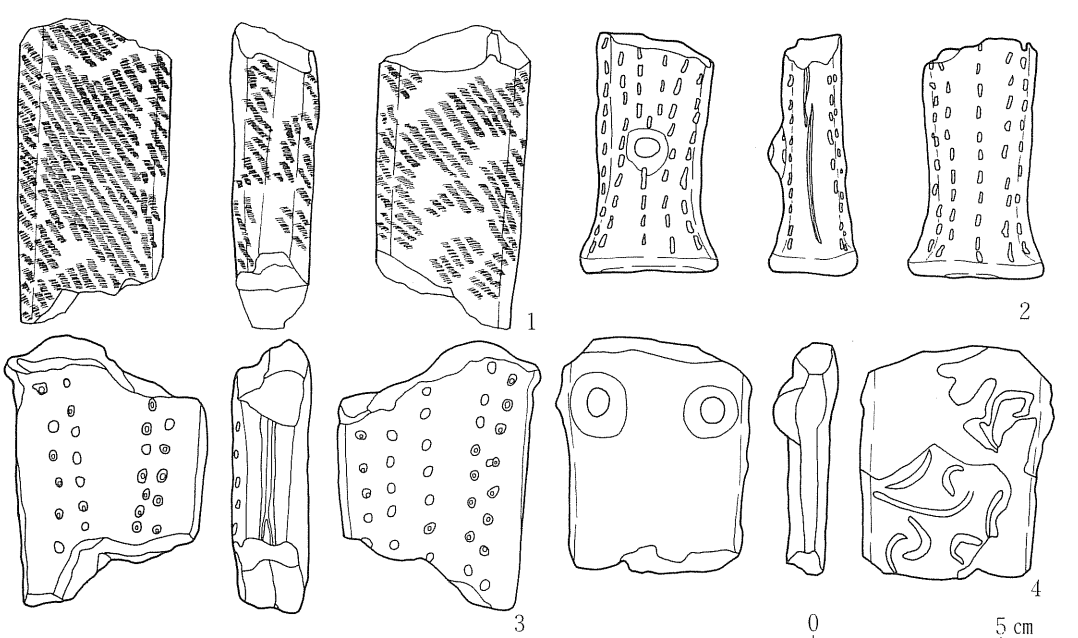
円形を呈するものと方形（または長方形）を呈するものとに分類される。

遺構外出土石器（第105～117図）

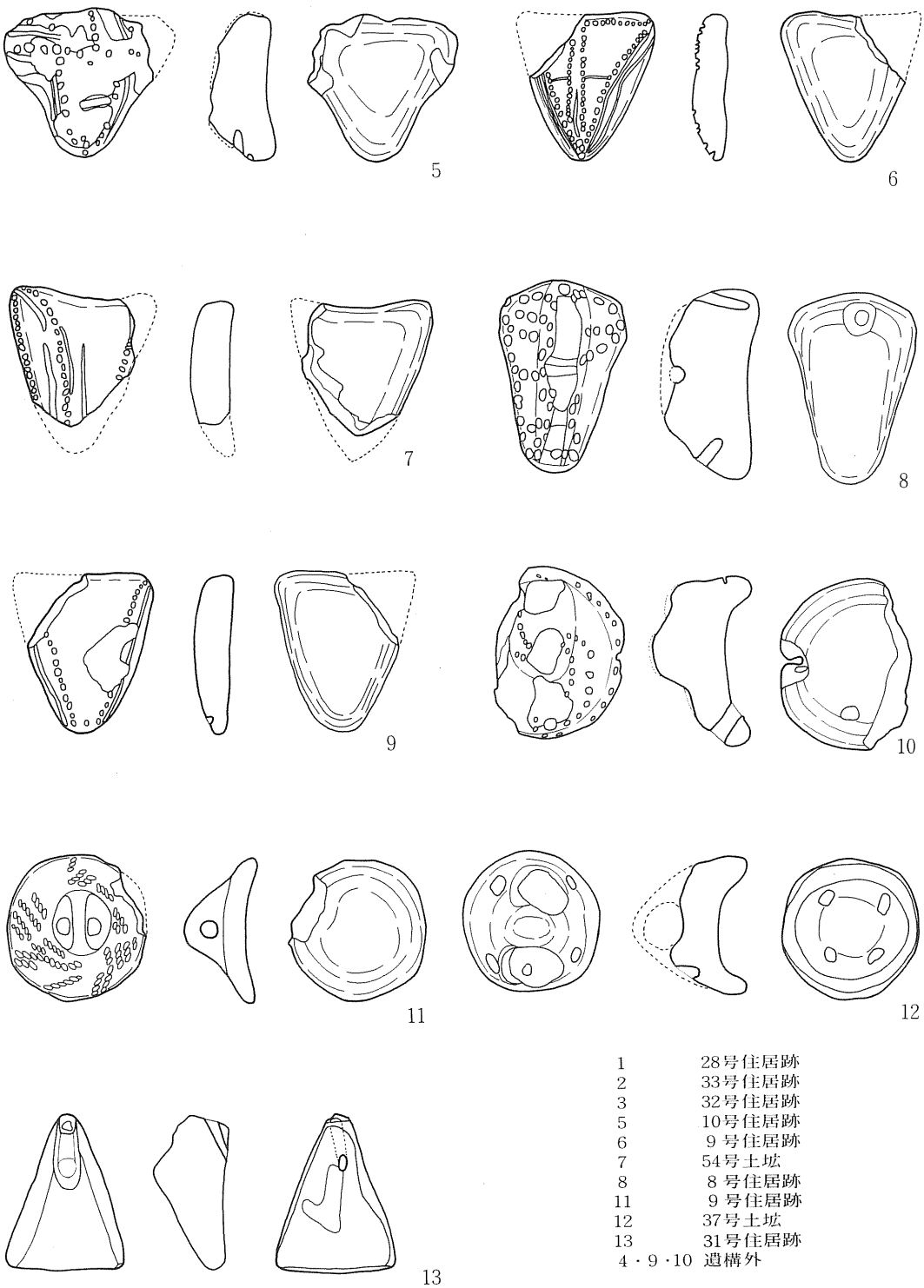
144～176は石鏃で、有茎・無茎のものがあり、アスファルトの付着するものがある。177～181は石錐である。182～201は石匙である。182～196は縦型、197～201は横型で、ツマミ部にアスファルトが付着するものもある。202～208は槍先状石器で、202・203の基部にアスファルトの付着が認められる。209～215は撥形状石器で、鋸的な機能が考えられる。216～226はヘラ状石器で、両面からの加工である。227～238は掻器、掻器状石器で、片面加工である。239～245は削器、削器状石器で片面加工である。246～280は磨製石斧で、ほとんどが破損している。246～253は小型で、249の石質は翡翠である。281は打製石斧である。282は石剣で、側面に溝がみられる。石質は粘板岩である。283は石棒で、頭部に三段の環とこれに続く山形・円形文を彫刻状に施す。頭頂部はくぼむ。284～309はくぼみ石である。くぼみ部が、片面・両面のもの、複数のものがあり、磨石と併用するものもある。310～324は磨石・敲石である。全面を磨るもの、側面に敲痕のあるものがある。325～329は石皿で、全て破損し、330～335は石皿状をなす石器である。336・337・339・340は磨痕の認められるもので台石と考えられる。

石製品（第118・119図）

1～5は有孔石製品である。1～3は装飾品と考えられ、両面から孔を穿っている。4・5は軽石である。6は円盤状石製品である。7は岩偶である。8は石冠状石器である。



第100図　土 製 品



1	28号住居跡
2	33号住居跡
3	32号住居跡
5	10号住居跡
6	9 号住居跡
7	54号土坑
8	8 号住居跡
11	9 号住居跡
12	37号土坑
13	31号住居跡
4・9・10	遺構外

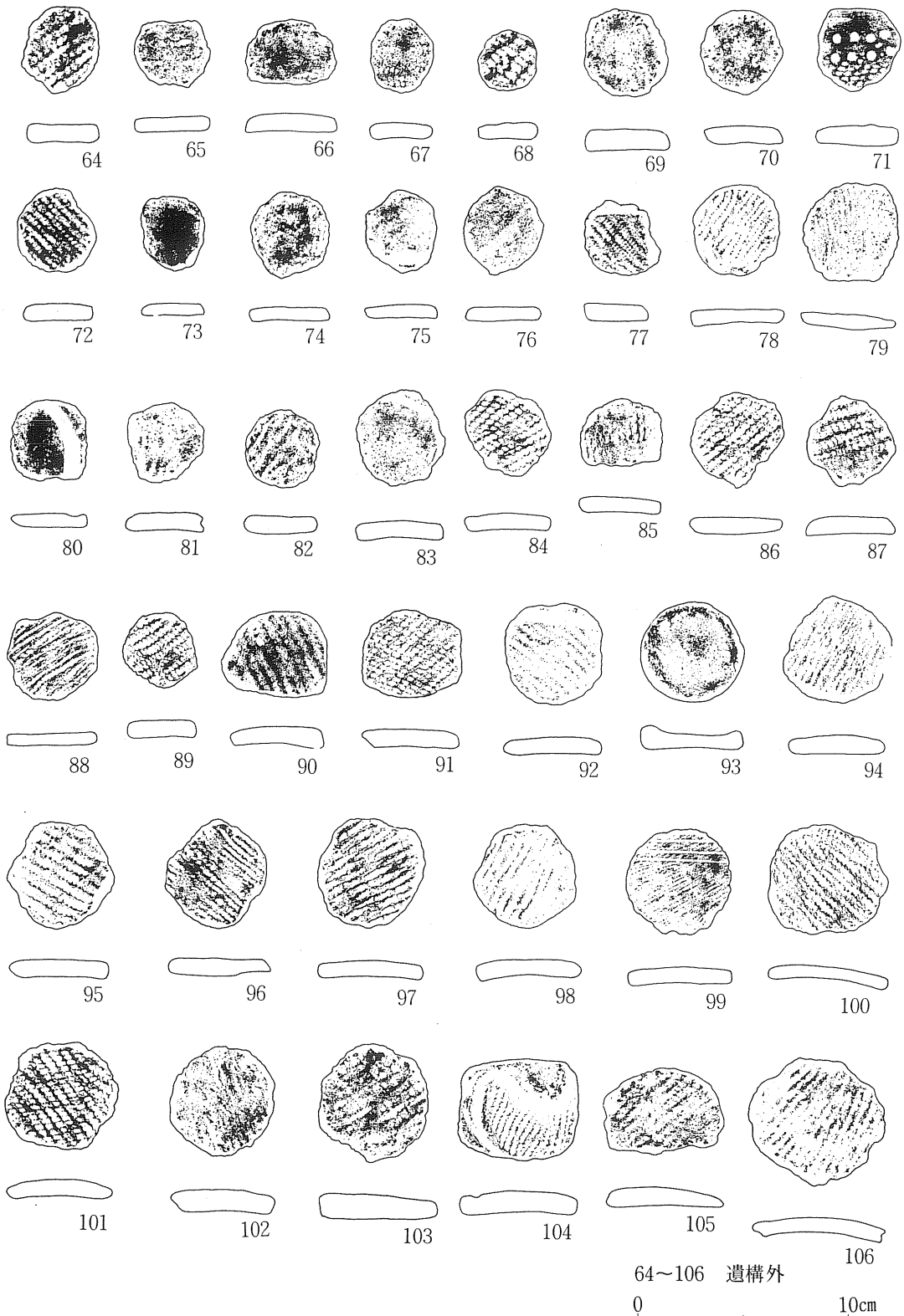
0　5 cm

第101図　土 製 品

14・15	3号住居跡
16・17	7号住居跡
18	8号住居跡
19・20	9号住居跡
21	10号住居跡
22	13号住居跡
23～28	14号住居跡
29	15号住居跡
30	16号住居跡
31・32	19号住居跡
33～36	20号住居跡
37	25号住居跡
38	26号住居跡
39・40	28号住居跡
41	29号住居跡
42	32号住居跡
43・44	33号住居跡
45	67号土坑
46	106号土坑
47～50	その他の遺構
51～63	遺構外

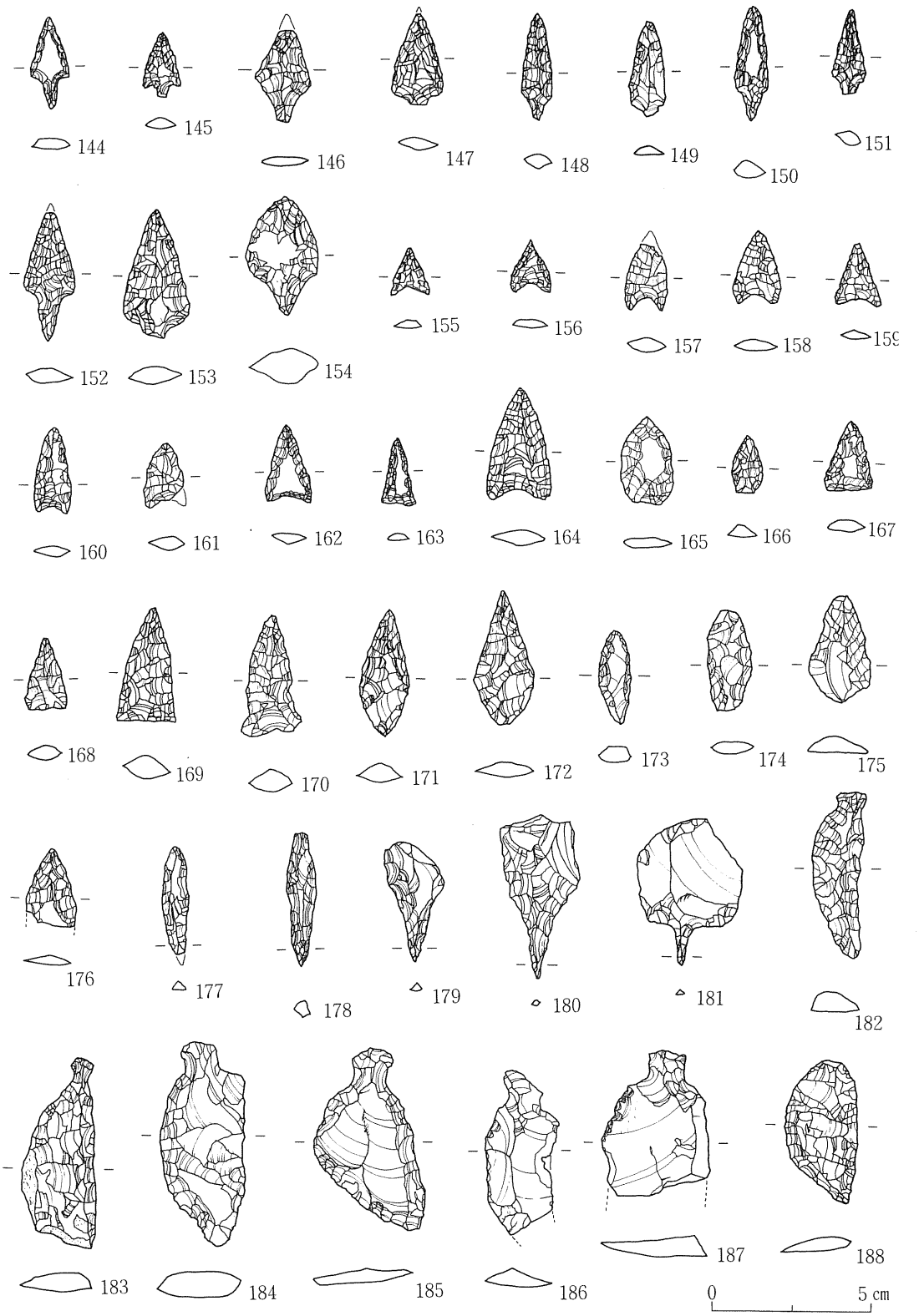
0　10cm

第102図　再利用土製品

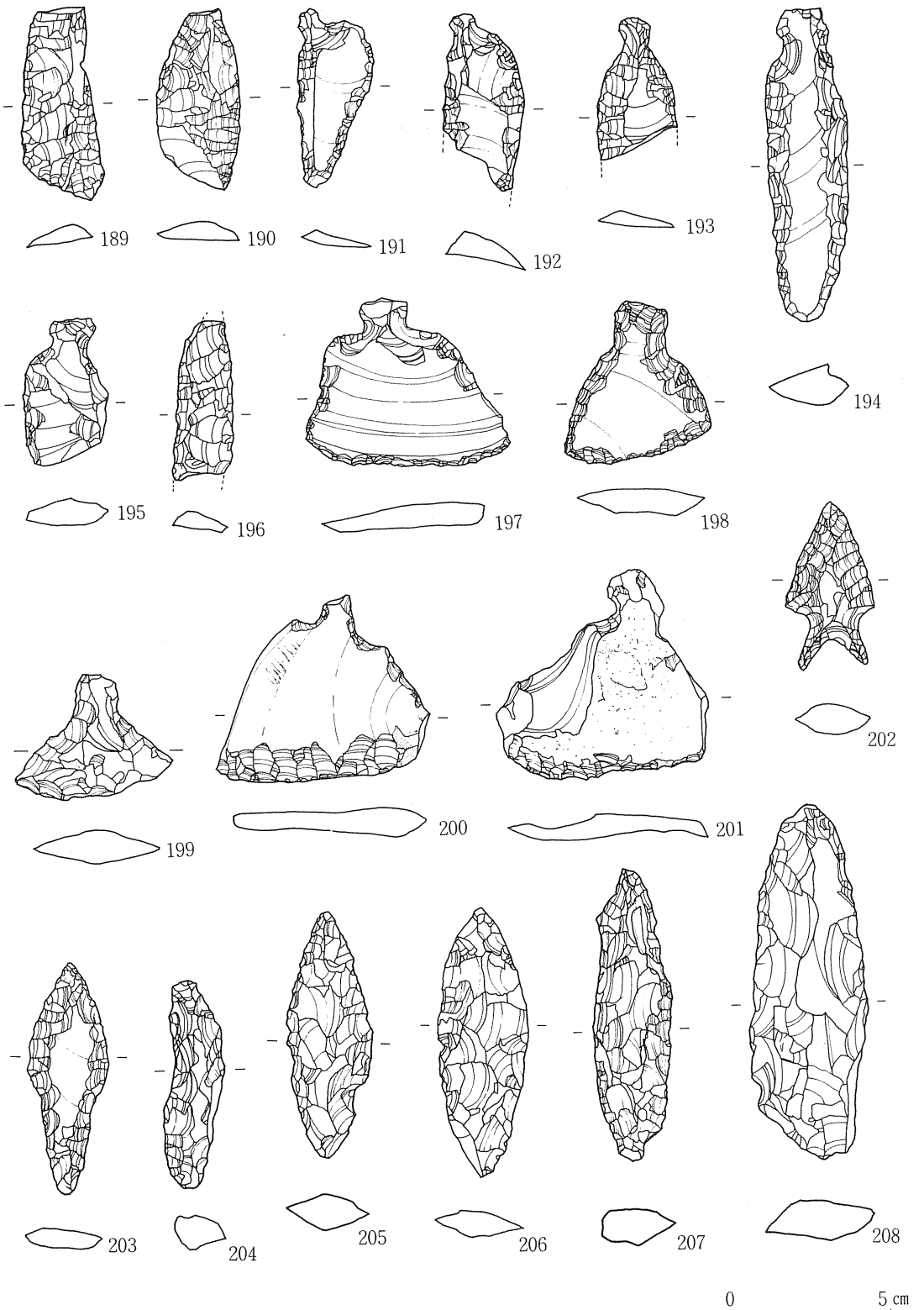


第103図　再利用土製品

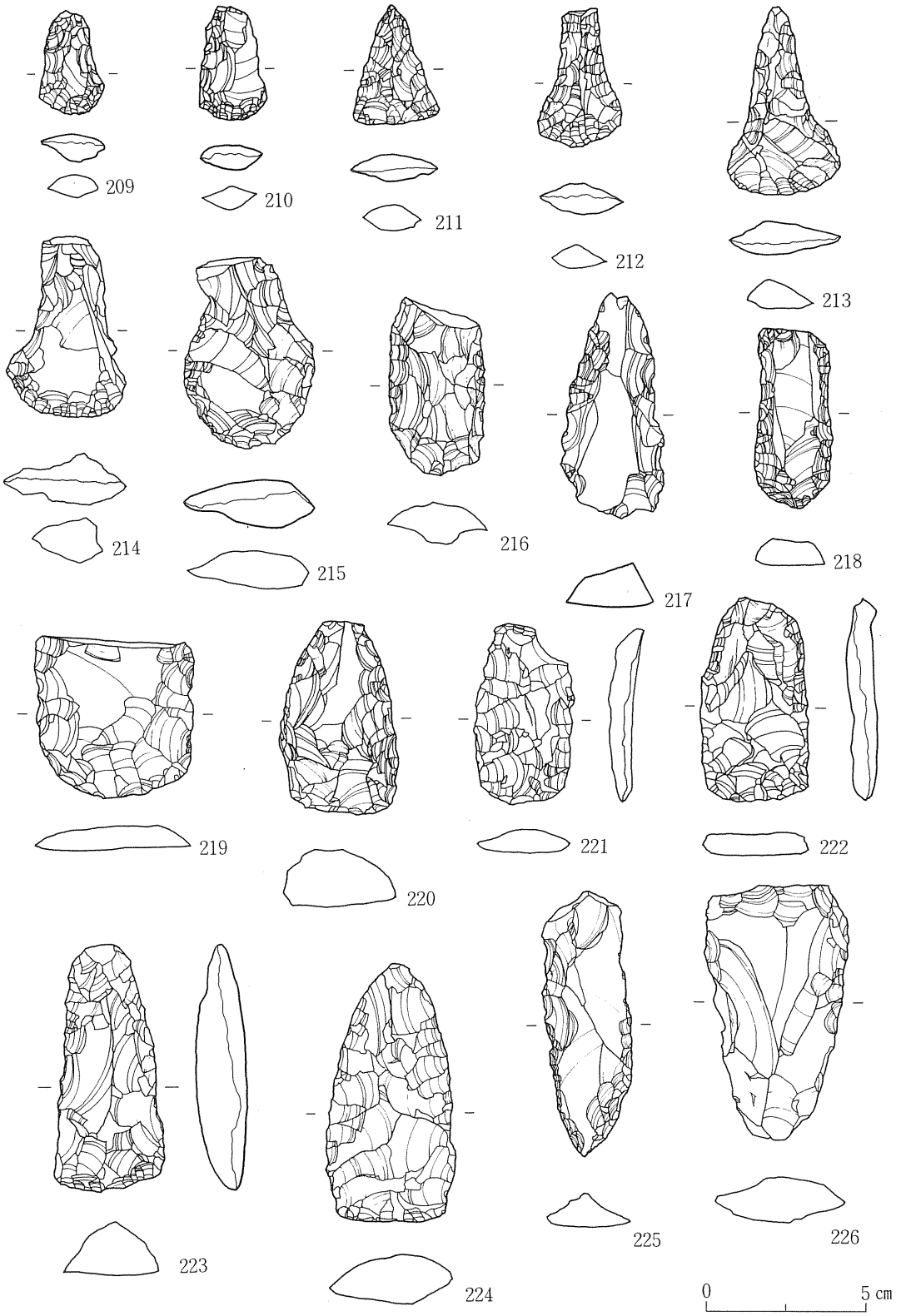
第104図　土器底部



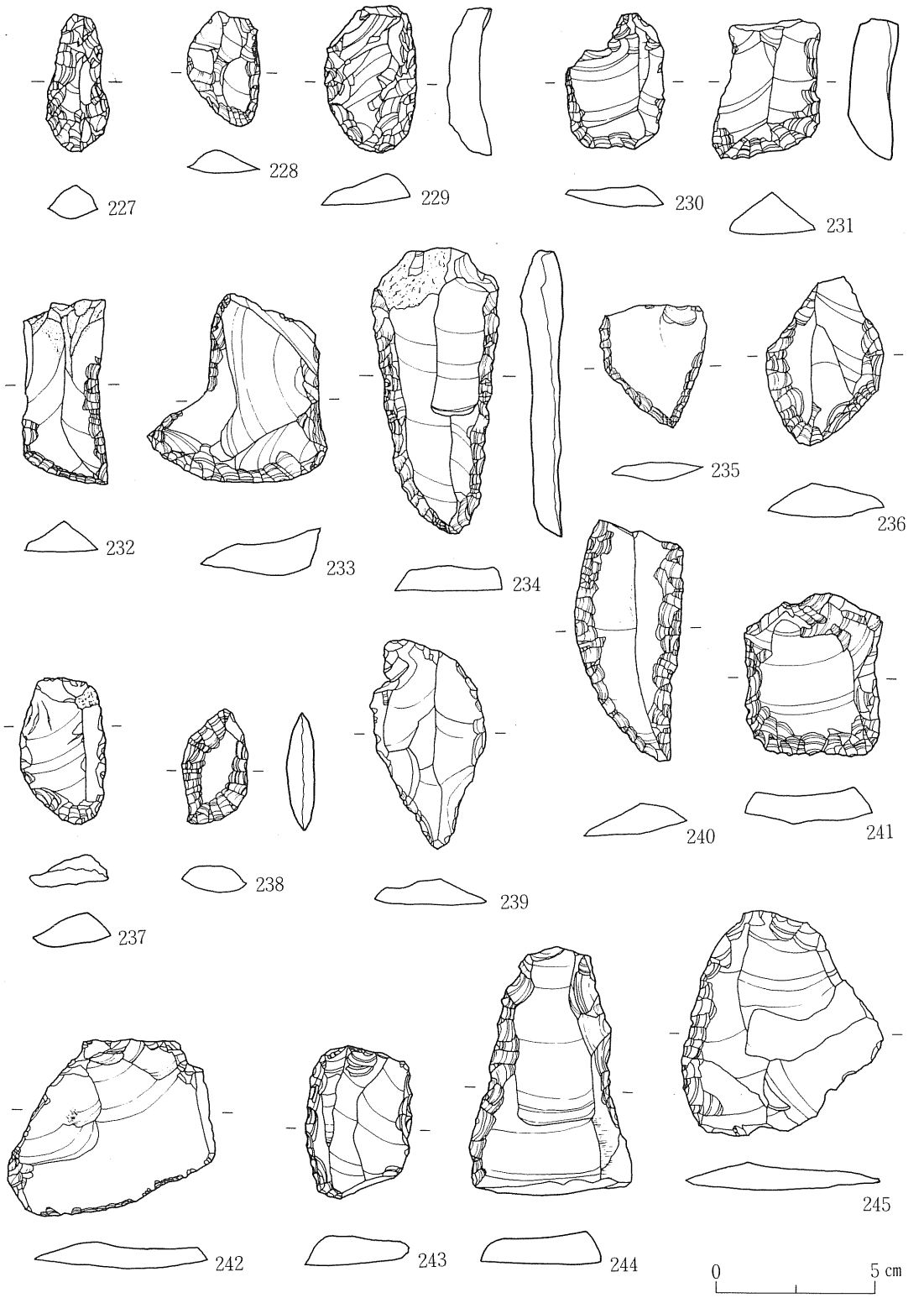
第105図　遺構外出土石器



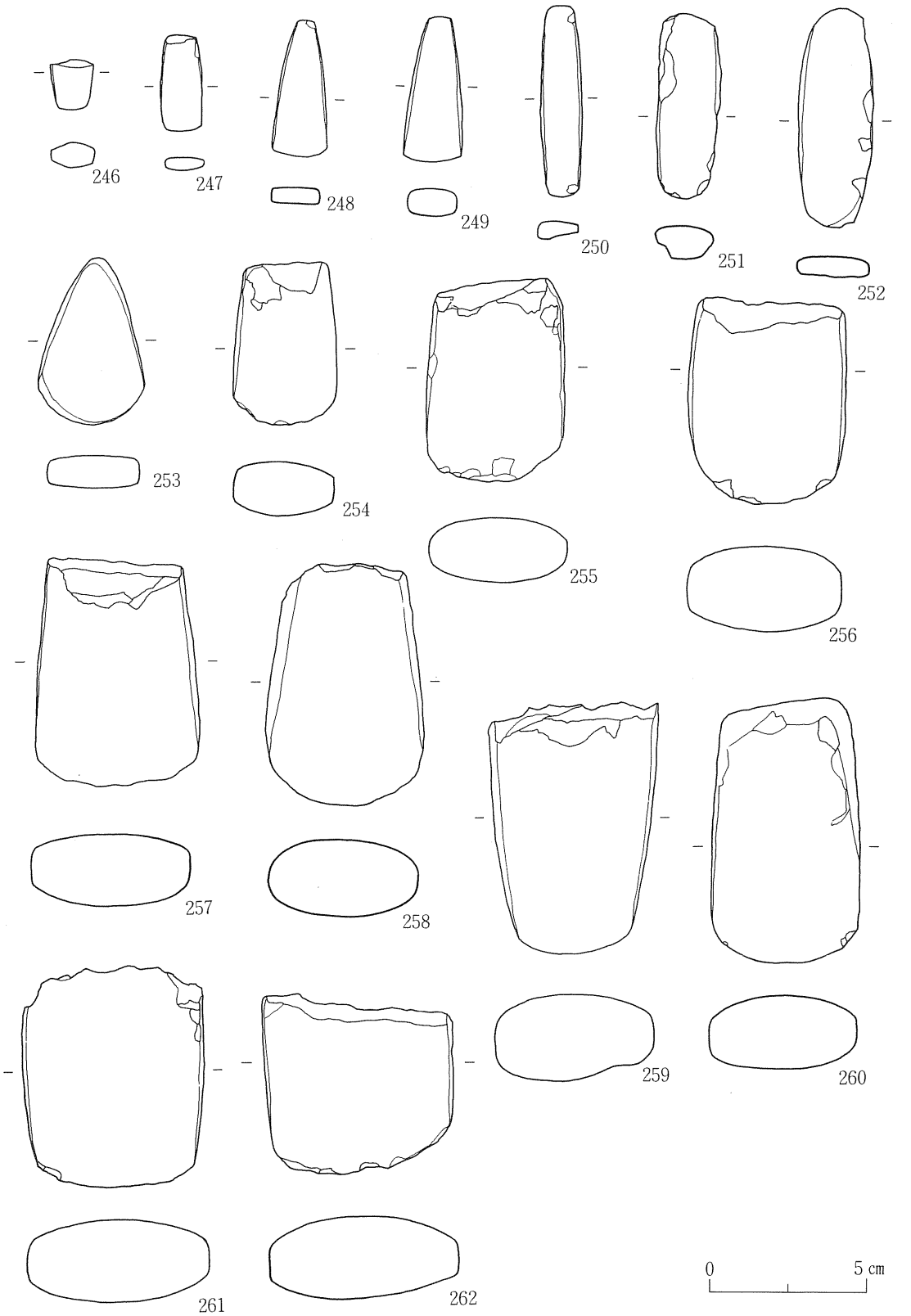
第106図　遺構外出土石器



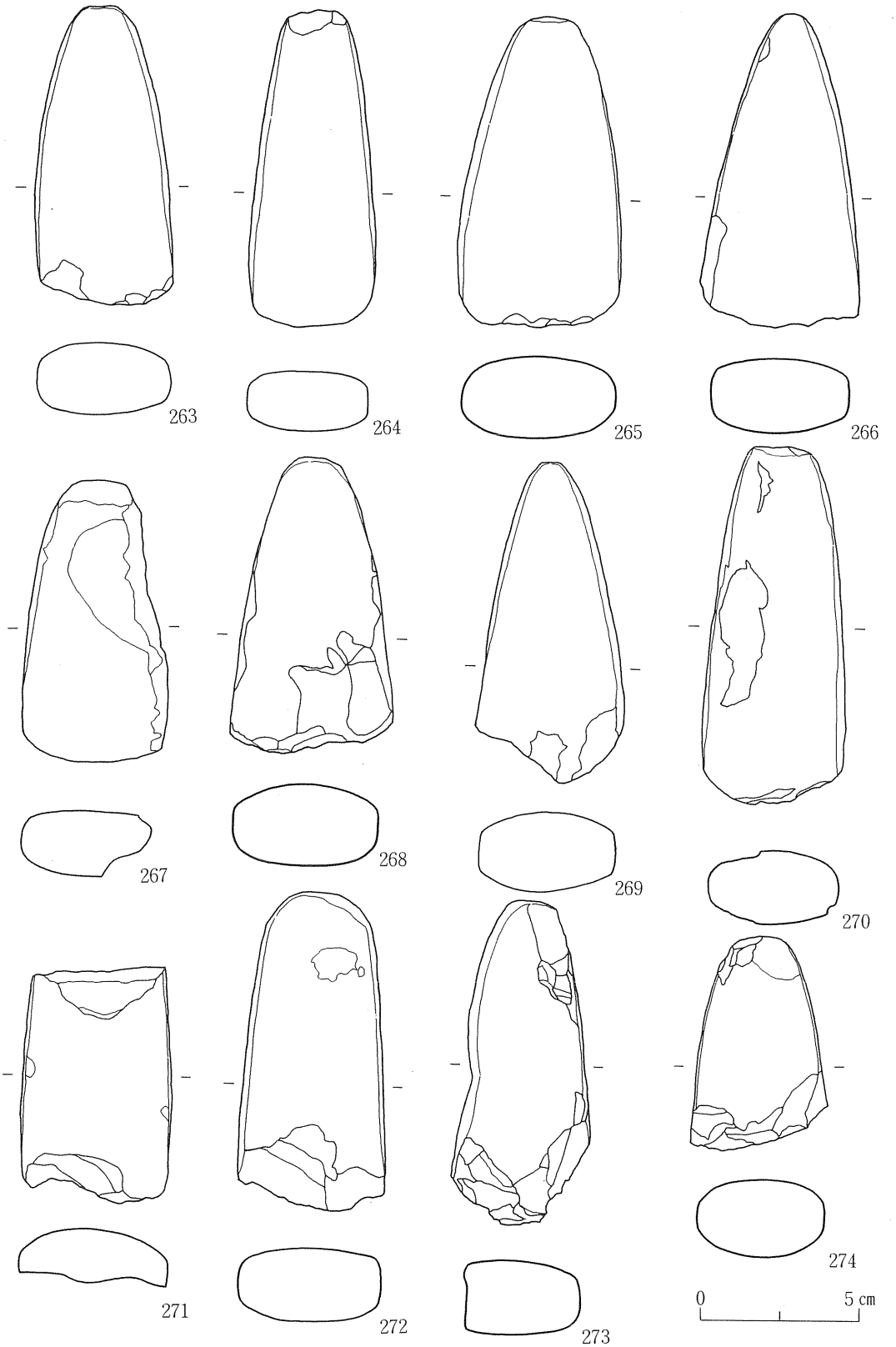
第107図　遺構外出土石器



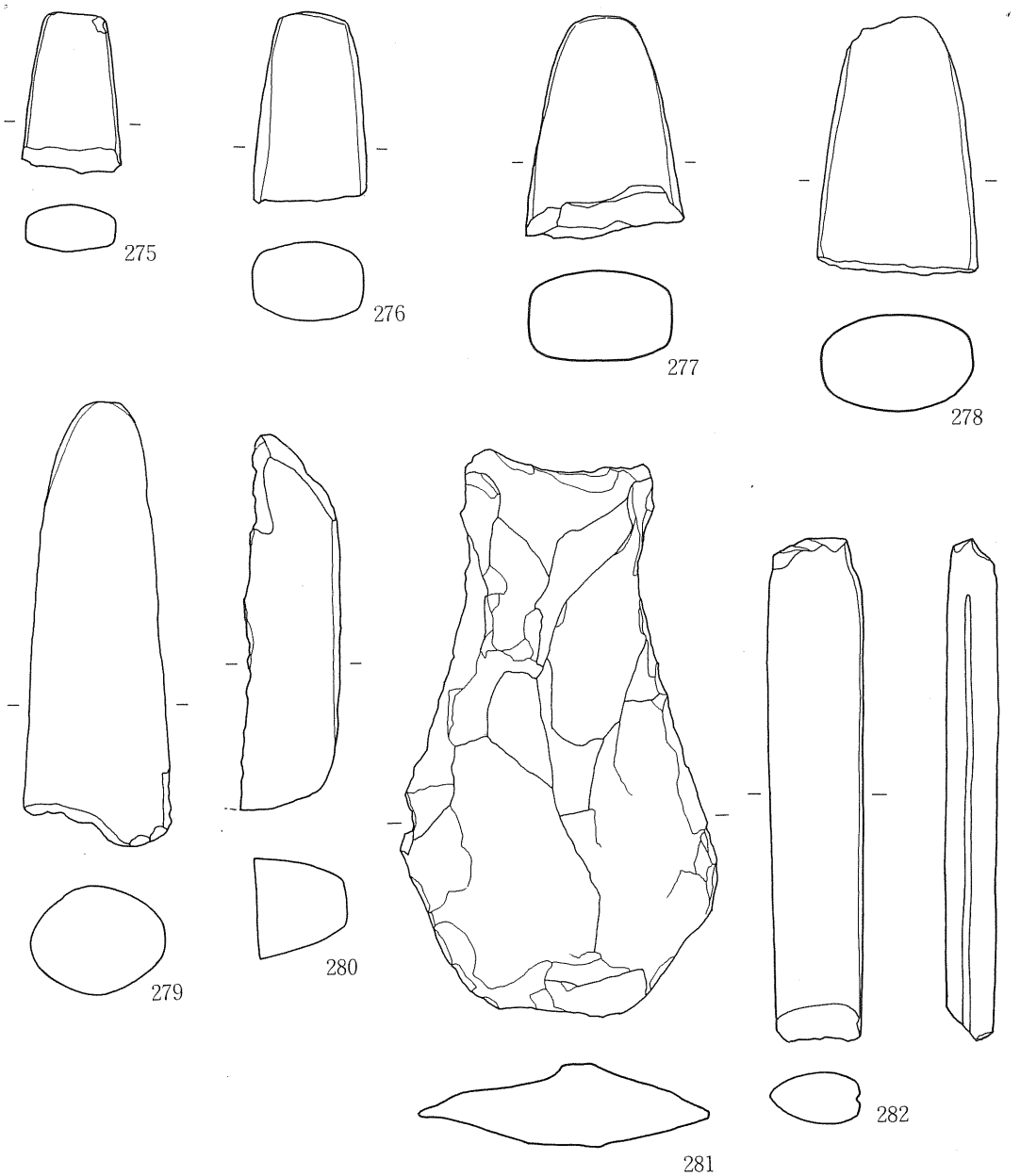
第108図　遺構外出土石器



第109図　遺構外出土石器

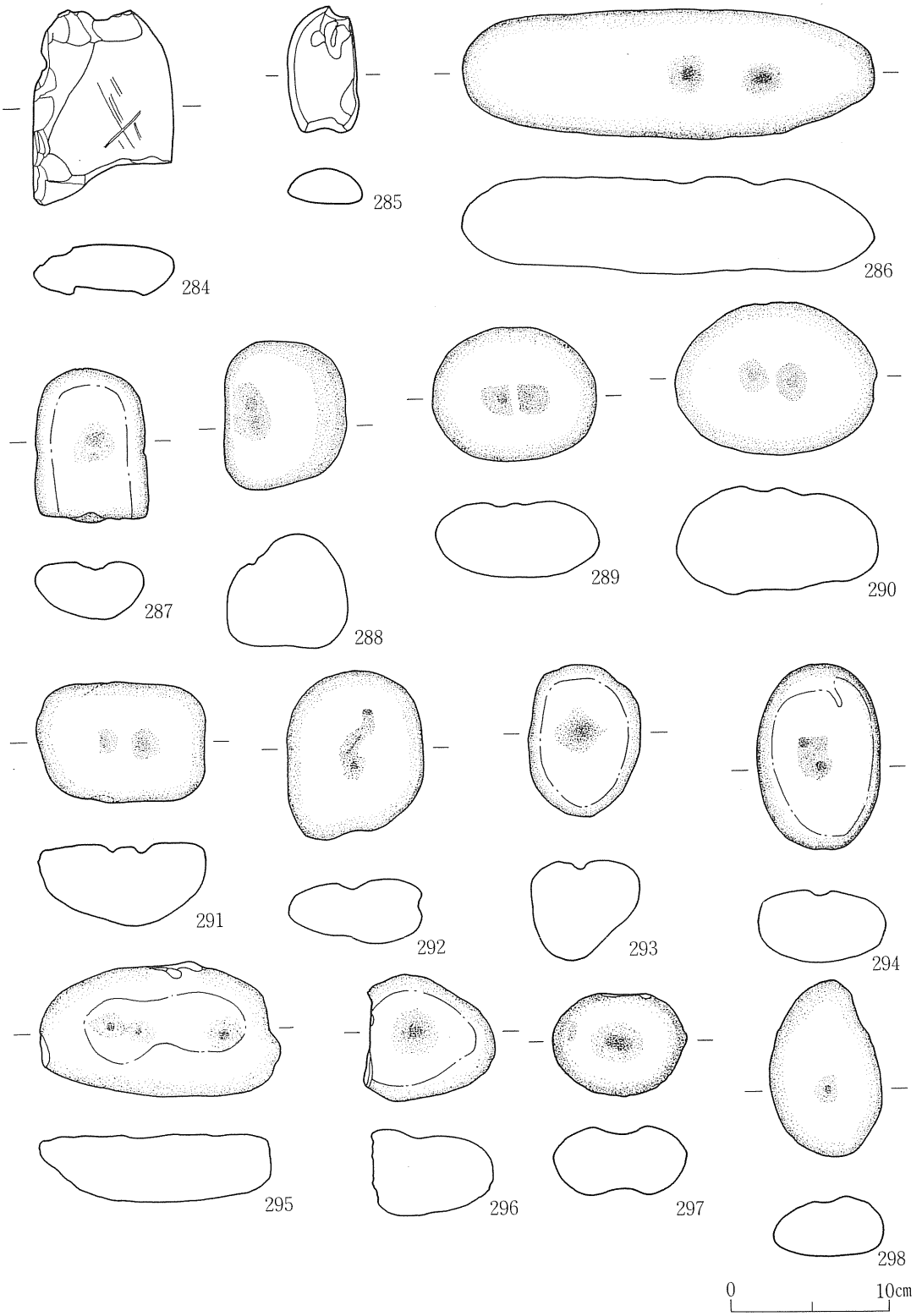


第110図　遺構外出土石器

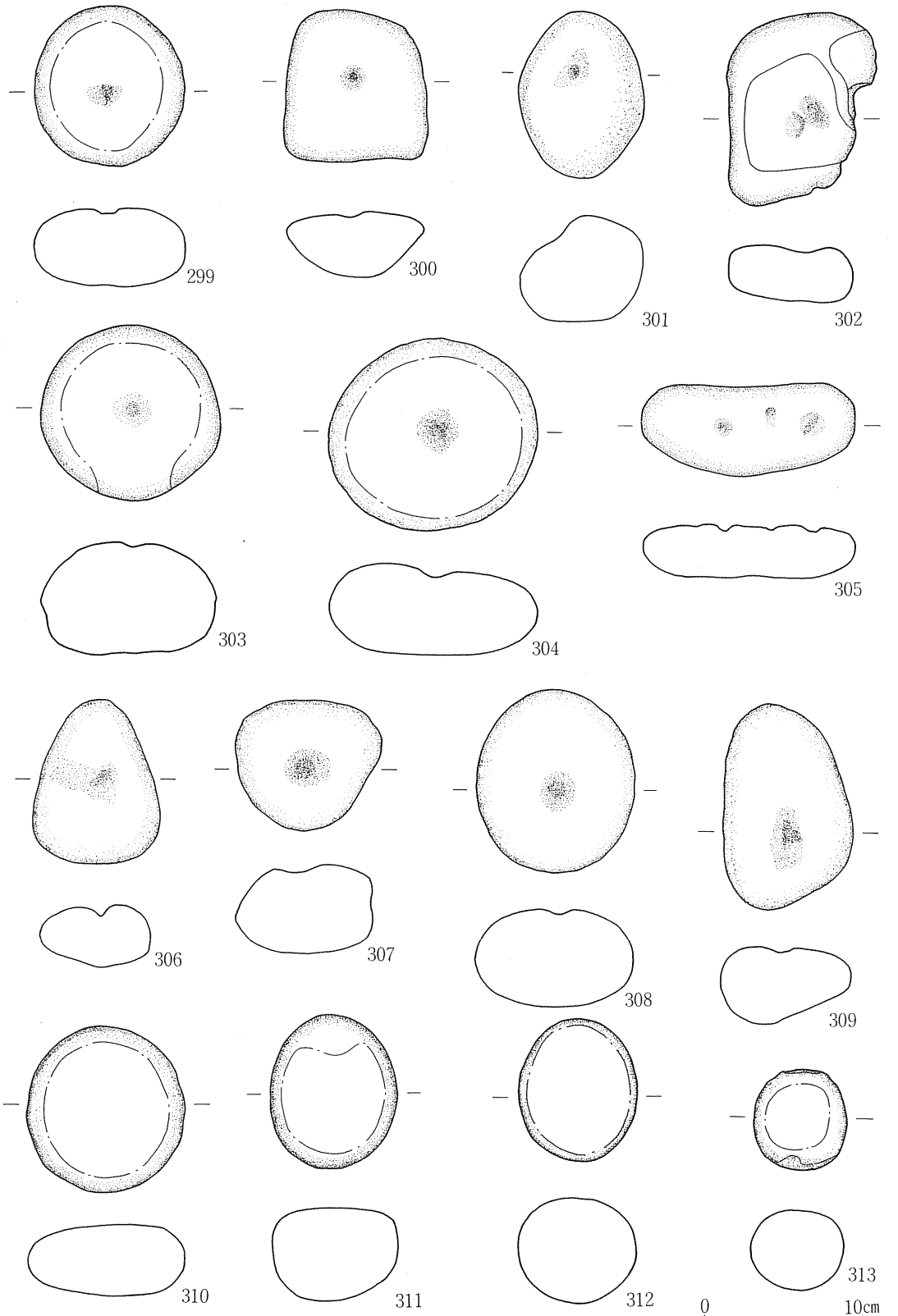


第111図　遺構外出土石器

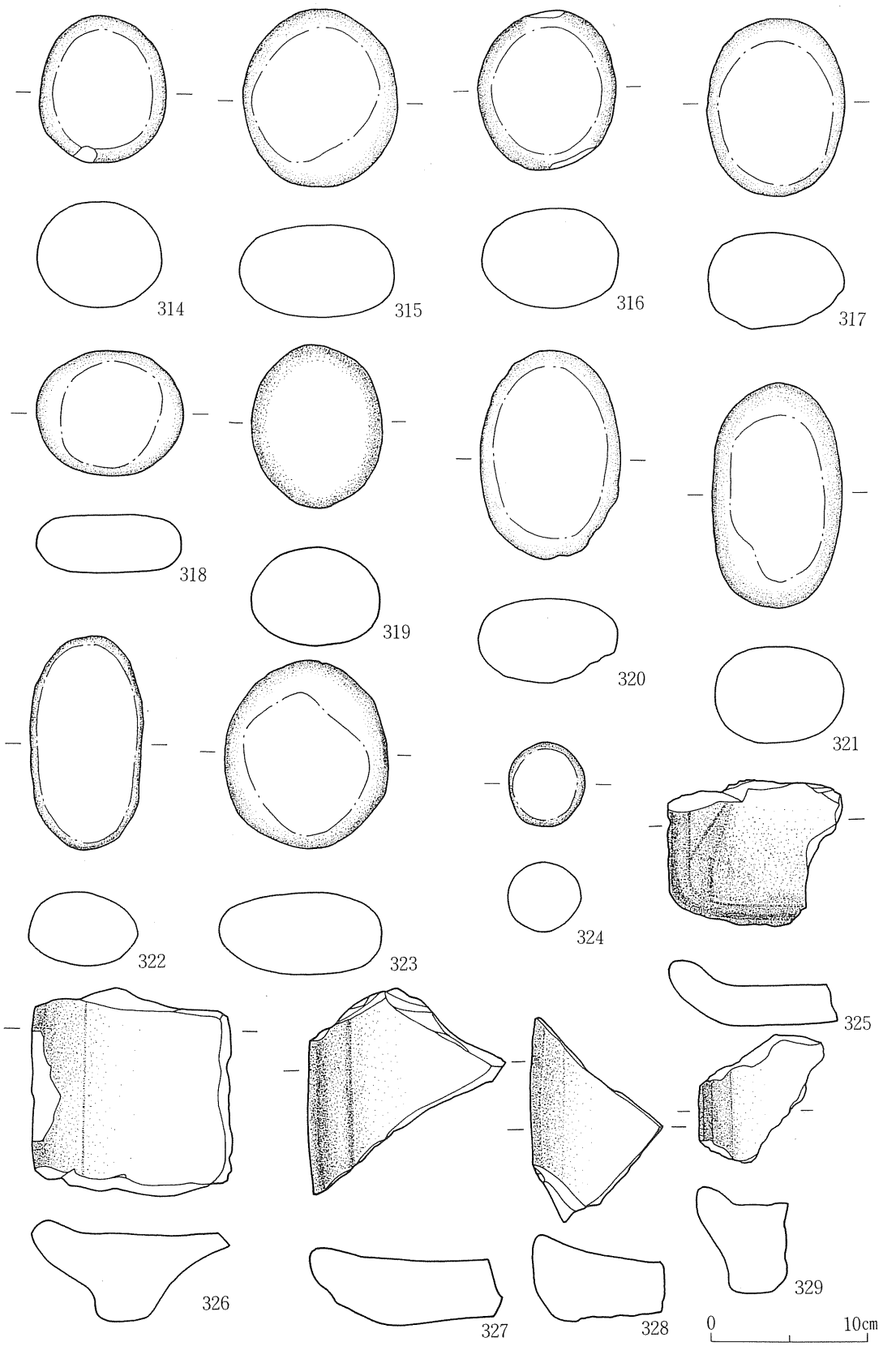
0　5 cm



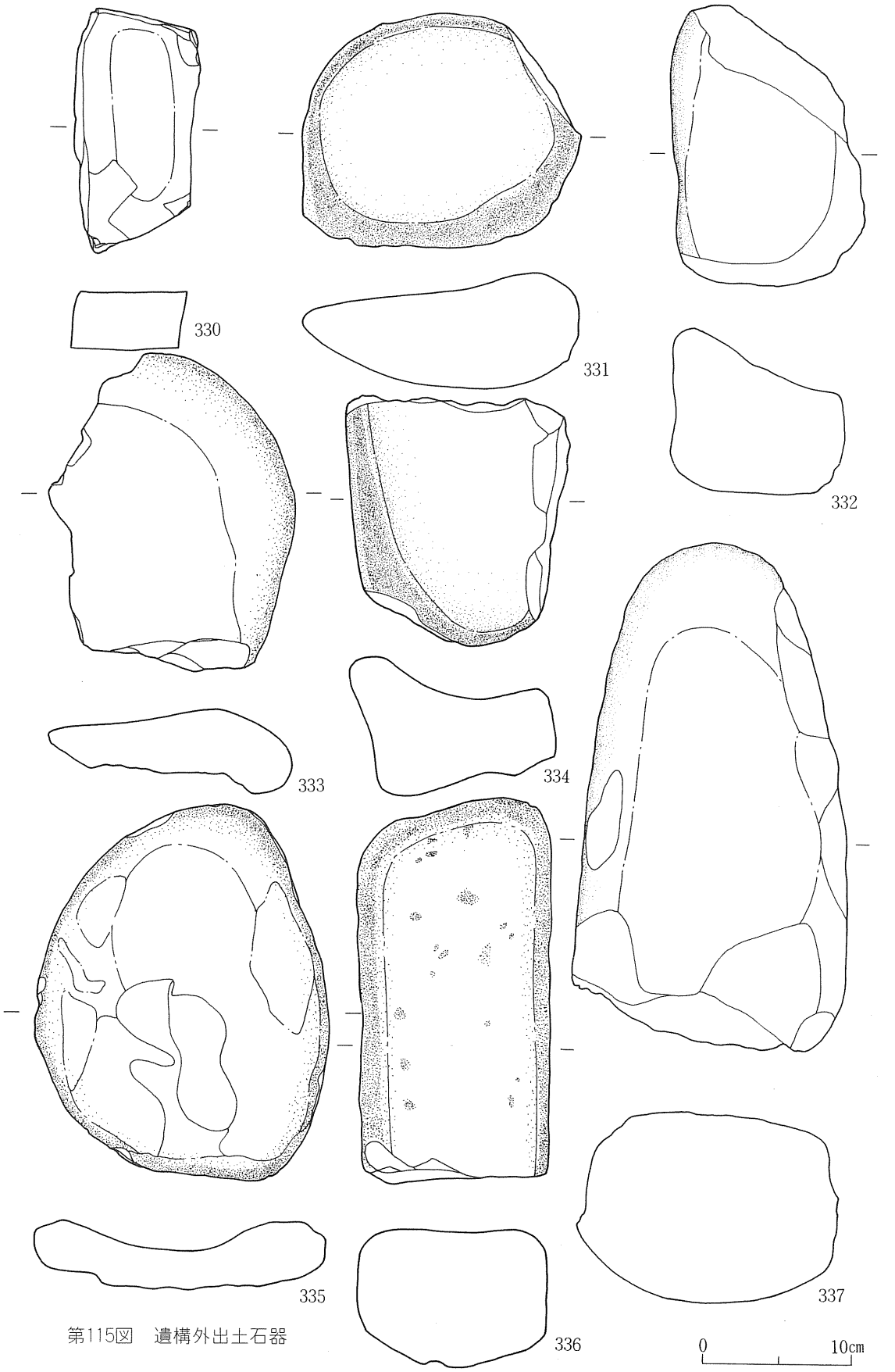
第112図　遺構外出土石器



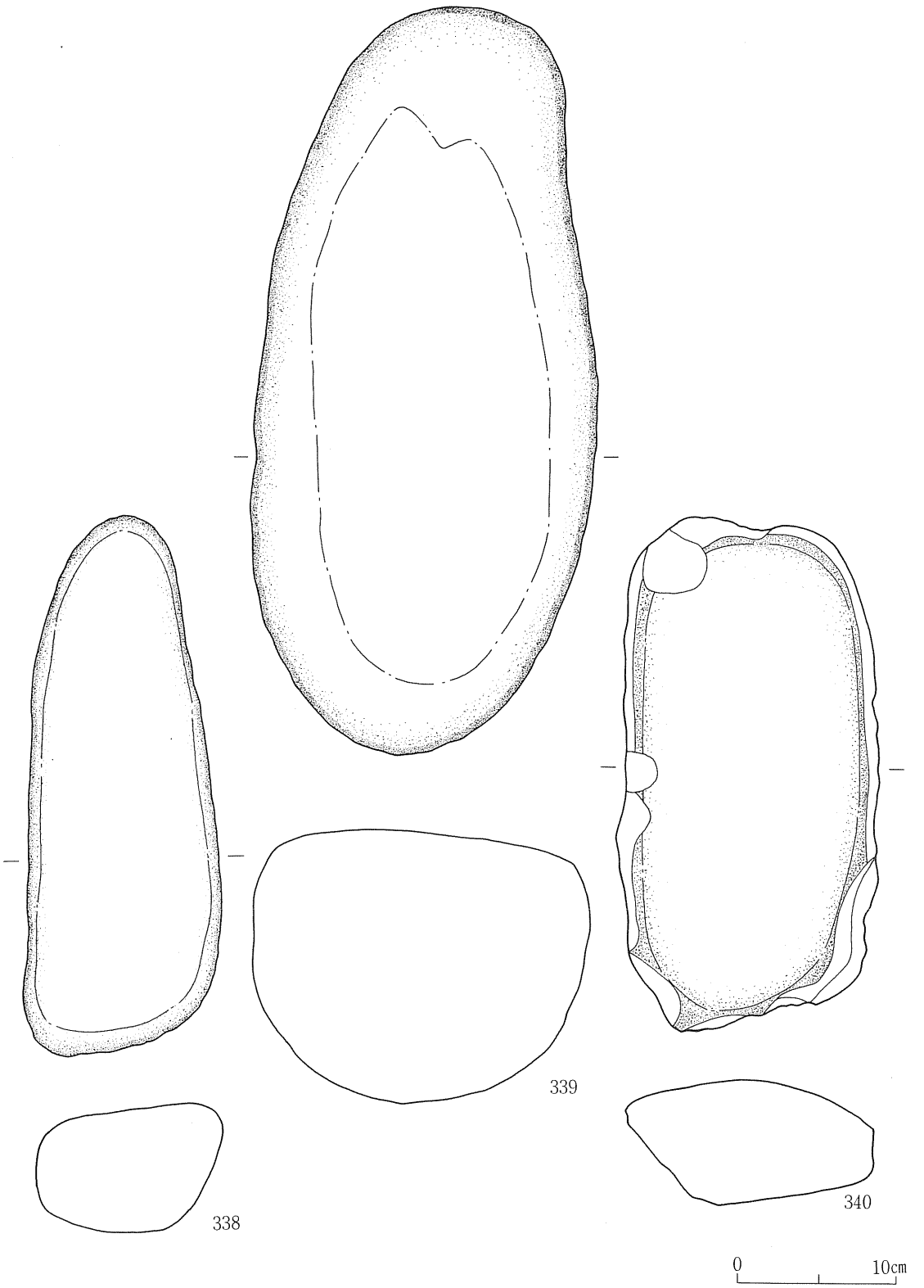
第113図　遺構外出土石器



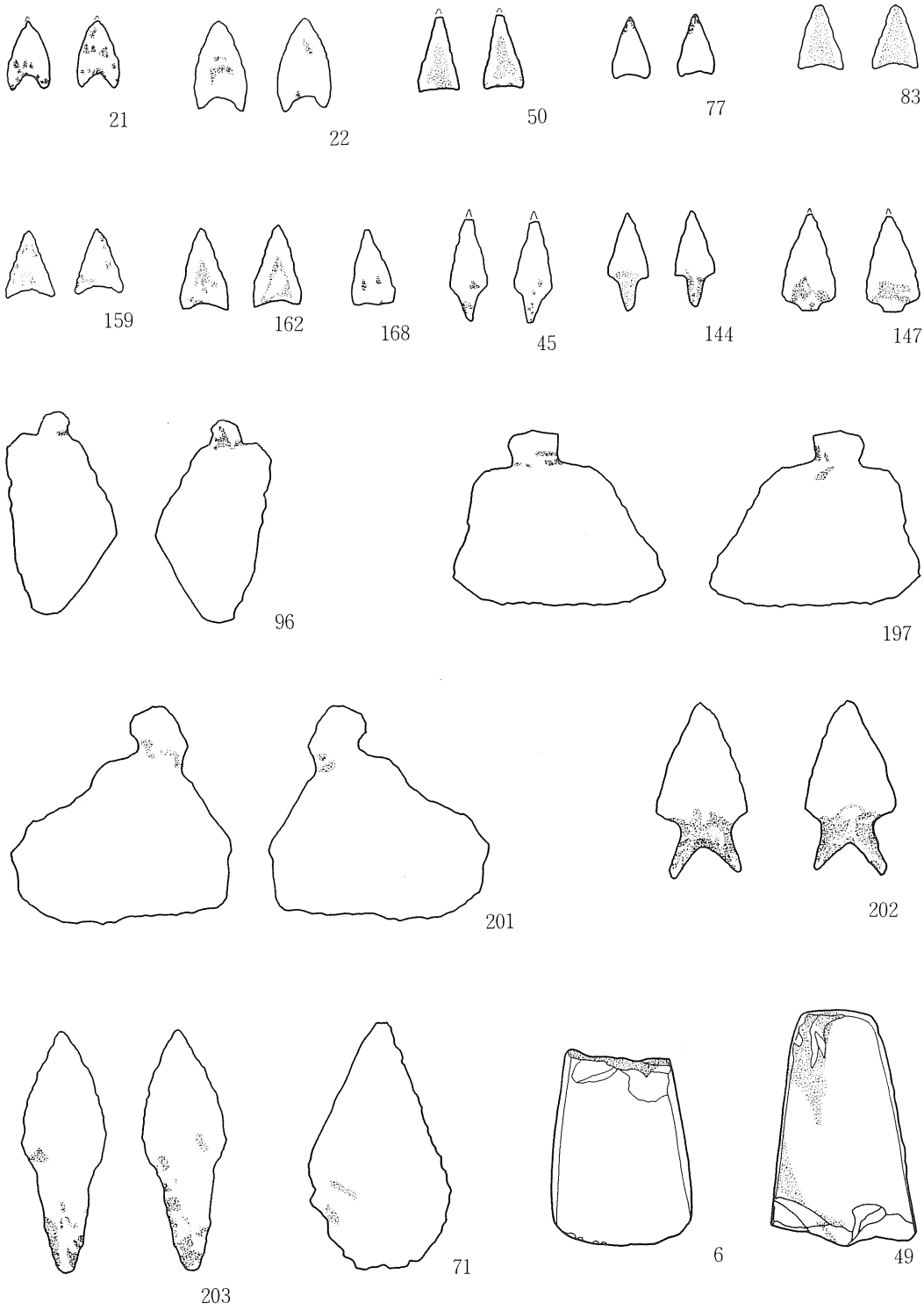
第114図　遺構外出土石器



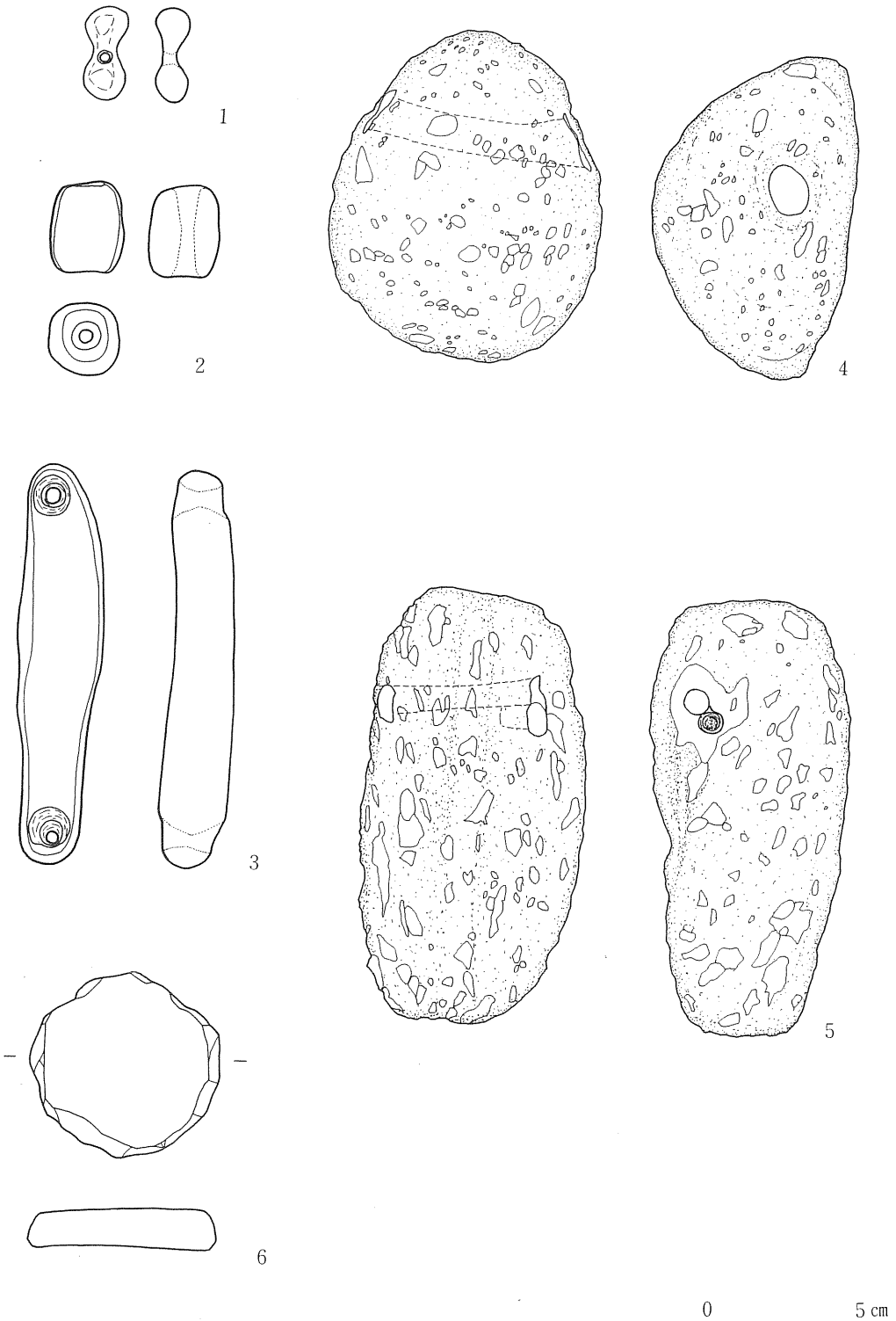
第115図　遺構外出土石器



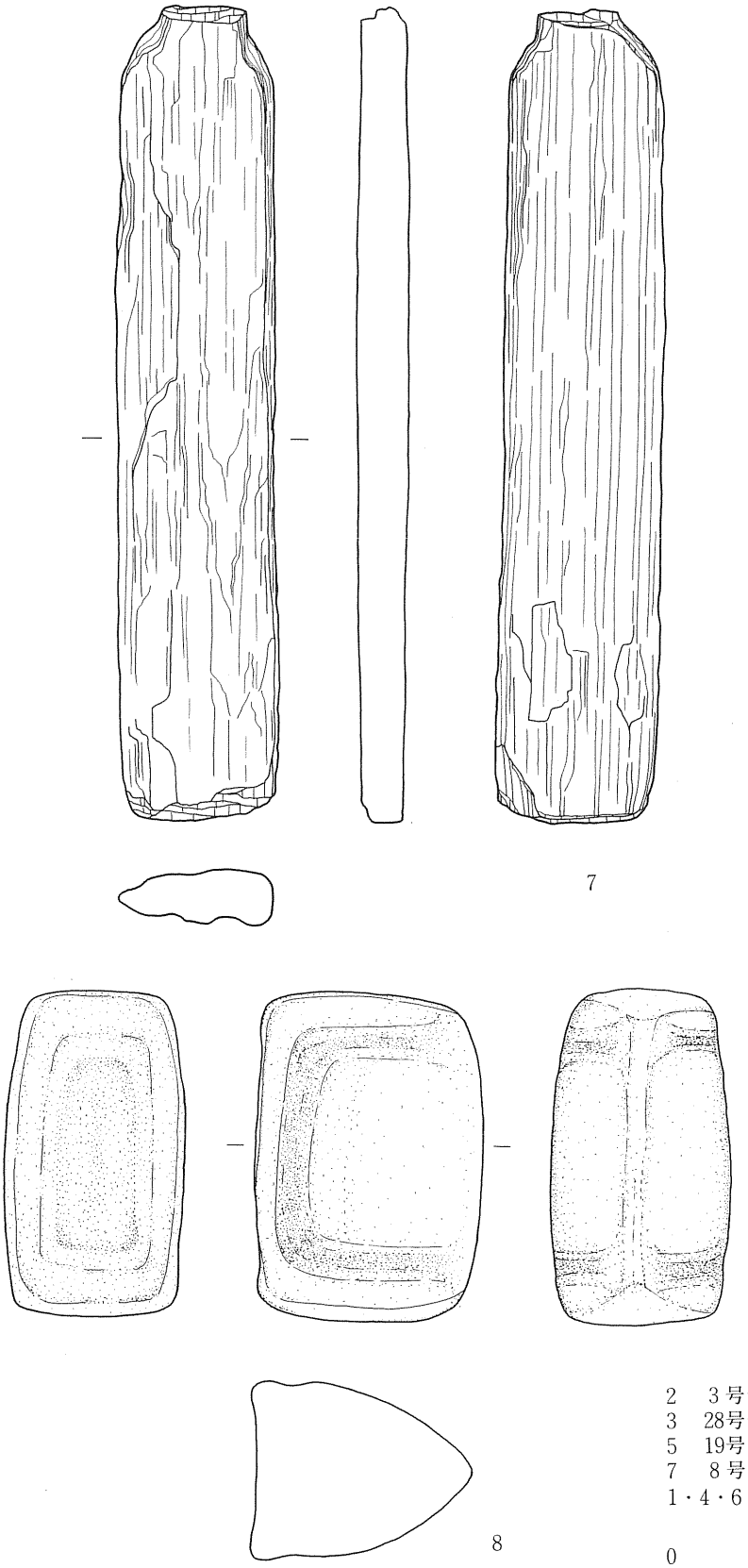
第116図　遺構外出土石器



第117図　アスファルト付着石器



第118図　石 製 品



2　3号住居跡
3　28号住居跡
5　19号住居跡
7　8号住居跡
1・4・6・8遺構外

0　5cm

第119図　石製品

まとめ

坂の上Ｅ遺跡の発掘調査面積は約5,000㎡である。南と北の沢にはさまれた標高約40ｍの台地上に位置し、遺跡を東西に走る市道を境に北側の平担面、南側の斜面に遺構が確認された。検出された遺構は、竪穴住居跡37軒、土坑122基、埋設土器遺構11基、炉２基、製鉄炉１基、炭焼窯１基、その他の遺構である。これらは縄文時代前期末葉から古代にかけての時期で、縄文時代中期末葉の遺構、遺物を主体に簡単に記述したい。

遺構について

住居跡は37軒検出されているが13号住居跡は大木８ｂ式期であり、25・26号住居跡には炉は無く、柱穴等もはっきりしない(本報告では一応、住居跡として扱った)。したがって、他の34軒を対象にした。

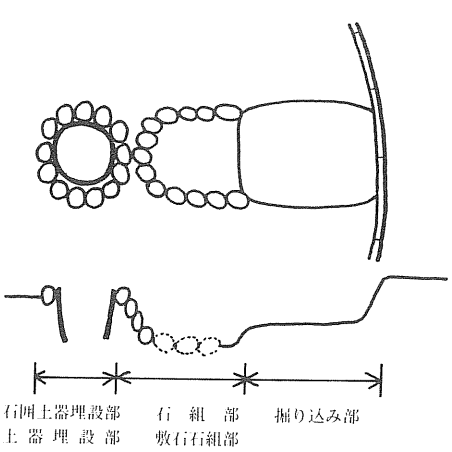
県内で縄文時代中期末葉の住居跡が検出された遺跡は、次の各遺跡である。県北部では、鹿角市「居熊井遺跡[1]」、「飛鳥平遺跡[2]」、「北の林Ⅰ遺跡[3]」、「北の林Ⅱ遺跡[4]」、「上葛岡Ⅰ・Ⅱ遺跡[5]」、「猿ヶ平Ⅱ遺跡[6]」、「御休堂遺跡[7]」、「黒森山Ⅰ・Ⅱ遺跡[8]」、能代市「大内坂Ⅱ遺跡[9]」、県中央部では男鹿市「泉野遺跡[10]」、秋田市「下堤Ｂ遺跡[11]」、「下堤Ｇ・湯ノ沢Ｂ・野畑遺跡[12]」、「湯ノ沢Ｃ遺跡」、雄和町「駒坂袋Ⅰ遺跡[13]」、「鹿野戸遺跡[14]」、県南部では協和町「米ヶ森遺跡[15]」、千畑村「内村遺跡[16]」、増田町「梨ノ木塚遺跡[17]」。県北10遺跡、中央８遺跡、県南３遺跡である。

住居跡の平面形と規模

平面形は円形のもの16軒、楕円形のもの12軒、隅丸方形のもの６軒である。規模は2.2ｍ～7.3ｍで、小形、中形のものが大部分で大形は少ない。

炉

炉は、いわゆる複式炉であり、住居跡の規模に比例した大きさで構築される。石囲土器埋設部＋石組部＋敷石石組部＋掘り込み部からなり、それぞれの組み合せにより形態は10数種のタイプに分けられる。炉の長軸線は住居跡の中軸線上にあり、位置は住居跡壁際に寄っている。概略で南西14軒、南東６軒、西５軒、南４軒、北西２軒と、南西側(壁)のものが多い。石囲土器埋設部、石組部、敷石石組部を構成する礫は住居廃棄時に部分的に抜き取られているようで（規則性は認められない)、火熱を受け一部赤化した礫が炉周辺に散在する傾向がある。当遺跡における複式炉は「上原型複式炉」と呼ばれる[18]形態の炉が主体であるが、前庭部と名付けられている住居壁



複式炉　模式図

に続く掘に込みについては火熱を受けない部位とされ、今まで検出された報告はない。今調査で1例ではあるが15号住居跡の複式炉掘り込みは火熱を受けた痕跡があり、必ずしもそれが用途を具現化できるものではないが、この掘り込み部の機能については課題とする所が多く、部位の名称も含め検討を要する。

前記の県内同時期の遺跡は住居跡の検出数は少ないものの、炉については、県北部と中央、県南部で大別される様相を示し、県北部（鹿角周辺）では土器埋設はほとんどない。炉の系統、地域性の相違によるものであろうか。

柱　穴

柱穴は4本が主体で、3～6本までの主柱穴がみられ、炉の長軸延長線上に主柱穴とは間隔の異なる柱穴をもつもの、複式炉の掘り込み部両側（壁寄り）に主柱穴より掘り方の小さい柱穴をもつ住居跡があり、炉の位置と関連して上屋構造のあり方を考えねばならない。

他に、大部分の住居壁はほぼ垂直に立ち上がる。周溝のある住居跡は14・19・22号住居跡の3軒である。重複する住居跡は29号、34号住居跡のみで34号が新しい。

住居の配置関係については、各住居間に切り合いがほとんどないことなどから、ある一定時間に存在した住居群を抽出することはむずかしいし、炉埋設土器および出土土器から住居群の変遷をたどれるほどの土器型式差は大きくない。小型、中形の住居跡が多い中で径7m前後の大形の住居跡（19号と20号、28号と32号住居跡）がみられ、配置関係に共通性がある。いわゆる長方形大形住居跡ではないが、積雪地帯の各遺跡に検出されている大形住居の機能を果す[19]ものであろうか。家族構成等の要因によるものであろうか。

遺構は西側に展開していくと考えられ、ほぼ同時期の「坂ノ上A遺跡」と関連していると思われ、また、御所野台地に所在する「下堤B遺跡」「下堤G遺跡」「湯ノ沢B遺跡」「野畑遺跡」「湯ノ沢C遺跡」の各同時期遺跡との関連の中で把握されるべき事でもある。

遺物について

出土した遺物は、土器、土製品（土偶、三角形土製品、再利用土製品、スタンプ状土製品）、石器（石鏃、石錐、石匙、槍先状石器、撥形状石器、ヘラ状石器、掻器、削器、磨製石斧、打製石斧、石剣、石棒、くぼみ石、磨石、敲石、石皿、台石）、石製品（有孔石製品、円盤状石製品、岩偶、石冠状石器）等で、他に植物遺体（トチ、胡桃の炭化したもの）である。ここでは土器について簡単に述べる。器種は、深鉢形、小形深鉢形、浅鉢形、注口、双口土器等で、縄文時代中期末葉の深鉢形土器（片）がほとんどである。

土器について（縄文時代前期末葉～晩期、古代）

1郡土器は縄文時代前期の土器を一括し、6類に分類した。1～4類は細い粘土紐貼り付け、連続爪形文、半隆起線文を施すもので大木6式期に比定される。5類は口縁部に撚糸、単軸絡条圧痕、隆帯に刺突を施すもので円筒下層d式期に比定される。6類は木目状撚糸文の施される円筒下層式

の土器である。

2類土器は縄文時代中期の土器を一括し、5類に分類した。1類は口縁部に隆起線および撚糸圧痕を施し、隆起線の両側を撚糸圧痕で調整するもので大木7b式期に比定される。2類は沈線で調整された隆起線が円形文、渦巻文を作に出す土器、沈線で文様を作り出す土器で大木8b式期に比定される。13号住居跡炉埋設土器（第41図19）も本類に含まれる。3類は粘土紐貼り付けによる円形文や沈線が施される土器で大木9式期に比定され、比較的古い段階のものと考えられる。4類は当遺跡で量的にも主体を占める土器で、地文施文後に沈線区画の磨消帯を施すもの、沈線区画内に縄文を充塡させるもので、磨消帯は曲線的でバラエティーに富む。磨消帯を稜線で区画するもの、地文より浮き上がるもの、刺突文を加飾するものなどもみられる。器形は口縁部がやや外傾する平縁口縁で、胴部にやや膨らみのある深鉢形土器が最も多く、口縁および口唇部など、細部の作りに数種類の器形がある。大木10式期に比定され、比較的古い時期の坂ノ上ＡⅠ群土器が主体である。5類は隆起線に2個1対の刻みを施し、隆起線間を磨消しするもの、隆起線に沈線が平行するもので、口縁部が複雑な作りをなす。本類は4類の新しい時期と考えられ、口縁部の作りなど、門前式期に比定され、後期初頭に位置づけられる可能性のある時期でもある。6類は口縁部文様帯および隆帯に撚糸圧痕を施すもので、円筒上層Ｃ式期に比定される。

3群土器は縄文時代晩期の土器である。工字文、変形工字文の施されるもので、大洞Ａ式、Ａ′式期に比定される。

4群土器は須恵器甕の破片で、古代の土器である。

5群は前述以外の土器で、1類はカキ目文（条痕）を施す土器で、縄文時代後期の堀之内式土器に併行するものである。2類とした注口土器は、いわゆる貼瘤・瘤付土器と呼ばれるもので、縄文時代後期後葉の土器である。6類は葉脈状の文様を施すもので、坂ノ上Ａ遺跡のＡⅡ群土器4類と同様であり、大木10式期の新しい時期のものである。以上、簡単に記述したが、今後、遺跡の総体的角度から、県内はもとより東北地方における縄文時代中期末～後期の編年の再検討が必要であろう。

製鉄炉について

秋田県内で製鉄関連遺構が検出された例は極めて少なく、能代市「中台遺跡」[20]、「竹生遺跡」[21]にみられる程度である。

炉は半地下式竪形で、残存状態は良く、炉壁高は65cmほどで、奥壁、側壁とも内湾気味に立ち上がる。炉底は楕円形（40×80cm）を呈し、南側（沢）にゆるやかに傾斜（15°）し、「ハ」の字状の袖をもつ前庭部に続く。炉体層序は、砂質系で第1～3層までは砂質赤色土、焼土混入、第4～6層は硬質な黒色（炭化物混入）、青灰色シルトの堆積である。炉の北側平坦部に柱穴と考えられるピットと炭化物を多量に含む層、焼土を多量に含む層の溝（深さ20cm）が検出され、上屋構造が想定されるがはっきりしない。前庭部、沢寄りにみられる礫は、段丘堆積物の礫層が露出したものであ

る。炉底をたち割った結果、炉底の厚さは3cmで、その下部は砂質土で約5cmの厚さまで熱により赤変していた。羽口は検出されていない。前記の通り、製鉄炉については県内では比較できる例は少ないが、最近は各地で検出され、それらを参考にすると、形態は半地下式竪形炉であり、いわゆる北陸型と言われるもので、炉体は円筒形シャフト炉[22]であるが、製鉄炉、東側に隣接する炭焼窯からの出土遺物は全く無く、操業時期はわからないが、他遺跡[23]同形態炉等の検出例から推察すると、ほぼ9～10世紀の時期に該当するものと考えられる。昭和59年度は、当遺跡の南側台地に所在する「坂の上F遺跡」の発掘調査を予定している。製鉄関連遺構とそれに伴う遺物の出土が期待される。

註および参考文献

1）秋田県教育委員会：「東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅰ　居熊井遺跡」　秋田県文化財調査報告書第78集　1981

2）秋田県教育委員会：「東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅲ　飛鳥平遺跡」　秋田県文化財調査報告書第89集　1982

3）秋田県教育委員会：「東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅲ　北の林Ⅰ遺跡」　秋田県文化財調査報告書第89集　1982

4）秋田県教育委員会：「東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅳ　北の林Ⅱ遺跡」　秋田県文化財調査報告書第90集　1982

5）秋田県教育委員会：「東北縦貫自道車道発掘調査報告書Ⅳ　上葛岡Ⅰ・Ⅱ遺跡」　秋田県文化財調査報告書第90集　1982

6）秋田県教育委員会：「東北縦貫自道車道発掘調査報告書Ⅵ　猿ケ平Ⅱ遺跡」　秋田県文化財調査報告書第99集　1983

7）鹿角市教育委員会：「御休堂発掘調査報告書」　鹿角市文化財調査資料19　1981

8）十和田町教育委員会：「黒森山麓縄文期竪穴群」　1971

9）秋田県教育委員会：「大内坂Ⅱ遺跡発掘調査報告書」　秋田県文化財調査報告書第51集　1978

10）男鹿市教育委員会：「泉野遺跡発掘調査概報」　男鹿市文化財調査報告書第1集　1976

11）秋田市教育委員会：「小阿地 下堤遺跡 坂ノ上遺跡 発掘調査報告書　下堤B遺跡」　1976

12）秋田市教育委員会：「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書　下堤G遺跡　湯ノ沢B遺跡　野畑遺跡」　1983

13）秋田県教育委員会：「秋田県立中央公園スポーツゾーン地域内遺跡発掘調査報告書　駒坂袋Ⅰ遺跡」　秋田県文化財調査報告書第92集　1982

14）秋田県教育委員会：「新秋田空港周辺遺跡 鹿野戸遺跡 石坂上遺跡 発掘調査報告書　鹿野戸遺跡」　秋田県文化財調査報告書第38集　1976

15) 協和町教育委員会：「米ケ森遺跡発掘調査報告書」 1977
16) 秋田県教育委員会：「内村遺跡発掘調査報告書」 秋田県文化財調査報告書第82集 1981
17) 秋田県教育委員会：「梨ノ木塚遺跡発掘調査報告書」 秋田県文化財調査報告書第63集 1979
18) 梅宮 茂 ：「複式炉文化論」 福島考古第15号 福島県考古学会 1974
丹羽 茂 ：「福島県における縄文時代中期の住居・集落跡研究の現状と問題点」 福島考古第15号 福島県考古学会 1974
19) 渡辺 誠 ：「採集対象植物の地域性」 季刊考古学第1号 雄山閣出版 1982
渡辺 誠 ：「雪国の生活文化と縄文文化の伝統」 津南町史資料編下巻 新潟県中魚沼郡津南町役場 1984
20) 秋田県教育委員会：「中台遺跡発掘調査概報」 秋田県文化財調査報告書第50集 1978
21) 秋田県教育委員会：「杉沢台遺跡、竹生遺跡発掘調査報告書」 秋田県文化財調査報告書第83集 1981
22) 調査期間中来跡し、製鉄炉を実見された穴沢義功氏の御教示による。
23) 飯島武治・穴沢義功：「群馬県太田市菅ノ沢製鉄遺構」 考古学雑誌55―2 1969

倉田芳郎 ：「群馬・菅ノ沢遺跡の精錬炉」 考古学ジャーナル70 1972
日本鉱業株式会社船川製油所：「大畑台遺跡発掘調査報告書」 1979
丹羽 茂 ：「大木式土器」 縄文文化の研究4縄文土器Ⅱ 雄山閣出版 1981
飯館村教育委員会：「真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅲ 日向遺跡」 福島県飯館村文化財調査報告書第3集 1982
相馬市教育委員会：「馬見塚遺跡」 福島県相馬市文化財調査報告書 1982
中村良幸 ：「『複式炉』について―岩手県を中心として―」 考古風土記第7号 1982
目黒 吉明 ：「住居の炉」 縄文文化の研究8社会・文化 雄山閣出版 1982
阿久津久・田中秀文：「茨城県花館ゴマンクボ製鉄遺跡発掘調査報告」 人文論叢No.9 東京工業大学 1983
富山県教育委員会：「七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要」 1983

第120図　遺構配置図

遺跡全景（北西→）

遺跡全景（南→）

図版 1

1 号住居跡（南西→）

2 号住居跡（西→）

図版 2

3 号住居跡（西→）

4 号住居跡（西→）

図版 3

5号住居跡（西→）

6号住居跡（南東→）

図版 4

7号住居跡（北東→）

8号住居跡（南西→）

図版 5